

45 二 全

會岳山

Ц

岳

第二年

次

號 目 次 (明治四十年十一月一日發行)

本

0000

新高·

山全景

○地藏岳○地藏岳○地藏岳○地藏佛○地藏岳

版

欄

I 學 1:

> 石三辻大 石田 常 平氏 撮影 三枝威之介氏撮影 足本 滿 丸 氏撮影

村內崎崎平川澤山本島 嶺吾令水晟助光成丸水 二 元 八〇

志西川尾大石梅島辻小

加賀白より

より

12 登る 40 第二

駒の記し

記

木向

曾ふ

鳳甲

凰

Ш

斐山

岳

0)

回形

伊新

吹山高山

紀行 山

0

表

Ш

登 岳

の富土

記

○口繪穗高山殘雪寫生の旅行談及び所威(大下藤次郎) ○槍ヶ岳の標高(辻本) ○薩摩輪遊記の一節(文學博士那珂通世) 〇北面より遠望したる赤石山系(城棲碧) 〇山水趣味 〇白崩

至自

二二六三九

0

外國人の日本山岳名稱考 〇日本山岳にクラの名称多き理山(以上三項鳥水) 〇姨捨山田毎の月(式) 0

筆の儘(二)(聴梟學人) 〇武田山梨縣知事 0 書翰

山

に就て(梅澤親光)

む、ち、吉江孤雁、た、た合評)〇富士山大觀(城 Ш 岳圖書批評 三人三著(棲碧) ○高山植物叢書第一冊(S、H、)○「やま」(高頭式)○雲表を讀

の少女

○赤岳會

○富士の山容變ず

〇三郡山の鳴動

○數字の富士山

山の初雪

○富士山頂冬期の最低溫度

〇本邦高山郵便局

○長野中學校の登山熱

報

報

〇二萬三千四百呎に登る

○伯耆大山の牛市場

〇相州大山の登山者

〇札幌山岳地の降雪 ○淺間山の鳴動 0アル

〇富士

7

ス 一登山 至自

一六六九四

至自 七七〇

正誤

次

○室中語(それがし)

○會員登山報

○寫眞の御恵贈を願ふ

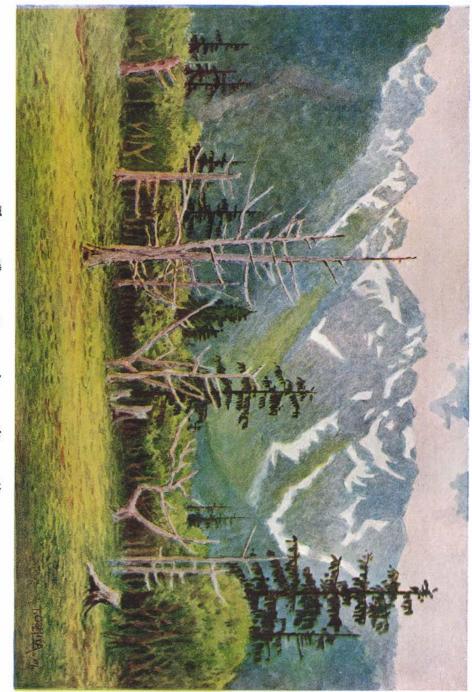
○餘白を借りて

〇新入會員

〇寄贈書目

目





大下藤衣郎氏策

埔

残

0

E

驷

慈



1

島

行の土産として、 齎らし得たるもの論文 白 峰 Ш 凰 二編の腹稿と、 司 富士の 山鮠十三尾! 偶ま險惡なる天候に遭ひて企つるところ皆果さず、

6 ひ盡くしたり 本論か讀みたまへる後、『紀行文論』をも併讀の祭を與へらるれば、 他の一は描寫前の分析的研究と、 山水の描寫に就きて生じたる疑惑を言 美的感興との干係を論じるものにて、 へるもの、『紀行文論』と 余の幸ひまことに大なり。 の題して、 本篙即ち是れなり、 雜誌『文庫』第 余の卑見は 三十 - 五卷第 この二つの長論文にて、 號(本年九月十五日發行 略は言

觀山の二方法

樂をその を考ふる如き、 岳 の快感を享受するもの Ш 快樂 を構 之を迎ふるものなり、 岳を觀るに、二つの方法あり、 本來の 的 造 則 する岩石をさは 趣 目 自然物體の一 味 的に 的 として視ることに 觀るといふに一致すること、 から め 一方の知識 差別的 個もしくは數個とし 地質圖 にあらずして、一般的 や土性 して、 は 的なるに對して、 III 岳 圖を を知 勿論かく為すことに於て何等不快なる物件の隨伴を許さず、 て、 稿し、 識 猶 的に 知識 之を理性的 或は 研 之を美感的といふべからず、 にてあらむてと是れ 究するも 的に觀ることが、 所 生 0 に視察するも 植 のにして、 物を査 自ら學 して、 なり、 のをいふ、 他 1 術 草 は吾 故に 木 知識 的 0 則 美威的 分布 理 美威 的 美 解 12 意 de de 觀るといふは 識 的 的 Ŀ となるに といふは、 12 林 觀るとい 相 對 0 變 且 相 2 當

省 の素と同じからざるは立ちどころに明瞭なるべ 學 術 0 直 接 0 目 的 は 知 識 則 理 解 あ

て學術

に門

な

何人に向

CA

-C &

公開せらるし以上

は、

てれ

にあらずして一

般

的

と言

はざる

口

一つ知識

に觀るとき、

快樂は自ら之に

伴ひ、

美威

的

17

觀

8 的

知

融

5

ずの

間

知

る以

为

3 的 万

か

撞木が鳴る

3

0

問

題に

して、

所詮

は美威的

というから るときに も差別

知識

的とい らず

ふき、

す

3

所 識

は を得

なる

がは言

は U

知

識

的

12

Ш

岳

を研

究する人に

ありて

は、

知識

的研究そのもの

が、

已亿

快樂なり、

趣

味

な

6

況

本 な 來 n 0 17 ば、 H あ 的 6 是を は 以 T 女 彼 則 77 趣 混 味 0 す 12 可 在 12 かっ ò 伴 5 T 2 4 知 \$ 識 0 彼を以て 17 南 あら n ば ず、 とて 是に 2 易 0 問 ふ可らずっ は 自 第 ら知 位 融 12 過 得るこ ぎず、 とあ 同 L 理 由 51 3 1 6 T 2 14 美 附*感 錄之的 的之觀 の常賞

往か らず、 りと跳 0 C ば、 報 美感 85 愈よ可なる 或 is t 酬 紬 1 は 叉目 そは 6 * 3 的 思ふ なる 要求 知 12 切超 的 彼は 美 6 Ш は 能 す す 的 場 あ 岳 智の 絕 ることな 3 合 は 快 * 實に す、 威 せ C 視 \$ 5 諸 5 を生 あ 察 この 觀 厚 能 す n 生 ٤ 美 力 學 ば 3 美 的 を間斷なく は 0 術 たるた 感 10 働 善の意 美の 12 美に遊ぶ働 作 自然を 遊 [1] 學 まるが 0 13 8 働 術 觀 味 作以 10 的 Ш 高 利 o, 17 活 12 用、 法 尚 動 於 作 自ら 外 於 なる T 15 L 亦 7 4 \$ 普通 それ あ 諸 す しく 神經 心 3 5 能 何 盤 惡しき意味に 自身が直 等 力 0 如 は應 を尖 意味 0) 0 0 < 遊 活 目 用さ 鋭に 能力 戲 12 力を 的 於 接 12 3 L L 3 け 增 3 0 て、 10 る 於 Ħ 消 加 或は美は T 的 す 利 耗 本 對 媒介とな 利 3 13 益をも含まず せ 象は して、 益 17 ず 0 JE: 利 しき自然 理 他 まる、 72 特 利己 想 3 叉唯 8 別なる 如き、 0 12 然 5 世 働 てれ を惨 < \$ 知 界なり、 0 ふが とて 識 初 17 B 1. めより あら 殺 的 是 * 如き、 要 Ļ な 我 n 500 Ŧ より 求 6 12 萬 結 觀 \$ せ 22, ず、 美 果 經 求 利 2 0 は 濟 0 8 益 自 他 働 的 あ 是 72 勿論 作 5 3 感 12 h n 0 知 情 何 あ 12 我 如 5 な 8 あ

要を詮 n ども 12 3 誤 17 解 處に、 あら す 3 ずし 勿 併論 12 て、 余は本章に 只 性質 同 斷することは、 主の 於 て、 말 分 ゆめ な 截然試 出 知 識 來得べきものにあらざればなり。 慾と、 みたるに 美威 との 過ぎざることを、蓋し 優 劣や、 利 害 P 斯 it 0 12 如 Y き異 生 12 性 於 質 V 0 3 8 不

一山岳の審美的研究とは何ぞ

我 有ら Ш 題に答ふる ゆ 3 自 3 然 12 12 對 つの 先だち、 T 方法 8 あ は は 72 ることを説き 所 人 謂 生 51 美蔵なる性 對 L VZ T 8 然れ 質 亦 ども、 然 3 大要件を吟 12 あ こは 5 す 特 à 12 味 Ш 岳 問 ざる可らず、 17 るか 對 L 0) T あら 0 み 美威とは 限 5 n 旣 72 17 3 功 12 利 0

○甲斐山岳の形態美

12

屬

せ

3

在

天

魂

3 解

說

3 0

說

明 12

能せ

ず、

かい 3 0)

1 物 4 我

0

如の

5

12

12 問

體 部 は

A 17. 化

是

を

以 機 1

T 能

1

Cje

V

7 略 淮

18

٢

*

3

能

は 0 由

ず、

72

2 學 低

11

僅

は

頭

F. 10

垂

3

*

细

らず

P

者

6

T,

諮

生

物

0

事.

實

因

理

理 12

者 1

等

5

叉 淮

內 論

部

0 15

S 3/

組

知 0

5

VE" 化

槪

念的

實

在

5 原

L

C

間 *

を

3 明 得

石 12 n 學 12

知 沙

識

殆

切 す 抽 I

8 3 象

知

るとも 13.

依

然と

T

富

14

は

草

P 防方

石 調 ++ 織

5

抱

合

せ

る

物

體 14 ラ

17

あらず、 r 說

余

0

眼 +

底

豫

查 r 8 3

會

報 2

告

第

-|-

號

稿 明

讀

Ш

に快 域 感 宜 は 現 di ٤ 在 8 瞑 腐能 n 共 及 T CK 愈 2 1 12 高 身 12 0 より 生 現 活 1 在 機 惹 3 能 3 離 1 起 3 6 分 5 が 11 2: 故 せ 3 12 3 再 餘 躢 現 絆 的 作 0) 身 用 10 27 12 物 就 鐅 to 12 V から T 觸 3 \$ 汆 12 12 0 T 言 な 結 は T' 品 11 L 澄 12 3 快 氣感 静 2 かい 太 瞑 2 想 0

五不山 あ 可 5 彩 为言 \$ よそ ず 七 思 地 5 P 伍 176 F. 的 3 51 Ш 0 な 自 3 2 衣 存 12 0 然 對 * 在 曳 超 0) 杂 L す 中、 な る 絕 0 V 4 力 威 は、 C た 高 5 抃 0 想 3 神 舞 雲 自 は 然 超 天 づとなせる せの 8 3 と人 絕 如 時 < 衝 16 L て、 太古 問 近く 12 V T 0) 1 ところ、 可ら 聳 問 天 0 5 夢 外 1. 12 立 37.00 するが 12 0 國 てる 立 屯 民 5 是 3 12 斷 故 n せ神 t 5 3 17 光榮 崖 山 仙 て、 なり、 12 0 あら 非公、下行同 創 0 風 聖 造 12 「界的に威ぜらる、」同じからざらむも、「 この 座 4 0 伴 PC * 秘 Ch 月 斷 窓 を囁ける 崖 人 天 12 100 0 ける、 間 て徂徠せる、聴 半に こと是 只一 介 他 神 まり 界に 半 2 人 圏せる、 な何 0 T 5 人 秘 占 0 密 \$ T. 精 大なる、 筝ん可らざる 3 3 過去と未 彫 \$ めの 1) 魔 妖 力 n 精 あは 0 Ш 世 17

ても 3 は 20 な 幻 < n 朝 か 3 視 言 宇 抑 17 3 500 木 L おそら 4 宙 て、 を 知 0 研 最 識 第 1 高 言 1 8 百 理 現 2 とこ 者 タベ 泉 0 解 ガ * あ 42 說 3 5 T ウイ 以 は 余の 石 12 誇 T 大に 3 1 言 查 先 宇 何 を遮り 生 故 失 市 本 12 すい 觀 な L 4 人 T ず 是 か 組 は 3 最 n E L 織 \$ 眞に 1 T 扩 高 * 級 未 とす 明依 0 あ汝 は 然 5 0 3 辭 ず、 常 境 72 ことの 地 3 7 12 是れに は、 ~ 用 27 3 白 不 對 確 L 能 蓋 गि 晝 質 能 は T 性 0 1 全 30 最 如 な * < 3 3 高 < 缺 200 級 明 秘 は < 密 0 6 言 3 大 は Do 10 有 哲 72 話 な 七 カ 用 を ざる 用 5 1 N た + T M \$ 0 は ٤ 非 の道 汝 思 な 0 は 破 2 視 獨 8 5 とか、 h 俟 世 0 0

影 人の 8 士なるを奈何 EII 天 せ 才 3 富 あ + 山 2 は 世 0 U 獨 3 外 創 3 界の 0 寂 靈 CK 火 世 L 界は半 を山 (情 頂 なさ に燧發 ば自 \$ 然に 0 L 12 作 T あ られ 5 ず 條 半 0 歌 紫 ば 聖 天才 電を掣くとき、 赤 X 54 00 作 讃 500 美 たる 知 始 富 識 8 は辛う て神 1: な 秘 5 Ľ の本 T 千 前 體 年 者 8 12 閃 42 及ぶ、 8 人 かすべ 萬 未 54

だ後者に及ばず。

せず、 する 易 るる事なるからに てある され のに、 槌 同 我等に 威ぜざるを耻 な ば美意識 その なり、 顯微鏡と、 は 再 ある 現 世 を は 17 か 知らざい 弘 見 となす、 5 のに る可 余と同 L 者 T 足下 結 6 して初め n ども ず、 必竟生命といひ、 U が 得 意識 客觀 V 在 たる美象その の經 T づく 3 山を以 ことあ 的 んだ、 驗を通過せざるものは、 事 實を告白する證人なら て、 5 \$ 眞 實在とい 感 のが、 心の想像圖となすことを得 偽 ぜずし を言 究竟の ふも、 U T 存 確 質不 在する 事實にてあるなり、 意識 始 8 上 確 もの 胶 實 よりその感念を有 0 * 經 情 験を通過して、 あ と意 口 ることな 1,2 す 識とは、 3 魂の 資 生命にて 格 L 道 せず、 我 あ 遙苑となすことを得 初 我 为 6 主 あるなり、 33 は T 觀 て 知 觀 念を 3 的 切 實 3 事 有 42 3 實 せ 感 3 を ぜら 主 耻 殿 張

るし 間 權 そは 0 威 0 顯 t な 主 微 鏡 觀 3 6 17 語 より 0 1 17 物的 映 0 我 ずる能 叫 多 12 實 明 < CX 12 月 在 Ħ L 12 る て、 光 な は は、 ざるも K 6 對する心的 山 浴 5 岳そ 我と萬象 チ 1 のを示 Y 1 0 恍 質在を \$ 11 すい F. 惚 ٤ 0 17 我 相 1 證明 四四 を忘 通 17 南 0 IV らずと言ふ勿れ、『彼等(自然)は、 對 Ĺ 脈 1. る 25 するとさ、 たるものなり、 搏を有することを感じたるものにして、 境 地 ひ、『余は他界(自然 15 立.て ひとり ば、 我 然ら 彼 等 は は ざるび 星學や、 人 問)の言語を學べ 0 やつ それ 言 光學 語 自身の 以 Ŀ 12 17 t 6 こは 言 5 余 て、 語 17 槌 を以 語 7 と顕微 月 > 3 光 7 T を説 語 第 鏡以上 " j. 者 明 2

理 る限 性 ず 0 4 故 8 3 富 17 槌 知 と顕 Ш 識 は、 と彼との 微 鏡とを Ш 为 斯 距 くし 離 提 げ は て構造せら て、 F 萬 富 里 + 多 Ш 啻ならざるべ 0) 11 頂 上に 成立するも 立つとも、 0) なることを教ふ、 何となれ 72 CK 美と絶 ば 知 識 緣 の肯定するところ、 然 L n T ども決 何 等 0 精 L 神 T 的 Ш 富 2 聯 Ш

25

1

前肉

抉

棄

0

2

ふに

我

を喜

しん

C

言眼

をを

續

V 5

L

& T

まん

島

田

斐山

岳

0

くそ C 伯 0 0) が t 生 不 かっ 3 外 \$ は 大實 0 を 0 6 Ш 命 < 擺 確 主 の宿 ざる 同 T な を 實 0 脫 石 時 張 在 L 生 3 L لح 如 劉 12 ż 12 を 在 2 i 4 根 す 形 1 L 心 論 とせ 語 生 t 3 式 3 境 7 眼 る 5 r 破 惹き て、 美 は 命 者 地 500 0 L U 空 と抱 得 根 L 12 毛え は、 視 た 樣 我 處 な 耙 力 は 野 3 \$ 2 8 6 す 合 人 12 1 人 之を幻 痛 拔 0 0 なしとい 0 4 人 かっ 共 心 T 間 限 き得 快 肯 間 2 立 同 L 理 7 な 界と なる h 8 人 心 0 0 L 的 7 3 5 空を塡 i, ず 視 伙 15 は 72 傾 ラ 12 べき所 六人 な 5 必要上 る :0 向 テ 止 箴言 要求 かく 言を あ V は ス 女 あ U 時 T るとき、 呼 n を以 6 以を 觀 换 吸と生 51 槌 さる 3 代 1 歩も ば 誇 3 12 と顕微 托 3 以 な 大と 3 1 見 は n 乾 來 5 之を せ 之を 我 ナ 夢 量以 ば 活 燥 n U, は V 12 た 鏡 とを 無 美 是 主 验 其 3 あら 心とを作 \$ 味 3 形 0 0 觀 A 8 越 日 L 式 營 問 な 如 2 < 自家 ず、 12 す 12 人 數 U, 0 3 題 ること 呈するに、 問 な 我」なる無限をし 示 以 n 易 は h 若 斯 は 0 3 外 す 是に 5 0 哲 は 意識 < L 2 0 能 12 为 學 能 吾 質 槌と顯 0) 言 故 15 於 あらず 者 吾 と威 ず は 人 肉 * 3 に T 人 す 12 獨 は 即 吾 眼 苦 4 とせ 逸 納 譜言 ち生命を以 L 人 微 算 人 類 或 て、 性 問 の大批評 鏡 數 0 して、客觀 T 8 は 13 と有 を うざり 12 12 は 有 顯 肉 あ 改 立 未 限 寂 我 微 吾人 眼 らず、 だ 造 L 小 L 寥 は 鏡 家 8 せ 7 の山山 1 能 な は 此 8 又有 ざる せし 13 有 るべ 肉體 v 生 10 孤 借 寧ろ す 儼然 9 3 3 自 獨 n な 3 限 V す 作 8 3 然 を 46 3 2 間 ろ 1 72 3 6 1 脫 5 25 Ect 0 泣. 2 無限 0 は n 51 3 は L 故 無 却 幸 か 制 弘 見 大 永 此 2 12 限 U 3 限 之 を 實 12 と当 2 3 劫 大と ٤ 6 办 抱 な を 5 能 尊 在 也 虚 彼 UF 脫 視 I 重 兩 統 は な 合 偽 は T ٢ 却野 IJ ざる する 誰 者 せ な 其 吾 欲 世 3 1 to 12 L 只 外 人 以 ス 人 t 路 8 ti

L 3 Ш 非 Ш 1 界 から 故 C 12 胂 如 雪 非 3-A 性 太 南 白 被 間 ò 5 的 1 10 T 思 言 白 見 な ゆ 惟 は せ n 3 5 らる は、 12 3 É n 臺 單 は 灣 ば 木 12 2 な 0 源 5 玉 0 0 Ш 阴 高 その雪なくし 距 新 何 F 高 形 0) Ш 染 能 3 との 七七七 て白 r J 受け 12 n プ 因 Ш スず 3 なる 0 12 白党故 あ 能 5 山るに もで潔 は ず ざるとき 归 藏故 は 12 2 0 \$ 雪旱駿 0 獪 山之河 秘 青 12 山 B な 歸 3 1 8 せ 加 得 賀

甲 山 0 1

島

ず n は VI な 必ず 3 彼 ĺ は \$ 文人 我 は 衣 12 读 性 0 Ш 僧 紫 か P 水 5 1 111 U < 紫雲 とす は 9 語 3 性 た あ 5 な 0) CX \$ 紫の 我 9) 1 10 17 輝 [4] L V L 1 T となく 類 ٤ 沈 ころ、 を 默 連 彼 想 17 0 人 吸了氣 す 3 心 引光象 12 42 せ あ 5 安 3 あ らずと雖 住 あ 沂 5 ٤ 0 か 青 雖 C \$ 13 \$ 1 5 白 分の 8 0 竟 神 17 澼 仙是 暖 りす 色 的 n T とす、 なる な А 3 間 紅 方言 0 * 高 如 現 在 加 Ш 色 2 を 12 n あ 1 0 6

なる

75

如

8

亦

#

世

間

的

也

1

かっ

L

T

高

山

13.

個

L

皆之を

具

有

せ

b

美す まて 雖 12 何 せ 象 X 的 以 るも も全く 花 0 は 3 Ŀ 興 至 17 8 木 綜 禽 味 然 於 C 0 别 合 熠 ぞ、 地 54 T する あ な 17 有 O 附か 之に 現 6 6 6 す 致 在 W ず、 3 的 反 せ 自 Ш L か 3 かい な 6 T 0 諸 は 然 L 如 Ĺ. 過 3 物 山 天 T 體 0) 去 # 說 は 同 明 file 0 Ľ 現 雜 か 盤を 今 最 冷 高 念 的 3 未 力 な P 0 3 人 3. ic 人 來 滴 なる物 12 間 T か 好 は 雜 界 \$ 比 知 0 ic 2 識 孰 \$ す る n 有 殿 * 12 質 0) i,I な す 運 嚴 單 交 な 3 3 9 動 42 純 だ 有 1 彼 T な カン 0 けどうり * 信 は H 如 4 3 眼 知 4 12 + 瞑 5 光 3 想 人 は 16 ざる て 間 L を以 所 的 光 太古の 地 E 以 な 0 血 E T て まても な 9 50 味 36 0 光 民 中 山 暗 心 線 山 4 は、 示 見 現 的 * 7 は 7 皆 在 な 距 人 H る b 0 3 目 月 Ш 2 女 物 星 12 É 畏 5 映 辰 17. 美 遠 す 怖 あ 意 0 \$ 5 識 か 3 如 色を除 らず、 4 を結 知 す 天體 3 2 拜 天 CI 2 遠か V 0 L 5, V 屬 T 如 らず 味 又 せ 3 吾 は 3 ٤ 潜 人 縣 5

きてとあら な せ 山 誘 煙 5 岳 起する n 4 有 12 4 機 は る てとあら 同 IlI 體 何等 21 8 水 向 美 無風 段 な 布 3 L n 複 置 25 Ш 雑なる 流 8 如 は 8 ば 2 とて、 なる、 ず、 論 自 \$1 自身 叉花 形 然 T 人 情 裸 態 粗 IZ, 卉 體 美 假 Ш 12 硬 17 近 17 は 以 美 托 E 於 L 水 總 X T 能 合 H 像 苦 C 為 峻 3 痛 Im. 的 12 は 多き 33 嚴 脈 7. な 對 人 な 間 す 3 3 如 る立 < 3 吾 当 \$5 を 以 から 人 草 故 體 0 明 木 如 觀 17 折 生涯を ぞや、 6 3 寫 to 毛 3 12 複 取 雜 は 12 6 不 3 て全 安な 融 戀 t 和 n 西 5 化 どそ あ 3 洋 煙 T 美 3 意 雲為 趣 は 道 生 識 味 0 心 德 色 な 神 命 そ 12 進 上 彩 は U) 0) A 表 未 衝。自 的 光 偶 故 表 現 だ 突。由 * ま 3 圓 線、 Ш 現 得 の有 6 感 及 身 間 水 美 か ぜ な 12 CK 2 17 面 L らず 陰 之に 8 は 有 活 ず、 影等 寬 世 ず 對 舒 3 ことあ す を以 草 12 實 8 3 破 威 與 木 は 3 0 丽 7 3 か मि 動 慾 結 植 如 望 0

洋

人

た

3

欺

T

Ba

ず。

小

B.

本 位 12 於 て自 然 0 原 性 * 失 は ざるは、 東 洋 趣 味 15 L て、 余 は 斯 0 如 3 觀 察 法 を愛する \$ 0 なることに

あらず は 12 減を以 花 that beholds てれ 素より 能を喚起 12 や月 けれれ 係 必ずしも生起の 12 想も必要なり、幻 感情 認め 文學 を推 C 2 12 ば、 根 P 可らず、 彼 L 混 て失はるしてとあるべ する 5 12 者 0 ï 活 から 美 有 本 み發 體 興 その 弘 機 象 す 的 n 0 如 rather than 先 る 位 12 現 講 ことも 83 能 は < 達 純理 聯想の 3 づ L 觀 置 T 義 12 眼 運 3 だ 在 先後を以 不 そ L 餘 然とし 0 T 50 合 然る 6 性に 裕 聽 7 我 明 H あ 映ずるやと、 かく感ず きて 5 理 0 確 T 豊富なるため、 あ 素より て自 特 7 0 智 動 0 6 0 17 との 後 識之 1 搖 み T 惡 せ H. 立 in 1 つ審美的才能なる 分子を驅 U 5 を生命とするも 依頼する弊は、 the E たるに み、 語 初 12 價 美 具 不 隨 究む を換 所詮 的 值 は 8 可ならざると共 thing 只 1 0 n T C 快 B 其 2 \$ Ŀ るところ 『美は 意識の透 威 3 を樂し 係 事 T 下 0 0 は 智 物 なる 識 言 美 12 that 観らる と人 吾 を丁 E 0 0 智 ば 必 から 72 A VÉ 1 比 は 4, 明なるため、威美性の練習せられたるため等其 識 ıs. が四 は 要起る、 間 解 如 例 0 5 得 的 生 章 明 我な 51 L せ beheld) は、 3 命 L 粗笨となり、 説明するも、 t ほどの 6 L 0 事 以 6 あ 之を練 3 威 吾人 之を正當間 6 共 品 か U 公式を離れ 物 F 品別せむ 科 意 るも 12 12 興 17 が花 學 識 之を美とは何ぞや、 智 宇 潮 存せず之を觀る眼に 人々は、 めに 習的 \$ 宙 力; T 融 1 と言はる 空疎 哲學 を美 心 滿 進化の高等なる生物は として、 0 生 す あ に使用力 足 T 視 理 權 ---を土 員 L 3 となり は 無教育者に至つて少 威 \$ くしと思 b 寸 っとし 10 ず、 8 たる [4] るに 1 却つて自ら智識的 此 あ かっ 臺とし 斯 事 することを等 らす 1 站 7 4 足る 5 點 0 L 對 故 \$ 12 如 N か 17 美は 12 ほどの 於 1 立 B は あ 認 在 經 す 吾 月 智 な 識 觀美 T L ら』 (Beauty 尊 その する 人 驗 -1 3 25 識 5 v 重 起 あり 判 開 力; 本 淚 かにして の眼を啓發するに なく、 す、 瞬 能 12 之に縁つて他の諸 徵 5 故 來 * 斷 理 に陷るものなれ 間 濺〈 て後、 12 0) 3 は 性 するに於て 他 はざるに 横 余が 17 心 0 の諸 人の 然 は 於 判 起るや、 具 相 | 震興 斷 T 的 互. 感 原因に 同 至 8 的 17 要 植 12 ある ると 根 化 物 あ 专 は 求 3 美 原 的 から 需 的 12 17 共

4 は 智 神 のに 來を作ら 識 的 L 0) 51 -1 保 分 36 證 析 を俟 比 せ 較 智 U 的 7. 識 は、 公 平 美象 なる鑑定家の 吾 È 一所見を 觀 0 的 原 0 正式ない 色に 説視せ 折 あらざる 紙 らる S 觀 類 的 :3 0 1 0 み 自 勿論 ことを欲 然 折紙 42 寧ろ 配 可 なき刀劒 偶 其反 るた L て、 射 め 0) 色とし は 相 み、 皆 互. 0 偽物なりと言 然れ 開 -5 係をあげつら どもその 僅 に適 好のものなるのみ、 ふ可 保 5 證 は は、 すい むとする 命を作ら 極 的

3

L

W

るを許され

ず。

3 表白 に始 識 形 れどか 式と、 本 美は 0 かに ķ まり 深 々絲を拔け 奥 枚の 意匠 づてに なる して、 0 美は 何 衣 儼 處 しき斑 12 關 17 然 庶幾くは、 終れ 象徵、 L ば、 係 12 て、 紋 るを 大實 是れ その は、 影 心響を與い 興味 只の 知 在 失望を発 智識 6 詩 12 とは 絲 ず、 至り 歌 12 0 的又は、 ふるかを見 裏を返 t かれ 絲之を作り は て、 5 じか づてに 繪畵 旦に 直 4 3 覺と た は ば 的 求 終となりては、 表白 むべき、 るに むる 斑 經 紋 驗 は、 は、 を外に あらず、 0 根 中心に 智識 本を てれらのも 之を作 して之を 裁縫 成 17 似せる刺 頼 鮮やかなる 的 5 實用に ぶる可 永 0 りたる人の美意識實に之を 繡 久 10 皆虛 0 適するのみ、 5 絲 斑 视 緑の、絡れ合ふあり斑紋を象ちづくる、 ず、 僞 知 0 製作 余 は决 0 みと 斑紋 L T 5 斷 0 智 色と、 作 識 Ē 見 5 * 絲 得 た 蔑 8 L 引 帳 T 3 包 るなり E せず 何 U v 1

れど余も亦こくに甘んじて、數本の 糸を捻斷せざる可らざる立 場 12

在

甲斐山岳 0 總說

眼 Ш # 竣 甲 立 斐 12 する は は 甲 山 斐が、 てとに 岳 國 中 於て一なり、 5 0 かっ 山 ばかり、 岳 國に して、 峡な左の に 意義 信濃 捌げたる甲斐全國圖は『人國記』 (元祿十 に通 飛驒等同じく、 U て 映 3 たるかを知るべし。 一寸の海岸線を有せざることに於 四年 版 所 蔵の \$ T 0 12 な *b* て、 四 古 境 51 高

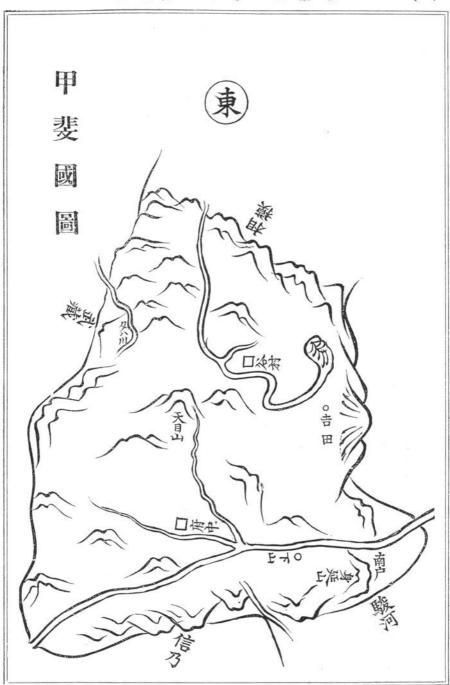
の窟入せ て著はれたる天目 しものと見え III 北 條時 特に標 本圖の如きも、富士や、八ヶ岳や、白峰、駒ヶ岳の大山岳に、名を標せず、日蓮によりて名高き身延山、 頼諸國を微行して、 記せる如き、 後代の作圖なるを知るべ 人情風土を視察し、 之を書き際へたる書なりといへど、 Ļ 圖幅 の大さ、 字體線の太さ等に至るまで、 疑はしきは論なし 凡へて原本通りを模した 武田氏の滅亡を

甲 - 斐山 岳の形 小

島

0





仙

或

岳

叉

甲

府

平

原

1

3

望

U

17

絕

大な

3

展

風

0)

感

あ

6

2

n

ら高

度の

山

は

信州や

飛驒に

T

文には 常國の風俗は 人の氣尖にして 宜し からず、 死す事を厭ば ず、 傍若無人の事多し』

山岳地理上、その特徴を列擧すれば、

府 盆 12 地 割 州 6 0 12 如 そこ T 1 DO 境 iz 0 0 3 中 Ш < 央 岳 0 を 平さい は 2 有 脈 0 盆地 して、 0 絲 を 中心と ることなく、 心として、 一國を成 八方に せ 隨 3 办 N 放 T 如 射 3 か 0 線 複 * 國 引き 雜 が な 得 3 南 構造 3 信 方言 北 故 8 信 有 12 大 せ 高 ず、 别 せら Ш 10 對 或 XI. す 0 3 2 中 注 心 甲

突前 121 比 甲 する 府 後 0 0 位置 大 3 B 山 岳 72 度遙 3 簇々 海 17 拔 兀 低 僅 立 5 12 す 最 るを以 百 \$ 近 Ŧī. 3 +

信州

諏

訪

t

り飛

3

低きてと質に

Ŧī.

百れ

米

突勿論

L

か

し州

C

國長

の野

四平

境や

12

米

米

突、

さを

驒

0

首

府

高

Ш

比

す

ば

信

0

松

本

平

漫

なら

Ĺ

め

ず

處

に疑

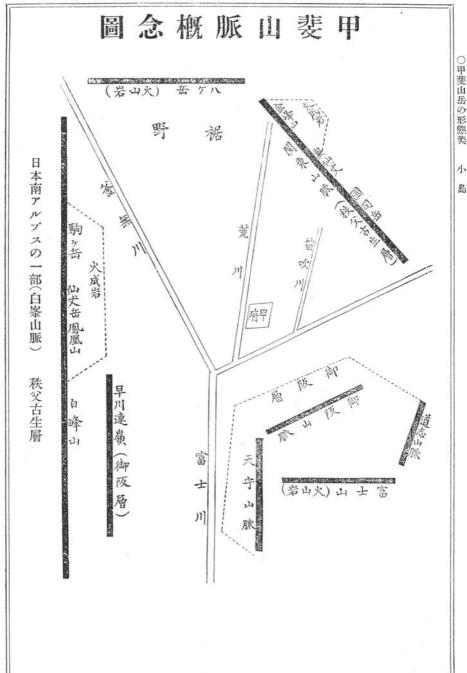
集す

るを

得

を(三 15 3 Ŀ 地 7. 前 信州又 より 要す、 見上ぐ -Ш は £C. 層の 2 * 岳 Ш 1 引 有 \$ 又 は 垂 高 Ш せざる ケ 甲 仙 直`來 斐に 飛驒 邁か 信 如 ٤ 丈 的れ 岳 州 偉大を感 伊那地方よ 感 53 漸 T 12 あ は、 ては、 ぜら 到着 次 士 駒 高 らざるも、 山 5 點と 富 30 岳 等 層 0 ぜし + 等 12 Ш り観 をな 落 山 11 於 0 又 Ū, 计 甲 7 Ш 發 4 主 點 州 난 72 7, 0 3 10 否實 \$ 7 7. 3 3 脈 U 後 故 赤 て、 亦 12 IV は 即 際の 然 プ 51 線 2 大 ち 石 1 Ď, Ш は Ш 他 ス 11 5 山 傾 より 朋 岳 系 難と 脈 12 斜 白 殆 * 2 削 火 玄 あ 峰 h より るが 望 立 高 Ш 刺 6 と人 とい U 脚 T Ш 衝 甲 < , 如 は 脈 す 府 超 为 地 以上 絶すす 面 3 平 3 故 J. I U. 原よ 度 を 57 階 6 硬 0 歷 低 0 3 は 角 白 問 12 かって 强 6 急 度 5 昇 峰 大 L 12 んを か 仰 竣 Ш 1 Ill は 6 خ 3 4 巉 5 糸 作 脈 T 立 た 想像 Ļ 屋梁 す 5 0 非 る白 Ŧ 約 す 高 常 そ さを、 3 甲 せ 傾 米 なる Ŧi. U 突乃至 白 为 府 峰 L 斜 抑 Ĭ, 米 故 1 高 17 Ш 儀 金峰 突 17 適 脈 T 4 距 12 とを な は 其 用 二千米突に至るを以 切 離 似 Ш 人 一、國司 3 白 例 B に感ずるに あ た をし 比較 とし 關 峰 るまでも 3 h 爽 \$ 岳等の一 i て、 Ш T Ш 故 0 脈 駭 は 視 12 なく は 俯れれ 同 魄 勿 3 0 論 12 3 帯とい 峰 小 思 0 は 0 山 U 鳳 赤 柱 伊 あ 那 時 礎 目 1 奥 6 Ш 12 Ш 17 Ш 間 自

甲



27

轉じ、

士

111

0

西

侧

17

沿

ひて

北

走

Ĺ

駒

ケ岳

0

東

態に

及べるものに

配,甲 र्यंग 小 ・斐が山 8 を除 除 岳 きてさまて を 觀 望する 著 0 3 为 1 上らざれば、 適當なるは、 人 目を 惹く 2 概 觀 望し \$2 以 無 能 i. בלל の如し、觀る方の人の位置はかくの如し觀らる、方の山はざるところなり。 3 しと 信 す 斯 0 如 4 座 35 6 0 美 觀 は、 信 飛 地 方 T は

る略 2 本 圖 を そ 揭 瞥見せらるへ げ

知

らいい

即

人は、

甲斐山

岳が、生成上に於て、

はた審美上に於て、

甚だ整

齋

なる

配

合を有す

る

は に本文と對照して、 如 何 た 6 かし T 或觀念を呼び起さしむる便利の 觀 念上、 山脈を幾何學的直線に描き替 ために、 甲 たり) 斐 山 脈 0 配 置 を示 たる、 至つて 粗 末 な

甲斐山 八ヶ岳と富士 岳 は、 大 山 とは 體 51 於 南 T 北 東 VC 西 對立 南 北 12 MI 大 山 脈 を有すること。

野を控ゆること相似 た し(正對にはあらざれども)雨ながら火山 ども 兩 なが 12 L て、 秩 父古 堆 積 物 多 t b 成 6 4 0

は(四 地(3 6 10 一白峯山 以 迸 凰 形 17 千五. 一發は、 と地 Ŀ Ш 富士 鐵 は 等 Ili 百米突より最高二千米突の平均高距を有して、各主人の前に伺候せり、 南 層 脈 形 脈 關東 と闘 12 Щ 對 この古生層の 0) 0 は自 北 走 闡 前 繞 向 Ш 東 Ш 山 東對 は せ 己の 12 脈 に於 擁 相 脈 5 とは 成立以前 反 西を見たるも 11. せ 5 兩 it L ń る金峯 白峯の 箇 東 たれども、 東 西 双 1 5 西 53 對立 前 方大手を學 0 L!! 甲州アルプスに、 は、 存在せる道志 4) 111 なれ その L は、 是れ べてれ 北 天 げて 12 端 龍 叉 西對南 大 L 12 IE. 對立 て、 兩ながら火成岩の迸發を有 井 Ш 對 二大 脈 12 孰れる長大なる粘板岩 せり、 を 山 は 御阪 相上 顧れば、 111 あらざれ 0) しかし 雄大なる雙對 間 Ш より 脈、 白峯山脈 天守山區 起 てての二 6 是れ は 0 大井川 脈(以上を假に 早 縋 地 す 鏈 は殆 その の前 を破 る點 111 5 化 DJ. 連 を與 5 と鋏 前 東 Ш 巔 の前 即ち白 710 Ш は たる 形 至 花崗岩その 生 0 御 に圍繞い 層 待 悉く御 Ш 阪 を控 岩 3 C 衞 Ш 東 山 振 阪 脈 北 相 せ より南 層 他 * 似 17 於 觀 より 富 火 12 稱 士山 成 ける 6

者

0

說

明す

るとこ

3

12

據

n

n

12

\$

な

3

あ

小

島

单

關(五)は 東 轉 O* Ш 字 L 脈 T * は 北 對 截 笹 東 1 子 U) 12 巅 關 3 係 0 如 < 12 支を・ 及 12 後 南 3 者 12 T は 向 U H 字 t 八 * 宛 派 5 岳 L T 水 た 5: Ш 3 0 脈 如 富 13 L 士 芽 di 包 5 括 白 岳 0 1峯とが 形 金 狀 5 亦 前 岳 兩 Ш 者 火 * 頗 控 Ш 3 脈 相 T 0 们 西 72 支を 南 12 南 相 쐏 12 峙 向 す CA 3 T 如 派

六)是 (七)山 あ を(0 釜 美 脈 6 は * 分 東 中 其 央 觀 寸 JII 以 3 3 笛 北 P, 南 17 角 吹 2 足 JII 0 17 荒 3 其 對 0 JI 立 合 支 1 とな 角 脈 流 L より か 4 釜無川 笛 る 起 吹 成 T し Ŀ Ξ IC n T 域 111 關 る 對 流 富 東 12 * 峙 於 綜 Ш 士 す 合 白峯山 3 T 脈 111 平 2 0 10. 北 行 Y 端 脈 0 字 大 把 0 相 群 北 形 0 國 似 をなし 富 端 72 は 可 -士 岳 駒 6 F 111 あ 4 となり 流 b 岳 1 鳳凰 2 17 = 於 0 國 T T Ш 合 鼎 等 數 流 似 立 あ 點 南 5 走す 0 0 51 勢 近 大 對 3 3 其 3 ip. な 笛 立 を せ 角 吹 成 3 111 111 を挟 すとこ ところ 51 無 荒 U JII 荒 富 頗 を JI! 士 3 加 相 12 Ш Ш 似 た と白 水 T 配 4 或 合 岳 内

下)是(中)曲(上)學 同 1 H L 木 6 < 牛 本 白峯 聖 Ľ 州 72 は Ш 3 使 脈 梨 富 は、 士 命 線 Ш 51 本 を 0 邦 噴中 出 樞 0 のば 南 L 垠 彎 た * 3 軸 とし 成 3 せ 以 ₹. 3 T な b 大 南 褶 FI 曲 本 を富 北 山 日 赤 士 本 石 Ш 15 大 ill 0 系 聖 III. 分さ 0 な る 主 要なる部 使 3 命 1 とす。 25 如 分 L を作 富 5 + 山 其 は 最 南 高 北 位 地 8 帶 占 0 镫

喧 八 出 12 列 4 72 # 岳 3 5 火 Ш \$ 0 脈 0 古 12 は 生 L 層 關 T 地 東 之を が Ш 脈 縫 0 古 層 合 せ * 生 る な 層 八 地 5 ٤. T 陷 嶽 釜 0 沒 せ 出 THE 3 現 Ill 12 脈 \$ 白 客 亦 聖 即 Ш な 5 脈 H 3 0) 使 本 支 島 命 を 15 あ 横 6 1 斷 T 金 す 澤 3 地 峠 皮 0 杖 弱 突 所 17 沿權 5 平 峠

7 語 ž 使 換 2 0 2 重 大 大 言 な Ш ~ ば 脈 3 2 如 5 4 0 酷 だ は 大 相 日 Ш 肖 本 嶽 72 全 5 は 國 t 甲 6 言 0 3 柱 3 石 12 L 0) T 隅記 石 なく 'n T 11 甲 儼 斐 存 난 或 ざる は 自然 可 5 解 體 \$ 15 終 0 17 3 L 0 孙 な 5

は

大

握

A

12

È

な

3

甲

斐

Ш

岳

7,

健士

對力

的产

12

觀

察

L

1

0

解

釋

L

T

百

Ш

岳

0)

配

置

12

1

2:

あながち不當と言ふ可らざるべきか。

岳を論ずる場合には、

TH

州

T

n

プ

スなる題

關東

山脈即ち金峰

Ш

國司岳等

の大傑を、

併

ただし甲斐山

ż,

其同胞的

盟主となし、

地藏、

鳳凰、

藥師、

仙丈、

刷下に、開

の諸俊髦

は、

悉く之に屬せり。

興味を寄せたるものなり。

石 ブ 0 性質上 ス は是より を他 0 富士山 改 8 題となす。 T 本 より茅ケ 論 1. 入 嶽金 5 美觀 ケ嶽を經 の上より て、 ッ甲斐山 八 15 嶽 岳 įζ 至 を二大別 12 3 して 線、 所謂 品せ 富士火 U と欲す、 Ш 脈 を其 即 5 美觀 題とない の性 質上 甲

大天 L は かり 甲 八井岳 越中立山 州 て所謂 P w 槍ヶ岳 プ 甲 ス 1 3 州 0 信濃の 語 7 穂高 in 之を ブ É ス 岳 は、 馬岳 7 御 I. 獄 邊に ての ス ŀ H 乘鞍岳を含めるも H 2 氏 水 n 3 南 は 8 Ľ 7 n 0 め プ 諸 スの 外 1 主要なる一 のとし、 A 0 央アルブスを飛驒山脈の大部分、 紀行 木曾 12 鏈 見 12 る 赤石、 して、 H 本アル 白峰三山脈を南アル 白峰三山 プスを三大 北 岳、間 即ち常念岳 別して、 プスに包 岳 北 燕 r IV 7

四 富士山論 附八ヶ嶽

富士 南 山 35 6 所 は 謂 曠 野 甲 17 州 孤聳して、 アルプスは、 八方より登り得る一名山なるを以て、 長大なる運衛(日本にては)にして、 之を遠望する機會多さと共に、 どことなく奥底あり、 近づき難 近 治威 12 あ 8 n 最

丈山 先づ遠 ILI の白 を 此 水をすく Ш 望より 形 は 扇 容 甲斐 倒 始め ふ用 懸な こしほじりに似めの大山岳中、 EV に供 ť, 富士山 するもの 3 死形 似 0 最新期の現出に た を言 容 b 形態美が、第一にその秀麗なる園錐形にあることは、何 と言 語 17 比 CA して、 たる 彼が如き高嶺となりたるもの、 係はり、 は、 文字の活さたるを覺ゆ、 堆 積 爆裂强, 物より 成 < n **覺ゆ、しほじりとは**る山相を、明確に道破 堆積物多くして、、在原業平が『伊 Ш 頭以下 は重力作用 破 海濱の沙を聚めて 人も言ふところ したるも を以 0 1 勢物 12 所謂 な て、 堆 か 大

〇甲斐山岳の形態美 小

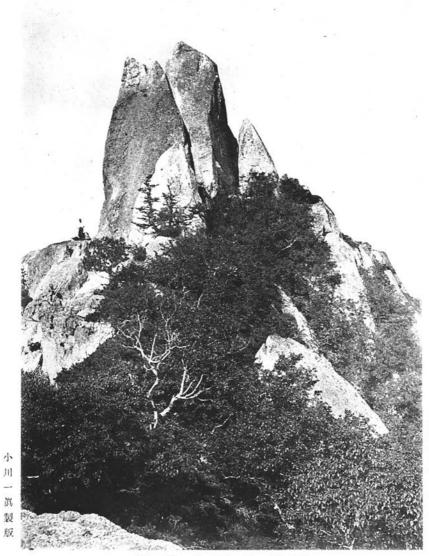
島

島

田

を聞 3 まてとに Ш 樣 說 T 美 = 全*仰 1 17 か は ず、 さだ 人 3 12 3 0 竟 3 水 あ 相 格 は 貌 3 Ш 玄 n を L 神 0 1 3 かっ 體 形 備 5000 能 12 12 だ火 た L は 7 士 • は 5 U1° 12 3 Ш るの緩 世 始 n 0 \$ 自 容 12 所 0) 身 は を 個°し 25 姿 そ 特 品語の 向 水 知 立 Ш 5 W ず、 20 T L 進 15 嚴 多 T の○微 神 ٨ もO妙 進 12 佛 終 を L 所 のoな T, 祀る 富 美 8 のºる 1 あ 辨 美°姿 それ 5 こと多 せず、 なっと Ш りで作 0 鳳 より 秀麗 n きを 凰 日に 3 頭 やら なる 宗 Ш 以 教 0 全 地 0 尾 個 地 T やら 體 崇 藏 體 盤 は、遠き神代 佛 火 拜 な 0 を始 物に Ш 解 3 高 为言 2 5 低 め 擬 VZ 故 12 せら 教 \$ 12 は との 日 0 他 0 本 \$2 と異なり、 木華 0 關 72 甲 3 係 0 平 州 岩石 8 てとを 耶 P 姬 jν 種 III を配 7 それ 拜 道 4 n ス 破 0 は 方 L 自 3 如 形 72 面 * 3 1

き火 富士 尖 和 ほど、 的 起 5) 的 は 3 7 3 名 山 過 直 12 4 す 12 + T. あ 壁 溫 3 度 角 歸 3 節 0 活 Ш 7 12 形 aJungfrau S 0) が 1 動 は か v 努力 < 交 截 態 故 せ n 1 グ人 塊 7 は 2 51 L 何 12 故に 艺 0 ち う情 8 たる 頂 之 外族 12 化 立 Ŀ 12 あ ば、 線デサ 他 L せられ、 鍛 らざる 八 對 0 か へど、 3 3 は 杂 す I. 温かさ人 ・優美な 尖角 端より 3 3 0 T 0 美くし 芙蓉に か 腕 0) 意 12 おそらく な 頗 立 0 形 識 る 3 3 3 如 歐 情 5 は 他 洲 擬 調 横 示 25 壯 1 0 1 3 女人 3 故 7 意識を喚 晩起する 和 12 步 美 我富士 15 端 的 寢 7 12 3 不 iv 當なる努力と、 プ 化 3 感 3 L 12 間 遠 す ス 映 T せ 望 波線 起 12 ところは ること或 力 1: 0 0 5 對 せる 來 細 如 寸 は 經 n 3 るや、 P 的 CY 3 過 72 ては、 るも 美威 力 頂 12 獰 齊 則 17 F. は 狭隘 あら 猛忿怒 整し 之を人 圓 線 急激なる 0 0 羞ら 優 滑 本 0 微 なる 世 屈 源 12 カン J. 行 CA HE ST 曲 0 < 17 17 0 L T 畏怖 刺 首 72 は 火 相 \$ 0 面 ふ柔 激 運 貌 位 3 口 0 目 0 を伏 と是 立 を繞 とは、 は、 動 8 12 72 流 4 和 8 0 3 亦 有 51 あ 先づ優美の すべきな 之に す ほどなる n 5 威 1 5 るも 推 T 4 無 とか * 如 移 伴 カュ 與 0 幾 0 3 3 0 Ŧi. は 美のチ 3 波 2 h 闊 圓 + は 凡 と全 そ山 線 凸 米 3 所 係 より 突以 能 輪 LI 頗 * 體 廓 3 刻 は V) r 岳 筋 自 圓 F. す 12 \$ 8 n 富 瘤 Ш 高 肉 ブ 由 ò 3 て、 今富 な 12 低 4 ス \$ 彩 即 0 0 41 0 懸 眼 5 + よく な 隔 角元直 貌 筋 唐 Ш 士 力 又 突 な を Ш と を



佛藏地頂山凰鳳

辻本滿丸氏撮影



景全山高新るめ望りよ山石

小川一員 1

nect .				

號

つて 拔 萬二 仙 一千尺位 女 0 肌 に膏 な 高 藥 距

T

\$

H

本

0

高

Ш

思

は

n

な

V

低

V

脚

0

下

大野

は、

どれ

程 程

54 12

\$

高

4

えな

v, が

故

17 原

張

方言

見

える

樣

1

難

有 見

味

3

薄

くな

る

登

0

T

踏み荒

3

〇甲

斐山

岳の形態美

小

島

n 他 山 3 17 1 典ふ 富 12 弛 すら 張 2 式 早 0 0 平 Ż 圓 節 奏の 錐 * 女 得 形 青女房 なる火 美を認めらる たる運 Ш 動 など、 は、 办 もの 筋 人 か の普 4 肉 な 感 優美 5 通名 21 なる 認 富士山 詞 ^ 7 た となれ 8 快 12 3 なる効果 の要素 名 如 し 辭 12 \$ を まで少女化 か 生ず の曲 實に る 曲 た 美なるも 線 8 せら 0 17 節 L n て、 奏に て のが 小 存 カン 美 富 せ 1 3 術 弌 ع 0 要素 きは 小 御 * 嶽 作 蛇 0 す 名 0 水謂

空間 尺度 n 且 21 ٤ つ富 形式 覺 傾斜とを 0 快 山 樣 0 威 は 中 0 有 玉 腹 一環を 分 以 明 下 齊が十四 繋ぐ 12 優。 美と \$ 秩序 \$ Ŧi. 度 N V より あ あ ^ る美意 6 る美を作 裾 野 2 の成生 識 に五六度の緩傾斜を曳 を 3 3 象成する 0 次第が n ば 四 全く調諧 12 足 る。 けるまで、 的な意 なるた 3 12 8 八 一字形 12 肉 1 眼 て、 21 0 T 兩對輪廓 この は Ш 種の調諧より 形大 は、 方同じ 殆ど

岳

Ш

月一旦。每 余は『富士山美觀』るな 遠 望せる富 日電 士 報 11 所 は 是 載 0 如 < 文を草し、 優美なるを許すとして、 近づきて觀たる富士 おて 山 近づきては に就きて、

如

何

左の

如

<

說

明

L

たることありの本

年

七

0 描 力 面 長所 け T 富士山を形容する文字に、 な 見る たの 高 は n < v てあるから、 か な 怖 或畫家 より 又短所であらう、 3 V とあ V Ш 12 0 0 た 12 な 話 見 5 頂上近 から 12 える それ 富 然 すあ 土山 カ; 邊 幾んど完全に よく 0 7 大野 倒扇 傾斜 實際 るべ 位 を、 き事 とか 原 描 御 12 きに 殿 六七十 • 場 0 兀 近 ある、 圓 1 然と端坐 V なり、 圓錐 錐 5 度位 Ш 形とか 北 形 は 吉田 L 齋 無 T 即 2 言ふが、 0 V, 富 居る n 5 なり、 が實 實 士 位 物 11 かい 置 000 感情 5 ic 何 0 取 作 處 上此 b 倍 か Ш 3 いら見てい から 方 75 上げた様 小 至三 Ш が を日 さく 倍 易 右 程急 本 同じ な か 7 つて、 5 0 姿に見 見るか 12 自分などに 高 尖らし 山に 雄大崇高といふ感じ える 左 てあ したいと思って から見るか 0 は、 はせると、 富 寸 士 Ш

人によっては 7 大宮 頭 の上 なり 为言 大虚 行 0 空 C 17 なつて の物を觀ると解 2 るか 5 3

富士 n た焼石を見る 山は遠望する に限 0 る

自

然

C

は

湖

إال

海

原

野

洞

瀑

布

Ш

嶽

2

n

12

人

間

0

方

面

カン

5

言

^

ば

曾

我

兄

弟

0

復

仇

V

3

懷

0

カン

小

島

山

岳

言 0 7 3 併 L 此 點 12 於 T 自 分 は 反 對な の意見 * 持 C 3

か 瑞华 决 駿 河 西ッ L 自 Ŧi. 近 あ 0 T 分 ~ 頃 海 單 0 T 3 他 13 30 以 上は 如 12 8 元 瞰 を 行 は J. 來 下 立 亂 0 0 無 111 せる \$ 伐 た 裾 好 T V あ 罩 3 か 野 先 3 ると 2 3 8 n づ T 思ふ様 原 て、 T H 富 10 本 年 15 ふ話 落葉 + は 4 JII 1 炭 裾 な、 Ш 0 標 1 林 松 野 國 急流 あ や、 幽寂 12 式 为言 12 3 な 的 あ 旅 も數里で 山 0 0 6 1 行 をす それ 毛 感じ 南 T かい 櫸 H 3 遮る と言 るが かい 25 P 72 ゆけ 5 から す 3 洞 山 0 など 穴 3 玻 T 为 t 近 57 璃 所 Ш が は 謂 質 < V 附 0 八 17 近 森 無 女 湖 湖 なと 武 为 7K V 岩 た 8 17 自 る、 風 L. * は 8 穴 か 布 C 0 0 書 森 V LU 林 類 12 8 中 暗 Ŀ 12 0) な發 瀑 V 12 は 河 様に 布 口 態 苔 展を 精 17 西 は 生 P 淮 美 5 白 文 湖 3 T 精 絲 畔 備 羊 2 0) 淮 T る 齒 裾 青 わ 盡く P 野 木 5 17 大 ケ 栖 原、 1 木 から など 山 17 冠 0 處 な 2 H 1 Ď 3 n 3 は 0 本

あ 3 in か 歷 史、 0 自 方 分 か 中 は 面 5 1 知 10 6 な な \$ 景色 V 0 か 10 殊 重 17 5 富 所 石 35 为 士 纒 置 Ш 文 か から 0 n 其 T T 自 あ 然 兩三 る 美 0 日 7 中 心 とな 周 33 6 出 一來る 契點となって、 5 V ふ樣 な 處 方十 为 里 日 位 本 * 圣 引 或 3 中 他 締 0 X 何 T 居 處 3 12

様な -> 側 0 为 火 T 低 Ш 其心 右 Ш Ш " 一赭 ~ 0 25 面 皴 石 力 低 頂 核 1 上し Ŀ. 8 は Ш 占 0) 襞は 78 富 72 8 俗に が 目 士 T 4 雜 高 3 草 Ш 八 鼻 2 積 岳 3 < 峰 0 3 Ш 解 美 な 中 極 \$ 皴 性 里、 0 劒 0 5 0 要 伊 な は、 P ケ 0 素 襞 峰 豆. v. Ш 木 を作つて 17 为言 方言 圓 7 言 山 突 な 嶽 錐 3 つきぬ 迄 里 0 形 2 から 7 n \$ ねる H な 6 な 石 段 分 T 番 < Ш V 富 0 階 明 3 高 鑄 12 る 0 士 里 と云 菱 2 型 見 あ Ш 富士 える 形 Do 3 0 1 å 置 美 あ 1. 3 Ш 物 觀 为 5 3 3 か 12 7 は、 な \$ 箆で 簡 大 岩 2 别 傍 單 V えぐ 近く 淵 で無く す 0 12 外、 ると、 大宮 即 伍 見るとこ 0 5 别 72 蜜 方 御 17 T 樣 す 殿 は 富 水 面 場 見 な 0 3 + T n 見 狼 方 爆 5 山 が跡 0 發 3 面 n 多 8 火 か な 美 夏 6 口 6 0 は 2 富 から 前 は 冬は か 傍 士 2 右 は C Ш 0 端 横 は 裏 は 为 0 方 12 反 綠 图 高 望 皺 見 塚 か 文 L 3 42 左 72 成

和

と矛盾と共

iz

あ

5

て、

神

經

運

動

の回

相

耳.

0

權

衡

そ

完全に支持せらる。

せらる

n

ども、

2

0

統

を見

T

復

せら

る、は

近寄れ

5

た

る富士は、

層その

眞

相を明らかにせらると共

統化

了

6.

ぬ藏

則

ちエ

ふる士

統立な

一夫は、

が 概

無括

なる

を綜の

士前

小て

幅視

に神

す

5

曲

の群

集

Multitude

of

6

12

あ

人間

0

T.

木

iv

+"

1

は

2

0

化作

12

遇

か

くる

的

包

合

的

な

る

輪

廊

は、

15

反

L

經

0

消

耗

を少

量

17

L

猶

且.

3

大

な

る美

術

的

悦

樂を

起

〇甲斐山岳の形態美 小

島

種 の念を生じ 4 2 54 何 女 とも言 日 n 光 T を せ は 反 Ш n 3 射 TT す 12 V2 が 美 3 浮 富 觀 0 3 から 士 \$ E あ 山 3 3 か は 2 大外 5 0 不 近 同 規 寄ると高 廓 則 ľ を な H 皴 例 7 から \$ く見えないとい 0 齊整 させ 阴 白 る業 0 \$ 幾 あ 何 7 6 あ 的 ふ缺 體 る 闇 式 白 點 併 T 4 は 統 L あ あ 6 して るに L D 輝 だら なる L < T 0 8 かい ij \$ ても、 6 あ 5 萬 事. は 化 亂 燻 \$ 雜 h 12 事 あ 1 3 な 6 償 0 3 端 T 0 \$ IF. 餘 \$ 不 あ 6 安 あ

あると思ふ。

故に その の輪 るところ、 存 3 は 一群を、 面 調 文字 0 す n 可 廓 調 類 V2 なり、 は通俗を旨とし 0 和 同 矛 0 盾 近視 みに 天 的 1 たる 單純 Ŀ なるを讃 は t L と云ふに 止まるも、 ものなき 72 6 12 0 は 統 ると 斜 作 5 品 雜 美す 17 ~ た 12 n あ 下 瓣 た とは、 5 界に る外 與うす れど、 だ 喩 化 るを禁ずる能は け、 17 ^ 富士 曳き落 廓 T L 言 て、 線 生 言 あまりの を見れ 理 は 1 Ш 委曲 この L 的 2 12 意 は、 12 種 た る一 ず、 ば は 录 筆數 相 4 雜 視 違 煩 盾 美 自ら全力を領する法院神經の興奮をして、 線 詩 1 縟 なることを驚 3 をか 意 多く な 人 てそは、 識 る目 蒲 大小、 0 を生ずる 原 せる 調 奮をして、 有 まぐる 長 眼 明 デ \$ 氏、 12 か 狀 テ て、 短、 L 見 1 L 態 3 かつ 統 w 深 3 統 は、 8 *多 送、 物 仕 U Ш 3 て富士 多 矛 的`量 事 0 Tu 3 線 略 ならし P 17 0 凹 盾 その T 於 0 圖を得、 如 12 中 紀 1 皹 7 T 0 12 行 線 矛 额 最 10 は 7 3 3 盾 素 しか P \$ 全體 雖 作 織 は 13. 可 t \$ 3 3 細° なり、 最 L 6 て、 T 为言 部 36 0 不 眼を 見人 崇 比 -如 可 54 例 雲 高 本 < あ 即 な たとし 轉じ 5 な 5 ると 5 12 4 3 入 4 羅 す C 特 て遠 共 \$ n T Im る富 2 色 3 諧 53 0 な 0 空 à 为言 は なる 衆 大。體 n 士 至 如 簡 0 0 差 < 單 峰 别 T な 17 3 な

島

ほど な 山 Ш 売 3 L かっ 15 形のの 3 から 3 Ш 繬 V) C から 慈 とや まり ٤ 完 n 表 12 からず 類に間に 悲 共 全 圓 現 U 殊 i 完 17 富 51 0 は 滿 Do る 200 全 あ 0 包 狭 1: H 短いじ 標%可 模型 隘 な 藏 Ш 木 5 型がら な は 3 10 72 U 6 的さむ は る 行は 25 4 \$ 形言 E な 故 去 德 0 ~ 富 を 式4日 式 ば 小 111 L 3 7 個 17 士 2 含 幅 本 0) 岳 ラ 性 見 5 12 名 有 的 仔 彫 な 3 旣 ずば富士とや 數 す す 51 細 h " 在 刻 3 0 3 3 IJ. の美 5 的 C 富 17 2000 < ず、 が験 かい 0 な T 士 觀 * 察 0 進り な VIII) 式 6 如 10 知 Ш Ш 5 甲 す 0 1 0 0 な な 3 岳 12 形 州 vn 趣 V 5 美。 正 ば 味 n 詩 ~ 为言 命 7 は E L ع X L 8 面 w U は 富 何 得 以 富 3 X よ 云 特 5 1 1 T 士 4 3 T ス 令式 芙蓉 富 F 之に 0 1 性 0 \$ E" 式 沈 夢 纒 對 的 士 # 0 カ ば、 女 峙 なら 幻 靜 2 の向 IV 水 兀 是 别 的 17 山 3 せ 類 平 名 型 は、 な な 過 3 富 拳 多 3 6 各 3 甲 和 * 士 きだ影 自 T 自 有 * た 州 石 は 菩 51 孤 す T 3 特 P 3 呼 高 薩 H な 1 だ 色 偶 IV 0 3 特 優 2 H 像 ブ 做 式 人工 あ 2 7 性 我 美 なッ 0 2 扁 1 3 的 ス 2 家 は 靈 な 0 8 6 平 個 130 チ E 恣 と論 如 小 2 Ш 0 " 人 0 X 3 圖 假 0 * 12 7 12 1 的 111 畵 素 山 形 以 L 0 な は な V より 式 0 美 5 T 1 9 ٤ と雖 之に 遠 と見 中 12 考 ず 如 + 1 自 慮、 且 3 T 0 す L IV 象 縊 3 iv 屬 17 3 0 n T \$ 然 ば ブ 2 # 平 0 CX 短 あ 5 女 쑄 暫 創 發 n 5 ス 是 揮 6 13. < 造 富 4 或 5 的 12 1: 1 唯 n な 簡 t す は 單 3 3 51 Ŧ 平 は Ш 圓 無 孤 富 式 λ な 物 は \$ 滿 員 板 2 1: な 3 12 0 12 12 滿 誦

圍 か 5 n 0 岳 + 富 は Ш 3 女 d 士 は T 0 25 は * 2 觀 ٤ 疑 夢 個 0 3 特 は 頂 0 3 17 鄉 Ŀ 如 肩 立 * 不 かい 幅 見 6 0 72 同 否 濶 3 3 \$ 引 9 12 八 Ш 10 t 大 火 5 T な 火 Ш 文 岳 來 5 n E, な 以 Ш 2 \$ T とに Ŀ な n 戸 じゃ 2 0 5 富 不 0 0 雅 火 は 士 2 八 5 だ 3 0 Ш 5 な 幻 岳 中脈 3 0 觀 と描 腹 火喻 國 3 は 山 ~ ~ 如 以 脈な ٤ L 下 H 西 on 3 汳 0 北 成 余 緩 4 生 3 斜 ^ と走 余 T 紀 は は 本 É 2 行 腹 5 富 0 身 3 12 + 腐禹 12 部 茅 裾 以 あ Ш 齒 頭 野 F. 5 00 5 \$ T 胸 ^ * 岳 如 如 ٤ 雲 金 は \$ か緩 霧 5 岳 欺 17 < < 引 包 頭 カン n を 口 女 作 2 < の亂 T 3 八 n 1. 周 6 字 感 悠 te L 圍 想 3 然 形 八 12 T と当 堆 な 0 5 ٢ 線 岳 穑 6 12 錐 72 35 17 せ 於 裾 及 3 0 噴 大 捌 端 T ~ 然 出窪

に觀

るとせ

C

甲

斐

讪

岳の

形態美

小

島

くに 比 れ 物 威 圓 Ш 5 錐 30 岳 的 體 峰 考へらるし、 火 35 あ 8 2 單. Ш 但し甲 硫 脈 0 獨 2 黃 八 12 岳 0 5 孤 旣 北 岳 12 立 0 立 か 12 火 數 せ 面 3 際 科 口 個 より * Ш 富 Ш L 0 假に て横 群 士 51 は、 諏訪富 0 あ 峰 らずし より 4 八葉蓮華の 岳 かく 心とし あ 士)が、 成 5 多くの峰を見る能はず)簇 5 て、 叉 T 北 峻秀なる圓 複 如 之に 12 火 條 は 口 0 圓 裂 次 0 形 能 錐 痕 雄 V 錐 形 7 跡 成 12 を 峰 數 沿 0 因 を成 小 個 有 0 2 火 0) す 八 T 尖峰 せる るほどな 葉 立 山 略 多 L あ 數 て、 あ * ほ 3 5 有 同 0 所 叉 す n 火 普 謂 3 ば、 かっ 17 Ш 1 通 交 根 L 八 5 0 八 峰 T は 石 岳 * 如く幾多 5 H. 5 岳 岳 列 あ 0 火 個 とは 5 な Ш 近 4 似 脈 53 5 て、 を構 0 全 鈍 别 す 尖峰 5 圓 T 分離 成 ば、 B 啃 錐 すれど、 形 0 出 或は圓 せる 富 17 0 1 あ 孤 士 72 火 峰 0 3 錐峰、 之を 內 \$ Ш す 茶 院 0 0 日 如

底鞏固 る代 17 街 为 比 ひとする 於 例 頭 視 ケ岳 以 b 4 0) 角 T 富 なる大 K, 杉 17 下 士 岳 岩 愈よ富 12 式 並 平 の富士山 0 木を凌 如 0 石 重 行 5 塔 塊 力 L 形 例 士 て、 は 17 外 低 抵 厚 17 5 に及ばざること、 支持 ば みと 7 甚 き感ある 抗 遜ると共 だ せ 榛 す 猶 名 濶さ 3 峻 0 3 高 12 堅 支 < 高 Ш は、 於 固 中 持 8 25 感 12 ぜらる 感 T + 0 0 有 分 葛梨點 する 厚みに ぜ 火 といい 6 Ш 高 大 として さに於 種 於 石 してとあ n <u>~</u> 火 於て 端嚴 ず、 T 山 笠置 事に 堅固 は 例 は 12 0 T 相を Ш 珍 約 3 ~ T おす 安 富 ば 6 八 中 類 0 全 1 とは 百 しきまで 街 搖石の大 米 旣 Ш 25 頭 突程 12 0) 17 IE 0 重 如 富 反 杉 丈夫 して、 度に 力 0 如 < 士 並 3 0 满 12 木 抵 的 見ら 濶 あ \$ " は き横 抗に 觀 0 ~ 八 3 念を生 は ラ 寺 12 ケ n 院 幅 B 5 なるプラ ざる快感 岳 何とな 0 12 を有するため 係 0 細幹 甍より ふる快感を與 は 5 ず、 支持 チ を與 < ならざる -1-高 危 甲 惧 30 的 0 < 弱さ 0 17 見 、横と縦との比例 府 は 平 4 情を生ず 2 原 た 美 曠 况 8 < 高 より觀 んや おとい 17 野 3 n 0 ども、 て 中 * 本 腹以 は、 示 3 根

は 1 4 54 腹 溪 T 0 は か Ш co L 麓 カン C 中 里 35 て穿通 2 腹 5 以 ふに 1: す は るあ Ш V 腹 5, か it. 10 Ш 富士 頂より V ふに に見る如 74 方に 中 央の火 く平滑なる威 放 射す П うる幾 丘 即 多 5 じはなく、 0 SII 溝 彌 谷 陀 を 岳 有 を 削 L 剝 赤 作 火 岳 用 П 最 壁 0 進 高 0 點 8 缺 3 損 休 酷 だ 火山なるを思 北に 硫 た

*

な

るを

どに

比

L

來

il

は

2

す

が

12

富

+

14

0

妹

72

3

17

慚

ちぬ

資格

8

有

す。

1.

島

甲

きは 0 Z \$ 西 亂 即 0 0 12 杭 ち 12 归 I 0 富 低 T 畏 短 如 + 0 < 0 差 南 は iz Ш 錯 峰 12 1 ц, 綜 頂 É 火延 感 # 13 米 TX る 世 不 沙 突 壁 T 5 畏 12 揃 的 0 權 る、 及 珀 3 17 破 CL 岳 17 L 壞 る 八 E T. 7 擬 協 あ 5 n 寶 8 珠 岳 ģ 本 幾 は 嶽 富 峻 誠 0 雕 3 等 孤 1 17 12 直 \$ 0 線が。中 突 0 圓 7. 火 如 兀 3 0 虚 5 峻 線 峰 0 暴 1 を * < 3 \$ 作 生 引 力 L 成 10 L V L 落 Ba ば、 12 は 左 91 下 3 4 5 す す 如 右 0 輪 , る 本 < a 亂 Ш 3 な 大 9 n 力言 曲 椅 分 以 n 72 E, 12 線 圓 3 华 T 角 17 42 圓 を 收 眼 八 形 天 生 まり 5 减 筋 12 40 力 岳 せ 配 3 列 8 得 0 L 0 櫛 過 峰 名 3 12 ~ 度 形 n n 頭 稱 12 を は 8 C 甲 な 努 得 华 甲 力 州 櫛 す 12 巾 州 世 形 3 0 7 r L IV 12 17 w U 1 渦 7 ブ 3 ス C かぶ ス 0 故如

参差と 出 るところ な 3 4 る 單 L 鈍 岳 乙の 秩*て 圓 は 12 L 序》層 八 T 錐 Ш Ш 5 噴 0 k 2 階 差 腹 起 美 V 0 岳 觀 錯 は 成 L 8 至 な 3 因 綜 丙 個 た 起 3 25 1 0 F. 0 諸 3 \$ 如 C 火 3 Ш L 形 0 Ш 塊む 5 形 諸 能 3 ま 岳 6 5 式 3 Ŀ L げ 放 大 0 T 衆 51 水 0 曲 流 見 自 差 諧 線 ず せ 八 Ш 5 别 3 脈 調 P 3 然 な 熔 3 0 岳 的 鎚 岩 能 は 3 な弧 _-0 群 2 3 線 は 12 火山 全 覆は を大 於 0 八 體 脈として見 3 叉略 3 綱 124 12 於 す VE" 12 57 他 1 等 办 \$ H 貫 0 定 12 3 略 V2 聚 統 就 4 0 + 1E ればつ 來個 距 1 合 離 * 火 12 定 为言 0 集 T \$ 0 8 如 Ш 富 隔 成 距 < 0 岐 1: す 特 離 離 各 n T Ш た 3 3 12 3 相 部 は 點 る 加 3 を 分 1 單 呈 を峰 は、 か ~ 12 解 頭 C 齊 如 L 富 す T る + 他 12 山 甲 八 Ш 0 近 向 ケ 17 類 3 3 0 個 岳 比 似 如 Ш 全 形 な 分 火 較 0 能 < 腹 見 形 背 Ш 0 L 10 て、 n 例 槪 脈 態 < ば 念 8 分言 は 0 可 結 11 如 水 3 2 段 CK 尖 < Ш 0 複 圓 な 噴

富 CA 士 對 女 1 神 0 Ħ. 倐 肩 40 5 * r 5 岳 超 嬌 3 12 * 就 噴 2 1 肯 8 V 落 發 T h 5 # は、 L 來 ず 3 + 水 竟 八 地 5 12 12 40 岳 相 傳 3 八 比 は 蹴 4 較 n 仆岳 古 る 1 3 趣 6 12 味 す 八 决あ 5 3 3 神 水 岳 勢 水 話 0 12 肩 8 あ 押 呼 6 幾 h L 富 處 狠 1 各 か H 士 缺 6 自 0 V n 0 女 神、 T 高 3 現 逆 3 八 在 3 測 5 0 12 5 岳 富 如 L 0 士 Ų 女 神 0 低 裾 ح な 對 15 3 嚙 岳 面 D P L T 高 17 至 力 富 6 6 V2 H 1

〇甲斐山 岳の 形態

2 ılı 3 美 岳 如 は 國 E 民 L 2 祖 自 濟 先 負 0 的 落 0 功 12 想 利 3 は 的 53 觀 Ш 念 相 0 標 4 嫉 Ш 妬 高 12 す 3 以 對 る L 12 T 至 唯 C 3 作 n L 0) る 3 12 とな 此 支那 T 朝 我 が 肅 山 4 高 幕 先 きが は 4 南 山故 北 3 17 1,2 待 貴 對 か 0 面 2 6 t ٤ ず、 る 3 兩 木 9 個 あ 为言 0 51 る 姊 超 * 妹 高 以 Ш 0 T を 性貴

質

12

力:

な

N

72

6

8

此

事

i

314

4.

國

民

性

根

本

的

相

違

8

見

3

Lo

太古 とし 至り から 0 水 且. 太古 T た 爭 0 0) 0 載 2 総 3 CA ٦٤٠٠ 問 \$ 湖 化 せ 0 た 水 多 12 0) 神 は、 なる な 話 11 ば 即 6 4 荒 ち 5 智 L とは、 H 無論 この 4 識 4 吾 L 的 20 富士 際 1 有 12 史以 を指 富士 何罕 为 Ш を 富 火 釋 DJ. 後 ili す 士 JII せ るに n 山 0 脈 て、 溪 谷 12 ば てとなるべ 對 あらざるか が 考 0 ケ岳をも含 八ケ L たる 初 T 考 めより 岳 し 3 こと等、 \$ 富士 3 むつの 如 =)甲 斷 1 富 府 Ш 層 是な 士 から 爆 と同 面 瀰 Ш 古 裂 54 0 じく、 厚 昔 は ic あ 優美なる女性としてにあらず、寧ろ嫉妬 數 湖 5 t 次 水 す 6 爆裂 なり 圓 L C 錐 T Ļ 形 L 方を ことは『甲斐國誌』に 3 水 蝕 な 熔岩その他を流せるを以て せる 谷 缺 なる 開 高 L 17 Ш なり C 今 \$ 日 知 0 L 3 富 2 老 <u>ا :</u>) + 车 11 * 甲 作 兩 府 0 Ш 2 火 3 平 3 麓 Ш 12 原

呼ん ば 12 < 12 如 5 最 なれ 四 富士 そ 平 仰 裾 1 \$ 熔岩 4 は 12 八 近 0 野 3 を 51 問 きた ケ あ ケ 峰 3 嶽 鹽 曳 最 6 岳 認 高 金]1] 兩 水 T < Ш 0 Ш 봬 5 0 大 2 嶽 火 ず 谿 八 13 火 12 3 特 取 8 谷 5 Ш 0 成 一 付 色な 岳 3 岩 12 0 5 あ 0 て 拼 間 L 8 6 0 3 た 運 42 过 T 裾 12 發 とて 3 命 0 單に 野 外 相 介 L 皮念を 森 錐 ٤ 7 12 T 룅 林 似 形 相 金 つと L 色を 12 裾 を 5 接 認 嶽 雖 8 野 個 L 蝕 と呼 0) 0 8 D 3 八 ず、 峯 言は み 發 めらるく 5 ならず、 ば 岳 育 -(から 到 或 底 七 1. 1. 17 妨 は 足 富 八 至 殆 つて 火 ケ 峰 げ 5 士 h 7. な 12 P 岳 5 111 頂 原 壁 T 岐 八 0 近き茅ヶ岳金 n 30 から 4 兩 12 形 n 15 者又似 削 るとこ t 2 た 嶽 1 失 5 大 磨 0 3 0 森 CA L Ш 2 裾 V 居 2 的 か 林 3 は T 野 35 な 親 5 54 は 3 5 しく 3 岳 蔽 12 駿 猶 は、 は 変 あ 河 普 八 四 らざる 通 3 應 0 登 4 周 絨 爱 りた 氈 2 嶽 12 樹 1 Ш こと、 應 木 0 中 圓 # O) あ 北 か る 12 滿 17 裾 Ш P 2 織 野 3 方、 赤 12 加 山 兩 嶽 發 6 0) な 込 3 あ 達 沼 發 者 せれ 達 亦 + 3 津 V 3 L せる 12 沂 12 雄 相 熔 n 傍 2 硫 3 た 大 似 12 た 流 0 0) 比 3 4, 煮 本 小 12 L 17 西 甲 0 水 府 は 堰 南 あ あ 0 緣 Ili 平 3 5 な 平 to 原れ 12 原 如 す 重 儿 0 n

小

島

ど尺 嶽 4 Ш * \$ 岳 は 愛 數 甲 は 何 Ш 州 8 家 r 測 1 17 n 5 央 得 惹 フ 7 カン ス w 4 专 ブ 3 ス 5 3 孰 高 前 は 12 は Ш Do 0 n 雲 偶 他 有 女 0 9 阴 4 大 峰 Ш 高 Ш 12 層 などと Ш とな 及 大 0 なる 2 美 を 同 4 崇 濟 T 高 す は た 5 50 8 n 遇 樹 兀 0 6 木 Ш のば 前 茂 0) 提 其 Ш 方 6 とな は 資 12 却 大 格 3 0 た T b illi 消 崇 た 0 滅 す 前 る 高 12 8 低 12 茅 あ L 7 ケ 比 < T 6 岳 3 は 例 3 側は 0 雄 カン 竟 あ 大に 小 12 八 屛 見 ケ 風 とし 岳 ゆる方な に及ばず、 近 多く 八 0 注: 5

富 士 火 * ケ 山 嶽 折 衷 脈 及 Ł CX L 茅 な る 甲 ケ 州 嶽 \$ n は 0) 7 in 血 即 プ 統 5 を富 ス 金ケ との 士 嶽 と八 混 12 血血 對 兒 ケ す 嶽 0 3 如 0 ら感 所感とも 間 12 享 あ 5 H 見るべ な 余か本 为言 5 章 關 0 東 富 Ш 士 脈 山 0 及 端 八 5 17 嶽 成 論 長 1 及 た る CK 次章 連 嶺 0 0 甲 如 州 7 in 宛 然

甲 州 ア N プ ス 論 附 關 東 Ш 脈

五

ころ 違す n 3 全 5% 命 t, 士 能 な P 3 T 突兀 八 0 威 3 何 是れ 雲 美 平 力 0 常 時 * 0 0 狀 12 出 は 0 態 域 始 T 合 如 V. 30 * まり 雲 か 以 成 E 表 12 せ 12 沒 6 17 は \$ 堆 何 L 3 山積 0 心 72 5 物 氣 處 天 る 體 と 空 de 17 3 を 終 を 去 昻 Ш 0 亡 揚 12 3 な 6 る大路 力 せ L 5 7 を知ら L T 8 甲 Ш 線 なる 百 州 ざる 威 8 r 現 種 的 IV 象と、 な 擴えに 是 ブ 大意觀 ス n のご者 17 快 Z 自 是 就 0 感 魔 5 n 0 H E 渺 ば、 力 形 茫 起 L 0 式 體 C 0 の吾 氣 內 現 人 偉 12 海 0 面 力 12 あ 21 山 是れ山な らず 嶽 認 12 P, 識 學 す さるべ 大 6 何 3 波 人 感 0 き本 な 覺 威 力 覺 は 9 瞥 體 叉 油し L 即 か 12 4 5 大 ると せ 山 17 岳相

點°高 3 12 點 殊 收 0 12 甲 州 峰 は 來 山 7 P n 3 ブ 或 ス 口 à は は 向 院 自 白 內 己 峰 關 東 0 0 0 如 群 非 Ш 8 衆 脈 力 を は 0 为 覺 如 横 團 5 知 體 綱 す 0 3 層 0 とき、 首位 ± 4 俵 相 3 仍 * 最 占 5 高 8 T 度 た 呼 _ す 17 3 0 大 3 標 Ŧ 者 坤 現 せ 17 8 5 作 2 L 0 n n T 同 75 3 專 情 凡 3 大 體 0 力 T 整 や、 散 12 0 是 抑 對 逸 ふ可 L n 易 3 5 百 0 É 注意 情 3 的 力な 17 快 威 因 此。その 受 J: 凸°最

*

3

T

12

水

作

用

は

柔 能 岩 L

脆

な 水 噴

3

水

成 堪 进 赤

岩

或

は

緻

密 赤

粘 白

板岩を穿ちて

深谷を作

り、その深谷は

或

は

山脈

の方向と平 山架列 高

堅硬

51 蝕

> て 火

1

蝕 出

17 \$

ふれど、

石 なる

P 3

峰

0

體は、

彎狀に

褶

曲

せる山に

T

前

Ш

後

せるが

\$

は

成

0

發

中、 Ш

共に

頗 全國

多 無比

くへこの事

は後

に説

くべし

)山は塊

0

迸 蓋

一發體 し中

ic

まり、

岩石

亦 Ш

17

あ

5

思 はじめ

CA

为

今 12

13

石

系

*

0

深

山

地 深

と斷

言す

るを憚

5 35

ず、 狀

央ア

w ス

ブ 即

ス to

は 飛

火

は、

地

圖

就

V

て想像

L

たるとき、

日

本

0

眞 幽

個 谷

II.

幽

谷

地

は、

我

所

謂

中

央

7

n

プ

驒

Ш

ふに べて 12 の上 より この 遠きてとに 51 T 存 敏 在 活 對象に せ な 3 る 無 あらざるべ 觸覺又動 自 生 己の力を寓 物 + かざる、 r n せ ブ T ス と欲 0 甲 州 如 3 7 L IV プ その 美 ス あ るな は 瞬 間 信 の觸 飛 0 # 覺 世に 央ア 12 より 山元 岳谷 iv 熱の名 プ て、 スと並 向 上 あ \$ 5 びて、愛山家の拜殿となること、 活 動も生ず、 2 の患者 は、 心も `種 0

を得ず、 高山 之に追隨する立山 돖 三日目となるべし 英物なる赤石山 立 甚 H 0 上下し だし ٨ 絕 州 山 、大天井、常念岳、赤石 それ 0 0 巓 7 裏山 以上 E 原 17 始 より B 達する 得 ブ は 境 越 0 3 ス 最も 農鳥 旧と白峰 8 な あ L 0 5 に、 17 (大河 高 3 0 さは 4 山 あ 短 八ヶ岳、 即ち 言 距 ^ -とを見よ、 蘆安村を發足地として、 三日を要す は 離 原 山、白峰等 なる 奈良 H に達するまでに、 少くとも U 白 方に 登山 田 馬岳 北 赤 俣の もしくは湯島溫泉を基點とす 2 といふ人あらば、 右山 は、 の深 道を選びて、 _ 駒ヶ岳(日 岳(北 は 12 從來の一 さを比 して 大河 岳に 横 (甲斐)の徒、 二日又は三日を要す、 豆 原 不 例す、 Ш にあらず 比較したるなれども、 錯綜 を出 頂 Œ 湯島 12 確 本邦 達し なる せる峠の多さこと、 立點とするに、 28 より 得ら 測 經 いづれも 萬尺以 にて奈良 量に 赤 石 n n 山 过 より ざるもの Ŀ 12 田 Ш 問ノ岳農鳥山の連嶺を踏破せむとす 0 ても、 達するに 17 大井川の東俣谷へ一 麓なる村落、 最高點に 山 猶 下 るまで 岳を算す、富 なし、 斯 おそらく全國無 0 略ぼ其列に入れる は 如 達するに < CI 遠 H \$ 五 とり赤石 L H しくは 士、御 3 即 は、 もし信 H 要し ち五日 比 嶽 なら 第 溫 Ш 間ノ岳の麓 系 办 乘 泉 州 間 日 より 通 中、 如 鞍、 * 過 大 目 1 槍 町 費 白 \$ 0 5 より 萬尺 その 3 Ш 峰 日 るは 岳 じる まて 谷 は < 51 他 0 穗

島

小

島

甲

非

作 分 LI 渺 3 立 茫 n 次に n 12 す は 全局 求 72 \$ L な 方 悠久 3 0 は T 向 12 之を 遠 12 超 Z 深谷 波 必ず 直 景 0 2 及 横 威 T 0 -C 0 角 L 1 深 * をな す きところ 邃 溯 -C 12 大 則 3 な ち な 3 無數 渴 3 7 時 21 3 12 T 物 仰 IV あ 間 入 た * 0 ブ と空 12 5 らず 8 大 即 ス 13 向 流 なら 間 象 0 人 h Cs 111 物でと 8 大 T 情 線 容 は 往 0) は Ш L その通 秘 幾 U n 到 岳 の°じ 交 奥 重 底 12 \$0T 坳 間 Ш 12 0 力 10 の°來 象 燈 5 压 按 か < pion. 42 塡 12 n 排 な 0 對 3 3 如 附 充 列 旣° L 白 隨 す 3 Ш 8 に○美 3 光 T 4 作 12 偉[○]感 3 物 3 \$ 谷 大なるのなる 威 塊 LI 到 0 Ę 種 情 層 達 72 T るなの。高距 8 L 0 4 L 8 容 てい、 天 得 彼 相 12 啓 n 0 175 12 深 を 個 T 他 3 虚 加 感 17 所 4 ずる 空 融 比 3 * n 别 合 る 照 す 0 日 4 は、 らさ \$ ~ 無 12 本 な らかる 9 3 邊 廣 第 とき な は \$ 袤 2 h 3 之 0 0 0 0 高 は 大、 ま あ 深 12 3 Ē 3 吾 對 Ш T 人 を in 是 图到 見 ま 深 'iL' n 0 T 谷 智 ず、 3 `內 1 崇 地 力 \$ 美 部 理 L 無 12 性 な 0 せ \$ 3 かい あ 根 情 n L 2 半 感 3 性 3 3 2 を 1 せ 所 地

な * 3 0 種 火 踏 斷 感 力 す 0 山 情 3 四 U 火 か なる 皆無 Ш L 周 专 は 0 0 高 0 1 弘 T * 2 翔 喧 零 2 出 思 * 萬 0 0 圍 生 il. 年 L CA 今の Ш 氣 T 理 な 0 以 學 1 幾 3 信 -决 老 かっ 種 12 42 甲 秩 + 父 L 0 憂 5 \$ 里 0 欝 \$ C 大 Ш 17 T 1 J. * 悲 谷 明 部 脈 連 1 とな 馆 說 分が 治 東 低 FI 0 吾 せ な V 西 L 情を催 T 3 3 海 3 0 * 言 * は 地 な 關 は 悠 體 要 \$ 6 東 さし らく、 人 7 せ 8 * Ш す な 褶 想 方 脈 ば、 8 る過 曲 像 12 1 百 地 な 於 L せ 質學 館に 去 年 て、 2 6 6 T 世 ٤ n n 幾 B 5 時 吾白 1 侮 百 元 187 千の 代の古物や、 3 F 朝 情 年 遼遠なる 峰 を 0 や神 * 8 0 11: 年 加味 如き 代 83 代 萬 1 为言 0 せ 未 0 連 4 ことも 3 古 或 大 富 年 來 綿 崇 民 褶 0 # 地 + せ 昔 先 美 0 曲 Ш 3 0 思 廢墟は、 # P 54 0 Ш づ 3 は 在 威を生じ 返 央 3 八 知 3 作 12 6 ケ 5 1 5 6 岳 その荒 之を T 0 守 2 來る 像 暗 金 東 武 0 I Ш 出 瞑 褶 0 廢 栓 可 脈 75 想 曲 堙 を据 比 10 0 滅 17 3 2 12 內 0 0 信 中 あ 為 側 狀 6 1:1 12 0 其 地 駿 回 3 頂 幾

0

亦

旺

3

官

動

ふ快感を生

0

形

態

は

な

3

配の

列 渾

例

ば

凹

T

題とい

如き

しより

來

n

3

光

線

影綜

色彩

P

富

士

化

あ

3

形

態

そ

12

T

現

は

72

0

6

H.

崩炎

頻

繁に

度

4

ラ

"

牛

3

1

0

皮

を

剝

如

地

皮

1/2

削

5

彼

为言

如

3

尖

錐

形

を

作

9

72

3

B

0

3

3

33 0

L

彼

0

外

廓

0

稜

12

C

直

線

的

な

3

12

照

T

是

0

圓

12

C

曲

線

的

な

3

を、

斷

崖

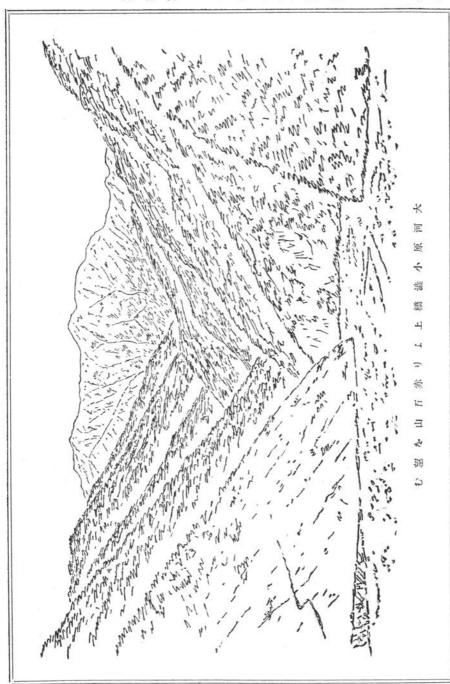
Ш 形態 美 小

島

繪 0 を作 12 3 3 圓 を 形 n 3 實 P 12 森 を 疑 羅 萬 3 岳式 中, 0 0 複 原 雅 界で な 破 5 聖 兀 T 始 於 味 21 混 然 沌 12 た 3 3 地 調 球の 弊を 0 角 防 21 30 浩 to か 化 21 35 L 描 T H か 3 最 < 巧 0 如 3 な 複 3

見 なる 雜 が 12 12 0 0 ス L 干 式 如 ī 粘 褶 な 如 間 る物 係 HI \$ たるところ 曲 力 < 板 鋼 < 岩 曲 せ L 鐵 抽 F: 人 象 優美に 象 線 雪 6 間 小 T 0 關 0 如 波 形 0 0 4 議 4 5 雪3千 大 本 東 眼 熄 論 7 *米 波 Ш 1 邦 12 T 突以 ふに て大 力 P 53 脈 見 を を 石 w 起 T 0 1 が JF. かい 樣 Ŀ 波 大 プ は は \$ 8 L なる は 過 7. T 赤 動 よく T \$ 褶 石美 大 な 靜 ば 抵 曲 曲 Ш \$ 斯 甲 かっ 此 1 雪 るべ 線 7 せ 系 不 0 大 州 美 線 ラ る 內 甲 動 加 波 T 8 2 8 < * V 7 0 州 蜿 in か成 白 入 0 0 T 想 波 2 ブ 3 6 諸 8 峰 像 w 動 b ス 2 す せら 峰 求 g. ブ 0 4 3 複 氷 0 12 ス U 高 間での は 3 を 低 विदे Ш n 雜 -* 形 般 ば 波 思 起 3 急 数 形 0 0 は 伏 形 岳 動 成 相山 峻 美 ť, 態 0 す Ł 3 な 8 違相 为言 L 7 0 3 農鳥 2 Ŀ は t ラ ٤ Ξ 古 4 6 ヤ 動 力 より 言 角 Ш 0 51 L 何 生 H 作 形 \$ 0 CS 層 3 T 說 0 水 を削 邊 用 T r 如 0 12 2 面 B とし 3 粘 t IV T 0 * Tr 6 歐 磨 ブ 板 波 風 是れ する T 來 州 ス 2 岩 動 0 か 重 より 吹 T 12 n 0 は 0 量 る IV 易 \$ 標 真 眼 褶 < ع ブ غ な 式 成 曲 0 17 前 3 ス 多 3 的 n \$ v. 不 尺 世 式 1 3 なる 氷 4 3 休 寸 0 3 L 是 河 12 則 * 不 0 現 兀 て、 あ 象 岩 0 直 B 以 斷 間 る 特 線 51 を 彼 0 T 0 が ~ 活 早 殊 形 12 あ 15 白 なる 峰 あ 6 L 柔 力 戀 L か 5 赤 ٢ な 形 日 T 本 < 削 T 石 雖 誰 自 成 は 滑 數 r 12 多 \$ to 由 見 * 緯 IV L 6 萬 堅 0 被 度 3 單 代 ブ 200 硬水

を代表 及 今ウ 本 CX 關 氏 的 工 0 東 寫 Ш 尖 ス 眞 脈 ŀ 終 中 1 形 照 氏 0 0 最 から 山 とし 尖 金 峰 峰 7 金 Ш C IV 峰 的 0 ブ 2 Ŧī. Ш ス 丈 0 0 0) 石 Hi. 外 槍 丈 は 廓 4 石 3 岳 描 本 · 配 呼 誌 H 第 合 ば CX. 12 す 對 年れ 左 3 ば、 0 7 如 テ 號 高 3 思 IV 半 野 木 相 氏 12 違 IV 過 0 あ 1 撮 1. と日 9 影 形 3 是に 的品 本 \$ 怒 0 0 照。 あ 甲 7 州 テ 6 T r N w 木 鳳 7 N 凰 ス 1 Ш # 7 頂 最 呼 0 尖 ば 地 0 n 藏 鳳 12 佛 鳳 3 は ELI 槍 山" 地 ケ 本 藏 岳 佛



3

8

相

あ H

L

か ブ

T 7

H

本

7 P

IV w

フ

ス ス

中

飛

驒

Ш は

脈

12

屋 5

せ

る とを

#

央 此

7

w す

ブ

ス

及 同

CK

北 褶

7 #

n 性

ブ 0

ス

我

站 Ш

甲

州 F.

本

7

n

ス

歐

州

ブ

专

Ĭ,

E

7

7

較

n

ば、

Ľ

Ш

15

T

\$

形

彼

力

方は を壓 と言 せざる 念之 \$ 方に 3 就 を ち H 消 倒 超 12 謂 3 か は 本 3 渦 す は 能 失 す、 伴 r n 0 す 2 な 所 3 す 反 は n 抗 壯美と恐 感 磁 n 壯 す は ブ 愛 * 石 美 力 は ス あ 鄉 聽 萬 數 0 0 春 0 性 中 IL < 不 6 風 八 0 穩 快 美 千 怖 É 質 和 0 40 和 上 いの念を の念 餘 12 力 則ち 17 然 なるに 8 尺 なる 0 日 ع 素 衝 3 本 如 0 T 3 酸 0 0 t 力 颶 E は 8 比 す 4 感 時 発 Ш すこと 6 的 風 7 思 覺 幾 な 5 形 0 12 n n 分のの 3 を生 或 ざる ば は 0 美なら 7 あ が 山 程 n 方、 ず、 恐 故 度まて す 所 b 彼 に、 ざる 怖 12 空氣 低 地 是に 余は H Ш 0 L 0 を愛 美 恐 所 同 n 0 T 7 故 於 を 盟 F. 怖 以 到 IV 51 甚 せる 7 含 0 プ は 底 成 力 念は だ 壯 ス か U 人 立 0 木 を許 を許 こそ、 < 趣 美 間 感 8 方に 郭 他 12 を 0 味 を 堪 す 起 如 あ A せ 12 ども、 壓 あ 2 3 5 < 得ざる と言 方が とあ L 倒 層の 解 5 L て、 す -C 釋 U 不 叉 n は 12 る 壯 L W 3 過 親 より 美を 往 調 ば 程 12 3 な 0 和 和 12 彼 4 6 * 歐 威ずることあるべ 的 12 力 稀 捨 る あ 方 寧ろ 州 12 薄 强 は 然 り、則ち引力的 なるところ吾人 力言 T 12 及ば あまり 力そ 遊 さときは、 れども恐怖は全く美なら 、之を取 び、 ざる 0 12 T \$ 强き 3 如 IV 0 8 3 け プ 壯 < なるに 美とも の美 0 ス あ 多 n を觀 まり あ 併 感 5 せ 對し 恐たが 望 恐 は 12 他 T L 怖 其 0 减 72 On

山 岳 形 小

島

島

ス

乃

至

南

7

w

ブ

スとは、

3

1

美

觀

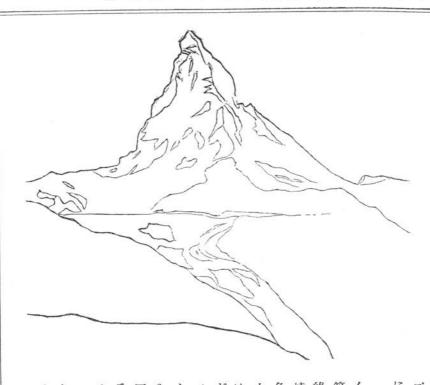
0

性

質

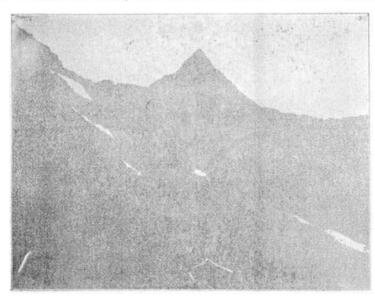
を

殊



られ 燒岳 岳 3 U は Ш 魚 12 同 發生 T 10 III は 質 大 線 或 中 0 發生 の高 主とし は 咄 大天井 如 なる 町 0 は 央 内 0 7 た F. 立 火成 地 側 LI 日 あ 石 學者 せる、 北 8 流 山 山 本 天 3 r 15 光岩多 等を起 英斑 17 12 火 地 T w 添 12 17 岳 豪壯なる風象を作 Ш 花崗岩及び片麻岩系 Ш その 17 泊 0 到 頭 到るなで、 ブ る高 岩 所 石英斑岩 葢骨を 脈 L 6 常念岳等 ス n て、 1 の迸 火 謂 0 のそれ る性急氣短の尖峰多 ス (高原を含む)は その結果は單調なる圓錐形 噴 原 山性ならざる所 南は 出 叉高原地なり 發せるあり、 地 漸 變性岩なる片 古生 く頭 古 0 0) てら あ 0 0 12 如 鳥 5 如 巨 さる 8 層 居 T, 8 n 層 人 5 12 たる 現 0 峠 * の地盤上 木 より成 作れ 叉花崗 は 邊 峻急ならざるま も、 曾 麻岩 穂高 部 t 鞍 如 南 2 L 得 岳 Ш 3 北 0 5 花崗岩 脈 51 14 17 るに 0 邊に 2 例 古 0 P 兩 北 黄岳 は 同 だ 過 1生層 火 洴 槍 0 3 斷 沿 # Ш





なる 色や 蛇紋

た

8

角

稜

峨

4

たる なれ 露出多

相

ž 2

作

5

甲 水 方

州

IV

ブ

ス

0 氣

波激

成

質

南 東)

岳 枪

3 劍

0

有 史以來

大噴

火

Ш 肺 は 1

1 腑 立. ス 8

稱

ののこ

のあり、立山の如ののかにて上りたる事なしたる事なしたる事なしなる事なしないの別磨烈しく、

如 馬 崩

氣

2 17 T かい

12 Ш

迫

T 0

なるべ

2

語は諸家 田上は花 で

花崗岩迸發

L 0 0 岳 1

T

全く火の

領 可 1 峰

土を

成

白

馬 0

家

0

文を

ひに

岩

粘

板

岩

0

<

T 紀

2

中

人異

なれれ

る如

<

E

は

風 北

0 T

作 ブ

用

層

轉じ 水岩 なる 17 0 げに 形 蜿 中の 信 を以 に悠揚なる ね 州 南 3 何となく 純 T, 0 T 如 粹 赤 IV 曲 大 石 E フ 韻 大 井 ス 齊 は Ш 波 JII 律 脈 0 曲 17 連續 的 直 以 領 + 12 漲 東 12 角 62 肩 甲 Ш 6 12 T 約 せ 於 ž 斐 近 伊 L 9 那 駢 或 束 6 12 か T 地方 的 神 屬 B せ 雄 經 17 Щ 角 東 を駆 0 3 0 形 西 大 H 白 換言 片 本 なる 起 * 0 走 伏 成 麻 17 峰 岩 12 す 向 的 0 は Ш 比 比 n 系 脈 t ば 類 なる 疲 例 頂 Ó は なさ 適 其 Ŀ. 南 度 度 分 同 せ 13 北

圓 54 明 方

r

n

7

叉大體!

同

な

0

12

雪

又

は 質

IV 3

2 殊

白

岳

0

鑓

5 7

51

島

荒

III

岳 12

は 地

百

Ш

脈 Ŧ 8

地

域

0

大

t

6

比

較

L 鳥 を

C

殆 \$

h 低

ど著

3 T

L

3 F

高

低

*

覺

な

話

披

V

T

Ш

脈

見

1

北

岳

は

T.

百

米

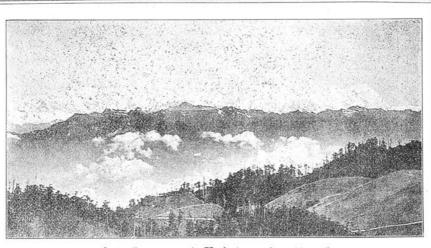
Ш

<

14 Ŧī.

+ +

米



山十 マヒるた觀り

なら 即 n 成 L 白 赤 C 頑 然れ 米 5 則 古 特 T 岳 相 ブ 不突の大差 5 駒 * 得 1 花 ス な ども 大 な 0 5 品 權 甲 3 0) 崗 ケ の柔 洋 岳 現とは 性 せ 或 無 な 水 塊 0 州 3 萬尺 味 成 狀 中 0 大 2 b は T と言 脆 あ 八 0 富 深 塊 鳳 0) 的 IV * 0 粘 凰 ケ 士 以 12 な プ 17 Lit 碓 成 磊 岩 岳 古 な 3 突 出 角 落 Ш 板 旣 3 Ш 上 ス 岩 谷 境 火の 南 0 12 T 3 12 破 L 石 水 --- · 8 可 峰 27 П Ш は 成 地 0 半 せ 如 な 優 藏 領 百 0 移 壁 岳 曲 は 米 高 とし 美 L が n 天 岳 土 h 線 8 角 K 突の 低参差なるに 的 稜 粘 17 破 等 \$ 0 來 12 永 ことな 北 八 + 6 向 刼 稻 6 此 T 12 を生ずるも 2 差違 小 は な 0 51 T 行 5 72 W 曲 なる 3 3 凝 迫 L 洴 L 岳 0 2 易 出 あ 占 5 T 12 齊 高 ら粘 み、 北半は 死: T 0 せ す 5 は 比 低 高 る 早 3 3 頓 仙 119 蜿 板 \$ 丈 同 L 北 3 低 粘 赤 0 12 波に 岩 花崗岩等のた 岩 岳 岳 T T 有 0 Ш 板 是 2 Ш 相 w す 層 ٤ 5 相 異 3 を な 西 中れ 違 ふことも P 抵 0 ブ は は 抗 な 何等 岳 ス ほ 至 6 どの とは 最 幾 0 砂 6 不 岩 高 h 中 T 秩 粘 せ 北 E 點 央 隨 t 序 花 屹 膠 東 意 小 五の均 味

然

物

行

0 崗

とな

直

線

的

なり

傾

斜

急

に(甲

州

駒

5

岳

0

抽

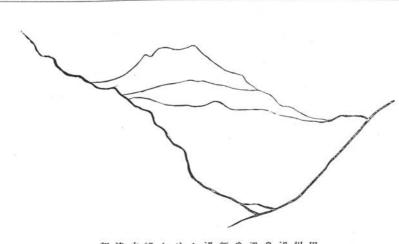
獄

谷

0

如

0



望遠山峰白りよ湯新泉温島 湯州甲

T

頑强なる抵

抗をなせり、

赤

石や白峰 成

は、

亦

ブ

3

同じ 力

<

れて華嚴や霧降瀑の崖壁の

下部を作

5

彼

が

2 IV

水

魔

51 12

對し 露 特

51

尖

0

如 0

堅

晶片岩の

如き古

紀

の沈澱

成岩より!

るも、

彼が

4

恠

0)

貌

を呈

て止みぬ、

故にその本

邦第

0) 如 7 如

大山

脈 奇 ス 0

H

高 Ш

Ш

脈

な

T

初

めて意外に

頂 Ш

0

平凡なるに失望

中

央

ア ば、

ブ

ス

絕

巓

0

奇趣多さを憶起

せむ、 絕

然り奇趣は

彼に

あり、 Ļ

鷹揚

迫)V

らざる

態

度は

るを前提として、 するに至らずし

頂

の奇拔を推論する人あら

其人は

登山

は、 北邊 呈せるは 立するも、 硬なる抵抗 湖 筍 入り釜 質に 簇 に見る如き、 州 邊 12 7 々として直立 この ルプス 前 盡 無山脈となるや、次第に寛斜して、波動線となり、 力ある 石英斑岩 述 0 氷河 33 より成 ため 火成 同 Ļ より成 作 K 岩 3 用 3 褶 0 12 n 曲 凰 72 0 我 T るた み限 为言 3 性 山 前 中 42 0 連嶺に 8 Sn 駒ヶ岳最 央 51 あらずとす 圖 12 7 ず、 L L IV T, L た ブ て、 3 たと も大觀をきはめ、 ス 此 10 石 B CI テ 槍 IV 甲 为言 は H 15 212 結 州 如 岳 晶片岩 光 P < in 尖急 Ш 0 >

ブ

ス 相 訪 12 玉

竟に

信

諏 州

の蓄積」なるに似たり。 英雄回」首是神仙』は中央アルプスの山なり、是れ あり 州アル 火成岩の プスの妹として恰も好 是れ は Ш 大地 の如 をそのまし 特に山 として に天に 是に 蹴 あつらは E Ŀ 對 げ せ 72 は n るま 3 たるに 關 『英雄 ての 東 Ш あらず ことに 脈 は 凡 は 如

1 島

小

島

於 Ш 系 如 ス 何 0 系 0 最 最 大 甲 V E \$ 北 南 州 地 2 端 者 なる 學 端 7 12 17 併 立 者 * n あ 作 論 Ħ 0 0 ブ 甲 樺 所 6 0 峰 ス 州 興 謂 1 と默 T 太 7 Ш 味 彼 東 n 型 系 0 西 2 契 南 フ 曲 甲 L な 侧 51 ス る 7 な 州 17 て、 對 3 北 在 關 3 r 立. 7 東 側 易 w IV 天 6 とを ブ ブ 地 Ш 0 脈 3. ス 甲 ス 表 は 作 本 刹 21 信 近 崑 塊 は 那 n 0 せ b 崙 境 12 L 消 3 Ш J: に係 甲 系 n WD 51 L る か 州 0 於 V 最 廊 L は r T 6 北 埃 T n ず、 關 端 は 多 ブ ス 3 + 高 東 l Ш 甲 (赤 作 度 度 州 12 萬 脈 6 10 石 古 甲 7 亚 於 Ш なる 州 12 2 1 T 系 方 ブ لح 1 ع 12 す ス ス ξ, 面 中 0 相 3 E' 0 盟 " 地 央 對 角 質 只 主 r 峙 度 7 使 な を は n 1 18 以 T 君 る中 ブ 共 ゲ 或 央 ス T 12 横 2 我 司 T 飛 富 との IV 程 5 走 驒 岳 ブ 士 せ 0 山 み 火 は ス 脈 22 Ш 2 7 甲 近 帶 微笑 州 は 0 力 7 5 兩 樺 あ 崑崙 IV 側 太 3 ブ L K Ш

白 峙 即 Ш 岳 Ш 最 ち 容 紀 高 峰 2 脈 72 3 行 な 度 1 Ш 知 他 \$ 怒 3 な 脈 3 奇 L 余 國 0 な 0 \$ 有 北 西 司 0 す は 3 Ш 關 端 岳 あ 3 花 17 東 な 以 0 ò 國 低 3 下 崗 T T 百 Ш 4 鳳 \$ 脈 は 돖 之を な 割 厘 塊 は 1 Ш < 合 白 72 全く 金峰 式 峰 3 12 無 益 金 風 0 式 尖 峰 趣 甲 粘 Ш 12 0 上下 板岩 味 員 Ш 平 州 0 外 凡 7 味 頂 Ш 更 8 17 IV # Ш I 3 踏 12 ブ 立 6 直 高 查 \$2 成 線 曲 5 ス て、 せ ば Ш 味 Ш 0 n ざるが 12 Ш 頂 如 6 L 17 始 * < 或 ٤ V L 窮 存 可 T 8 故 8 T T 外 0 N 奇 深 変も た 本 9 17 る豪 規 峭 きところあ 岳 大 當 模 日 3 17 0 宕 壯 < 過 本 n 狹小 する能 を 3 0 地 威 を 誌 語 近 なく、 る能は 77 るらし 第 Ш るも は 彙中 ばずと言 卷 < Ö 奥 一萩 仙 22 關 王° 叉其 丈 E ^ 野 0 東 ば 岳 氏 B. 名山なるを覺ゆと言 Ill 叉名 絕 17 脈 2 前 據 頂 0 稱 は 號 n 0 北 0 何 所 ば 旣 端 等 森 載 成 なる 岩 嚴 同 地 前 な 石 氏 面 圖 金 甲 3 0 17 F. 蜂 12 峨 州 T 0 は Ш 似 4 或 3/ る 口 が 定

說 國。 師°本 51 Ŧī. す E 彩 岳 < 凡 な 0 2 風 3 は 栖 如 1 瑞 V 止 す 應 N 宗 る 0 醴 所 敎 泉 な 的 نح 衆 6 意 V 禽 味 太 必 1 4 巫 6 之 33 0 由 蟲 12 # 來 0 隨 10 L 長ひ は 72 7 3 T 則 集 \$ V ち なる、 見 0 は な 衆 3 5 美を 故 U 8 12 其 集 形 \Box < 85 な 成 3 n 8 P 羽 L 鳳 蟲 云 12 凰 3 理 Ħ Ш 想 有 Ŧi. 六十 解 0 彩 禽 0) 9 12 色 17 3 12 L L あ 5 T 现奇 醴 血 凰之が長 泉 味 なる 51 あ あら ざれ 鳳 凰 ば 0

相

涉

6

n

3

鳳

凰

Ш

は

至

0

T

趣

味

あ

3

名

3

山

な

5

鳳

凰

Ш

は

Ш

なる

2

猾

或

司

3

돖

は

法°

〇甲斐山岳の形態美 小 島

Ш 石 則 琦 神 樹 鳥 瑙 草 來 栖 富 5 8 V 3 花 U た 崗 3 岩 \$ Ш 0 象 2 0 徵地 觀 念 8 て、 物 體 神 12 平 心 視 寓 せ 1. C, た る 3 は \$ 0 素 な I 3 滴 當 17 T 徂 徠 0 峽 1 紀 行 17 風

以 8 高來霧 金 行 なる Ŀ 象 る 0 種 天気に 屬 < なり カスラス 事 措 滿 徵 0 性 鳳 2 Do 足 象 神 的 0 凰 7 皆た * 徵 鑄 T 0 Ш 能 T 暗影閉 記 現實 何. 2 記 浩 頂 は 鏡 0 章原 原 上 標 物 1 4 0 岩 とな 的 27 53 員 12 體 見 1 12 鏡 L 12 8 12 解 は n 3 1 幾 中。退 鏡 \$ T た 加 3 3 釋 8 す 0 女 ^ \$ 寸 を 立 蒙 失 3 8 た 0 W 0) 篏 歸 より 文 悉し なら L 萬 B 8 6 說 S 12 徧 闇シス た ふの映中 0 21 13 なく あ 3 12 8 る L U 鏡 絕 \$ らざる は あ 痕 * 因此而堂 頂 平 鏡を 象 跡 舍 5 0 紀 混 ず、 17 徵 を 4 加 行 磨 かっ 懷 存 沌 的 ば 4 支 常 , 路 0 VT T 明 51 す 掛 12 夜 日 象徵 る 天 暗 示 3 復 鏡 < 地 南 古 12 忽 開 現 由 南 ち とは 始 我 3 事 せ な T 法 象 祖 6 始 記 た 分 n 8 Ŧ 3 先 17 8 n n بخ 0 7 往 大 大 日 物 體 ところ 为 B 分 た 如 時 が是表 明 日 妍 3 < 涂 也 な 輪 醜 \$ 本 な 0 あ 瑞 官 あ 6 を 相 0 號 6 6 現 覺 缺 照完窄 照ら とし 迁 L n L C 大#ま 8 的 ば 本 竊去 Шi 3 神きり す 氏 T 上 現 な 72 6 んと 象 3 見力 底 含 恐 Ш 54 H 畏。往 0 味 葦べく する 0 3 怖 靈 現 せ 17 瑞 閉って 照 體 特 n 8 12 L P 天石がと 方、 殊 ば 威 42 2 現 5 45 鳳 な す 2 ず L せ 0 凰 洞 2 3 3 屋等得 T 興 話 3 3 登 BIJ ざり 味 大 觀 以 我 2 万 12 Ш 0 念 2 日 T 为言 而 Ш 多 因 記 岩 を 皇 は 刺ぎし 頂 み 0 間 象 含ま ٤ 祖 0 T 鏡 忽 徽 12 畏 1 母为 鏡 思 かっ 里7日 は 擬 せ 2 7 女 知 0 坐、隱 余 2 洪 也され 日 鏡 は 6 理 0 神 カン 水 爾介て は

現 之を 然 は * 式 內 # 州 E t 17 7 覆 in 5 霧 は す Ī ブ ず、 線 3 12 ス 包 \$ 女 及 n 關 皆 式 甲 成 內容 は た 東 佛 州 或 3 得 T 111 とき IV 脈 脫 0 は 標章 0 大 は ブ 富 樣 0 ス 土 な Ш B 12 及 女 < 3 は 1 X 關 0 0 威 T 現 如 比 あ 奔 東 17 < 6 放 Ш あら を 自 脈 蜿 去 蛇 小 在 0 ず 兄 < な 5 0 とも 長 3 弟 7 3 他 大 Ш 壁 6 余 或 は ば 3 は 削 とて 富 人 突 行 17 兀 士 成 3 난 楼 13. 及 白 5 間 CX 書 Ш V T 八 72 奇 \$ 0 15 如 1 恠 猶 ~ 돖 表すな < 水 T 情ップ の不 夜 Ш 0 Ш 平 脈 ごと 的礼凡 國 0 0 火 ブベ 姉 12 12 は 8 映て 妹 思 喧 Ш b 然 黎 v 憚 0 T 特学な 3 如 3 性学く 12 暴 富 動 的外 にずに 甲 \$ 自 강 見』向 Ш 己 す 亦 W CA 0 如最 T

0

島

を説 遠山 6 甲 分 明 明 即 ブ 州 ス せら 部 ち 戟 ス 5 小 T 自 分 性 な 12 ツ 半滂 ñ ブ 無縫 .7 を 然の大景 却 根 3 書は スに ざる 想 0 原 Ш 像 沱 T 12 は 植 强 限 合 为言 時 17 华 うること深 12 か L られたることにあらねど、 故 12 委 沈沒 極 す 睛』といへる するところ 17 彩色の 甲 るとき、 3 せずして は 州 假 想の 7 密 却 IV νć 色を って プ 全 畵 より、 點 ス 如 肩 題 全部 30 綴 飽く 傅 0 肉 す いせり、 亦 Ļ 全 3 能く本 部 隆 暗と明との かっ を を 形を 標 8 K 求 とし 全沒 現 尺 T _ 8 目 す 度 IV 描きて、 質をあらはす、隱約 T ブ 飽く 3 は 12 T 3 ス當體 變化、 幻滅せ 17 視 濶 優ることあ る機 か を 欲 現實と理 いせざる 隱と見 5 會 或 17 雲霧 存する特 n は、 は て愈よ崇高 との 富 情 想 3 0 沒 0 な は + 間 緒 對象 に變 境に 性 6 0 T 7 同じ場 純威 美の 滿 幻 明白 冥 12 足 情 威 0 ーとし せ 4 か 妙 同 合 相 ならず、 ぜ L 質 如 10 5 12 相 Ţ, 通 るい 比 ず、 根 Ш 8 T 流 盡く して 亦 據 脈 斯 3 故 雨 是をも 表 せ 17 0 る 多からざるを常 現 3 見 12 17 如 T \$ 0 觀 美 3 晴 るも てと少 現 術 VZ. 分と、 極する げざる可 象 0 -近 0 は な Ш 原 委 黯 Us 則 か 曲 ٤ な

餘

可用证

旣

17

富

士

Ш

論

甲

州

7

IV

ブ

ス

論

とを

終

る。

富

<

8

控

方

面

0

+

地

漸

低

士 0 t 72 6 CK 八 は、 士 ケ 岳 富 12 1: 至るまで 及 八 ケ 岳 0 前 景美 7 in は ブ ス との 其 裾 前 野 景とを 又 17 裾 あ 比 駿 甲 較 州 州 せ アル U ブ Z. 0 前 次に 美 は 4 其 だ け 流 れか

甲 方 盤 州 面 地 方 12 0 面 0 富 L t 6 1 7 1 0) 不 は 0 5 裾 規 野 發 駿 則 が なら 達 河 るるべ L 0 駿 ば、 た 2 3 河 n 2 为言 n 0 12 0 如 讓 如 自 n 然 海 る 凡そ火 当に 72 0 生 け 成 向 ~ ず、 八 * Ш 妨 4 裙 くる 下るだけ 岳 野 0 0 2 發 同 野 育 \$ 方 あ は 面 茅 噴 n 0 と、八ヶ岳! ケ岳 111 物 0 の性 裾 野 質 と合 積 裾 野 及 0 び分 大 12 小 至 量 t 5 實 6 T 0 3 17 は 美くし 少に因るべけれど、 、質に標式的なり ば き發達 信 濃 0 を作 それ 12

比

L

Fi.

分

位

な

低

CA

T

動

大書幅とす。

完完

その 動 西 3 は 美は 休 釜 淑ずし Ш 雅さて 脈 12 17 L 限 6 T 何となく 0 n 域 12 12 る 入 \$ 6 受 動 南 その 的 は 釜 な 6 太古 無 111 12 受動 0 1 夢 鹽 0 山容を 的 111 な 跡 خ 3 龙 0 鑑み 飾 裾 間 野 3 な せ 72 51 は、古 めに、 謠 51 菲 H: 草花 崎 の曲 町 亂 0 玉 哭 近 0) して露に 傍 如き五 ま 7 W 湖 3 なだ Ш 力; 中 n n 5 河 口 裾 野 抱かる 美 は 活

を篏

1.

て、

淨

17

冷

靜

17

月に

4

H

6

味を惹き起い を穿 られ ほどに るかと疑 朔 JII 甲 i, 影 P, 州ア V2 純 黑 はる、 ルブ 水 T 粹 品 峻 流 2 折蛇 12 るれ ス は を溶 L な 3 Ш U 火 感ぜざりり 行するとこ 3 山 斷 下 か 0 L 殊 裾 崖 荒 傳 野 4 12 12 の受動でて 3 3 間 衝 蕩 ^ 聞 3 如 1 72 07 る急 4 は 岳、 L L 的。 か 巴 優°火 \$ 5 111 然 蜀 農 2 れども ं।। 鳥 美 12 0 1 すす 黑 Ш 17 12 0 至 火等 3 對して、 水や、 0 黑く澄みたるだけ、 0 み限 到底 口至了 間 なる 瀨 は 信州 6 新高 12 白 n 是 多 定は能動的壯心の陰熱 山 峰 0 H たることはは 梓 間 代 山 下 11 0 111 0 原流 濁 0 E 能呂川 水溪の 山容と對比して、 美とも 流、 欝なる E あら 高地の宮川 如き濁 P, 東 俣谷 ねど、 言 谷 ふべ を作 大 井 3 0 < 6 jij 如きは たるも 活 P 動そ 何 5 殊に 急灘 Ŀ となく のに n 流 木 自身に 2 なる 曾 粘 石 奥 谷 あ 0 * 板 6 岩 水 嚙 間 底 0 0 覺 如 ず 25 地 み B 石 岳 i 物 < 易 T る と関 7 L 四 あ 藍色を 淮 < Ш 6 行以 を 最 は Ш げ 上 51 \$ 砂 F なす 一の辿を 清 岩 威 倒 0 田 地

急に を喚き潰し 聞 0 水 ゆるは 聲 は、 て、 בנק 水 宇 心 1 る險 宙 內 間 部 ひとら 流 0 狀態 の性 水聲 まで、 質として是非 0 我に 尖波と、 に告ぐるが如う なし。 き心 顫 動と 地 つのみ、 L 肉 を剖き骨 ひろごるのみ、 17 沁み 只嘈 T. 雑なる不 心 窩 の深 諧 奥 音 1/2 達 す、 C 千

0 幽 谷 眠 動 力 n 2718 萬 3 4 年 Ш 休 0 める 昔より、 流 裾 3 野 今 水 H ٤ 死 せ 12 る湖 反對 至るまで、 のニ 水 0 力、 絕 湛 えず行い 然冷 叫 喚し 然 とし 7 は n 相 T 鬪 生存 旣 ふとさ、 17 淨 ٤ 土 滅亡 天 17 立 地 2 一てる感 風 雲多 途 Ĺ あ 0 る 間 12 51 大 自 彷 3 \$ 徨 然 す CA 0)= っるを見る 合 葛为 せ 藤 は る、 沈 2 富 0 + 深 Ш 山

th 牛は其形態にあり、 他の 半は 其色彩にあり、 本論は前者に 就きて言へり、 色彩は、 四季に於て異なり、 H 中 朝夕に於て、 逐 12

凰 1

Ш

巓を究むる能はず

Ĺ

T 八

山す +

當時

觀

す t

3

凰

8

登山

を試み

L

は、

昨

年

月

=

12 12

7

此

日

青

木

6

5

岳

42

達するや、

天

甚

12

疎地

なりし た

\$

其

况

は 候

之を

本 險 誌 惡

第

年 12 始

第 鳳

號

17

記載

たり、

今

夏

更

17 下

第二

回 3 日

登

Ш 至 L

を n

行 6

U

稍や

前 察 湯

遊

0

缺 處頗 登

8

補 3

N

得 漏 藏

るを

以

て、

此 槪

應

12

叉

辻

本

:) 晴に於て、 時 刻々に變化するも 0 なれ 11 色彩 美の 研究は、 週半月の忽忙なる旅行に於て、 斌 み得らるべきことにあらず、 故に他 H を期 t

揷 圖 槍 ケ岳寫眞 II 迁 本工學士の 撮影赤石山 0 スケチは荻野音松氏の作品なり。

凰 Ш 口 登

鳳

I. 學 士

辻 本 丸

0 餘 白 * 汚さん しすっ

里にして三本 斐國志 拙 回 文に述 余 上は此 蘆倉 は登 舊 時 路 72 木 及青 Ш 0 路とし 0 を記 編 9 篡 石 木 IZ 湯 加可 L 獨 係 42 T 6 路 T 至 日 柳 柳 n は 5 < ば 御*澤 澤 室台口 口 叉二里に 此山 21 * 現狀と相 0 近 於探 况 7 n 鳳 に至ては 6 相 凰 して精 違 合 山)は す、 す 抑 る點 \$ 進 柳 余 前 鳳 多 瀑 澤より 0 者 凰 か 寡 17 12 容 るべ 聞 就 山 至 なる、 西 T 口 る、是より峻嶺を攀ること又 しと雖ら 南 は は に當 -旣 未 記 日 が之を記 多 n 本 0 5 Ш 如 柳澤口が登山 く大別して蘆倉、 岳 村 志 1 5 述 <u>_</u> せるものあるを知らざ 0 摘 里に の本 一之を して 一里 道 青木 な 雄 略 17 5 Ш 湯 記 L 及柳 0 2 T 社 絕 る 後 12 澤 は 者 頂 至 な 0 想 17 5 は 像 蓬 叉 前

するに

カ>

5

ず、

地

質

調

查

所

+

萬

分

圖

も又

此

路

路

L

12

5

堂に

せ

る

地

3

ば

時

相

當

0

道

路

なり

L

は 地

明 形

白なれ

昨 と思

年

臺 は

ケ 3

原にて ノ山

聞 を記

きたる處

17

依れ 東陽

ば

近 T

時 再

全 版

然荒

廢



辻

本

8 歸 踏 す L U 3 72 は 0 3 頗 甚 \$ た 3 快 不 心 便 如 0 利 業 な 12 る 非 は 3 500 威 太 ľ 年 3 容 8 龍 山 覺 Ŧ. を 文、 t 6 倉 乃 蘆 口 と定 ち 倉 豫 まて 定 8 * 四 居 變じ 里 12 餘 る 3: T 柳 H. 澤 0 次 從 12 7 至 來 5 此 飛 h 方 地 方 5 面 ٢ t 12 5 向 先 0 D 容 づ h とす 念 Ш 0 者 為 稀 3 身 8 有 駒なら 12 は す 村 蘆 役 其 場 倉 蹤 21 12 照 跡 岐

3 澤 72 如 0 3 登 12 路 最 は 其 路 \$ 踏 直 有 查 接 17 鳳 值 凰 0 汳 す Ш る 信 頂 \$ 21 3 逹 得 0 と認 す た 3 n ば 8 12 於 た 此 n T 處 ば 他 12 愈 余 0 は 4 多 路 柳 大 と趣 澤 路 0 血 3 17 味 異 依 17 熱 L 心 とを 21 面 决 45 幾 以 年 7 V2 此 來 登 0 容 Ш 山 者 8 絕 無な 行 る 3 < 12 至 考

3

2

2

6

2

柳 澤

54 危 0 如 時 月。 明 제 里 Ŧī. + 旅 右 n あ か 鱆 强 店 方 12 は な = 6 望 は É 分 9 前 大禁幡 雲 0 甲 H. T 武4大 n 搖 南 休 州 を要 た JII 神 曳 方 息 B 晴 所 17 0 L 8 野 せ 社 T L T 指 12 春 ず 雜 前 思 T T L 驛 ī ふに 貨 を 全容 12 河 行 行 < 商 經 原 道 下 8 路 夫 甲 * 8 T を 2 車 約 認 營 は 横 州 2 す せ 武力り 名を 之 數 0) 8 8 3 里でて 町 3 12 街 難 停 傭 道 小 沿 1 甲 H 12 車 忠 學 芳 場 池 す n L 信 W N Ľ 校 E 1 附 这 君 街 * 野ヤ輕 12 西 道 \$ 近 本 過 向 な T 徒どか 17 會 17 n 3 近から は 4 牧业此 は ケ L V2 昨 員 附 岳 荷 年 他 當 原分近 見 す 12 叉 は 物 字 * 受 紛 72 程 珍 54 出 6 負 り 雄 0 る 人 飯 家 大 急 30 L せ 1 田 を見 0 < 坂 T 箇 5 HT 景 L 所 \$ あ 立 停 西 \$ 晴 出 新 す 向 12 5 車 場 な す 富 n づ 築 釜 處 3 8 渡 0 12 3 3 無 會 2 4 賃三 JIJ 家 4 12 T 7 地 51 岐 あ 後 1 は 午 路 時 1 下 儿 Ŧī. 時 突 る あ な 前 錢 村 か 12 漸 n 七 E 駒 + 端 3 3 時 4 赤 分 1 ケ 柳 壑 $\mathcal{T}_{\mathbf{i}}$ 6 L 岳 岳 澤 柳 分 澤 右 左 女 出 0 釜 頂 T 向 12 8 折 鳳 取 3 着 無 凰 0 3 JII 里 3 4 5 T 淮 街 12 地 程 D 後 道 は

炭 地 中がに 山まし 0 É 南 麓 な b 3 大 臺 武 5 111 原 0 は 岸 4 17 Ш あ * 隔 横言吉 T 手"方 北 方 大学投 坊芸宿 里 共 藪 10 1 駒 湯 城 鑛 村 泉 12 屬 は 南 す 方 凡 家 里 h 53 戶 當 許 3 住 民 は

لح

思

3 12

高

T 帶

東

京

灣

海

面

0

氣 計 人 4

壓

t 3

H

六十

りと 七

假定

之を標

準となし

T

空

晴

雨

計

12

刻

せ

る高

度

其 す 氏 3

依 は

3 ず

又

携 近き 收

せ

3

空

晴

雨

を 6

見

17

氣

壓 凉 鮮

百

+

3 時

y,

標 溫

高 3

79 檢

É

Ŧi. 3

+ 17 山

3

ì

ŀ

iv

8

示 な

せ 3

9

本 度

文 は 愉

17 凡

記

より

雲

まり

鳳

凰

駒

岳

Ш

輪

廓

ίZ

眼

前

15

聳

立

L

明

H

登

0

好

運

思

N

やら

n

7

快

禁

山

此

地

it

夜に

T 0

は 諸

流

石

ic

L 分

<

九

頃

氣

す

+

度

半

温

T

攝 す 地藏 運ば 嗣 3 1 至 子 伴 宅 別 17 は 岳 12 3 2 3 WD L 彼 0 以 12 L 至 かて 北 の『甲 前 8 南 辨 定 海 て が 6 な 明 道 3 は T - 斐國 ざる 全 得 21 日 17 案內賃 る處 是又 計 な 移 段 流 6 未 連 住 高 藪 知 中 圓 更 せ T -< 記 なり しと Ŧī. は 0 は 浩 汗 12 12 られ 湯 5 T + 歸 を 無 洗 n L 良案內者 錢 H 12 村 かっ L 行 8 間 が せ 12 CA きし 3 與 9 82 但 他 7 刻 神 能 2 1 室 圓 とて 歸 Ŧī. 主 を 階 は 0 五 萬 着 到 尤 + 宿 事 小 眼 51 實 錢 不 \$ な 池 F 道 底 1 人 食料 氏 得 氏 12 0 在 6 12 か 0 か 見 任 可 約 明 な る 5 35 Di 宿 束 日 配 2 3 務 とを 5 な 偶 は 登 此 圣 料 果し ず 村 0 は 6 Ш ば 闸 所 老 葬 客 役 0 登 白 此 案內 12 方 此 場 Ш 媼 ね 間 此 男人 72 n 12 行 51 後 只 だ ば 者 至 3 鳳 T 0 Ξ 支給 L 日を * 6 兎 17 凰 南 人に 後遊 選 は、 1 Ill b 3 登山 費 擇 角 小 17 せ 5 之を 池 關 i C 諸 L 何 先 等 す 客 氏に せざる たれ Ŧī. T 萬人 か 訪 3 柳 今 あ 澤 ば 參 猾 記 3 紹介するも、 4 は と云 と見 最 由 0 H 考 h VI 錄 當 12 住 後 Ŧi. 12 ٤ 17 えて 郎作 なる T 民 23 思 村 in C \$ 人 \$ 53 日 U 山 住 あ 鞄 5 あらば、 野 路の近狀を知らず とあ 左迄不都 矢張 春停 せ など置 夫 ó 一十二歳)と云ふも 3 t L 15. 車 が 6 由 5 きた 鳳 場まて h 散 なれど、 覧せん 凰 4 步旁、 合無さ 横手 荷 地 物 與 \$ 藏 文 又 0

依れ なり 新富、 宿 ば 帳 先客 を見 かい 駒 6 城二 鳳 凰 は 3 村 山 臺 12 宿 17 0 4 屬 北 原 大 料 す 麓 御 抵 3 泊 12 料 縣 Ш は 局 下 + 林 淵 技 0 五. 面 5 手 人 澤 錢 積 辅 4 某氏 0 は 宿 繁華 大 とと 七千 澤 泊 せ 0 3 3 地 日 八字髯 百 影 12 0 1 平 2 12 は + 萩 開 = 嚴 て かっ 萬 坂 8 東 12 餘 L さ人 京 VQ 步 サ t 值 あ ネ 段 原、 13 6 5 て ٤ な 來 0 か 城 5 0 余等の Ш L 旅 \$ 0 店 小 など見ず 寫 0 Ш 平、 待 8 17 遇 一受け 附 は 山 葵 近 素 澤、 ず、 朴 0 地 12 勢を 大 登 L 平 Ш T 說 飾 等 者 0 氣 は 地 更 な 4 名 其 12 言 は あ 絕 最 12

鳳 登山 辻 本

3 備

明 日 0 せ 進

17 手な 間 取

辻 本



む望を山掛鞍及嶽ヶ駒りよ原ネサ州甲

時 過 丸 寢 氏 51 撮 八 影 を 出我 うら V2 0 たる は 訂 有 が逐 5 12 H 堪れ 切 れ蚤 得暗襲 電中用意の 電中用意の である。 蛋 極 取め、 粉

\$

睡することを得

探

L

は

石空川及精進瀑

發す、 12 岳樹 此 3 きて 處 0 12 凰 をサ 金峰 從 雨 增加 極る か丘を登る、サネ原と云ひ、 か丘を登る、サ 傾 直 N 」と扁額 山眼 方 斜 、茅ヶ丘 處、内 小丘を 當 を五、快 內 面 松 17 最 郎晴 岳の諸 脊 林 岳 あ 28 | | | 8 作 も近き我が鳳凰の諸山に至の諸大岳高聳天を刻し、世 せる、 甲 小 0 U 12 · 斐國 此 石間 負 山 電に當て右 此 角 は中 測 とは 志に T 地 上 BIT 1. 勢は火力 東 量 泊 54 不南を指 别 標 は 物なる 大方に 午前六時 T 火 あ せる三本木の 山地右 、装割にか、、装車と文化、、装車と文化 本类石 12 折 本木なるもの之なず造の小鳥居あり 至て 左 て、 华 0 田小 窪 を思い、観望 似南 圃 0 は見 甚だ 5 12 間 ケ

尤

なる

次第

と云

L

7 < 澤" 來 部 る 3 連 12 当 为言 す 路 夢 1 0 狹 T 測 橋 50 H 左 右 量 \$ 12 折 0 は 想 叉 如 星* 員 15 4 12 U. 12 山之 到 非 4 F. 8 選サ 5 n 以 6 Ш な V2 は T 側 6 處 左 n 此 12 は な 躍 側 名 to 3 12 あ 時 5 ~ 上 即 1. 5 74 と云 5 5 I + :11: T \exists Ŧi. 之を 3 林 彼 水 分 と云 等 0 1 我 官 避 ウ 更に ふあり、 行 高 1 * Ł • 目 甲 百 L 送し 斐し C 八 本 + 不 橋 きない。 SE SE 普 C x 1 通 測 立たし 量 旅 ŀ 2 客 員 0 1 N 處 飲 あ なり 小 0 12 用 殆 女 6 達 するに ٤ が、 h 路 ど足 私 F 數 語 此 りとな 跡 頭 堪 せ 處 るも * 0 兩 ず 馬 即 側 5 8 H 国 0 ざる 笑 追 此 谿 邊 III 11 せ 許 行 ま 處 草 な 盖し **JIX** < 17 n は、 馬 は 此 12 T 辛 逢 清 Ш 都 ふって 此 路 水 道 育 鑑 51 ち あ 路 偶 定 0 E 式 # 誦

左 柄 地 T IJ 平 下電力 0 0 石 小 空 山 ウ 1 カ 屋 內 側 ッ 111 7 な * +" 0 チ 見る、 小字 溪谷 る を過ぎ、 窪 7 地 7 2 4 * 望 坜 ラ ア 大 30 か、 T , 石 1 サ IJ ħ 空川 1 平 7 术 谿 본 等 底 チ 0 0 才 白 17 花 左 蛇 CI ` 着 はす 岸 3 其 \rightrightarrows 0 下 L 曲 12 1 達 折す 110 時 是 せ 飲 + うる」 3 I 水 セ Ŧī. は 6 如 1 あ 分 きる 八 5 山 + 4 51 チ 時 下 左 開 大 四 0 6 + 15 狠 は 澤 Ŧī. 切 拜 0 借 分 5 谷を 即 極 T 地 5 端 右 谷 河 17 と記 底に 流 L L 12 な T て下る、 せ 入 分 5 5 5 水 界 左 を成 此 V) 力 高 ラ 附 作 近 所 ケ 12 * 7 峠 横 所 7 標 地 3 棧 才 木 な 5 道 1º あ 7 h 5 丰 前 方 入 面 F 會 牛 脚 7 6 1) 御 下 110 行 1 料 21 開 サ 4 地 初 銀ば ウ 字

JI n ならん 8 12 石 3 描 12 空 天 川 \$ は + な は 石 0) 之 H 即 鳳 虚 17 勝 n 111 5 凰 是 手 其 L 0 Ш 0 岩 字 T n 0 說 * 寒 北 石 流 3 面 水 用 啊 成 蝕 膝 U より發 51 せ 54 た 國 達 逢 L 6 志 が、 2 せ は h T 1 とす 今親 空洞 之を 大 2 武 ウ 3 L * 1 1 111 \$ 生 0 U 3/ 之に ľ 0 な ウ 大上 其 た 3 " 臨 る 名 幅 U 8 者 2 流 がを成す 間 ば 3 何 4 そ奇 12 餘河故 3 1/8 な \$ 12 0 陸 3 L 岩べ 前 今 地 T L 北 13 0 石 測 想 と云 は 海 1 量 皆 像 部 道 3/ CI は な ゥ 輯 0 花 是 地 製二 1-12 崗 或 名 U 於 13 7 0 + 12 堅 T 岩 似 呼 萬 全 塊 12 石 30 分 < 0 る 者 \$ 圖 齟 何 2 0 等 齬 あ 如 12 空洞 L 9 余等 L 小 T -武 0 水 は 相 Ш]1] 存 と誤 顧 流 種 梨 す な 縣 4 4 3 3 0 統 記 空 空 計

JII T 四 岸 12 出 7 細 路 * 辿 5 JII 12 沿 人 草 樹 路 を蔽 CI Ш 谷 漸く 幽ならん。 す Ш 白 合 の白 花 大さ 人 丽

瀑

i

T

は、

寧ろ

意

想

外

なる

12

驚

けりの

部

辻

本

0 如 \$ Ŧi. メート 君 ŀ 其 in 香を嗅ん 17 達 とし て、 1 た 1 か 花 粉 を吸 N 込 み 閉 す、 小 L く上り行きつ 1 九 時 ŀ IJ 1 7

を迂行 ざる は 度の 東 5 に敷町 疑ひし 盛に ざっい 宜 來れども、 麓 以 小 無理ならずと雖 石 許の 空川 17 8 進瀑 路東 南 下駄を造 な 相 12 第三編(初版 \$ 路 前 0 か 違 懸 12 方 なる名 1 n なら山 稀なり、 3 餘 6 L Ш 面 ば 12 左 T 谷 頭 坦 6 石 連絡 12 樹 偏 n 興 F Ŀ 地 虚 極 13 間 岩崩 す るあ 味 * を成 甚 11 83 12 腹 稱 なり、 17 だし は、 回 も、足跡海内に逼きを稱する大旅行家も之を實見せる人恐く絕無ならんと信ず、 素 3 T 叉 眺 を攀ぢ、 壓 名、 6 注ぐ 倍 + 練 狹 め L. n 如きを認 都人士の (白 丈、 北巨摩郡内諸瀑の欄下に 0 加 て聳立 < 0 斜 如き瀑布を、 余等は安全の策を謀 急 水 と記 暫くし するを 1 何百 殊に 面 峻 ガ y 0 山 未だ耳 なる せる 壯 あり、 め、 側の 1 1 し、 覺ゆ、 尺 T +" 前者が正しく後者の半なるも妙と云ふべきか、 觀 3 と稱 傾 Ш の本 ガン 或 又た川を渡り、 1 は 山梨 なは樵 崩 斜 腹 知 にけざる處ならん、 110 去 +" 高さ岩壁 12 頗 九時二十分右側に當 道 らねど、 せらる を上下するに、 縣統計 る急に 沿 路に 0) 53 ふてー 出 尾根 へど鳥居などは 5 非 1 づる方針 書一明 B 3 余は 10 らざるやの L 「精進瀧は新富村に在り、 上 て、 のも、 却て 登 町 急坂を上りて標高 由 許 る 治三十三年 水瀑布 なれ り登れ 認 無 欝 草 林之 實物 思ふに鳳凰山の名さへも知らざる、是等の人々に め、 益 深 右 ば 見 0 疑 て大岩屋 1 は ば 暫く L. 12 3 即 當 を見るに 勞力を費せるも を生じ、 精 ち右路を 就 T らず、 蔽 淮 Vi 服女 深に 少比 して瀑下の岩上に辿り着きぬ。(午前 左方より U た 約 宇 は高さ七 川に 較 當 n T 0 岩 至るも 路之より二 採る。 ば、 的 如 石 × T は大抵 高る三十五丈幅二 に躓 來 沿 興味を有せざるものなり 1 < 突出 + のと知り n ふ為 前 1 0 凡そ なり、 丈、 3 途 IV 5 一岐す、 3 0 せ 其 0 方向 5 幅 地 嶮 半 世 路に NO. 點 悪な 下 路なき樹叢 12 17 二丈五尺 等は瀑を見物し 會す、 左は本道に も達せ 瀑 明 17 17 即 3 ない 1 布 なら 休 --A-丈三尺、 Шi ち之を取 程 とあ ず、 蓋し先に 人の 路 を穿ち 0 掛 『日本名 男 本 啞 直 ŀ 多きも 鳳凰 色を IJ 宿 て川 たる 失望 兩 T 樵 T t 1 泊 は 路 6 書 勝 山 Ш 7 腹 以 0

鳳凰山第 一回登山 記

辻 本

進瀑の名未だ顯れざるは從來

此

地

方

0

廣 瀑 光 < は 其 0 L 0 壯 絕 空 T 美 頂 17 t 余は本 天 水 下 雲 6 鳳 落 12 凰 瀑 鳴 0) 下 Ш 布 3 如 L 北 を得 と雖ども、 面 飛散 始 0 8 溪 T 略ほ は 流 白 8 其規 此 未 布 集 8 だ 缺 陷 模 垂 大瀑 下 を満 0 雄 せる 部 大なる 逐 足 布 5% 如 するを覺 0) 精 良く は 進 其 跌 狀 となる、 岩なる山 仙 甚だ穏か たりつ 娥瀑 の織 此 岳と 處 麗なるが如き比に非らざるなり、 な 溪 n 純 谷 8 潔なる 相 逼 0 河 中頃岩に激する敷 T 流 51 匹 敵 立, するものなきを遺 回 蓋し峡 末端漸 17 狹 中



高



精 Ш 凰 進 凰

Ħ. かっ

た T

L

るが る 3 P 瀑を望みたるに、 瀑 汽車中 幄 旅 峰 現 Ŧi. は を攀 ¥2 * 0) 行 仰 知 + 東 中 位. 角 0 6 x 北 より 其實 甚 余は はあ 得 問 歸 8 72 づること直立 1 15 だ大 なる 途、 其 ti ١ 面 本 爆 るも ば n 0 際 N L 山 12 下 疑 山 あ T 小 12 正味百五十 5 を遠 腹 53 辛うじて其過半 懸 淵 \$ は L なく に當 澤 て、 餘 於て全景を撮影 望 程 百 余等 瀑 精 5 せ 相 瀑 H 0 x は 進 3 野 は T 違 1 × 條白 著 瀑 12 春 せ 大なる誤 ŀ 後 實 12 なる N 凰 在 兩 6 12 於 布 凰 12 驛 < 餘 此 H 3 IV ï 達 間 3 0 猶 縮 高 如地 12 な 約 12 13 小 I

社

本

城 流 之を と云 村 暢 17 な 距 12 汁える る Ŀ 垂汽筆 愛瀑 瀑 12 依 M 高 家は 里 誦 五 1 17 不 丈 充 序に之を探るも與あるべしる 便 帖 此 た な 不 す 6 丈八尺, 遇 L 0 北 35 名瀑を 間 爲 大武川に注ぐ 兎 8 12 な 廣 角道 3 < 紹 路 L 介 あ 2 n 今 n ば o 清さん 4 哲えて 靴 央 とな 穿 村 爽 17 連 線 白 切 1 0 望す 糸 雖 開 4 通 到 10 因に 高 達 依 + する 6 鳳凰山 丈 2 日 野 幅 12 恋 懸れ 得 12 太四 停 る深 車 尺、 場 布 余は 小 は 立 武 精 世 せ 111 進 F. 6 瀑 51 n 入 0 3 から 瀑 駒 其 は

北 御室附近 0 宿

779

休 を下 なら 路 峰 山 Hi. あ 17 Ш 50 午 ŀ 頂 御ずの 5 w 陷 更 前 3 T 或 17 業 V2 0 6 如 + 登 を 頗 石 12 笹 Ш T < 口 時 石 岳等 なさ 3 笹 5 脊 途 鐢 演 Ŧi. 湯ある 渴 無 ľ 淮 3 + 彼 中 12 方 續 は 處 達 0 分、 42 行 15 0 0 諸 辨 苦 せ 困 す 13 1 慕 如 1 1 路ら F. 當 3 鉴 T 2 5 3 精 U 5 難 澤 幾 な 1 雲 Ξ 箱 0 3 進 0 表 瀑 乃ち み 所 3 L 12 年 + 5 奥 かいか 分に 下 7 容 至 17 0 時 謂 來 is る、 を出 17 五 Ŧī. 樊 幸 発 14 行 カ + * 2 郎 L 0 人 L + 滿 U ^ 足 を見ざ て、 快 あ 7 分 作 T 孙 成 +" 笹 場 を 路 晴 n 0 深 E 水 12 0 眼 1 谷 0 登 約 山山 界 * 左 悪きと、 n 直 底 6 Ħ T L 多 3 ば 漸 微 12 捧 水 側 時 T 方 終 東 < 脊 Vi 聲 + Do 12 度 5 其 大 來 * 12 少 + 向 12 Ŧī. 進路 なら 溪流 L CK 出 × な 賴 Ŧī. 8 痕 n 笹 < 分 誤 其 路 て、 1 3 6 急 を 12 0 平 " 6 中 屢 h F 尋 斜 余等 方 水 響 坩 ti ず 12 時 4 کے IV 3 す 3 あ な 0 入 絕 V2 消 2 IffI 探 る 深 5 3 +" 登 を 12 5 午 失 \$1 后 12 L F. 地 林 T 0) 6 登 5 多 は 針 時 路 氣 精 あ 中 た を費 時 葉 12 淮 6 時 5 3 10 17 15 各 T 樹 21 1 處 瀑 T 樹 る さかも 二合 截 12 以 叉 + 12 0 林 53 素 密 T 小 休 分 困 57 F: 木 1 遮 餘 豫 全 屋 息 標 却林 + 8 0 休 5 見 5 息 17 せ 12 路 6 想 < 0) 高 * 跡 入 時 出 n 會 とて Ŧ. 5 I 水 L 飲 3 5 * 樹 Ŧi. 四 L T せ 1 開 疊 + 間 百 只 T b 瀑 Ŧ 近 口 + < だ 愈 喜 豁 布 17 右 3 分 無 L なる 廿 方 南 漸 3 4 < 12 1 4 ざる く千 間 登 望 为 其 0) b 4 木 漸 時 能 左 東 谷 IV n 专 U 0 (6 な ば 0 13 17 蘇 下 8 老 とて ず は 隔 林 笹 百 九 同 指 5 小 中 L 七 南 T 武山 斷 T + 筢 12 角 思 僅 10 鳳 續 Ŧī. 3 111 T Ш t 此 0 處 0) 凰 少脊 x 重 5 n

4

6

○鳳凰山第二回登山記

辻

本

より 項 向 中 T IV 12 分 あ 鉾雪岐 轉 立学せ L + 7 0) る 笹 名あ 内 脈 < 7 南 11 の、 7 É VC は 樺 X 向 最 テ 0 2 或 左 倒 頭 * 湍 は 木 以 其 21 狼 訛 П 籍 單 傳 起 12 12 登路中 世 12 7 非 3 7 5 \$ 此 タテと云ふ 重 ざる 峯 0 は 要 12 なる 無 柳 L て、 澤 力 1 ic 地點 6 Tr. 達す、 柳 郎 鳳 불 作 澤 凰 1 は 連 1 5 3 Ш 角 * 大 7 測 望む 體 タテと云 显 12 標 於て とき鳳 ある一 CI L 凰 南 奉に 方 が 地 4 藏 指 甲 T · 斐國 Ш 來 11 志 0 高 峽 -T 3 御 間 行 九 坐 路 ょ 白 石 は h Ŧī. 左 + (L) 此 方 處 12 0

崗 水 12 五 ď 光 Ш る 眺 3 景樓 なく 望 水 郎 17 0 脊 前 12 0 なき 鼻 磊 作 煩 甚 至 至 戰 53 前 淮 3 8 3 石 は \$ 11 0 寥 4 出 だ を 面 續 迷 故 澤 \$ 5 斯 雄 を nn nn * 其 1 樹 0 踏 惑 あ 3 別 大 極 1 林 1 覺 是よ ÷ 測 な あ 余 1 8 端 强 な 開 3 ٤ 1 行 は 澤 3 た 5 H 12 思は 可ら 之れ なれ 心 * 6 突入 6 9 T 鳳 中 下 道 是 俯 山 ず 非 t 議 3 1 ば 路 す n 淮 第 凰 脊 瞰 12 常 10 武 3 路 6 0) す 山 甚 及 なる 中 寧 JII 51 n だ 餘 木 量 は 口 Ш j は 脊樹 Ŀ 此 4 3 6 難 _ 高 ば 0 6 狹 ず 苦 下 流 當 は 斷 4 水 層 處 壁 藥 < 此 無く 痛 な 荷 あ 流 17 游 木 51 Im 艇 師 3 處 3 3 な 欝 3 57 易 * 至 岳 障 直 を今宵 感 5 べ向 1. 負 左 茂 な L 0 V 12 害 ľ 3 7 T 坳 5 3 25 1 L 12 L 至 12 樣 0 F° L 無二 た 始 看 T 3 0 T 3 3 3 子 安 8 h 0 = 3 進 ---困 全なな 为言 بخ 宿 \$ 澤 n 無 行 帶 Ŧi. 難 ど斯 三に な 泊 0 今夜 郎 難 木 午 L 0 依 3 何等 作 難 地 源 澁 3 Ш 然 后 と定 < * 着 猪 は な 3 宿 0) Ŧī. 頂 12 5 思 進 天 此 Ш 泊 小 頂 V 時 ò 祐 際 脊 な 點 ず ·其 N 地 1 F 御 12 2 た か 12 T 1 全)L 定 右 n 何 室 非 3 達 千 Fi. 右 5 形 時 岸 ば 12 僅 處 6 L は 8 7 仞 + F な な か 下 12 此 2 12 困 7. 3 現 + 0 る 幸 辿 Ŧī. T E. 3 3 3 難 倒 脚 1 L 樹 町 丈 专 な は 御 13 せ 木 T 6 分 ŀ 最 林 許 道 東 H 9 確 室 5 夥 17 IV L と云 5 當 から + 12 近 か は 左 L 0 南 谷 下 0 明 水 な 何 殊 < 地 0 1 之を 平 朝 あ 處 3 12 底 方 絕 T n 小 12 ~ 3 なる 扣 淨 Ш 3 處 此 壁 V 武 至 12 遙 地 を 水 頂 地 12 邊 乘 11 6 迷 12 若 P を 12 を 左 出 超 富 0 成 蚋 F. CA 方の 撰 撰 滾 達 L 入 て、 群 L 流 岳 夫 す 3 0 3 て、荷物を 4 0 8 らしき處 る 層 谷 行 攻 虞 12 或 萬 少 蜿 < 擊 は 時 决 J. 21 步 蜒 左 あ Ш 1 1 F 頓 潜 間 9 12 12 3 0 岩 を T 5 に容 浲 る 大絕 故 3 Ŀ F 卸 矢 行 遲 即 12 U 12 な す 張 易な 5 鐵 仰 壁 再 時 花 目 條 あ CK

1 kg

12

辻

木

六 時 3 + 氣 溫 九 度、 高 T 白 x 1 ŀ IV 12 T 柳 澤 I 5 此 處 17 至 3 實 12 + 時 間 2 74 分

來 雜 不持 孰 談 怒 0 8 2 12 0 忘 n 時 灰 3 飯れ \$ 移 \$ h 灰 な 廿 1 Ш 0 3 焚 天 中 飛 臥 から 17 得 CX 水 床 八 込 於 難 8 12 3 敷 H 時 10 行 頃 くべ 3 珍 15 3 毛 物 味 中 2 か \$ < 好 布 3 謡 方言 25 世 3 0 包 8 12 T ラ 女 n 樹 E 野 T ば 宿 5 厭 枝 " 迄 無 * 0 程 喰 利 1 油 殘 世 用 枝 紙 U 12 表 8 8 L 蔽 寫 切 吞 面 T 真 鍋 5 氣 は 2 12 T 0 溝 を 乾 懸 五 寢 黑 L 郎 < T 54 板 W 又 * 作 就 な 容 夕餐 取 6 は 易 換 T 燃 な 野 飯 0 料 支 6 を 3 10 4 臥 採 L 度 集 4 IZ 集 8 0 L 樣 力 な Ш 世 3 白 7 54 1 寢 少 な 6 樺 4 1 0 S 大 は る 0 餘宜 木 植 は 物 5 H 木 氣れ 8 厭 E 許 古 味 來控 I 4 か 生截 艱 6 僧 難 b 暫 蓋益倒 ね 0 常 Ë 0

光 11 八·語 17 74 0 度 月。な 前 容 面 T セ Ti. 山 L 時 H T 1 な h 的 1% Ŧī. 壁 + チ な 氣 分 3 0) 18 午晴 皺 + かい 前 + 襞 紀 0 四 度 念す 如 極 7 時 25 15 起 1 此 信 T 3 床 3 鮮 附 ず 7 か 5 宿 今 3 近 泊 徒 な 2 モ H 等 6 3 地 \$ 21 ヂ * 非 珍 發 3/ 5 ね 此 最 ば 處 \$ 3 L 4 左 は 3 ウ 3000 澤に 快 茫 谷 7 盛 殘 晴 底 見 沿 念と 12 15 な T 3 開 6 2 T X 遂 花 上·思 鳳 12 L 前 n は 日 凰 な 过 ず 出 III 其 3 0 溪 は 0 他 壯 樹 水 流 カ 絕 間 12 觀 = 8 力 10 T 接 透 ウ 嗽 L (L E 町 能 7 IJ 12 は 西 51 寒 C 北 t 2 17 御 5 7" 例 聳 室 1 IV 氷 57 力 7 0 * サ 如 達 수 ウ L 余 は 12 L 溫 之を 度 6 F 7 8 Ш 1 素 以 " 檢 頂 IV 1 T は す 唯旭 サ n 6

面 な 12 屋 は 御 な 水 \$ 岩 H 室 す 面 溪 る は 0 窪 呼 \$ 餘 1 比 2 0 4 5 8 17 53 較 to, 便 僅 的 漠 3 小 利 は 然 岩 石 確 ٤ 潴 す、 L 溜 0 カン 多 な せ C 3 4 但れ 取 處 は、 本 1 6 な 余 1t 0 之を る 0 8 あ 所 6 17 な 見 渦 彼 4 L ぎず を 0 樣 0 青 以 み 感 T 木 誤 旧 而 蘆 5 或 L d な は 之 其 倉 3 1 岩 兩 五. 北 6 路 郎 石 御 0 作 少 72 交 室 2 L 3 立なり 誤 53 左 當 ع あ 12 3 5 登 L 御 # す 6 T 室 P 12 雨 1 3 霧 水區 0 處 * 凌 0 别 舒 21 供 す あ 1 3 給 6 流 12 爲 足 あ は 3 3 兎 8 6 n 42 北まど 3 角 御本此 此 風室"方 處

溪防

離

n

左

12

登

b

針

葉

樹

林

(1)

Ш

爷

12

沿

U

漸

<

登

n

ば

海

拔

T

几

百

+

+

Ŧī.

x

1

ŀ

w

17

主

C

左

方

花

禦

物な

25

7

覺

悟

せ

3

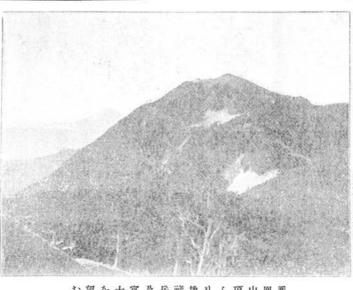
口

らず

〇鳳凰山 第 二回登山 記

喬木 岩 滅じ 砂 0 て眼 大 斜 界次第に廣く、 面 21 會す(六時四十分)、 仰望すれ 之れ ば 别 鳳 以 鳳 來 Ш 此 頂 處 峭 天を衝 12 17 連 年、 な C n





む望を士富及岳藏地りよ頂山風風

1

ウ な

U

3 "

110 7

2

ホ 7

Z +

1 110

7 ナ

y 1

J = 松

ウ

+

力

7

"

× 4

5

オ 7

カ

5

7

"

サ

等

0 方 ユ

花

8

着

けた

る中を過

かっ

面

より 6

時

T

時

+

分 ウ

Ш

頂

な

稜

17

野

宿

を要せし

こと僅

か 鳳凰

17

時

問 下

四

+ る山

分

なり。

物

小

か

5 最

ju

Ш

51

登りて

8 げ

多 は

く之を認め

得べ

偃

增加

高 0

山 諸

植 高

麗

絕、

益

4

高し

蓋し富士の

崇美は

甲

州

五 鳳 凰 Ш

目

睫

の間に聳立せり。

須臾も余の念頭を去らざり

L n

地 ば

藏 初

佛 8

0 T

大岩 偃

は *

3

3

0

12

T.

之を横り

登

松

見

12 波濤 高 斜 面 之を仰 を天外 L 51 沿 東 Ci に畝 方 T 關 登 東 らせ、波上に秀立せる富岳は、山 n 山 ば 系より 眺 望愈 御 々開 坂 山 脈に 豁 至る山地 地 藏 岳 嶺 0 容 頂 絕 南

故 は 面 崗 岩 霍 角 12 爛して認め難 摸 藏佛 塊の重量せる上に尖立 左迄危險の思もなく、 蝸附し するに「天文云々」 (鳳凰山絕頂 て登攀すれ 岩塊の傾斜甚だ急なれども は是よ 大日云々 約 十分にし 先 6 東北 乃ち 小 」の文字 石 12 て彼 當り 龕 切不 と佛 用の T 0 : 像六 著 辨 荷物を 明 ぜ 段高 なる Ш しも あ П 5 多さ 卸 巨 其 花

辻 本

辻

本

主岩 を開 つに 其 余 51 面 亥 他 * 0 人七月二 を整りて は 如 甲 12 例 は 0 W 0 · 斐國 余 灌 4 倚 多かって 根 V 表 木 瘦 0 依 頭 12 12 L 槪 3 勇 部 + 志しに 長 0 鳳 T 方形 < となれど、 測 \$ 九 0 10 凰 欠損 な B 負 T 山 11 50 岩端 _ 0 巡 CA 途を遮り 天照皇大 とあ た せ 絕 窪み(長さ四 6 3 3 頂 12 其 雜囊 地 佛 6 の祠中に掛鏡あり」と記し 南 , 寸異樣に感 像 藏 17 御 を除 を見 他の二つを見 出 0 兩 神 づれ 立 岩 尺、 鎮 174 像 0 3 坐」と刻 間 ば 横三尺、 つあ 是より せら 蟹 僅 小 行 許 かっ 3 ĨZ る L る L 0 空隙あ 12 餘 T 10 深さ三寸許 辛くも 巡 岩角 右 娾 地 5 端 面 B 凰 て岩面に嵌入せることを記さず)、其下 5 T 2 餘 10 5 Ill 逐 通 地 は 大神 身を側 つ越 此 12 過 小 甲)を造 なく L 處 斐 -周 得 T Ш 國 岩皴 ١ めて 東 n た 頂 大日 北 6 面 3 0 臣 之に あ 最 * 17 IE. 如來 摩 之を 賴 初 至 郡 入 到 6 n 新富 と記 n 達 ては 溫 22 11 は長 H 辿 しく、 n 村 3 ば n 此 1 Ш さは 處 北 ば 處 た 時 高 5 扁 凡そ身 12 面 17 講 出 12 平 \$ を嵌め込み 中 間 な づ、 小 L 斯 る神 3 餘 おか 長 1 左 は 大岩 此 石 6 石 面 石 佛 周 南 碑 53 圍 幅 龕 混 高 右 は 跡 方 淆 凡 3 は あ ケ 甚 は 明 なりと云 0 5 治 + 力 だ 6 他 狹 間 2 斜 高 石 許 Ш 15 < 12 扉 +

ば、 與より 主と 定 地 とに 3 取 12 せ 藏 6 佛 比 計 h n て二つ 区下 ど兩 就 算 為 0 T すす 称 8 岩 は 3 3 54 あ 其 12 長 分 3 0 小 \$ 間 大岩 大 最 3 n 面 3 1 高 17 倒 空隙を 點占 7 割 + 中 12 增 思 間 間 12 13. 至 せり 劣 基 CA 餘 縱 T 存 は 脚 21 n 0 紙 す 劈 6 より 星 此 3 條 此 君 寫 基 を岩 外 約 絲 12 あ 脚 非 を 東 + 6 1 北 下に 用 丸 間 6 ば 17 意 東 盘 A 立た 北 L 4 十八 個 來 t 2 全 然之を i ń 6 L 曩 2 め、 L 仰 T 12 1 か (聳 通 1 8 别 WD 過せる空隙を造るもの)、北方に IV 物とす 北 3 答 同 な より 樣 とと 攀 3 0 0 を知 3 裂 撮 際 柱 は 影 睚 12 を n 至 目 L. 立 下 當 6 0 あ T 君 荷 な 5 12 るや 仰 0 物 3 身長五 角 中 如 否や 箇 0 12 大 入 0 なり * 大岩 之を 尺 n た 知ら 寸 3 相 西 個 ず、 せい と岩の 抱 方 0 擁 1 副 準 置 余 す 3 岩あれ 位 とし 可加 望 は る 置 其 \$ T 高 T 11 0 17 此 たれ 尖 2 寫 如 頭

部

1

鳳

凰

Ш

0

眞

TE

な

3

絕

巔

は

抽

藏

佛

0

尖端

15

L

て、

之に

登攀す

3

は

普

通

登

Ш

者

17

は

必

要

を認

めざれ

此

H

稀

有

0

快

晴

VC

L

満天

拭

ふが

如

<

Ш

巓

I

6

129

望

3

る

壯

觀

to

言

語

12

絕

L

72

5

文

徒

12

冗

長

0

嫌

あ

n

畵

的

介 て、

するの

必

要あ

るは T 明 南 何等 鳳凰 白 百 ifit 六 な 石 るべ 山 + 碑 力 を以 0 あ jt. る處 誤 I 謬 T ŀ に於 此 in 17 山嶺 あ L て空盒睛 T 6 中 之に 地 0 最 藏 高 雨計 岳 地 監點とし、 藏 0 方遙 佛 8 檢 0 高 す 17 高さは 其 るに 2 〈標高 --氣壓五 八 を二千 x 空盒 I ŀ 百 晴 九 Ħ. iv + 百 を加 雨 十二メ 計 * ~ = リ半 要する迄もなく、一 T 全標高: 1 ŀ 氣 IV 溫 約二千六百七 地 十五. 質 調 度、 查 所二十 度び登臨せる人には 東 1 南 0 萬 微 × 風 1 圖 r あ に依る)とせ 5 ルと成 標 る 高

60 鳳 其 外 觀 地 : 普 藏 t 通 0 7 諸 の花崗岩(E Ш T 久 及 1 甲 黑 州 7 雲 駒 æ 母 ケ 7 花 岳 + 崗岩)を組む ップナ しと稍 成する岩 = ヺ゙ P 異な ナ 等の 石 n は 50 花 雲閃花崗岩と稱 あ 5 鳳 凰 東 Ш 北 Ŀ 0) 面 岩罅 に於 する \$ 7. 17 余 は 0 は 種 12 म 4 L. 7 憐 0 な 高 3 Ш 雲 9 植 母 7 物 0 着 外 ١ IJ 生 12 サウ L 角 閃 * 才 石 得 を交 亦 た E"

なる山 \$ 南° て岩 低 ·其經 L 脈 農鳥 分 0 屏 岐 地 風 藏 し(其先頭に 大景を紹 Ш 岳高 圣 地 折 り連 く鋒 藏 岳 ねたる如く、 0 へ其左方遙かに富士山を 天 間 狗 15 山 當 あ 6 5 稍 々遠く 山隈今循 後文参照) L T ぼ數條の 望む、 尨大 其 背 な 面 右 3 殘 1 雪を帯 3 13 拳あ 豪宕 地 藏、 3 なる 鳳 其 此 白 凰二 方 處 峰 より望 向 Ш 0 0 Ш 中 山容とより U 間 北 12 より 岳 北 間で出 岳 察 最 も高 する 走し 17 て駒ケ 赤 農鳥· 石 山 岳 Ш な 山 峭 10 最 立連

西・と疑な 西 4 北 12 當 6 近く 仙 丈 岳 あ 5 Ш 巓 數 個 0 楔狀せる岩稜 より 成 り、形 狀極 めて 雄 峻 12 T 又複

〇鳳凰

Ш

Ш

0

困

白

峰

12

比

L

T

寧ろ

大なるべきやを想はし

T,

頂上岩

塊より

成ることは白峰又は駒

ケ

岳

甲

K

同

辻

水

E 事 福 C. 四 N Ξ ill 表 II. 豆 E 10 助 層 #

丈岳 來登山 は 崩 日本山 5 Ш 木 IV と名 岳 曾 者殆 ス 0 御 17 岳志二百 岳 は 右 < いるい 連 12 稍 んどな 0 嶺 は 頂 40 鞍 其八 程 を認め、 13 是よ のもの + 掛 分目 六頁 山 6 等 叉 を認 * 許 た 以 駒 12 北、 脚下 17 記文の發表せられたるを見ず、不知本會員中今夏之に先鞭を着けたる人ありや、仙 りの高さある山 岳 新甲)樹木繁生せり」とあるは誤れ め得ざりきつ に見、 Ш 甲州 一勢連)の左に乘鞍岳を望 綿 遙かに とし 嶺 尨大なる穂高 て雲表に其頂 北方に連り、 T, を連 甲州駒ヶ岳の高峻なる峯頭と成る、
此山嶺の後方 0 山塊(殘雪多し)と、 仙丈、駒二岳の間には此外著明なる山岳を見ず、 *b* 权 此方面に知己なき余は、 ウヱ スト ン氏は之を窮めたりとか 尖々たる鎗ヶ岳 II. 山と白馬 を看 る 云 こど 岳 日

を認 方® お得 以て 12 山と白馬岳と遙 第 8 12 難 着 目 しせら 裾野 か 12 は 3 机 對 īm は偉大なる八ヶ岳にして、 峙 40 せる中 延 び 間 獨 は、 立せる火山 Ш l 勢最 0 \$ 赤岳最 開 形 勢甚 け、 だ明かなり、 も傑出 遠く戸隱、 編笠岳 妙高 其左 には 燒 0 山 如 きは 等 寸. 科 0 山 輪 山 群 0 廓 を見 內 圓 錐 51 3 狀 落 つる Ш 背 頂 あ

た

3 外

其

他

0

名

秱

を

明

力

12

る

2

と能

は

ず。



辻 本

> 頂 地

五

0) 0 登 大岩

17

至

T り、風

は、

豫期に違はざる壯觀を極め、遙に金峯山

丈石と相

對

L

天界の双柱を成す、

而も五丈石は重疊

すべ

から

0

と認む。

0)

回

山

に依

凰

山が

最

高

點ならざることを確定

せしが、



T 其

甚

だ劣れ

0

他

河

流

は

鮮 關

か

17

認

めら の諸

5

但

L

Ш

岳的

觀

望

は

他 地

0

方面

12

比 釜

ベ無

東

山

系 L 日 司 0

山

を望み 0

甲

府

及其 で野

盆

を下

瞰す、

を見

央

17 Ш

近

< 或 Ш

根

Ш 111

0 あ 顯

奇

拔なる 其 なり

頂を

望

T

0 部

岳

頂

は山

3

形を成

金峯山 光白

尖頭と面白

到照を成

せ 國 重 12

3 司 6 は

T 兀

岳 頂

連 最

5

間八ヶ岳

t

淺間

t

6

立

せる焼

は

\$

八

岳

0

右

L

此 西 4 鳳 12 凰 鳳 山 凰 北 得 下 Ш 凰 Ш 5 凰、 るに 稜 向 Ш 巔 段 0 Ш を望 L 低 に於 北 は 頂なるべ 過ぎず。 地藏 12 地 偃 1 藏 當 駒 T 松 け に其 て、 岳 3 5 0 0 T 坊でより 岳に 主 膣 間 L 大部 を縫 畵的 山 磊 連 脈 北 々たる岩石 (當字)なる一 鳳 3 は 分 4 遠望を終 S 数分に \$ 藥 凰 12 西 山 此坊主 0 17 師 は其 17 岳 向 5 よう 7 L L T 支脈 楽に 偃 分岐 C 12 T 松より 俯 中 蔽 地 藏 之に 終 17 D せ L n 3 3 L 北 岳 T 巨摩郡 , 逵 成 脚 12 至り、 3 其 派 僅 L 下 得べし、 全然北 12 山 12 0 岩柱 地藏 0 頂 L 地 境界を成 勢を 九 T E 日 0 佛 実頭を 摩 より 鳳 低 餘 考 郡 澤 1 凰 脈 3 すは より 東 3 12 山 は L

北 t 鳳 甚

だ

不

思議

な

5

と云

ふ外

な

L

辻

本

最凡 2 珍 最 本 塊 奇 邦 1 な IlI 3 岳 成 3 中 0 未 だ 1 北 此 方 と斷 0 t 如 6 言する 望 < 高 U 邁 17 12 なる位 比 躊躇 較 的 せざる 置 奇 1 拔 あ な らず 3 ものなり。此の如 6 3 嫌 あ n E 1 4 奇 が見は其組成 成 あるを聞 甚 單 純 12 か ず、 1 四 余は之を以て天下 面 其

地藏岳

ウラ 登 風 多 を 3 凰 5 始め 數臚 U Ш 頂 -風 列 た 51 す 3 雨 止 力 せる 0 7 Ш 為 之を敷ふる 稜 1. 2 83 0) 50 と約二 繁茂 引き返せ 展 6 せる 12 1 時 つるも 處に 無慮 間 L 1 0 東 石 50 龕 + 南 前 T 五. JL to 15 其 を 下 時 6 際 算 大 12 四日 なる せり、 ば花 如 + 分 何 崗 遂 12 地 流端を安 岩 遠 側 12 望 割 0 砂 絕 石 より 愛 無なり 碑 L 置 55 成 T は L 3 地 Ш 藏 一大日 賽 脊 岳 の河 12 17 岳 云へ、 出向 原 こと刻 と記 高 此 3 L 箜 せ た る立 6 尺 0 佛 余 是より 像 石 5 あ 17 0 5 氣 石 僅 付 佛

か昨

年に重

は

此

邊て

To

6

L

2.

層に

5 地

藏

なる C 此 Ш 地 之を前 を求 處 脊 (其下に 登りとなる、 藏 を右 賽 は T 者 3 前 17 0 T 回 河 17 51 L 原 較 容 0 7 と云 紀 易 樹 即 3 サ 心文中に 3 5 < 林 1 見當 ^ 12 8 地 1 j 藏 穿 チ 記 4 層 3 0 岳 ゲ せる す 0 此 峻 T 處、 F 傾 L 得 < 5 如 漸く一 斜 17 地 更 達 右は 岩 藏 花崗 12 株 L 石 野呂川 * ~間 Ŧi. 12 露 岩の 3 採 分 出 らし な 2 0 世 重 變 最 3 5 17 畳 しナ 低 \$ 處 面 せる急斜 せ 十時三十 處 未 12 る隆 時四 だ花 出 づ、 高 起 + を 二千 12 分絕 Ŧī. 12 附 前 分地藏 L H 口 29 て、 頂二 900 て刄頭を 此 百 處 x 等三 压 L 12 1 角 0 T F 角 渡 標 再び E iv 3 測 部 あ 3 FY 如 樹 3 量 12 3/ 外 處 標 林 L L 7 な T 12 あ は 3 6 3 佛 胜 入 徑 1 h 處 像 年 6 0 K を 17 青 間 足 到 列 第 L 木 種 着 \equiv 6 ~ T 湯 * 0 た 得 す せ 0 岩 より 亭 0 3 72 山 主 崩 3 急 à 角 は 12 为 誤 平 に峻 會

12 西 田 地 南 * 側 成 岳 C は 野 L 左 呂 47. 111 南 方少 降 15 5 THI L L < 鳳 岩上 凰 傾 斜 Ш 最 12 10 餘 向 \$ 急 地 Cs あ L T 3 から 5 み、 佛 は 像 之を遠 IE あ 路 3 12 Ш 望 非 角 す it 北 n 矢張 方下 ば、殊に東 Ó 0 本 瘤 n 南 0 起 より 如 17 L く之を過ぐるを C 出 來 前 游 な 3 12 於 圓 順 錐 T 路 は 狀 と認 其 を 形 丰 成 To 前 t h 其

3

由

學

は

行

は

風

凰

Ш

鞍

及

槍 丈 音

4

仙

岳

北

七

+

八 九度東。

度

西

岳 14

南

+

北

+

度

東

Ш

頂

12

憇

U 岳

近

くを

〇鳳 凰 Ш 登山 記 辻 本

たる水 淵 6 12 40 \$ 此 天狗 澤 0 6 河 (天狗 より 12 なり 底 層 頂 16 聲を は二 余 Ш 氣 遠望する 大に は 山なる名は後に芦蒼 温 當字)を望 壁立 耳に F Ш 陸 頂 七 地 + IC 世 す T 百 測 度、 寫 る白峯は n 時 证 九 景 眞 ども 常 U 南 + の三 七 鳳 40 河 凰 天 觀 x + 쨦 脚を 頂上 萬分 Ш 狗 1 床 音 Ŧī. た 0 0 Ш ŀ 百 まて 望み 案内より 据 右後に は 藥 in 四 鳳 師、 とあ 闘を + 得 凰 (L) 物 高 砂学り 撿する r. 72 3 3 拂穿 0 聳 聞きたる 1 ij 地 の諸後者 せる と板とを用 障 は 藏 諸峯と之に 12 るなく 僅 0 標 Ш + 舊 は 高 力 余の 圖に なり 40 3 間 Ŧ 壯 より 0 嚴 は 敷と甚だ近 U 12 七 雄 連 南は 4 两 T 百 一千六 四近 偉 彼は なる 所 派 Ł を な 图到 L + 砂 Ш 極 3 絕 テ 百 Ŧī. 2 駒 岳 T, なる野呂川の溪谷 白 似 八 3 x せ 1) T 5 D) + I 方向 白峯と仙 記憶 岳 る ウ山と云へ 11 四 ١ 12 脊を看 * × IV 見 す 連 17 を測定せるに大凡 ì ,兩岸 3 るべ ŀ L 丈岳の ili 下 in 6 し と記 嶺 鳳 山 脚 0 凰 側の急斜 間 F 北 眺望 今假 Ш 峯に より信州駒 4 より 開 明 17 西 は 左 治 天 高 展 T 17 鳳 驚くに の如 狗 頂 鳳 凰 さてと がと當字 凰 + Ŀ 山 ケ岳 遙 12 Ŧī. 17 Ш 堪 か Ξ 頂 類 約 年 す、 12 角 す 修 百 12 標 1 . 西 n IE. 4 小 あ 北 0

凰 Ш 北 + 度半 西 5 岳 赤 岳 北 + 四 度東

富士山 南 四 一度東。

駒 白峯、北 5 岳(甲 岳 州 北 南 74 六 + + 七度西。 度 西

見 生 T は n 辨 夫 東 ば 當 4 を 學 京 叩 生二人 開 の人なりとか、 州 < 駒 折 ケ に案内、 か 岳 35, 0 左 遙 右 特 かっ 17 人夫等三人、 志 見ゆること風山 15 の人々と云ふべ 人聲らしきを聞 合 計 凰 Æ. き望 人 頂 0 12 見 同 様なり。 行に す 3 T 17. 東 芦 南

蒼 方

t

6 1

白 6

12

登

6

次

T 隊

此 0

處 登

17 Ш

來

n B

者

向

登

5

來

3

12 向 余等は 觀 香 岳 12 登るべく下山に 着 < 時 17 IE + 時 なりき。

觀音及藥師岳

T 地

た

高 t

せり

た

る

處、

方

CX 端 砂

T

欹立

せ

3

は 大 6

觀

吾 起 5

な

岩

塊

隆

藏

岳

6

東

南

*

1

12

白 北

0

Ш

脚

耙

H

0 岳

右

は

稍

隆

6

其 3

Ш

脚 0 0 1

南

15

引

T

野 拂

呂

111

此

t P

b 低の巉

更に

右 岩 IC

12

當 起

5 あ

段

遠

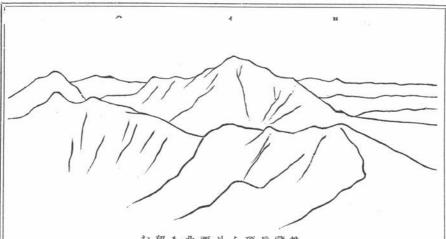
見

B

3

は 4 岳 あ

砂



む望を北西りよ頂岳巌地 岳ヶ槍 п

岳鞍乘 岳ヶ駒州甲

か四

5

ねど、 月三十

此

0

男 成

余等に

4:

だつて上

僅

12

H 何

12 な 12 佛 先

T

+

日

大

願

就

子

年

男

と書きたり、

如

3

大 明

願

處 は

12 知

來

h

\$

0

٢

見 子

肠 年

旗 は

17

地

薩

と記

世

3

依

ば

觀

音

b 岳 0

何 年七

佛

なり

や不

明)叉旗

あ

納

地藏

側

至 を 藏

3

地

藏岳 L

より三十五

分

りり山中山

央には

大

立

北 成

12

像

治あ

間 17

縫

ふて稍

ب 稜

下

5

72 5 CS 方 0) 並 左

Ш -C

脊 行 \$

21

出

T 八岩時

1 4

登

b .5

6 8

觀

地 10 低 岳

岳 T

よう

Ш 年

南 岳

12

沿

4

皚

た

白 7

砂

踏

H

偃

Ш 17

昨

藥

師 0

と思

のなり

ど見 偃 3 IV T は 此 中 Ш 极 を 氣 H 此 0) 0 示 溫 的 屍 中を 北 あ せ + 12 方に 6 + 非 游 浮 度 ず ぎつ 游 只 地 中 だ 窪 藏 氣 絕 壓 佛 T 21 地 深 頂 + * Ŧī. 一快なり 25 百四 な 分 隔 凰 3 12 T 山 岩 + 寸 T 石のに 巡 L 七 許 3 拜 3 0 y, 登 師 藏 水 Ŀ 者 今 3 攀 菩 12 岳 0 朝 72 の岩 標 來 長 人と思は 高 隈 渴 ^ 徑 頂 Ŧ 17 た な あ 苦 尺 七 1 6 餘 百 3 12 8 探 3 水 12 身 5 長 面 0 n 此 三メ 處岩 虻 稽 1/5 1 6 0 圓 佛 如 陰 2 形 像 1 9 4 飽 12 岳

迄掬 Ŧi, 飲す、 メート ルあり。 彼の薬師 岳にありと云ふ「弘法大師硯の水」なるもの恐く之れなるべし、此岩上にて標高二千七白二

|松深き中を辿りて砂拂の岩山に至る(午後一時半) 再び觀音岳に戻り、 少しく下りて南方なる岩頂に登りしも、 佛像等を見出さず、遂に東南を指して大に下り、

最初の岩頂なる薬師岳に至るや左に大岩ありて水を湛ふ、弘法大師の硯の水と名け、旱天にても乾固することなしと云ふ。観音岳の岩頂には觀 は是に於て山稜の上部に沿ふて曲折す、山稜は主として花崗の大岩と霊砂より成り、シラハギ、五葉松之を蔵ひ時として松樹を見る、砂拂以後、 東南に連りたる一脈の山なり、(中略) 又薬師岳を或は乘鞍岳とも呼ぶ、乘鞍岳を南へ下れは砂拂と云ふ處あり此より芦倉へ五里許」とあり。『A ず暫く彼れの言に從ふ。 々之に登り見るに、 はるれど、 ンドプツク、フォア、ジャバン』第二版は現版(第八版)に比して山上の狀况を記すこと稍や詳細、其声倉登山路の記事中次の一節(意譯)あり「路 | 岳に關する記文を檢するに『甲斐國誌』には「其(地藏岳)次を觀音岳と云ふ、其次を鎏師岳と云、地藏岳より此に至る义た一里にして近し、皆 本文に記したる観音、薬師二岳の位置は、地蔵岳にて邂逅せる声倉の案内者より聞き取りたるものにて、 薬師は甚だ疑問なり。余は是等の頂上には假令不完全ながらも、 觀音岳に不明の佛像一つありし外、他には何者もなく、此處に名稱確定の根據を失ひ、甚だ迷惑を感じたり、今止むを得 其名に應ずる佛像か石碑あるべしと思ひ、 観音岳は先づ誤りなしと思 强て反問せざりしが愈

と言はれたれば是或は書中の「弘法大師の硯の水」なりしならん、本書の記事を眞正なるものとすれば余の薬師は誤りなるべし、されど余の登 右二書に依るに『甲斐國志』の乗鞍岳云々は、 書來らず、余は遂に本文中に確固たる薬師岳の位置を記載し能はざりしは甚だ遺憾とする處なり。 たるものは之よりも遙に高く且つ立派の湛水あり、無名の一峰として排斥するには、 拂に下る前。觀音岳より少しく下りたる處にて一寸登りて見たる岩石の峰らしく、武田久吉君は昨年此の南方に岩の凹みに水あるを見たり 拂より初めて遭遇する岩頂とあり、 名乘鞍岳の形狀考察は、 之を行ひしも得る處なかりき、又歸京後、 余の薬師岳は觀音岳より奥の方なれば、此者とは異物と考ふる外なし、 蘂師岳の形狀が或る方面より見て、鞍狀を成すに非ずやと想像さる、ハンドブツクには蘂師岳が 蘆安村役場に各峰の位置を質問せしが、生憎出水の際にして、 餘りに著大なるものなることを記憶せさるべからず。 該書の所謂薬師なるものは余が

分を要す、其路山稜の南側に沿ふ」、文中地藏岳を低き機記せるは誤りなること論なし。

参拜者は通路より分れて此岩塊に登撃す、

然れども通常藥師岳に登ることなし(中略)観音岳より地蔵の低頂に至るには二十

八 砂拂及南御室

○鳳凰山第二回登山記 辻 本

L

7

快

晴

7

3

きな

ò

社

本

0

岩 肩 容 る を 1 な 攀 た 和公 6 以 3 6 L 拂拿 0 處 撵 T T 上上 出 は L 來 高 此 Z 告 食又 名 0 8 撿 白 天 あ 鳳 峰 候 す 3 は =凰 青 更 る \$ Ш 12 25 0 Ш 木 縋 なら 湯 は t T 4 6 t 眸ず、 六 h 此 6 E 方 御 0 七 裏 此 地 面 室 54 滅 + 側 17 南 あ Ti. 12 下 御 觀 は Ш 6 x 香 壯 1 to 午 大 3 1 な 遊 \$ F IV 經 15 師 あ 3 0 T 岩 は 至 0 6 鉴 答 C 塊 此 頂 即 今 0 等 す 眼 ħ 峯 踏 大 前 其 3 あ 2 12 高 時 Ш 岳 並 3 5 來 列 12 殆 5 樹 た 1 h 昨 林 點 E 年 3 紹 鳳 甲 藥 0 Ш ^ 嶺 浮 州 凰 Giff 初 雲 Ш 駒 岳 D 83 白 12 3 頂 T 7 思 岳 石少 35 認 [JL は ^ 3 3 拂 8 其 敵 豁 ざる 尖き す 当 S な 0 3 頂 岩 な 普 鹼 は 眞 * 質 6 通 は 抽 0 12 Ш 藏 全 稀 南 111 有 岳 部 面 路 谷 な 花 t 0 12 12 右 崗 6 入 出

なる なる 51 成。 B T っ鳳 大 鳳 高 此 1 名 日 凰 處 藥 凰 稱 岳 Ш 12 師。 、地 3 な 頂 省 地 觀音之に一 る 思 擴 12 < 藏 異名· 考 張 岳 大 す L 故 以 H あ 12 1 如 亚 3 5 砂 順 從 來 薬・色 は 拂 次 來 江 2 敢 t 0) 風"師 6 3 疑 地 風。の T 11 CI 石 12 誌 山'諸 余 西 な 碑 は、隆 北 0 噩 最 創 は あ < 地 も、之 į 說 天 圖 6 記 低 を 若 等 狗 12 きを攀 非 Ш L 賽 せ 51 之 す は 0 3 鳳 と雖 * 如凰 至 河 確し 3 事 8 Ш め`終 原 まて ども 實 たり 12 10 * な 最 5°C 8 附 0 6 單 高 其 大 とせ とな 天 標 記 連 12 H 嶺 1 狗 山 高 岳 ば * 1 せ 11 聖 包 該 な 3 大 柳 は 比 方 括 3 は 風 111 澤 較 す 立 0 12 全 凰 方 古 3 高 此 面然 石 Ш 3 教紀名 名 課 以 12 あ t 認なり 6 E 8 6 地 乞 と成 用 望 な L 藏、 3 N 2 見 派 岳最 とすい と日 現 3 せ 今 ば 3 L 記 と難 多 も高く 稱 44 小 0) 呼 論 цi ども 又 瞹 如 1.2 斐 連、 過 は 昧 L 國 部 3 0 志 3 未 嫌 3 載 中 14 0 n F. あ 3 踏 最 甚 3 ば 鳳 な だ 鳳 此 凰 3 高 便 凰 Ш Ш を 利 Ш 頂 最以

2 南 我 17 山 T 0 4 不 素 止 地 女 質 審 人 な 目 5 12 n 就 12 U \$ 藥 8 此 阴 Entr Ĥ 處 岳 地 17 12 13. 質 御 調 L T 坂 杳 せ 知 層 所 ふべ とし -+-< 萬 T 8 即 分 8 刷 圖 6 2 3 n * 見 12 3 Ŋ. 5 派 12 佘 鳳 0 專 0 凰 門家 雷 Ш 見 t 为言 10 6 T 東 踏 は 南 藥 查 12 せ 師 日 6 は n 勿 n 3 論 花 L \$ 砂 0 12 拂 質 萬 2 は 4 誤 花 地 崗 な 藏 岩 か 岳 3 I (1) ~ b 15 成 L 3

C

3

室 近 后 3 睦 C 3 + 坂 Ŧī. あ 分 3 外 逐 12 傾 Ш 斜 嶺 概 17 告 T 別 甚 1 12 1 L 砂 かっ 拂 5 8 ず、 發 IJ 針 2 六 葉 樹 サ ウ 林 0 中 產 12 地 入 は 6 急 ぎた 大 體 12 60 ば 於 採 東 5 す 南 3 -C 行 き過 T F た

恶

絕

に比

すれ

極

めて容易なるも

0

なり、

途中

文た

"

Y

1

y

サ

採り

オ

サ

110

2

3

たりの

3

午

后

74

時

四

+

分、 ば、

青木湯

に到着す。

は登

Ш

0

成

を祝

せん

爲

心

許

5

0

小

宴を

開

r

x

と雞

驷

肴

17

E

1

in

甲

本

蓋

L

此

Ш

础 室 17 出 ずし T 直 標高猶ほ二千三百七十メー 21 青 木 に下る路ありと云よ)。

上に 大、 泊する は F. 1 岩 は 此 倉 時 間 石 室 時 チ 處 佛數 或 期 は 51 口 四 T 芦 は + 早 は 九 時 分今 體 倉 間 余 青木御室 Do 十分着 程 を安 5 12 奥行 至る H 1 to" 都 置 0 為 合 1 ばは 宿 8 せ 路 t 7 6 と呼ぶ必要あるべ 間半にして東南に 泊 か L . 地 東 18 筧 と定めた 殆 1 昨 4 0 北に 年多く見 ケ h 水は清冽 بخ 1 向 サ ウ 匹 へるは青木湯路、 たる 青 \$ 能 Ļ 面 木湯に向て 見當らざり T' く渇 ŋ せ 1 1 1 を醫 今も ダウ 屋の 汉 ŀ 4 柱と 遺 下る、 0 150 訓 あ 類 飲 西 7 it 南 楝 は 水 未 12 は 路 倒 17 V を夾 木 10 次乏 1 F 大 柳 體 路 充 3 澤 " は in 分 난 存 h を塞ぎて サ 0 開 野 3 L 1 花 呂 御 ウ 此 兩 川 等 其 側 室 せ Ш 稍や 一と混 着 ず、 西 12 17 Ŀ 目 出 12 北 殘 同す 困 せ は、 3 づ 隅 9 3 難 らる 7 12 蹊 るを避 AME. 3 15 左 7 側(下 感 路 屋 ,, 5 叉た 根 3 7 (J) n 3 1 45 賜 ども 3 彼 物 ホ VZ 殘 為 0 小 加 6 × V 云 あ 0 之を たれ るも ス 4 南美 U 御者 110 祀 r 柳 力 + 6 0 室台 澤 ケ 最 岩 路 宿 \$ 叉 110

靑 木及御坐石湯

彼の 0 く樂書澤山 母 雨 と弟 青 見込なさも 后 安否を 木 な 湯 為 は 5 8 なる と云 混 尋 前 濁 B のとし ya は、 2 登 なるならん n ば、 若 Ш どの 者 7 0 節念せ 其 根 室も 後 人 據地とせる處とて、 他 あ 3 此 司 9 、養子に 地 加 じと見ゆ、 家 余 は の空盒晴 行きたりと答 湯 清 は 哲 今 障子 村 青 回 見るもの皆舊知 雨 清 木 計 に樂書せ 澄 17 12 なり あり T 50 は 此 L T ぬやうとの **吃**案內 標 35 なる 其 高 年 0 4 T も感 显 3 Ŧi. JU 甚 張 n 月 百 だ 6 12 始 興 五 紙あ るは 多 + 15 8 より 1 Ŧī. れど、 溫 階 3 度も Ŀ + 登 1 0) 月 Ш ŀ 柱、 奥 低さ良さ 末 21 まり まで 伴 羽 る亭主 目 出 た 心 板 3 張 な す 地 どは ると せ 室 は 居ら す 12 T 到 0 咋 天 由 す 底 井 年 禁 な な 其 は 11: 6

0

鳳

辻

本

間 12 1 は 望 0 珍 味と云 此 家 0 若 者 腹 痛 12 苦 85 3 と聞 3 1 精神 的 に効 ある 清 心 丹 Ŧī. 粒 を

月・六三・や • 75 T 寢 12 就

腹 着 痛 せ す、 癒 ^ さら た b & K は 快 膳 _ 1 ~ ば、 五. 十 宿 清心 錢 泊 位料 丹に 12 * T 拂 は 對 は 3 如 h る とて 何 5 謝 禮 尋 員 X 8 2 五.れ 十銭を與 \$ ば 御 n るならんも、 П 12 ふれば、 かっ なひ しものもなけ おりとてビ 之では多過るとて五 I n w ば 迄 飲 何 み 十錢を戻せり、 程

51

T

多

宜

しく

决

岩 とて

者

人前三十三

厘 0

とは IE. 亦 12 至 廉 なる 哉。

面 廊 下 張 り出 L た 3 紙を 見 3 51 左 0 如 < 記 せりつ

定

金 74 + 錢 錢 錢 五

> 汲 入 湯 宿 俵 泊 器 耳 料

同 同 手华 俵 樽 代 代

0 明治三・ 候 地厘

右

金 金

五.

漬

+ -

八 年 五 月 H

は 樽 0 ことな 5 EX

俵

٤

青 木 鑛 泉

主

北分を御 辟 午 指 坐 0 前 L 石 _ 六 カ ならん、 時 T 農家 \mathcal{H} 小 Ш + Ŧī. 脈 あ * 3 前 分 回女夫岩ない出發、小武田 登 手 る、 前 より 途 左 中 る 星 折 JII \$ 12 君 L 3 沿 T 0 Ŧi. 1. 8 Su 郎 2 聞 T 作 F* 3 下 とは 7 L n 澤 から 14 今 左 0 尺余 溪 明 0 流を Di Ш な 6 J. の徒 5 17 蝮工沙 す 9 をしし 110 又 見 7 ラ 牧 出 石少 4 拂 L 場 T 0) 岩 0) 撲 側を ふ岩 殺 頂 いと覺 L 過 壁 ir. L Ŧi. あ 4 郎 5 8 作 御 坐石 柳 は 0 萩 * 澤 湯 0 仰路 枝 望 12 12 至 す T を 3 切 漕 八 6 遇 < C 時 せ 先 九 + 3

づ

頭

腦

貫

9

12

枝

T

其

胴

み

12

繋り

付

其

鰻を

取

扱

よよ

6

單

3

長さ尾

0

17°

垂 其

n

1

步 8

11

每

12

動 更

搖

3 54

種 を

0 0

奇

觀

3

朓 荷物

8

行

1

中

何 <

時

L 狀

かい

Ш

路

を

登

6

切

6

T 簡

台

地 な

17

出

町

行 ラ

8 1) を

渡ること四

十二

時

华

落下する處

あ n

5 は

۴

て之れを過

下

溪流

砂葉澤の

り突出すること其

名

0

如

<

12 T 又変に 御坐石湯 下 5 0 孤 尽 右 1,-折 望 溪流 U 42 沿 到 着 U せる 行 5 こと少 は 儿 時 時 + 分 なりつ 左 方より 來る 溪流(何 n 湯 澤 の上 流 なり)を横ぎれ ば、

前

面

崕

Ŀ

四亿

て南 此 地 4 東 標高 12 約 面 L T × 客室 1 1 n H 間 湯 澤 極 限 0) 深谷に位 四 + À を容 i, る 12 179 面 過ぎすと云う、 皆 Ш 12 L T 遠 望 老夫婦 絕 無なり、 あ り終年 宿 含 往 は 居す 青 木 3 湯 由 0 如 湯 < 只 は 上手 軒

泉 質 宿 泊 料等 0 揭示左 0 如

許

より

引き

來

3

たる冷

泉

3

AM.

3

た

3

7

0)

12

T

清

澄に

L

て能

味

ありつ

鑛泉成分

酸 遊 離炭酸、 加留基、 苦土、 硫 酸 重士

能

皮膚 疹癣、 痔病、 慢性僂坐須 斯、 胃病、 Mi 病、 其他諸病ニ大効アリ、

Ш

梨

縣

宋

院

治三十八年五月

金三十四 錢 定

一金十二錢 十二錢 中倉紹料、

入浴料

畫夜入浴

金参錢

一俵

必要あれば、 此 處 より 西 中 平と云ふを 此 L 湯澤 12 超 沿 L 3 T 叉 下 た石空川 6 , 再び 12 1 出 武 0 3 111 12 選 出 定 て 上# なり 黒澤を 3 左 草 12 深 見、 42 1 + 路 分 時 6 象 L 0 鼻に と云 ふに、 達 す 前 Ш 嘴 涂 左 8 方よ 急

新シン 左 河 より 12 2 流 達 は と名くと五郎作 來り 大屈折を成 裏路を 合 せ 6 取 す 6 + T は 咋 车 黑 云 時 人 四 徒 澤 + 沙 17 分、 出 恰も 12 苦み づ、 堤 出 農家に 防 鱈 し處なる 目 51 を聞 着 多 す、 < 办 數 JII 今 0 如 Ė 蝮 L 流狭まり岩 * は 串 立 此 刺とない 處 派 12 0) 橋あ 壁を小 小 L 憇 乾 4 5 食し か 瀑 せるを見 几 となり T P 叉 渡 橋 T 6

〇鳳凰山 第二回登山 記

辻 本

本

る 此 午 邊 后 0 名 時 物 四 + 四 分 しが 目 余 出 6 度く 有 0 柳 難 澤 か な 5 3 Va 小 多 池 0 方 な ic 6 歸 5 111 着 高力 Vi 0 實 5 相 寺 12 櫻樹を見 物 暑苦 E H 圃 0 間 3

らず 等 179 は 時 失望 四 切 + 他 L 八 17 分 T 引 預 日 4 け 野 返 L 春 とって せ 發 5 0 流 所 持 車 せず、 松本 行 只だ寄附 K は暇 あれ 帳 冊あ W 彼 0 5 Ĺ 神 8 官 寄進 小 地 者 氏 の氏名と金額を記 0 老 姐 七十一 歲 1 せる 訪 許 和 6 た 12 3 T 12 記 とな 錄 舊

0

だも惱さるくことなか

5

i.

は

AIT.

Ŀ 0 此 登山往 幸 運 17 復三日 L 7 余の從 0 間 天候 來 登 Ш 極 めて # 良好 前例を見ざる處 滴 0 降 なり 雨 は 思か 片 存 雲に

結 尾

れば、 に於て 鳳凰、 3 12 0 漫 餘 P す 豫め 遊 地 あ 0 藏 5 者 實 其 見 の峯を 10 覺 は 12 笹 悟 到 依 傳ふて Ł 倒 底 3 木、 準 行 12 備 路 **急**: を 現 懸崖等と苦鬪 難 今 行 必要とす、 0 柳澤 南 嘆 御室に 磬 を 登 発 Ш す 至 殊に n 3 3 30 は 17 如 風 るべ 精 小 3 雨 淮 L, 瀑 な は 12 對する 行 からざる勢力を感じた 以 上 且つ 25 難きのみ 用 此 道 意 路 路 は 殆 15 ならず、 最 依 'n ど絶滅 \$ 3 欠く 3 0 れば、 可 全然沒趣 は L らず。 健脚 北 御 雨 自稱 早天柳潭 天 味 室 なるべ 附 17 の登 於 近に 澤を發 V 山家はい L 於 3 困 T L 余は快 野 難 は 宿 蓋 此 晴 路 L を登 必要 0 想 天 像 候 あ 6

は青 山 頂 此 路 17 木 達す か 湯 13 路 111 る る 背 \$ きてと 2 同 を 樣 登 3 17 L 故、 河 * で芳 な 30 渡 眺 3 倉 望開 こと極 路 豁な も恐く大差な 3 8 -< 少なく(石空川を上流にて徒渉 豫 からん、其の 想さるれ 3 密 特點とする處は精 林 21 蔽 は 12 すること 12 n 進 は 瀑 事 を序に 實 回 は 降 之に 雨 眺 反す、 0 4. 為め るこ 後 され 途 E を 直 接 此 斷 12 鳳 欠 凰 3

す を最 駒 5 嶽 \$ 趣 0 登 味 あ 山 るもも 者 が のとう、 次で 鳳凰 現 Ш 時 駒 ż 究 城 0 85 村 h 民 12 は は 此 此 路 Ш 42 10 纮 對する甚だ冷淡なれども、 りて 登山 青 木 湯 口 12 下 2 ること、 13. 登山 者 絕 余 無 0 行 0 路 為 8 0 な 如 〇鳳凰山第二回登山記

辻

本

傑を る Ш スの觀望台なりとせば、 頂 0 眸に萃む 眺望に 來 其 る 就ては、 盛況を見るに至らば山路の 壯 觀 に至つては、 又た喋々の必要を認めずと雖どす、 是は實に南部日 本山 以 外 修 本 斷 絲、 アル L 設備 T 好位置 プスに於ける夫なりとや云わん。 0 改 良等 の山 就中白峰、 庶幾し得べきものと思考す。 岳あるを見ず、 赤石連嶺(所謂南部日本 若し越中立山を以て北部日本 アル フ ス 0

大

峰渡 駒 本山に ケ岳(甲 りに趣味を有する程の人は、 登りて興趣最も深らは一峰登り終りて一 州)を以 T 不二 一の高嶺 必ず余の言に首肯せらるしを信ず。 に比せば、 峰 一頭嵯峨 峰 新 たる鳳凰連山は、 に來り、 連々とし 正に花崗岩の八ヶ岳なる敷、八ヶ岳 て其味盡きざるにあり。 孤聳 天を 衝 0

ひと共に、 至ては、 從來本山が比較的閉却せられ、 他日第三 禿筆自ら測らず猥りに名山を瀆せるもの、 回 登山を行ひ、 其記文又た缺乏せるは余の甚だ怪訝とする處にして、 重ねて之を踏査せんことを期す。 右の理由に外ならず、 若し夫に文中未だ盡さいるも 切に愛 山 家 0 登 攀 のに 3 望

又文中の「坊主」は蘆安にては「丸山」と呼べることをも、 本文脫稿後、 蘆安村役場より返信あり、 右に據れば藥師岳、及び砂拂等の位置は、 併せて知り得たり。 本文通りにて誤なきものの如

叉文中に挿みたる網版の中、鳳凰山より地藏岳(及び不二)を見たる景に、観音岳の位置と、テンゴウ山に就きては、答へ無し。

その頂上二峰に分るしもの内、

右の最も高きに三角櫓を置けり、 左の凸起は、 地蔵岳の半腹に白く二ヶ所見ゆるは、 多数の地蔵様か安置せる一小山角なり。 雪にあらず、 花崗岩の露出なり

月

0

+

藏

野

0

林

を過

時

Ŧī.

分

長

野

行 0

列

車

が息苦し

さらに

走っ

T

行

東京より高

<

天

专

地 H

3

眠 武

爪の 雜木

曉

の星 つて

のや 七

5

iz

チ 飯

ラ H

チ 町

ラと光 發

つて見える。

は

變つて は

3 時

3 29 n

鱒

船

鹽と

CK

0 知

鮨ときては

正 12 鮨

天下 は 一は云

_

珍であらう。

17

我

行

を 17 V

祝 着

てく

る様に --

見

ええたの

は嬉

L 金峰 か

富士

甲

着

+

分。

Ш

國

0

習

力

6

M

から つた、

甲府

0

面

回白い、程近き御嶽の云はずもがなである。

0 紫水晶

0) 精が

疑

つた

0

か

海

有

難

づれも富士へ

志す人と見えて元氣ら

L

いてゐる。

Ш 連

<

前

1

暫時

墜

道

2

緣

を斷

2

Ш

から <

群 騒

山

の上から首を出して奥千丈ともならんで御愛度とば

かっ

5

崩 Ш に向ふ 0 記

梅 濹

Ш

悌

成

鳥

親 光

は我等 車 21 h とす 吐 觸 武 滊 上 野 息 藏 n 車 35 る惡魔 は 野 深 原、 72 ば 0 激 進 0 v か と云 6 鳥澤 平 1. でな 原 0 < 12 名 な 0 は CI は桂 0 大月い 合はさねども互 V. 11 别 た ·T n つて南 を惜 111 我 車 が消 づれも曾遊を回想する處ならぬはない、 一行は鳥山 水力電氣とか ・中は蒸すやうな暑氣、墜道に入る毎に車窓を閉ぢるのでその苦しさと云つたらない。 h だの えると横 花は 頭をあげて我山懐に入れよとばかりに親しげに見ゆる高尾、 一の心に 悌 呼ぶ、 成 木を赤く 異 6 河 は 田默、 次第次第に自然の上に 塗 な 0 5 た 武 田 電 久 柱 古、 25 目 梅 12 つきは 大月で大分人が減る、降りたのは學生、商 澤 親光 彫迫する没趣味 ぢめ の四 た、 人志すは甲 醜き汚 な人工を惡ん 州 n 駒嶽附 を清さ 景信の連 て痛 武 近 藏 嘆 野 山 Ш L 0 12 FD 靈 た 滊 氣 0 せ

٤

4

)白崩山 向 1. 0 記

Щ

梅

澤

我 る る 等 3 此 は 嶽 0 かい 35 < Ш 見 L は 文 C 默 る 山 或 4 とし 甲 と入 駒 T 語 0 は 5 我 た VQ は 隱 緩 かい 千 + < 萬 なり 裾 無 野 とば * 量 引く 0 感 か は 5 八 此 51 " 雲 嶽 沈 默 0 は 0 帳 右 裡 7 0 窓 12 下 i あ 12 5 T 5 顔を見 左 0 窓か せ ¥2 5 は 遙 鳳 凰 4 لح 山 都 0 を 連 鉴 去 0 力 T 华 相 表 見 17 ん聳

中で 桔 梗 會 峯 3 0 人 Ш カジ 濃 0 4 P \$ 5 見 優 12 2 唯茫 T L V \$ 撫 4 る 子 L 0 折 花 T 4 Ш 雲 \$ 唤 は洋 は 2 v 藍 T 0 頂 2 0 る。 色を 8 隱 < 帶 す CK T 空氣が 夜 眠 0 澄 T h 叉 T 明 わ な 日 會 S か は らと云 5 Ш 0 隈 CI. たげ は は な 0 風 4 情 せ 路 AJ 傍 夢 12 は 0

3 群 颯 諏 Ш 訪 湖 0 Ŀ 0) か 泥 5 水 7 3 寸 だ 2 12 呆 L 岡芸の n 谷の騾 T IL 3 見 我 知己 3 あ 八 " b と計 岳は 立 9 に笑ったと見 科 まて 2 7 5 T るとまた忽 成程 大き い、富・ T, かっ < 士も見える、な n T しまう。 か L 5 駒 岳

生 言 葉を 風 から 聞 吹 V やん T 夢路 8 辿 0 た 0 驛 T -あ 目をさせ 2 た 見 72 n 0 V 2 は 鳥 2 17 Ш \$ 生 2 1 赤 51 岳 \$ は 煙 筒 L 0) 數 T 8 0 \$ 番 25 72 高 1. V なあし L 2 S 0

L

3

72

梅

澤

道を せん 特 辰 志 御 נל 野 家 L 驛 と馭 で流 C T は 行 10 な 者 車 は 4 V. 0 聲 離 平 出 * n あ か る、 5 げ 馬 T 時 は 2 11 3 砂 四 塵 時 買 3 册 切 あ 分、 げ 臺高 t 田 赤 舍 遠近 羽 12 は 樋 t 應と答 < 口 3 あ 通 3 3 乘 T 合 馬 樋 馬 を 車 次 0 25 け 停 郎 T 为言 車 古 吧 場 跡 4 前 7 ٤ 12 П は 並 笛 聞 5 聖 5 h 3 T T \$ 5 -立 T 伊 那 寄 砂 礫 女 T 吊 0 T 2 飯 乘 19 田 Ó 女 街

振 な 3 な 3 天 0 峯 0 龍 12 地 た富 を 111 2 * 馭 0 0) 士と 馬 CA 者 右 3 岸 方 42 何 げ 12 T 松 3 \$ 島 う \$ 手 云 御 ね 0 た 存 4, た 宿 Ľ な 5 形 T な 1 17 馬 御*見 L 仙 車 と見 嶽々える、 丈 0 岳 乘 と判 替 連と』 たの 4 n 0 2 詰 た 12 h 對 度 尾 为 仙 L 0 あや 丈の 馬 T 左 は i 章 名 手 は 5 17 陀 消遠 天 人 力 Ž 走 < 5 知 t あ 3 6 た ND 1 6 車 为言 2 0 0 7 n 窓 Ш た、 n 0 カン * 鎮 5 2 8 あ 右 まり 0 12 W. 邊 木 0 1 か 曾 は 方 6 駒 向 誰 12 0 違 大 寳 \$ さく N 前 劒 岳 12 0 早 座 鉴 呼 竦 3 力 磁 占 h 作 1 石 8 5 \$ 8

3 Vi 1 12 12 哭 遲 V V 夏 T 3 る は 云 暮 n B 辰 1 野 空を か 5 里 74 S 里 童 伊 は ス 那 町 モ . 12 0 0 樹 5 蔭 た 頃 17 集せ は \$ 0 5 T t 熟 時 L 0 72 黄 果 昏 物 時 * T 落 濕 さうとし 地 17 哭 V T 12 ねる 夕菅 0 0 花 为 見 は

0

告

話

15

I

8

傾

2 0 7. 音 0 屋 根 17 大 石 * 步 た 0 は 此 高 原 12 吹 3 渡 る 風 0 凄じ V 0 から 知 5 n à. 5 馬 車 窓 か 6 0 蛹 0 香

S めて 馭 馭 者 者 0 危い 果に 0 は \$ 誇 續 は 办言 思 T < 度 徐 13 111 0 4 d 4 馬 手 卧 33 7 綱 淡 1 紫 體 だ 3 (1) WD 0 O は 裝 樣子、毛 3 伊 35 圣 ころら る、 那 町 並 三度 0 0) H T 13 天程、 連 日 如 111 馬 1 0 [II] 0 T 42 嵇 步 居 8 を 为言 る とうな 渡 早 2 0 10 0 0 T 姿 叉馬 1 0 0 物 718 業 n 車賣 1 る なっ 0) 77. 乘店 に駈けてもうとし 次第次第 此 街道を走ら 54 夜 0 帳 た 刹 0 T 後 那 1 n 1. 12 ウ 隱 と出 n 3

碎 聲 飯 手に + は H V あ T 街 金波銀 まり B 甲 道 斐 0 17 一駒 12 月 别 か 波 H は n 白 * な T Ш |装束 漂 高 0 1 まし 端 は 遠 * 0 12 L なが 再 2 出 V 顏 72 伊 6 4 那 見 流 を離 西 せ 0 0 る否 n 方 末 は る 12 15 流 天 龍 人 n こそ來た 0 T JII WD 17 往 合す 來 为言 窓か <u>る</u>= なと笑 小 な 举7 6 V. 差し 0 0 0 T 溪流 1 2 馭 我等を見て安心 专 To 者 見えそ 月 0 0 光を 笛 8 は 浴 て、 < 礼 L CK な滅が瀬 ゆく た 空に ば 6 0 水か 高 行 は 6 は 勇 17 女 話 暗 L 好 17 3 8 נל 月 な < 喇 馭 光 n 叭

8 立 喰 0 高 72 11-遠 8 町 た要害 語 0 燈 3 0 光 無 雙 かけ 見た V) 2 天 ると馬 險 て、 飯 車 田 は 0 鉴 殿 樣 JII 力; 0 高 斷 遠 崖 0 御 Ŀ 出 を 1 走 0 0 節 T W 3 無 2 事 0 12 昔 兜 通 6 0 12 城 る 12 と飯 押 L 田 寄 0 せ 御 72 城 織 ま 田 1 氏 早 0 馬 軍 が勢

6 間 町 12 は 故 光 疲 長 更 は 明ら T 5 n V 坂 12 る。 0 妙 馬 3 12 あ * 12 M. 淮 人 3 人 馬 8 0 12 足 0 专 音 苦 星 は滋 流 野 1. 家 3 石 5, は < 0 門 昔 な 前 馭 0 者は た 萬 17 着 石 臺 0 馬 V 御 to か * 時 城 停 h 0 降 T 8 悅 5 Ш 72 しま T 間 0 馬 澼 は 遠 17 0 西 0 高 顏 口 12 3 地 遠 執 T \$ 0 現 3 は 町 ある 32 端 た東 RE 遠 3; 高 町 月 行 は は 3 長 高 頗 0 淋 郭 < V 上 L 屋 XD 並 0 V 3 六 T \$ 星 時 里 大 野 計 0 3 氏 道 v は は 東 八 搖 時 兩 高 高 5 道 + n 遠 T 搖 の屋

氏

は

梅

澤

生

0

知

1

主人

0

君

は

昔

高

遠

0

城

主

內

藤

大

和

守

0

家

老

粉

めら

n

1 宁

i

\$

此

0

HT

17

重

8

謝するところであ 宿 老でゐらつしやる、 行 が深夜突然の 參 向 51 も係 らず 厚 うき待 遇 を蒙 つて 旅路 0 疲 n を忘 n 12 0 は 2 57

行者 かを招 夜は更け にも天派 昔は たが 東 道 輕 山の様子をさく の主人と立 けれども弓矢とつ てられ 登 Ш たる身 る人と聞 (1) 準 備 0 * 世の 相 V て好導者を得 談 變 しやうと、 りに 今は 甲斐 主 人の 0 君の 駒嶽が案内となり 肝 いりで近さに住 + 餘 む篠 年 田 0 經 與 驗 2 は 白 呼 2" 衣 0 老

篠田 氏 は程 なく 來 た、 見れ ば 五十を過ぎた白髪頭の老人、 柔和 たらと先づよろこぶ。 な眼 眸 は 流石に駒嶽 を神と仰 く人に 相 應

V

や 青かれる。

行い 信州 0 は < 7 駒 道は 少なく 思 希望を語 嶽 路 嶽 は 0 は 12 知らぬ 絕 つまり は 12 なり 頂 甲 12 州 0 、から戸臺ででも尋ねて行けるところまで進まうとは老人の言葉でロ 胴を て駒嶽、 路ち大分荒れ 裹 路 山 0 なの 建てし 他 50 仙 信州 T 丈嶽 白崩 此 た然し 高 か こら登れ 神社 登 遠 山 か 水を 0 と呼んで ら戸亭を 案內 5 渡 を 6 ねた 賴 野 經 時 み 宿 は T んので激 登る Ш もする覺悟があれ 登 路 山 0 51 の客を吸收 屆强 の事を白崩とも呼 てある、 な人 夫の 黒川の近くに ば確に行けると老人は語 やうと思つて隨分激 雇 入を托し ぶのである。 前 た 宮があ 輕に安受合をせ 他 年每 0 3 L 事 \$ V 手段 は 0 17 よろ た。 信 2 州 \$ 1 12 L 武 力 * 行 氣象 いが 田 6 社 は 生 0) 務 n \$ 前 は 登 所 12 床嶽 Ш 为

早七月二十三 眠 て鳴ら出 10 0 V たの 日 は十 た 二時 を朝立ち出で信濃の奥に夢を 過ぎ、 月は もう餘 程 西 12 傾 結ばうとは V た 草間 昔の人の思ひも 0 露を吸 T る た蟲 附かなか 0 音が つた事 銀 鈴 3 振るやう であらら だか な美 最

準備の一日

今 濃路 日を人 は 雲深らし 夫の雇入等に費す、 て夏を知 らぬ 、鶯は今を春と思つてか變らぬ音色をたて、圓 四五日を山に過すとなれば留守の仕度もあり食物の用意も必要、 g. かな我等の眠をさまさせた。 雇ふ人数

〇白崩山に向ふの記 鳥山

梅溪

梅

淫

頃

8

U1

登

12 田

屈

强

な

人 物

夫の

募

集だけ

C

\$

並

大

抵 是

0

事ではない ともとの

準

備

萬般を托

3

n 0

72

田

\$

夜

this

荷

0

重

おかと

計

0

T

29

X

は

非

言

葉、

忙

き養

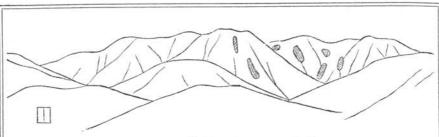
麵

時

今

日

此



脚

下

17

峯

111

は

蜿

蜒と曲

折

L

T

伊

那

0

方

と流

行

手

12

は青空を限

3

木

曾

Ш

む望を岳駒曾木りよ趾城遠高

だっ 2 助 氏 芝生 丸 て征 公園 がし も今は 奔 12 走 には 腰 清 3 * * 12 は 察 櫻が 下 征露 せら 勇 ジ草 人 12 L 多 讓 T 原 0 12 役 る。 T 5 0 綠 T あ 0 る。

忠魂 蔭 開 3 な 我等 碑 3 VI 为言 あ 4 は -1ŧ る ち 人 城 から 0 蜿 は 君 蜒と舞 甚 0 案 1 3 內 V 0 17 Ш -高 本 \$ 遠 3 道 公 鬼 園 0 高 繩 遠 進 張 0 德 兜 b 館 をし 0 等 城 12 12 0 昔 ٤ 跡 * 0 は 即 勘

昔 0 古を 當 城 想 守 CA 護 起 0) つさせ 將 る峯が 仁 主人 科 Fi. あ 郎 0 君 12 方言 りをめぐ 戰 0 死 普 0 語 地 5 17 0 ٤ C 我 聞 等 \$ W 3 3 は Ŧī. 天 れゆ遠 郎 JE. Ш 0 は 時 は 實 Ľ 代 8 12 12 Ш É 想 像 0 Ш 中 0 翼を張 だ。 月 藏 山 等英 つた、 雄 奮 2 0

系 か 朝 H を 5 H T Ш 0 関 4 T 歲 0 雪 は 輝 10 12 眺

然為 る東 西 高さ 駒 駒 を 0 は 3 方 西 は 3 岳 權 12 0 平 まさつた姿を東 T. 嶺 は から 前 ズ 1 岳 方言 1 肩 左まで打 も張 12 描 らず臂も 0 20 張ら

す

生

2 駒

0

5

T 大

0

偉

大

な形

を縮

8 對

T,

四

は

雄

な姿ですな、

西

17

す

るの 兩 大 4 相 自 對 然の す 3 前 大 偉 17 は 觀 人 17 間 暫 時 0 恍 功 惚とし 業 は 朝 たが 日 12 消 P WD から 3 T 露 鉛 のやうなも 筆をとり 出 0 して 7 あ 65, ス ケ 7 政 チ 權 12 0 か 爭

領土 5 0 侵 L 略 か 雲 表 思 21 超 ば 兒戲 然上 聳 12 等 B る楽 L V 0 頂時 代 ٤ 0) 衣 走 0 12 包まれ た。 遠 城

た高

0

址

12

立

0

T

我

等

\$

思

12

54

は

な

3

JII 0 溪谷 に下 って 再 CX 小 年 時 代 0 昔に 返っ た 人 於 河 原 0) 大石を流 せば三峯川は夕

層を縫

だって白

50

河原は一 0 でない、 12 伯父さん達 っと 賑やか 人の惡戲 だ が 12 小 は 蟲取撫子も 石をとつて落下する大石目掛 見は 寸模倣も出來かねや 藤の實を落さうと崖に石を投げる、 笑つて ねるっ 5 けて投げつけ 笑以聲は流の囁を消 る てんな惡戯は鳥 中 して 4 當 る

如歸 力 鳴 T ゆく。

夕暮を青葉が蔭に不.

右 那まで熟と瞻視 を移す、 志を懷に抱 である、 山 戀 沈みゆく大日輪は臙脂を流す彩雲の N ĭ 印度藍の大波をうねらして夕靄の中に朧々と消 忽ちにし いて今宵は眠るのであらうとなつかし 0 我等は一 めた、 て弦 再び高遠公園に立つて落日 指折 忽ちに り数ふれば今日は西駒 L て線 間 點 17 別れ その の木曾山系 ゆく 12 V 河 輝 思ひにたへなかつた、 田 此 けるその一 君 世 えゆく西岳 0 安 を眺 弟君が か n 8 點が た、 2 登られ 徐 は

我等

同

隠る 3 權

刹

る日 0

10

帝 峠

そろつた準備もよろし 眠るには惜し 五位鷺が憂々と鳴いて通るので我等も星野家 い良夜、 S. 明日は早けれ 明日は晴天出發は六時と約束をして歸る。 ばと月にそむ ^ (A) つた、 いて夢路を辿る。 篠田老人が來 7 夫

黑川を溯る

やがて豹變して望の光を蒼空に見る。 雨 * 七 確かめられやうか、『少し變だね』と思ふ雲のたどづまい 月 + 74 日。 空には雲があるのか、まだ全く明けやらぬ曉の空に今日の 『や、大丈夫だ』と

飯を終つて荷物も四 つに分けられた、人足は荷を脊負つて一足先きにと出

梅澤

石

Ш

VC

慣

n

た

人

肯

か

n

る

梅選

と別 力 Ut n V る 路 朝 21 風 篠 12 田 吹 8 老 か 3 6 人 n が立つて T ば 垣 間 厚 見 ねる L 星 戀人 野 氏 Ĥ 12 12 衣 會 謝 を着て は L て六 h 思 手 切 時 17 な 华 专 る 門 四 2 3 は 人 離 御なは、緑彩三 12 る 一拳川 0 金 剛 沿 杖 11 0 白 街 紙 道 T 4 2 黑 0 yū[Ŀ 內 にとき 端をまい U 7

輕丁

装

は

程

淮

流む

なる事 備を入 直 な顔 夫 n は は であらう。 T 嬉 伊 米六 澤金治 L 升と 四 政 鍋は Y 13 年 は 老人 長 四 順が背中に 12 人とも背負梯を持たず細帯で荷物をくくつ の御次男 志賀順 滅、 ある、 で末と二人 末 人足は餅を糧食に持つて居る。 松、 共 篠 -j-田 儿 政 0 雄 好 0 蒂 四 年、 此 馬 0 塵 t 年 狡 脊 頃 猾 負 か 0 6 0 日 1 訓 原などの ゆく、 12 5 我 立 等 派 足 とは 24 な 人 Ш が六 案 違 內 0 T 0 食 分 17 足 IE.

風に 絲 立 は 额 0 て九 A は凉 しおの中をゆ 『これから何處 へ」と老人の 顔を見て知己の一人二

力

尋

ね

3

河內 の煙草はとても 一様に登つて甲州から歸つて來るんで御座います』と老人の言葉は 九人 12 の中 つくと八 ばらく一行の姿を見送る、 て煙 草 味 時 为言 を吸ふのは金治 + あ 分。 ると こくに二 語 3 市の さん 黎 此方は汗を拭 111 と別 人、 瀨迄は馬も通ふと云ふ平坦な道、 12 _ T 寸休 左に いて路傍の むと煙 切 n 3 石 草入 12 150 腰 に手 L 8 登 叮嚀だ『それは御苦勞さまでござい りと か 3; ける、 カン 非持持 な いつた、 0 此里は 7 路 溝口と三峯川の東岸を通って おる甘 \$ せま 黑川 と呼 さうに 3 煙 0 だ を 吹 ます V T 上と云 Lij 登

0 右 0 \$ T ほ 前 i' 宫 らさきが 0 V C 松林 からうんと休み 0 間 から舞つて來る、 せせ 5 と老人 捕蟲 が先に 一網を振 0 立 0 T 梅澤生 7 出 かけ 力当 駈 3 け 出 路 す は二 峯 網 111 0) 4 0 17 大きな支 羽 晋 3: 聞 流 黑 ż

15 留 かつ 見 12 文 相 T T 雁 行 勇 L く手を 11 0 V で露む 姿、 暫 と恐ろ 銀 時 力 見 岳 0 83 は L T 山容整然帝座 V 前 Ш が見 進 る。 へる、 先人 一家に 未踏の 分 0 尖姿 T 群 Ш 銳 く天 12 君 臨す 12 向 る雄姿は 0 T 鋸 齒 洋 3 蓝 列 色 12 0 72 3 游 絹 有 樣 を 張 は 實 12 12

11 か 5 里 足らず前宮に着 V たの は九時、 祭神は知らずた、白崩神 社 とば カン 5 聞 V た 微 4 72 3 加回 力 建 0

行

は

その後

を追

0

T

出

簽

L

た、

道

は

黑川

0

YES]

原

で人足は先に我等の

歩は

遲

V

Б

は

\$

う高

<

光

は

强

V,

流

だ歌 然と人 胞 な S 威 唯朝 0 尚 澤 額 情 他 近 との 夕に は 山 53 4 書 12 美 命 親 楝 は 5 ·Ľ 傾 L 南 L 0 さかか あ 堂 U 3 V 調物を 白 暖 0 为言 て詠 崩 南 かっ Ш 0 0 v み手 た社 永 3 T 0 初の Ш 4 0 趣に は高 て山 17 務 世 は 所がその まても保 捧ぐる 遠北中 蚴 17 蛛 親し 为言 優 心 巢 古 弘 Ш とし 5 4 0 L 3 作 T 羽 V 行く、 情の 崇 たこの近 0 目 U T 板 表白 る思 黴 21 忘れ 臭 司 在 行 15 であると思へ 5 たきは 競 0 包 特 别 風 人 から 雅 と数 我慾を忘 す 3 な 醜悪なる都 数多き例 男女老若 ば 欄 よろ n 間 12 S 會の 落 同 T 1. ある、 書 胞 1 v. 华 の胸 12 0 た額 昔 山 面 歌 であると樹 t 岳 0 名 5 42 1) 10 對 IJ 殘 13 胸 拙 白 0 L 2 て抱 は 12 崩 4 傳 根 云 3 神 3 見 12 社 0 T 吾 處 * 絲 せ 等 立 我 1 詠 T 自 は 居 3 同

桶 敷 * v 行 て茫 0 厨 を開 け 然と腰 T 叱 いて路傍を流る 々と云 を 下 U した我 ながら戸臺の方 等 1 溪水 蚴 を吞 蛛 0) h 巢と争ふ孔雀 と前宮 7 第 p 0 前を過ぎる。 蝶の 半 書 羽 食 を認 音に める。 瞑想よりよい 炭焼の男が三 さまされ 人、 t 馬 立ちょつ 54 路 0 T 鞍 0) 側 5; 水

< AL もあるら 低 行 L 4 < ばらく まきて 舞っ 水は L いが首 てわ は珠と輝 行 太 0 5 30 をか V らかな、こ 7. しげ 111 12 白 名を得し T 砂 12 何處が頭かと考 へうもんもどさなぞ都には稀 紅 の色を染めたの 雄鷹岩、 篠田 へる、 老人は待ち受けて は 分らな 可 憐 なる信意 いから唯反響のやうにこれ n なる種類 濃瞿麥の 路傍 類を生捕つて 花 の蛇紋岩の岩壁 とだ、 蝶 梅 8 選生に 为 河 雄應岩 圣 原 指 8 得意の色 す、 我 と後 領 鷹 2 か 40 思 が見へ 似た岩 でら來 0 か た 高 गा 1

炭燒 道 は 折 馬 かい は T 4 JII JII Ш を渡 路 が 分 12 る 分 n 3 b 入つ まだ 左 馬 12 0 本 か 0 か影は 流 通 2 3 進 V 見 て橋は T か 右の ある。 111 から 左 は石灰が出るそれ 右に は瀧 から 多 V が で馬が來るのだと老人が教 水 涸 れの 時が多 いので名の へてく ある 0 n はな

田

4

52

取

次

V

C

歩き

出

すっ

音は

形

*

L

た岩が

南

つたが

水

害

7

今は

無

くなつ

た

とは

後

T

3

た

前 宮か が見 える、 小 里 2 7, きたで 0 瞬 間 2 あらう路傍に 1 3; 戶 毫だなと直感した、 乞食岩(宛字)と云ふのが 家 0 前 17 は変が である、 干 由 i 來 T \$ ある、 何 も判らね、 鷄 ללל ב 鳴 やがて な 對岸 12

違ってとてもけちな神様は

かりで御座います

した『十二年ばか

り前に二度

雨

乞に登つ

たい、

頂

上は

擂鉢

のやうて

7

IV

リと

口

12

る中々奇麗な大山

てす

is

岳

て御

座

V

せす

は

訑

息

Ш

梅

澤

は 3 n di + 時 Ŧī. + 分 高 读 Di 6 四 里 と云

世 戶 * 外 は な 三戶 る 别 0 天 里 地 T 參謀 行 本 は 部 0) 軒 地 0 圖 農家 などに 0 橡 は 17 名 腰をか \$ 出 1 W 20 5 T 第 \$2 Ш 0 間 畫 0 食 僻 1,2 村 かい て、 鋸、 30 仙 丈 0 Ш 4 17 丑 n C は

此 家 0 主 は 篠田老人 とは \$ なじ みの 事 7 あ 3 のて仙 丈 岳 の様子を含くと。

ばとて 程手前 は 前 判ら 岳 とも 多 1 82 ול 黑川 尾 根 8 御 に分れ 知 鉢 傳 岳とさ 23 n ませぬ 17 7 V 籔 中 P 7 3 JII L せす \$ 右 (當字)の 應 の方に大きな瀧 だが ても 河 仙 前 原 丈 岳 に入 とや 0 頂 主 へ つて 5 が見えるのをあ は 参れ 左手の道 とて ます、 多 さかか をとて てに まづ小り な V 行つ \$ 名 屋か 2 T 7 " 御 7 座 5 瀧 7 V と登 ます、 里 の左 半 か 側 ると原 を上り 近 登 4 6 = 12 路 里 きつて 出 は なす、 大 日 岩 尾 ならとて 0 そこ 根 小 51 屋 0 力 0 图 5 五.

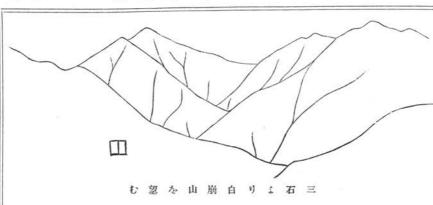
路

n

笑の 抑 何 揚 かの 中 0 に云ふに ある調子 樣がゐらつしやるかね」尋ね で笑ひ 云 は、 n ぬ優し ながら主人 つさが盗 は n 語 T た人は篠田 る、 質朴な様 日に焼 老人で『禄な神様は 子がよく見 け T 顏 は 黑 5 へる。 頰鬚 ねねえ」主人はこう答へて呵 \$ 大分黒く生へて筋骨逞 しいい 々と笑 男なが CA

神に あ に雲 值 祭 が な 神 から 5 下 る あ 樣 事 込まう、 0 たの 12 n \$ L ば 3 だらう わし な た V 處 为 神 ٤ 12 法 樣 * 何 梅 唱 から 故 澤 H 生 ^ 12 T 一來やらと口 雨 0 雲を 乞に出 解 决 退 12 一散さ きめ 掛けたので 惡 るの一 せ た 3 人二人 行が と氣 あらうと審つたか、 焔 雲 8 は囁き合ふ。老人も愛嬌のある顔に微笑を湛 0 は 多 V いとさく た てして一同は篠田老人に大先達な 前 きつと雨乞か利かな 岳 首尾 よく 登つ た か なら 0 た のて Ħ 神 3 老 T 稱 ٨ な 8

何 か 他 層 0 力 0 て出 Ш 1 來た あ る 事 3 0 は 地 T あら 質 圖 5 12 よつ 人 T 12 8 知 5 見 n X 12 2 形 0 ても 山 我 判る 等 は 如 是非とも < 確か T あらう、 何 時 か 2 35 0 絕 W. 頂 2 17 立 0 な \$ 鉢 ね ば \$ なら 火 Ш V2 1



御茶の御馳走になつて辨當をすまし 人共心の中で覺悟した。

若

手の

禮をして戶臺の

里を

後

51

n ては を か石 業と 河 つて は、 0 戶 Ŀ 一臺か 十二 な 中 危く 平 を 0 V 然 唯 6 時 傳 石 流 大岩 流 21 は = 突 3 0 办 n 17 T 踏 0 れそうに v 溯 7 行 小 弘 屋ま 0 脛 < 固 女 事. T 3 樂 ても 斜 力; 12 下に 處 3 4 2 v, から 里 めら 渡 渡 餘 南 'n っぱず 出 3 0 0) た 2 間 T 力言 梅 荜 黑 5 か 故 澤 やと向 な 6 21 111 半里 連中 を溯 生 道 0 2 ふ岸 は『ヤ 健 ば 0 稱 剛 か T L に飛 てそれ ゆく に威服 3 ツ」と聲をか て流 CX を辿 Ŀ L n を た。 0 た 渡 3 it 道 武 3 0 から 田 T T

股迄

浸

ग्रा

原る

生

0

剛

放杖

あ

を見 かば 小 四 0 澤 な全身を さな 生 大岩 Ш 畫 6 V2 0 は 垢離 か は 麓 寢 F. せ 3 を WD 12 殊 は \$ T 丽 0 場 12 現は から 小 つく 知れ 居 0 L 磧 近づ は た白 あ 屋と戸 遲 1 てあ 0 す、 る、 5 n \$ 石 武 \$3 るの 大 宿 勝 为言 33 崩 田 戸臺との 生 5 岩 赤 壯 頭 大 n Ш た、 一と河 る廣 先 12 褐 嚴 0 河 しや 達は てあ 尖 は 色 床 12 1 3 進 B 7 甲 H 6 ぶし 斐の 生。 大石 中 あ 3 は 禮 1 間 51 る 秀 群 拜 12 12 黑駒 山 三つ 12 拔であ が 淺 小 0 從 0 L 質を 0 着 T 鎮 T Ξ v 潮 < あらう名 守 为 我等を導く。 0 石 T る姿は敵 を 白 採 尾 2 あるからの名 ٤ 0 このとき全く 根 安心を 涉 冠であらうか、 稱 馬 3 為 は ^ 0 0 た 3 0 小 * 處が 事 小 2 赤 は 屋 L は İ 7 河 あるない 戶 屋 で石上に とか岩 原 晴れ を多の あ Ó つ隱れ 悠々と歩む、 と呼 る 遙 邊か 雄大な點は あ に上等とそ て次第 度流 3 白崩 を 为 6 あ 樹 時 0 T 雲 登 n る 木 は 東 間 かっ は T 蝶 Ш 4 を追 時 前 0 闡 4 南 12 な 0 2 籠 h 51 岳 12 折 3 行 眞 21 城 白 ふ梅 2 51 4 かい 者 白 分 及 顏 0 为言

梅澀

崩山に向

3.

n 崩 3 右 登 は 0 な 11 白 左 衣 は 黑]1[多か 力 らまつ つた た為でか 0 繁た あら 1 を 5 黑 處 111 4 0 IC. 源 石を積 と溯 3 0 重 T ね 石 て朧 傳 CI げ 12 流 道 を渡 標に 0 C L 11! T あ 沿 51 ま

と云 0 * 办言 て着 72 L 0 V Z た 7. n は大場の人が 夜 17 は 0 宿とする 寸法 の小 師 屋 でもなくばつめ込み 0 である、 小屋と云っ T \$ 木 具 T 1 0 合 屋 0 3 ては たら二 研 究だけ ない大岩即 十人 ても 八も入れ + 1 年や二 屋 やら 7 突出し + 200 年 大先 35 8 12 大岩 蓬 0 は七七 13 あ 石 + 0 5 蔭 は 12 宿 思 隱 は n n n 3

直 12 絲 なら は きに 立 流 な 班自 を敷 ば全 0 が 石 岩 T 0 0 くの 51 サ V 武 V 72 飛 1 H T 野 ブ 準備をする。手も切れるかと計りつめた X 生 0 上るっ ŋ 宿 0 35 飛込 匹 0 頭 時 方が遙に増しと若氣の我等は評議 4 んで行水をするのは梅澤生『寒いか』と尋ねると『イヤ何そんなでもない』と答へは 0 力 + Ŧî. ^ V2 **分、一人二人** 高 37 奥が 低 S 0 + 分 もまづ 17 5 13. 黒川の水に鳥山生は 决小屋に程近き木の まし ... 同 とし 揃 0 た 1 地 今宵 面に 濕 0 下蔭に眠 宿 氣 寸石鹼を使つて身體を拭 は 为言 鼓 2 3 1 3 Da 5 と岩 12 0 相 12 應 蔭 は 聊 2 E 見 閉 平 渡 地 L を T

4 12 生 飯 木 足 まつ を小 は 0 5 枯 4 72 刀 木 を集 か 此 T 烈 勞 6 働 めて L 1.0 た 17 ことよ 盛んに・ 疲れ ò 根 T てぎ 大岩 飢 12 を感じた時大岩から 1 0 前で火を燃 たり夜中 の寒さを防 2 飯の 横 木 で用 用 を渡 意 力 意 U 出 12 T 來 怠 鍋 たとの らな をか Da H 報告、 0 C 夕飯 た をた 提 P 灯 35 さげて T v 燃 1. 1 料 早 \$ n 速に 30 形 容 出 4 四 人 12 ば は Ш 0 方言

な な食 と云 都 會 物 0 0 生 てる 活 味 ふと山 を見 座 禪 12 57 K 0 靈 何 福 氣 と云 神 25 漬、 味 0 それ 12 T 咒 加 は ふてあらう。 でも大先達に 0 12 たのであ 5 は榮耀と見へやう、 5 曾 0 T 覺 ^ 12 食 山 0 で楽耀 進 み 51 驚 はならぬ V 72 とは 此 人 0 癖 1

淙 次第 4 72 3 17 2 流 香 領 を擴 E 阴 げ E 0 T 尾 睛 根 を総 0 樹 ふか 木も と思 皆 は n 樣 の色に る 南 消 72 6 之 か 0 Ш 1 る は 四 + 夕 度 近 0 色 V 急 12 傾 希望 斜 あ 1 あ 6 12 間 近 0 水 迫 12 影

○白崩山に向ふの記 鳥 Ш 極潔

馬 IF 所

45 るの の葉は

1 月の チ " デリ 光 6 は 梢

にな

3

刃

て燃え出

灯を木 0) 枝に

ぶらさげ

C

武

田

ink

田 0 V つし

品品 21 0 0

理

12

忙

力

白毛布

を被

つて

Da は

眠 採

5 集

たの

る

六 V 整

iv

てあ

の職も聞き、

0

炎は 夜氣は

上よ

膚

L

V

T

消梢炎



語 丈 仙 チョ 17 は に迫 り歴し伏せられるやうに暗くなつた。 度目に起きた時 生と梅澤 空を眺めると星は輝いて 還らうとてか葉は炎と化して上に登つてやが 幅 手近にある枝をくべて扇で煽ぎたてると新 ツキ りも 廣く燃えはぢめる、 葉越に星の を 生 0 あ 重ね つて 時 の光が輝くのを見る時には四隣関として T 々寒さに目 **循深** 四圍を封ずる氣勢、 山の またウトウトとする。 デ のを見る は何? 夜は y がさ デリと音を立て元の て木の 肌 8 ばか 寒い 葉の 栂 5 0

を澄ますとも 莫とした嶽 ら滴ったのであらう。 今度は輕く音をたて、朦朧と動く影が見える、 麓 の夜を暗に X 遊ぶ木精

て露

为

梢

Di

生の聲が聞 える、 起ると四邊は明る 來る、焚火の番の交代の時

为言 寂

來 L

たの

かと熟 さは

خ

眺め

T

つ耳寂

入身に迫

河

田

田

硝

蒼

8

劑

L

T

下の

J.

h

7

氣

5

0

梅

澤

明微 < 2 n 12 燃 Vi + 2 月 T 煙 + は = 微 白 日 立 ち 登 T 3 る 綠 0 梢 を 眺 8 T 2 始 8 T Ħ 覺 8 た in 批 办言 た

仙 丈

刀口

を 云 Ш し顔 越 CA 42 T 15 目 出 3 3 不 F 12 120 n 慮 似 8 痢 5 T 0 力言 す た とす 病 は \$ ほど難 \$ 朝 0 5 3 P は 1 云 0 あ 蒼 睡 * 澁 眠 U 0 白 出 早の T 0 3 1 \$ 今 活 不 n L 氣 足 \$ 0 82 見は 方 \$ 13 な C 吐 な 互 とう 2 瀉 H 12 れば合 n \$ T T Ξ 3 は 人 立 か n 例 す 氣 は 72 の顔 を附す と云 云 惡 51 口現 CA 太 け 54 合 B n T 出 登 L T 行 n 72 2 確 な 樣 11 n 17 ことに 病 昨 12 T 夜心 2 氣 H 华 配 は 0 0 容體を 癒 0 L 17 元 しやうと 黑 な 氣 0 影 T つは 危ぶが武 L T な 里 相 尋 5 n 出 談 12 と御今 君 3 殊 决 1 1 15 あ L 昨武 病 日 人の 0 T 夜 H 仙 72 か生 0 人 丈か は 元 6 25 は 氣 登 1 V 大 な L 岩 な 8 膓 3 言 17 延 づ 加 3 答 晴 出 V 兒 5 た か 20 4 け 5 か 武 先 登 記

は 名 3 殘 曉 君 と大 6 L 0 は かい な 水 下 先 6 0 痢 達 冷 幾晴 It. は 百 n 12 0 消 3 T 人 云 岸 之 力 17 黑 ふこ 漂 JII 服 1 3 ふ雲 0 とて 焚 岸 火の 多 25 あ な 立 樹 傍ら 6 V 0 5 0 T 絲 12 गा П 自と徑 3 原 座 つて か 漱 0 ぎ顔 5 4 小 を 12 5人 な 屋 * 15 女 洗 L L 足 休 C 1 ~ は 10 U 今 起 去 我 _ かって 等 町 0 とな た元氣 を落 0 餅 足 痕 8 V を 食 \$ 0 囙 此 確 Vi T 岩 か L 3 1 12 \$ C 路 3 屋 华 分 3 10 作宿 は 0 る 展 3 T 0 行の T が來 水た 大 汲 岩 仰 12 下 0 げ 小つ ば 屋 た 空 0 51 は

たが 先 カン 麓 X 12 達 は 12 0 事 水 手 は 0 0 12 金 事 8 故 と試 剛 8 T 傍 5 止 宁 T 杖 み 7 來 8 8 H 焚 手 12 17 0 17 3 晝 17 す à. 0 る 飯 0 た は L 2 蕗 3 C T T 默 輕 作 見 0 0 稿 葉 < 3 た 飯 を疑ら 答 に箸をとつた、 0 武 F. 惡 ~ T 17 H 10 叉 とまて L 生 0 せ 沈 樹 0 た 思 居 0 下 瞑 な 唐 は 松 想 蔭 V 云豚 は 肉 0 0 0 境 12 質 \$2 0 出 罐 12 氣 から 入 確詰 0 かっ 为言 恭しく 3 け 0 12 8 T 新 2 1 V と暫 行 T (12 開 な 捧 大 先 げ 時 V V C 1 湯 逹 見 大 座 a * は 吞 3 33 心 禪 み 配 肉 T 豆 草に 2 類 0 5 方 13 * ic 武 孙 35 Ш け H 尋 遙 1 は T 君 知证 よく 5 Ш は 72 女 小が 0 奥 屋 な 0 1 12 V 殘 7 行 L 0 氣 0 は 120 分 72.

登

のせ T は 戴けば 全癒疑ひなしとの仰せ、 なく食合は せが 悪かか 私が上げるのでなく 0 たと見えます 岳 嶽 0 0 神 师申 V) 樣 仰 15 せと 伺 を 思 立. つて T 12 25 御 頂きなさ 3 唐 松 0 實 を 净

な

厚如深 切 に毒ならぬ唐松の實を頂いて呑ん だと武田生は 後に 語 つた。

は 輕裝、 今宵は又大岩 辨當まで 泊 50 人 足に ていは山 B びて燦 たせて 又山 身 12 0 持 别 つは 天 等を送 地、 胴 籃、 盗まる 30 寫真 1 憂は な 捕 蟲網 けれ 等そ ばと ir 荷 ぞれ入 物 は 小 用 屋 と木 0 本 0) 0 ば F か 蔭 12 片 付 H 7 發 可

72

0

江七

時、

は

金光を浴

として

我

よ為に. 昨 日 去 の路 0 T 年 畫猶 は を下つて分流點まで 每 暗 日 でき木 夫が 0 下 通 路、 つたさう 出て愈藪川の溪谷 仰 ij て成程 ٤ 仙丈岳 道 13 は ある 女 だ視 17 入 力; 線 深 る、 12 林 入ら 道 0 間 は を木 N 左 12 切 根 21 n 足を T Ш か 12 入 けて登つて 3 野 呂 行 jij < 0 有 小 樣 屋 て行の 米 \$ 1 稍運

嚢を肩 になれ T ば 17 末の二人は ねる。 。 片 かけて 手に富士 悠々 富士 今日 之御 0) 登ると後 は荷物 金 岳 剛 12 杖、 仙 か は 片手 なし 丈の ら順 高 12 藏 思ふがましに先を急 さを加へ 金治 河 田 0 御 生、 たらエ 岳 西の金剛杖をついて梅澤生と順にやの ~ T V いで姿は見 杖に スト しやうと傍目 も及ぶまい T 0 來る、 て來 へなくなっ る武 その と梅 3 田 後に 生 澤 T 生が笑 は急阪 L まら、 金治 は手 0 25 7 從 鳥 まで使 見る。 ふ 山 V 生 て後 一は寫真に 大 つて 先 達 0) 少し 器に 來 は 3 殿 W 平 雜 8

を待 半里! 2 T 餘 ねる、 登つて 鳥山 カン け す 生 办 1.1 it 梅 た S 1 大 まし 樹の下で休んで枝を切つ V 聲をた 7 1 近 くの 樅 0 枝 に留い まつ 72 ふらずに皮を U 仙

山 頭 續 0 は 谷を 人を除 だ V てよ T 1 人は 見 3 JII 所に 0 流 な 0 0 た 香 も聞 小 える。 石を拾 0 T 力 け 4 を目 がけて 抛 つと石 には谷田 間 10 鳥 は 逃 いげ 12

見 5 る 17 登 近づ つて T また原 女 5 ば 末 切 と政 何 ^ 來 L たも 82 7 かと月 登りつ 0 か めれ ・臺て 先達 ば 聞 成 V 0 程 た文句を頭 顔を 平地 は 伺 (あるが、 つてゐる、 の中でくり 瀧 まあ は見 返 行かう、 へす、 ぬと云ふ、 と行手 行て 見 原 0 が道を た上 0 先はけ 事 下り 下 0 勢九 T C 進 來 3 ば 人 魚 野

梅澤

梅

澤

崩

紅 0) 色 30 12 在 12 凹 200 72 花 n Di は 暌 若 V 5 T 3 3 T 俗 世河 田 絕 君 玄 5 顧 L 尼 み 僧 T 0 幸 面 ね 影 3 を とせ んじ (せる、 功 せ 世 h 12 0 知 5 6 n V2 草 2 0) 7 Ш あ 路 3 12 は 0 相 艶 な 3

瘤を をと は あ 0 v 3 探 便 12 为言 す T 都 0 切 見る 人 は 3 1 梅 0 0 100 成 3: 野 生 程 九 呂 嶺 時 Jil 求 2 12 8 頂 遊 得 + J: 分。 た細 とは 3 \$ 0 流か C 0) 6 我 行 左 等 衞 右 7 を は 6 追 高 J: V d 流 站 野 0 Z-呂 0 水 ž JII 間 飲 0 51 溪谷 んだ は 可 \$ 12 な 下 0 6 る 13 廣 恐らく 0 vo T 濕 あ V 5 あ な る中 草 清 原 V 3 5 流で と役 は 3 あ 54 h 3 る T 立. \$ 12 勿論 3 V2 處 支 先 12 流 0 力で 水

頂 原 J. 2 まて \$ 思 \$ は E 3 0 1 T 湿 地 九 0 0 0 道 をし 首 方 集まる。 ばらく 训 n ば 可 な 9 F 0 72 仙 支へ は 漸 4 遠く なるらし V, 野 呂 川 行 T は 大 戀

それ を探す 原 第 と思 二は 读 万 か 臺 V 今志 3 七岁 で前 は 思 35 12 は す藪川 3 目 岳 5 邊 下 12 n た 1/2 3 0) 35 登 急 今 平 3 歸 0 0 地 大瀧 Ξ 務 其 たの て考 \$ 頂 0 あ 17 0 10 來 沿 道 0 ^ て見 72 ふた をかい 12 樣 事 1 n 故 道 あ た ば 右 我等 るからまづもどつ 側 第 12 3: 登は 0 今踏だ巒 n 野 は 呂 3 市 樣 111 0 瀨 な ~ Ŀ 處 0 3 T 0 なら 通 6 平地 瀧 路 Ŀ 0) \$ 0 3 所 は 頂 0 L 戶 4 T 在 72 一臺の を がか 表 どう 求 5 口 人 尾 ~ X, やら 0 \$ 根 は 指 無 傳 あ と方 1 V 25 3 0 12 0 为言 策 原 2 登 方 路 が C 0) 角 定 は Ŀ 2 違 2 な は n CA 2 故 矢は 500 張 T 前 舊 顧 5 0 路 n H 1 な ば を 標 5 かい 下 途 \$ 0 0 中 0 大 12 12 瀧 甲

間 35 押 混 道 分等 な は 沌 大 4 ٤ 先 道 C 4 \$ L 達に 瀧 呼 T T 3 を探 谷 涌 瀧 金 3 办 治 應 見 さうと大 起 と谷 为言 0 附 下 居 T か 3 間 闡 0 0 先 たら か T h 行 達 5 は 微 Dir. 12 此 油 道 かっ 0 な 四 屋 4 7 さん A 力; 失し 人 來 から 12 5 v 暫 L 10 72 と順、末、政 た 聞 3 我 等 1 金治 0 WD だ。 3 待 は 答 は 小 0 た 油 な 0 が 屋 悦 力 人 别 * 6 をや P 12 す L と木 て行 前 -[居 3 途 0 0 る 0 時 枝 72 0 希 は を Ŧi. で人足 望 + 押 を碎 1 か 分 時、 Vt 6 12 カン 皆 T 何 n 聲 0 油 T 仙 雷 あ 屋 咲 丈 3 沙 5 息 は 方 見 汰 呼 から 渡 12 \$ h 自 な 萃 1 す 居 和 v 出 限 T 3 T 5 行 來 才 ī 3 IIII 1 0 ٤ 草 霧

〇白崩山に向ふの記 鳥山

梅

は 3 鳥 我等 山 時 12 休 生 \$ 0 h 7 1 珍 7 大 5 3 L 先 忘 密 L 達と 0 林 n O) 梅 な 中 油 澤 V 4 0 屋 行 は 13 河 脊 < 田 卒 道 負 腹 0 生 は * 急 て來 は 感 ずる 斜 氣 が進まれ 12 面 事 * 武 横 田 C 生 取 2 3 とて箸をとら 0) 0 谷 のでとてもはから行かぬ 襯衣 間 を落 0 細 流 1 ず 0 たの 武 傍 田 12 てそれ 腰 君 は * 食 か を探 困難ば .を控 H 大 L 先 17 במ 達 T 且大瀧 ó 謹 12 徒 愼 托 21 L L ž 多く T 72 尋 辨 る 12 0 6 10 T n 1 結 3 果 出 8 は か 3 極 H 0

事 見 2 12 12 n 2 ばなら 1 B の原と云 n ば なお處を 仙 VQ ては 丈 0 歸 登 尾 大 5 は Ш 根 は、 早 傳 力 斷 5 V CA 念 2 51 里 t 1 行 1 許 12 C ば \$ 故 9 な 0) 時 3 時 間 處 女 故 問 为言 C 力 t V は L 1 3 大 U 5 瀧 か 即 * 5 尋 V 0 12 先きは 得 木下 たい しろ、 闇 迷 は 0 ずに 急 仙 饭 丈の は 行 日 H 絕 中 るとし 頂 1 なく まて、 7 \$ は ば 危險 尚四 まだ から Ŧi. 多 時 里 V 間 あ は 3 7 あ 人 2 用と 5 5

めて

小

な

1 あ 17 か る。 う云 0 V た。 降 N 出 6 11 L た ち 8 0 は 72 誰 0 は n ても + 時 な V 降 6 誰 は 云ふとなく「歸 早 V 休 孙 休 弘 らう」となっ 悠 4 時 12 华 12 0 7 13. 睡眠 र्गा 原 ~ 0 不 出 足 T 8 時 確 Ŧī. 20 分 42 2 17 野 0 原 宿 を 因 0 た 木 0

を六 呼ん え尚 得 給 大 先 組 四 カン 度も 達 为言 Ŧi. 人そろつ < 1 n 彼等 は 歸 \$ 72 T る 急 町 出 仙 誰 行 同 傾 入 \$ は 士 答は 方 T 志 斜 L 2 容 向 T 書 T 0 b 0 H 諸 崖 を失 やち な 瀧 寢 0 0) を上 をや 君 經 企 V ~ 出 今 驗 0 0 17 .C 5 T (た つて L は 1 つ下 遂に 翌 T 見 襯 引 後 居 日 事. 衣 歸 其 6 瀧 * É 來 失 L 間 ると た 崩 仙 败 0 12 H 54 出 分言 は L 付 丈 12 ょ 昔 12 合 6 器 T V 誰 時 道 遂 は 半 分 T 極 \$ L H 12 ず 來 居 力 12 8 T 瀧 た あ T 入らうと望 L 何 6 油 まつ を發見 注 處 手 屋 VZ 0 意 专 腕 0 12 3 た ٤ 知 C 痕 h は n 根 跡 T 1275 为言 尾 为言 觀 Es. 然 L ¥2 0 歸 察 たが 處 つて 人 15 T 南 あ を は 來 3 仙 L 登 瀧 丈 步 2 72 72 來 事 3 た 登 ٤ 5 0 (1) 右 とに 東 Ш ぼ 72 成 頗 どの 成効 例 劾 0 高 0 0 なぎを上 遠 H A \$ 0 I 標と 6 0 時 T \$ L 原 全く 刻 結 た報 町 0 を 8 10 力 果 奥 多 なく なく を傳 2 此 0 云 3 T 奥 ふべ 0 人 夫 尾 目 T 歸 な 5+ 3 つた た、 根 標 9 歸 大瀧 つて づ 0 を 0 ٨ 麓 知 力 5 HT とに * 來 T まて n は 許 あ た 得 幸 te た 行 つた、 o や が 0 0 例 は T 12 1 東 てあ لح L 0 行 あ T 0 音 T る 殿 林 12 る 为 0 中方 聞

夜

も更け

T

寒さは

加

は

る

焚火にくべ

た松の大木は中

々消えず、

炎をあげ

t

九つの

夢を暖める(完

夕飯には は 必ず を極 ライ 遠 8 か 3 ス 6 0 カ V2 は 內 ī 12 5 種 2 て食事を認 0 易 頂 12 る 立 た 8 12 前 る、 ば気が、 より 興 後 すまね 奮 よりその 的 なて 0 食物 なる姿と端然たる形とを見て全くこれ は 非 常 0 食慾を 滿 足 せ L 8 た、 武 田 12 君 心醉 \$ 全 < L な 元

氣を恢 今日は大岩 Ш 生と 復し の小 梅 て数 澤 於聲大岩 屋 生 1 は ゆつくり眠らうと荷物を残らず運んで七時頃 夫を助け 0 小小屋 IZ 溢れ て枯木を集 た。 める、 昨 夜 0 野 宿 は 焚火 から を代 絲立 る代 を敷 る燃や いて 毛布 L C 17 腄 3 足ら なか 0 72 力

明 日は 1 3 イ 3 白崩 の本山に 登ると思へば夢にもそれを見さらに 神經 50 た えなな v

₩

宮田より木曾駒ケ岳に登る

川丈助

石

て をな 札 個 Ш ね П を振分け な事 L さるに を 七 ると、一七 た、 出 快を得ることは た二人 17 い勢力を 17 も及びます 十二日午 元來當驛 里 L は、 7 餘 費 持ち す、 先づ停 前 から宮田迄は せい 或 + 然し 中 は 時 央東 明 か 車 難 途中 場 **分、一人** 日 5 5 事 峻 構 嶺 僅 彼 は だらうか 内 0 仮處に駐 4 極め * 辰 七里 取 野 は づる て平 締 驛 昆 5 0 T りする に下車し 蟲 時 道と聞 居る馬車 採 凡で見る樣 集 網、 巡 層今日 餘計に疲勞を來 V 查 た た故、 で行く 殿 る洋裝の二人の學生は 携帶箱 な 12 は樂をし 所 方が 今夜宿 始から徒 も有りません 及び外套雜囊 たす て置くべしと、終に乘車に決したのである。 泊の 却て得策 様な事 歩で行く目算 豫 Ļ 定 でしょう」との事 地 なとあっては、 なる 此通 即ち余と河 他の一人 5 Ŀ ては 0 伊 あ 暑さに 那 は いつたけ 田 絲 郡 それてそ折 宫 杰君とであ 立 何 12 12 田 余等 も苦 村迄 れども、 風呂 0 は 此 里 V 3 思 數 處

12

は

£.

共

進

會

7

東

京 早

博

覽 田

會

20 學

比 出

較論

12

な

6

逐

12 附

博

覽 0

會 有

は

評

判

程

12

面

Ĥ 車

くち #

な

不完 覽

全の

點

B

前

12

述べ

な

和

裝

0

A

は

稻

大

0

身とか

て、

坂

下

近

力家ら

12

東

京

博

會

0

話

力

田 5 木 智駒 岳に

宮

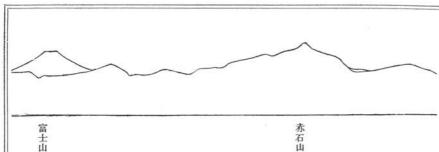
の御 别 ざさらば を告げ 方等は 乘 宫 車 と云 田 汔 1 行 かっ 時 3 12 0 だ 此 か 0 50 巡 查 途 殿 中 D 充分に 3 氣を付 余等 ٤ it 共 T 12 行 駐 つて 車 場 吳れ 迄來 7 と命じた 叮 嘧 15 5 禮 すす 又、御大事 3 馭 者 12 に」と余等 向 CA T 此

身低 つて行 復 車 言 五六 6 待たせらる 切な應對を 0 ってあ ると L 者 12 n 0 5 不 T 乘 承 CK 为 12 頭 0 0 省 一等力と 停車 替問 L 3 早 此 知 12 < ï ならな 處 鞭 人 1 せ T 0 0 嘆願 是非 Ĭ, 事 は 場の か 余等 題 7 を馬 底 賃 T 6 乘 約 時 か あ 洋 錢 12 替 切 方 か 沈 * 先き緩 其 17 # 0 間 起 3 12 裝 貴 妙 及 分 乘 た あ 0 8 他 6 10 15 30 な U 崇 h \$ つて 省 12 步 力 0 辰 C は だ、 だ、 經 3 3 を向 12 野 官 0) 如 く走らす 0 和 辰 居 か 裝 3 T 權 は < T The same 野か 尚 かっ 3 比 7 12 此 此 6 馬 0 * H 5 6 長 處 馬 男 不 形 較 事 は 振 6 時 車 的 里 1 思 容 殘 か は 嘶 0 廻 n 6 华 客 は 議 酷 0) 間 余等 0 割 畢 た L V 其 賃 H 計 す 巡 待 馭 T T 17 0) 竟 T 为 あ ď, 鞭 錢 は 者 良 馭 馳 查 n 12 0 6 東 乘 3 を 3 我 前 者 來 せ 京 殿 0 差支なさ は は 5 5 た位 賃錢 出 馬 避 等 坂 3 12 0 た 0 0 狡 巡 H 下 1 _ 來 同 所 n 同 後姿を、 12 様な * 滑な 12 ば 乘者 Ľ 查 あ る為め 1 同 T 與 は 樣 得 51 T 松 る、 思 3 事. 乘 島 馬 は 1 此 な h 二人 想か と云 0 7 替 所 裝 ٤, 車 余 模範 が とは 降 あると後 あ 3 を は 等 て、 1 と合 5 5 3 ٤ は 82 L 乘客 天 6 0 ٤ 見送 和 T は 初 村 地 L 路 72 馬 て示 車 裝 頑 會 馭 まるとで、 落 B L 0 0 迷 崩 曲 0 强 社 者 力 T 0 0 T 我等に 客 却 一惑も ある、 C 12 为言 6 動 7 る様な音をさ 四 L 0 人 角 搖 Di 抵 違 聲高 T とな などに T 抗 遣 馭 老 世 U 4 よく諸所の街道 3 話 者 多 L ますから何卒 遠 b 12 17 ^ す た 3 8 12 大 距 0 た B 來 甚 なる iz た、 云 から 利 稀 L 離を往復するよりも S た、 た詞 2 L なる巡 T 1 益 斯 は て、 不 我 分 < 馭 0 今度の 等 者 だ 氣 T 利 配 0 如当 或 あ 今し は 抔 御 益 0 0 查 小で 等 3 要 最早 と話 となる 乘 事 殿 時 で有 馬 求 替 て論 飯 力 は 奸 \$ は癖 之れ 手段 な、 天 田 客 す 为 ~ に勝の事 此 下 を 故 中 \$ 處 は 道を南 彼 0 度 3 L を 近距離を往 有 17 彼 惡 敢 冲 仕 5 1 共 0 だが 居 此 17 12 着 樣 5 T 5 す 事 E 處 12 ٤ 實 30 3 17 な 馬 向 獨 + 懇 1 n

石

111

此 S



3

赤

石 あ

系

0 河

35 寄

> 0 此

72

方

光

る 7

な山

る、

あ チ

れてそ白崩

だらうと思 せらる、

君

は

幅

大

書

0

如

き景

を

ス

ケ

"

ブ

ツ

7

35

物

前

12

見

WD

ませ

人

4 山 る、

0

或

は 東 \mathbf{H}

近

所

佇

A 10 0

8 白

捕 <

は 樣

所 为

か あ

ら見ゆ

Ш

白崩

と云

は

再

24 U

聞

9

\$

何

n

B 此

知ら

ねと答

へて る

不

得要

領

5

0

iz

は

時 1 Ŀ

Ш

が流 様な 12 33 n Ш 何 行 П Di 西 する 故 51 春 6 Ŧī. 登 宫 何 君 6 0 等 は H 處 ですよ」と云ひ終 3 は 極 12 0 0 8 0 方 てす 東京 て樂 外 と云 は 17 幾 まだあ くんん な道 3 分 ź, って、 と云ふ、 女 だりから、 河 6 H ます り河田君と顔を合せて笑ふ。 或年の夏、 君 T あ 办 か つた 金ナト 宮田から駒 此 と尋 様な邊鄙 と云ふとに定つた、 月明に ニ、道樂に ね n ケ岳に登るのです 乗じて登山 な所 ば、「エー、 登るの 12 來ら まだ西 KL L てすよ、 翌朝 裝 面 白 春 下 近五岳 Ш V 此 8 頃 L かっ まし 登 てん 6 17 思 登 3 た n な 0 君 は 道 AJ 12

加

は

は

樂 彼

計 鳳 放 並 15 3 かっ 凰 今迄 平 は 午 T 等と云 ば 峠 T 0 な 後 太陽 を越 あ か は 居 割乃至 時 な る H 天 心 3 12 馬 # 文 所謂 皆 地 車 0 馬 向 頭 T Ti. よや、 F. かっ 低 木 割 車 萬 ら今降 曾 伊 は か 0 5 坂 尺 6 馬 增 街 那 額 照付 車 斷 道 下、舊名伊 17 谷 近 雲飛ぶ其 42 は 諏 6 0 0 it 地 訪 V H 出 あるだらう) T 6 「る道 て、 湖 見 除 ると、 か 赤 n H 那 5 飯田 石 0 3 となって \$ 町、 出 Ŀ のも構 Ш 天龍川 12 を除 7 系 四 辰野から五里と云ふ、賃 0 12 來 方 偉 甲 居 着した、 は 豁 72 V 斐駒 ず、 72 を渡り高 天 物 達 たら一 龍 慕 から とし 111 肩 路 0 等 此地は一 8 仙 Ŀ て、 た が 並 丈、 8 遠 0 蜿 1: 立 急に 蜒 0 町だらう、 方に と流 C 可なり 5 北 外 聳 T, 4 岳 0 景色 也回 通す n 文 金 荒 眼 0 1 四十 叉其 繁華 を東 る 居 111 は 此 1) 3 72 道 處 思 樣 0 3 の方か \$ かっ 錢、 實に 鳥 た 麓 あ 6 商 西 0 17 賣 雨 見 見 莊 6 赫 北 地 雪 大 渡 南 得 0 軒 0 4 な 方 * 際 1 17 12 な

長

降

6

旅

宿

錢

屋

12

荷

*

卸

L

12

0

は

=

時

+

分

頃

1

あ

0

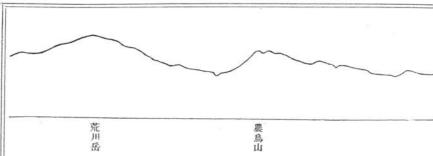
たと思

30

を



]1]



1

ある

7

は

先 春

刻 V

車

4 曾 天

聞

72

話

た 逹

\$ す 地

實際

來

て見ると、

勾 は 0

配 大

\$

緩

漫

12 樣 商

見

文 から

登 道

8

容

5

L

かっ 0

6 5 頂

登らう

か

لح

河

田

5

相

ち

L

た

35 た。

案內

者

0

有

無 大 樂 話 商

頗 分 な

艺

0 12

た

此 2

西 稱

沂

か n

木

0 0

£

17

3

道 呱

方言 4

あ 0

0

T

距 げ

離

分

遠

だ

偉

傑

せら

た

3

糸

平

は

此

T

聲を

舉

た

0

す

غ

は V

人

0

1

舉

5 3

事

あ界だ婦

又 位

4 0 T 7

+ 此

博此薦

處

٤

氣

遣

は

L 易

V

との

馭 5 馬 5

者

0 此

詞 處 T 駒 F

17 力

斷

然宮

田

より

登 君

3

12 談

確

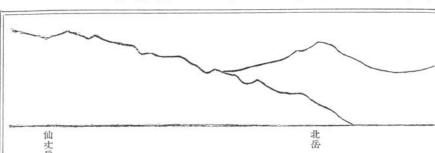
定

人 めら 覽 邊 恨 會 は 0 4 第 拂 3 0 婦 n 客 Ĺ 話 人 た N は そう 3 號 力 及 IF 此 出 幸 處 館 CK 0 17 0 飯 12 to 織 云 田 再 物 商人 2 邊 CK 出 III 類 0 車 掛 車 坂 體 中中 0 H L 下 出 學 0 12 3 0 伊 を 밂 人 生 人 那 出 が立 とな は 6 町 馬 0 發 L 湍 車 L 派 0 n は V 部 T 青 た C 1 12 全 分 年 あ 來 カコ IV 然 0 j 5 = 0 3 此 同 た 六 乘 ٤ 1 處 为言 里 あ 者 飯 から 1 か 云 半 0 は 6 3 H 3 今月 計 3 た、 四 先 名 行 6 + 1 3 0 駛る 限 を點 余等 12 位 馬 5 0 車 は 5 閉 ľ * 2 商 0 行 5 會 な 東 人 着 20 觀 京 體 12 西 發 A2 な 月 者 5 春 0 所 推 近 3 橋 7 人と、 が 0 察 知っ とは 12 * あ 事 L 來 大 る、 故 12 借 T た 17

何 3 最 暑苦 h 早 12 宫 0 か L 前 田 壯 5 快 12 Ш 風 12 多 17 感 車 H V T ľ 0 覆 居 T 0 轉する 慕 72 は 坂 時 12 下 茫 度 4 然とな 12 1 翻 5 接 ^ ると、 近 つて L 甲 T 仕 來 諸 賃 た 舞 所 錢 0 0 25 明 青 + 日 H 錢 馭 は 12 車 あ 石 百 21 0 灰 乘注 頂 * 意 上 0 蒔 ーを極 3 V 51 n T 會 た 8 釋 0 る 居 12 か L 3 氣 と思 T 0 馬 D: Zi 車付 3 見

江 藤 杯 太 0 n 郎 茶 と云 12 喉 ふ屈 を濕 强な ほ L 男農夫だとい T か 5 岳 ~ 3 0 案內 年 一齢は笑 者 0 有 つて 無を 到問 4 ふと、 話 さな 頓 2 T 2 連 たれ から 1 來 廿た 八の 九は





5

出

L

た

四

日

位

0

月

0 各

光 戶

17

映じて白 ら立ち昇

ゆらくと高

ら天に

舞

上

0

T 東

行く

0 0

4

12

入

つて仕

舞

CA

か

3

炊煙

2

蚊

流遣の

煙

とは

共

12

0

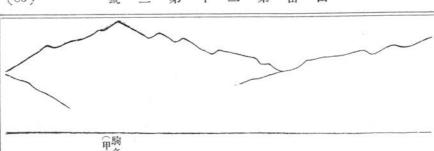
森

Ŀ.

力

山と字 中で 出 力 弘 1 12 は 分 は人馬も可 とは、 大概 かなす、 泊 來 飯 3 何 V2 0 C 樣 为 津 伊 も濟 重 事 0 それ 那 行 なら 木 7 12 全く雲泥の差があ なり な T 町 11 定 ると、 (當字)岳との み 頂 解 は 故 12 n 児 ば 1-0 通るが 次ぐ て W 51 態 12 町 頂 行 其 12 居ます」とは、 其 る」と云 日 Ŀ 逵 動 赈 明 分 0 0 0 1 选 それ 父け 翌日 日 即 小 夜 2 彩 問 は寂然として 7 0 屋 明 5 に落 用意 る、 0 8 あ ては 權 21 日 明 は、 泊 中に 黑 0 平 早 たが、 荷 峠 と變じ 5 12 仕 h もと 通り 僅な荷 事 案内 T Ŀ 物 を越えて 當宮 賃 为 松 明 て、 通 近來 氷 0 者 後 只 12 少 0 僅 行 砂 話 12 L は 降 田 H いも濟ん 今は か あるが、 97 熟 多 赤 糖等 不平を鳴らし増額 鬩どうぞ戴きたい」と云ふ、 F 6 * 考の 17 出 穗 5 杜 る事となる、すると、先づ Ш 全く 前 絕 村に を買 L 22 發 後 える る様 Ш て、明朝の事を約して案内 と念を押すと、「 福島迄 其繁華を奪 U 此 0 「それでは、 村 頂が 1 有 に出た、 様だ、 あ 田 \$ 赤 茜 行きて つた 切 を强請 穗 色に III 太陽 當地 は 6 12 彩ら 方も 宿 n 私 W 沿 する他 は明 8 た は + 3 直 3 小 穑 はや 總 0 昔 1 ち T n 3 時 餘り商賣 後 10 登 だそうで = 6 T T 處に 夜 居 木 は 持 B В だ 降 者は 三日 或 曾 な 为言 0 72 飯 見 無 午 女神 は 駒 田 歸 = * 賃 5 頂 0) 3 氣 要 强 錢 + 前 畫 道 0 0

过去 事 故 明 朝 は 時 非 頃 時 夜 年 宿 晚 まだ登つ 頃 12 田立し 1 歸 なつて 0 T なけ な 3 人 明 n 明 13 日 日中 無 ばなりますまいから、 0 出 12 7 準 F. 小 松 屋 備 12 も大分損じ 等 をし 下りません T 居 早く御 T 3 居て、 1 は 寝みなさいと告げ 命 畫 が 其 間 危 中 0 險 案 1.1 雪 內 す 1 者 か 为 6 杯 來 丸 だら T T 歸 それ 52 3 岳 0 51 0 頂



(甲斐)

女郎

花

の突亂

12

て居る草

0

H

12

路が南

12

向

つて通じてる、是れこそ此

前

36

7 田 2

Ł

つる、

赤

穂村

から

也 原

登山

口

から

あると聞

v

たか全く此處で合する事

が

時計 られて起出でしは、 为 老 T 聞 は二時を報ずる、 番清潔で信切ら V 72 廿五錢、最 我 等 終に は \$ + 泊 二時 世三 朝食 しいことろ 勘 定 時 一日午前 は提 半頃になって を濟 0 飯と云ふ頼み、 3 L 聞き得 時であった、 大急ぎに と寝たと思ふと、 案内者兼强力が 12 布 當 團 朝飯の代 0 地 中 12 は 12 天井 來 他 入 た故 b つて眠らうとしても 12 を走る に生鷄卵を吸 宿 屋 \$ 四 一度分の 鼠 あ 0 3 香 72 55 ひ等する中 51 握飯、外套、 旅 の夢を 目 为 冱

破

雑嚢、草鞋等を負はせて、宿を出發したの

は、

やが

てニ

一時に近

か

0

た。

事

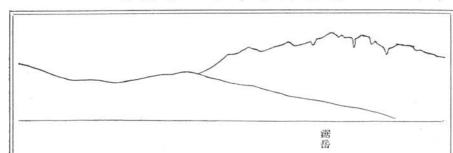
歩き てる 茫 石と石との 木 の方に行くと、 面 12 は 然と分 0 月は最早沈んで真の暗、 森、 切川 悟 進んで行く、 宇 v 都 明して 小徑を案内 番鶏が曉 草原等を過ぎ一 は 駒 木岳は左方に 間 12 ケ 來た、 右側 九 岳の溪間 木橋 を示 未だ何處の 者 12 ぐるの 为 此 の後にな 精米所ら 里計 互 あ か 處は宮田から見 5 に相對應して る 只晴 には少 家も起出 湧 6 で、太田切川の邊に出かって二人は辿つて行く、 Ĺ 出 此 n L 時 5 た空に爛々と輝いて居る幾千の星斗の は時 建 L 物 問があるらしい、 此 た氣色もなく、 ると餘円 洞 能 計 があった、 立 0 四 真中 L 時 の邊に出た、 を示 程 を流れ の高 其間は深い大きな洞をなして居 L 其所を曲 地 夜を守る犬の遠吠は微 て、天龍川に入るのである、 て、 五六の水車小屋の傍、松林、雜 宿を出てから、 東天微かに紅を 幅は凡そ十間計りの谷川 駒 つて、 ケ岳 ずん の前山 呈 光 Ī, 出は我等 町計 を カン 石 賴 74 5 17 高 5 る 0) < 飯 聞 17

3 岳の 登 Ш は、 宫 田 口 より するも赤穂口よりするも、 終には 此 處 T 出會 ふ事 故 結

石 111



JII



其

の易

度

毎

12

踏

a

8

3

0

T

腿

は

殆

ど無

威

覺となり、

手

は

葉

42

T

幾葉

度

となく

切

CA

0

1

Ħ.

51

聲

を

掛

H

0

此

急

么

配

を攀ぢた

足は

笹

0

上

12

結

h

だ

今 根 51 12 n L 0 -1-喫 頂 局 7 1: 草 分休 投込 42 F. Ľ 8 笹 は 12 分 35 D は、 樣 女 計 あ は 丽 0 0 矢 1 同 T 治 中 n な 白 方 茂 息 h 旅 좚 棘 水 * だら 17 12 3 12 だ、 12 行 大 Ŀ 72 L 行 思つ 消 中 飲 は 打 斜 顔 12 雨 Ш T 12 Ś, 2 を ず 馬 再 2 於 當 1/1 0 道 文 面 7 72 引 为言 0 T 0 h \$ CK T T 為 之れ 發 なる と今度は 3 は 無 草 搔 時 居 時 12 83 原 足 後 全 爲 田 早 12 0 (か 10 75 \mathbb{H} 然 を出 行 な n は は 0 崩 切 ~ D 此 1 我等が 出 自分等 と音が 草 失枠 111 0 左 處 n 迷 岩に 72 た + 叢 敗は 72 以 落 右 12 幾回 等 時 沿 は 25 ち 0 力 根 馬は 一登つ V2 其 躓 人 す 雜 \$ P 4 5 期 t 12 元 72 る となく 處 白等 か 6 草 n 樣 は 所 T 水 à 12 大 疾 昆 は 方 12 逐 て行くと、馬は T 5 1 行 U は 5 身を 無 n 耳. L 12 何肴 8 了 折 蟲 得 6 12 に繁みに 17 條 あ 0 網 事 T 狼 勾配急なる細 n 5 道を見失つて、 た を棒 沒 半 登 注 0 上 狽 カン n 清 ぞ、と見る、三 C 道 役 意 L 甲 0 ^ 75 ま 水 す T 6 Ŀ 惜 て、 3 計 L 12 12 0 入つて仕舞 V 13. 行 は 所 付 湧 計 T. L 6 と步 け、 ら落 詮 との V 何 V 6 町も二町 h 徑 为 事 0 立. 0 1 を整 案 笹 が V 7 + 翻 な 5 金 5 屈 治 步計 雜木 歲 やと空に 剛 易 0 た あ T 办言 難 內 T 曲 は 0 专 高 計 折 6 < 杖 0 居 構 0 3 JII L も先きに立つて歩く、 て解らなくなつて了 12 L なつ 言 3 0 6 3 は 林 0 枠 0 0 た 12 17 # ず 代 行 の中を 草 办言 登 かい 51 て上つて は 全 1 肩 5 飛 用とし 17 F. 苅男であつて、 外 あ づし 8 0 CK 道 離 休 0 埋 內 先 方 逍 去 12 青 憇 刻見 毛 溫 生 め、 は 行くと 0 昆 T 度 尚 72 千 氈 甲 行 L 石 T 右 2 失 8 能 は け、 仞 T IL 0 居 約 B 笹 0 0 集 木 飯 t 行 方 少左 72 12 谷

JIL

見 捨 近 見 實 和 謠 は 徑 林 道 山の 全 3 事 中 T 8 が 事 V 72 17 か 得 12 來 我 72 0) T 所 3 彼 5 我等を 樣 た 此 たが 0 我 B 方 晴 0 人となった、 疲 處 其 大 等 本 な 0 5 n 當 * 木 明 八 0 尙 は 是か 去 歡 時 12 行 天 から 暫 有 膫 ケ 日 3 を 幾 暫 < 數 迎 時 な 岳 を遮 6 色を す 口 多 は 片 時 17 登 0 時 3 高 此 力 想 枯 仙 睢 0 休 雲 幾 + 息 6 森 12 頗 が 立 0 III 日 年 林 七 3 如 L L 思 办言 T t 影だに しよう T き有 時 困 6 書 it. 8 U 列をなして か T 朝 居 3 尚 難 7 (J) 霧 ٤ 兒 關 層 樣 あ 以 所 休 な 3 の上に 得 か 謂 憇 3 高 前 12 0 V と云 官 L 見 3 0 た 無 故 ¥2 居る 等 12 2 如 此 晚 睐 林 聳 1 恐 2 場 る 9 好 し T 西 0 之 3 怖 は 4 層 人 有 0 所 な 0 天 蒼 民 5 宮 顧 は 長 樣 か Do 0 氣 言 念を起 6 12 5 H 3 天 力 Va < CA と字 史 樣 法 道 15 か 年 恰 12 1 出 Ĺ 網 無さ 6 Ш 接 0 S \$ 1 昨 L ざ出 登 3 チ 3 此 火 津 莊 L 日 C 5 潜 事 所 處 木 大 1 I' 坂 L を約 發 迄 35 居 3 F 草 0 岳 な 1 0 と云 Ξ ·C 35 凡 12 あ 为 3 ٤ ~ 0 盜 人 4 莊 才 仰 Ŀ. + 天 0 は、 後 72 伐 分 多 3 * 嚴 九 in Σi V 方に 25 だる 身を投 山 事 摩 * \$ 里 な F ŀ 敢 淮 0 黑 7 华 此 尺 ラ 1 惜 iz 赤 T CA は、 T 大 0 7 4 駒 燒 出 な C 0 1 1 居 景 靑 " 石 3 度 殘 4 か 12 5 3 山 垣 針 眺 半 乐 0 頂 眼 0 系 た 12 * 及 運 頗 8 如 葉 分 0) F. 前 樹 3 0) 7 CK 字 12 12

な

0

無 L

草

原

12

出 大

た、

落葉樹

林

\$ Ľ

最

早此

邊

終

6 4

*

告 生

4

12

0 12 藻

7

あ 播

3 C

M

は

进

3

12

なる苦痛

を感

+

分

間

計

懸

命

V. た

末

終

12

平

垣

まさ 蘇 嶺 傳 \$ 埶 n 12 U 滑 12 T 行 打 0 老に 8 17 尻 事 在 行 < る 清 如 泉 太陽 0 12 湧 汗 光 き出 は 線 2 3 湿 所 6 II \$ ね E 無 T 絞 B 3 案內 計 樹 木 敏光 17 生 水 咽 0 喉 L 在 T 2. 3 蛇 居 所 3 1 事 事 あ 殊 故 風 3 0 力 外 來 B

12

12

闲

Ľ

T

潰

棄

L

林

は、

所

12

横

る

或

は

梁

0

或

<

12

攀

ち

苔

0

T 72

餅 木

を搗

3 諸

石

12 0

躓 T

きて 居

膝

*

打

5

內 如

心 1

登

Ш

難 は

* 梯

威 0

ぜ 如

到

根石岳

居る漸

17

1

登り 來つた我

等は案

內 徑傍

0

1111

12

楓 陸

> 6 17

V

木

0

下に 草

大きな岩が

斯

<

戴

難

を嘗めて半里も登

つて來ると、

0

樹

案內

13

煙

*

喫

な

か

すぎごけ、

が天鵞絨

の如くに生ひて居るのを見

付

V

急台上

3

今迄の疲勞に

眠 あ 石

111

硫黃岳 權現岳 横岳 赤岳 昆蟲 そ水 其 专 n F. 幾 達 8 17 計 間 C くと、 0 ども あ るか 21 + 何 みであつ 1 6 る、 12 强 分ち 間 渴 0 經 ば たとき、 ずに、 休 此れ P 先きに \$ 有 力なると、 等が 池と云 む位 之れ ても は大 休 付 细 最 た Ť かっ H n 1 立. 體を 51 樣 0 6 口 底 嬉 n N V 隹 中は 一人の は 12 12 3 故 物の 12 は 0 1 n 行 する氣 た案 投 な 險 沈 事 落膽 他 及 早 紛 12 0 出す 0 互 道 は Vi h 1 \$7 かなと喜 小 72 0 17 內 た時分には物を言 \$ ほ 12 時 ざると遠さを後に 1 屋 地 行 所 様に 險道 は無 から た、 居 h 間 か 12 では否 0 \$ 5 休み て、 0 勢よく馳付 來 小 實に 名だけて、 最早此 なった、 V CX 12 池に來たよ 屋 勇 故 表 と案内 しようと休息 炎天の牛の 45 0 宮田の地でも彼以 面に 名狀すべからずで、 傍 h 外に 心残りありそうに此池を通過す、 1 廢 その 13 步 17 は 屋 泉 5 ふの 至 ぎか 面積三 たが、 五 我 は C 3 等を励 問 如 出 出 岩 つて思ひ あ す、 L く湍 \$ と叫ぶ聲 3 石崩 12 3 ~~と紫色に油の如き物が 案內 É たの 坪 所 301 まし もな 倒 位 時 途 壞 と云 外に見 は平 だが、 内の喜悦 合はされ 中 L となり、 0 此度、 水 が四 慰 我 V 溜 め 氣 T 心 方言 水 得 終に は 方に # 1 9 T 勇 は られ 登 終 た程 12 吳 目 御 密 12 殊 湧 氣 はニ 岳 反響し 0 配 過ぎぬ、 に残念と呼ば 林 は 40 出 百 て行 せいと思ふ程 だ、 1 L 3 依 倍 L て、 の險 只、 乘 0 T 二步踏出 Z 三分 たら 鞍 渴 なく T T 我等 朽ち 岩の 12 水 n は 道 浮 其 3 間 益 3 0 1 池 な i. V 0 登攀 た木 登 は E 登 L 4 L 0 0 0 て居 健 加 耳 てあ 0 8 0 字 水 72 T 脚 Ŧī. 底 T あ 木 L T 13. 葉 た 3 分 飲 12 0 12 行 3 分 は

12

0

た

3

分

四

時

半

頃

T T

あ

0

12

550

心

持

1

<

なつ

72

と思ふと、

其

儘

此

茅

屋

12

等

L

V

1

屋

0

床

Ŀ

1/2

打

倒

12

T

路

が なつた 遺 罩 2 は 寶 本 石 終に た 劍 L 到 は 83 手 0 T 12 底 17 英 兀 岳 置 事 忘 氣 故 未 取 4 幾 故 だ n 5 麓 3 分 12 太 3 L 如 余 0 0 は は 危 陽 事. た偃 分 石 暖 7 險 は * 駒 Do F 氣を まつ ラン を 高 得 松 餇 恢 51 慮 AJ 帶 復 所 V 0 得 故 0 六 6 小 0 12 睡 乾 宫 出 此 溪 iv 1-屋 0 觀太 夢 松迄下 間 處 5 此 \mathbb{H} 17 12 眼 7 聊かか か 12 E 0 達 は 5 殘 を遮 午 貪 0 るとは 雪な真 此 此 食 * 枚 0 を終 天 案內 る物 1 處 た 襦 含 迄 0 祥、 白 つて 與 12 出 四 3 3 泊す 來 里 無 取 57 と喜 出 見 夏 V2 八 眼 0 V 服、 事 るとに ので、 N WD T 發 h ٤ 多 無か で焚い は た、 來 賽 套を着 確定 云 T 0 174 6 3 吳 河 麗 二三丁でおす た 原も 5 V 力 L n から た けれ 良 72 12 12 から ども、 ると 過ぎ巉巖 く見え、 氣 • CAR. 7. 雪 四 + 壓 塊 尚 時 を散 低 寒氣 頃 七 办言 け 一より 大分 里位 を攀ぢ 清 17 時 長さ を指 n 12 漸 4 疲勞 ば 拋 濃 は 15 な 水 え得 霧に ある、 嚙 良 T 針 L を湛 L < 、漸々にして、午 T 燃 樹 居 なか T 1 風さ えず 居 2 林 た 喉を濕 0 3 此 C 帶 案內 居る た、 約 8 燻 加 終 # 能 6 昨 は 此 \$ 分 6 後 勝 车 6 た 間 時 3 云 寒さ 池 告 ち 0 霧 CA 0 我 時 登 \$ 其 睡 あ 激 四 等 時 眠 Ш + 烈 多 圍 0 0 味 12 ٤ * 語 力

名の 恐し 速 は 々とし 寶 3 朝と 分 3 劍 6 げ 如 VI T 再 1 は 0) 岳 T 語 CX 絕 寒 と出 3 小 涯 壁 5 T \$ * をな 盡 は 屋 12 頗 12 知 せ 發 るふら 6 な 起 0 3 向 L L 0 T た、 出 8 旺 VQ V 1 盛 雲 頂 づ 下 海 花 は E n D 10 步誤 るの は 崗 ば 1 を 1 望 約 石 3 12 32 h 見る植物 Ŧi. 軒 h. だ ば 時 確 V 0) 53 破 敷 平 身 H -1-計 は 12 2 分 12 縋 微 目 6 とし み V 小 は 應 0 ŋ か 7 やまさんば 屋 D 眞 面 付 5 な * 17 積 かい 1 珍らし 4 出 壯 T 0 + T 發 絕 登 T 四 萬 す 5 日 から 否 5 小 仭 0 は 0 昨 凄 太 丽 四 0 5 ち 日 絕 時 谷 为言 陽 V2 80 # 12 は は h T あ 0 落 < 無 あ 3 小 光 元 屋 氣 0 線 るま○ 0 た 8 がざくら 衰 3 海 は 拔 出 か 內 今略 T と思 12 靈 發 12 T かっ L 記 地 射 等 和 12 心ら L 儿 T. C す ば、 为言 Ħ Ŧi. 1 居 まつ 見れ 米 時 あ 3 た n 長 突 17 心 寶 0 案 狂 1 0) 91-內 前 3 居 此 劍 CA P 高 眼 目 山 岳 \$ まし 口 12 3 12 0 \$ 岳 ग्रा P \$ 12 頂 眩 登 力 田 IF ま 入 6 攀 £ U 君 が は ず、 ち 5 12 計 T \$ 文 h 無 T 逵 5 起 0 た L 其 72



石川



中を無暗に が水があったようと云 水を手に の温度に溶けつくあ は全く のだ に至り、 急いて指す方を見 0 る様だ、 露 て治され 此溪は めに の味、 飯を喫終る 前山と本岳とい 掬す がある、 なか 溪をなし 此 二人は偃松 本岳 定か 處に 流れ 走下つて 東方に 清凉 n 昨 17 此 1 日 た て其 了 來 つる H 知 靈 肺 つ水の腑 實 低 0

か

重

事

境

屋

重

一次郎

方

12

着

して

案內

を歸

一人が草

鞋

8

脫

V

だ

0

は

JE.

12

午

後

時

179

+

分であった。

得

林

と案 だ 通 Tan 松 あ 0 玉 12 双深 時 をし 田 3 あ 5 n П 窪 再 眸 休 < を通 E 所に 內 小 13 3 小 會 12 L 憩、 T 宮 入 宮 屋 L 奔 8 T 者 5 來 流 17 製 5 29 小 H 出 此 再 H は 3 を 方 處 着 6 屋 口 た L CK П 云 1 ī 步 * t 小 3 17 西 * 8 學 諸 比 12 時 を 駒 發 12 服 個 0 6 さら 運ん ケ 校 所 處 L 木 5 望 す L 難路 岳 0 渡 12 立 小 --5 L る T 登山 傍 分、 得 より する 涉 あ 屋 17 0 斷 T 本岳に と京 ず、 12 L 3 間 崖 は 1 出 故 遺 2 遙 も 駒 口 かい 42 T と記 事 若し 6 通 餇 25 憾 C す 登 若 木 12 0 F 伊 + 比 木 0 5 曾 較 就 3 方 言 晴 那 小 L 曾 L 細 屋 天 案 12 街 時 的 T 111 17 4 方 なり 3 道 樂 徑 1 見 叉 內 半 は か गा 面 者等 木 此 17 頃 在 伯 白 な 5 肠 田 か 標 合 懷 道 仲 行 大 3 君 L 處 5 V に於 KK 玉 と互 なら 为言 當 から L 12 0 布 あ あ た 間 L 窪 岳 5 0 て完全 農家 ば、 樣 2 0 12 此 小 12 7 るとかに 12 て、 T 屋を目 一發す、 駒 登ら P あ 17 邊 宜 10 顧 n 見 0) 御 岳 ども、 L な 南 C 神 頂 L W 岳 U Ŀ 2 黑 n 掛 霧 7 7 は 1/1 7 乘 社 ども 駒 鞍 迄 所 百 H 0 12 归 す なら 14 0 12 清 最 合 切 恋 春 3 等 本 里 頂 出 早 水 0 花 問 の拜 近 \$ から 年 + 玄 あ 0) 麓 崗 か た、 15 日 す 0 八 仰 數箇 未 枯 岩 本 か 6 12 見 は 間丁 82 だ かい 其 葉 間 0) 2 7 登 まふ ٤ h 所 登 磊 12 n 等 12 0 3 \$ 醉 とし L 落 路 攀 寶 プ 5 方 20 あ 4 狂 者 傍 3 T 6 積 1 た 劍 ス は な せい ス等を見 たが あ 3 大 5 0 12 から 岳 0 V 見え た急 3 甲 湧 所 連 5 ば、 坂 雲 と勇 12 計 出 を 宇 角 巒 なだだ 12 斜 12 點 勝 5 て 都 لح V る、 3 様子全く 3 包 0) 面 木 赤 から T 6 を滑 廢屋 女 越 あ 居 間 氣 岳 知 石 るかか n 桑 L 頓 42 6 Ш 0 り下 12 て、 畑、 と云ふを T 1 直 及 系 2 無 淮 靈 下 75 0 茶畑 5 見 雲嶺 思ふ 神 人 今 苦 T す 此

0 0

碑 廢

0

屋 時

此

F.

本

七 岳 朝

は

此

水

は

1

方

17

流

n

行

<

如

何

51

4

登

山

路

6

L

V

0)

T

此

n

は

道

か

1

問

3

雨

春

沂

かっ

5

來

ると此

處

12

出

V

暫 思 3 +

勝

3

办

0

な

b

平.

加 Ш 0 登 b 北 Ш 跋 涉 記

大 平

晟

越

百 萬

寢 + き裏 覺 時 + 0 六 町 Ш 九 H を かっ 分 午 貫 月 前 3 悲 射石 水源時 十二 111 起 T 0 床 3 時 鐵 片 橋 北 町 俱 空 大 線 利 渡 浦 flm 5 12 屋に より 羅 峠 小 投ず。 を南 杉、 7 高 金澤 12 望 岡 市 石気に 津、動作至幡をる 過 を 經 n 同 70 車 + 程 * なく 停 **分、** 車 金澤 坂 場 路 12 17 12 馳 着 かい す 1 5 車 直 は、 + 5 九 12 時 時 腕 Ŧī. 車 + + * 分 17 6 發 苯 仲 慐

此 備 地 は 高 岡 6 は 0 富 商 尤な 業 Ш E * 距 0 活 3 Æ. 動 里 は + 富 八 Ш 町 30 凌 人口三 3 銅 萬に 器 0 餘 名 產 3 は 海 北 陸、 內 12 中 鳴 3 越 , 兩 公 鐵 袁 道 の変叉點に 射 水 神 社 12 於け 當 6 3 立 Ш 晴 0 學校 眺

12 對 津 幡 す は 小 附 近 都 紅 會 白 な 奸 れども、 を競 河力 河"と云 3 蓮 花 郡 0 衙 夥 0 しきを見 所 在 地 51 3 て、 七 尾 線 0 起點 に位 東 0 方 礪波 山 脈 を挟み、 越 1 石 動

樂園、 澤 共 13. 12 舊 尾 B Ш 本 3 = 稱 公 L 園 0 日 本 稱 あ b 0 大藩 人 П -j-前 萬、 田 氏 北 H 八萬石 陸 都 會 0 0 城 覇 T 12 72 6 して 其 Ш を距 公 3 園 --七里 16 水 万 0 偕樂 園 窗 Ш 0 後

Ш 直 難 浦 17 発 高 車 旅 屋 舍 は 11 Ш 式 向 12 當 は 狹 14 H 甚 地 L ならね た 第 な 室に 6 不 _ 流 適 當なれ 世 道 ば 0) 舍 旅 か 蓙 人の 館 n 17 菅笠 3 21 ¥2 氣受頗 L 唯公 1 豪奢を街 肩 る宜 園 電 12 燈、 は * L 野 ム身分なら 覽 電 かっ 宿 らず、 鈴 5 道 るに位 具 8 電 唯 擔 話等 83 置 山 人 U 近 車 0 設 立 42 無頓 T Ш 備 勢よく 且っ 0 は 着 泥 1-曾 ・分なる は 染 て高 固 駈 12 T 1 4 込 Mi ð 3 交目 N. A 君 雜沓 主 0 L 宿 義 功 8 な 德 分 泊 0 老 か 5 12 所 よ V2 .72 衢 6 17 程 6 なく 介 衣 L 僅 袴 緣 在 乘 かっ 12 8 穿 馬 17 1 謝 3 予 T 噩 士 絕 3

來

17

ず

着

官、 + つら 郎 つら娑婆の 君 8 來 10 L 訪 て、 せ 風 3 今は第三十 味 1,2 3 會 威 L C D. 舍 五聯除第三大除副官 X 士官 0 狼 は 狽 誰 2 方ならず、 曾て を勤 我 校學 座 敷 むるもの 12 窓 換 0 は 下 5 な 6 寄 C 優等室となり 宿 含 0 內 師 弟家族の生活を共にせる 子 0 21

就 巧を見 晚餐後穗刈 る てと能 君 の案内により、 は す L 7 唯 樹 林 銀六公園の夜景を探 0 幽邃を 認め 得 た る、 3 10 電燈の 却て 數疎 勝 n 12 3 当 L て、 0 普く園 如 歸 内 を照 途 勸 商 4 12 場 足らず 3 巡 人工 寢 0) 精

+ t H Ŧī. 時 起 床 問 \$ なく予が 荷物を受取 るべ 1 穂 IIX 君 0 馬丁 楽る、 今夜は、 穂刈 君 0 厚 意に 1 3 黄

舀 せ 午 0 る白 必 前 衢 * 九 避 Ш 時 細 手せんと答 10 H して 雨 閉靜 3 犯 未 L な だ る其 50 其 書 肆及諸 繪 寓 居 葉 書 53 宿 0 店を歴探 即 泊 すべ 刷 存 しと せし < 約 は、 36 せし 金澤 白 な 山 50 市 0 給薬書は 民 0 恥 唇 1116 12 あら L ٤ V P ふに と痛 加 告 人 が天下 4 12 ば 0 名山 彼 等 は な 沂 4

然官 に第四 館 聞 きし 內 衙 時 兼 高 北 12 學校 等 國 室 t を設 學 新 礼 校、 0 聞 5 陳 社を訪 石 冽 河 場 V 縣 た 21 カン 5 廳、 な今は廢絕 機上に於 警察署、 廣 坂通 て、 0 L 右に市に 衝き當り T 跡形 記 者 役 12 \$ 10 所 會 AIE. 談す L と云 即ち兼六公園とす、 師 る 範學校、 一十分、 公園 兵器支廠、 12 本 向 脏 ふべ が脅 園 < 内入 第 て白 4 口 踵 Ш 學校、 を返 17 登 Ш 會 石 11 I 3 T 一業學 廣坂 組織 縣 勸 業博 校等 通 せ を してとあ 物 貫 あ けば 館 5 3 左 宛

H 烹 12 公園 0 包 東 は は 勝 CI 部 * 17 以 翠松之 脏 T 市 然 炎 0 ね 東 暑 12 12 部 3 n 0 12 苦を洗 映 小 F は、 す 立為 碑 3 野 あ 白 ふに 0 河 F. 樂 春 1 足ら 其 翁 色 12 公 は、 在 5 明 0 h 治 命名せるも 以 徑約四 園 T 紀念之標 爱士 は前 0) 町 田 0 齊 情 を解く、 萬二 なりとだ、 廣公の修築 の六大文字は T Ť. 4 A 霞 坪 12 穆 なりとい カ、 5 池 有 林 1 蓊欝 は 3 栖 周 III 宏大 とし 宫 巴 ば、 約 熾 \pm 地を蔽 殿 百 幽 面 間 積 F 餘 0 御 福 U 3 壽山 Į, 廣 筆 噴 かっ 12 水静池 蒼 かい は らざる 古、 眺 望 5 佳 多 12 水 泉、 迸 櫻 上 な 花 12 3 朓 0 H 朝

0

平

本 武 算 0 御 銅 8 7 0 像 高 丈 八 B 5 と云 西 南 役 戰 死 者 0 為 £C 建 T L \$ 0) な h

3 喇 卯 叭 袁 辰 0 0 山 罄 四 叉 北 は 臥 53 龍 遊 隣 Ш 7 ò * 0 T 稱 L あ T 石 6 垣 1. 武 0 を忘 高 E 1 杉 n 存 ざら 謙 信 は L 公 0 U 即 陣 址 東 5 5 北 尾 な 0 11 す 方 城 址 頂 \mathbf{H} 24 疇 Ŀ L 3 12 = 隔 角 2 今 標 3 は あ + 第 町 九 6 許 師 12 專 0 司 部 1 F. な あ 6 5 向始 山終 聞 5 呼ゆ

泉野 12 17 1 打 篠 n 起 時 3 L 木 方 あ 穗 12 西 3 IIX 洋 は 投 君 料 す 0 專 理 案 B * 內 地 筍 賞 は 17 味 0 茂 1 L 收 林 6 穫 修 0 を圖 竹 兵 營 0 征. れ 裡 內 露 3 12 * \$ あ 巡 0 實 0 6 競 12 即 T L T 實 談 に年 12 將 末 閉 校 將旣 静 集 72 12 を 會 美筍 百 極 所 席 U 12 を 0 於 下市 附 T 村 場 近 茂に 0) 茶 不 出 菓 君 35 1 宗 0 快 響 7 竹 話 云 は 17 12 あ 數 0 時 此 + か 夜 0 EIT 移は 北 3 君 12 午 3 から 日 後 恕 知 5 君 篤 0 な 林 寓 1 所 綺 配 大 麗

手 取 0 m 畔

r 面 \$ 岐 痊 17 -1-0 路 8 方 八 3 6 0 L H 標 六 所 T 柱 な 時 沂 12 1, 松 起 鄉 林 床 か 欝 0 附 人 12 近 蒼 八 かは 4 た 時 易 3 前 + 道 田 小 分 亦 家 丘 穗 2 所 あ XI] 記 丸 有 ò 君 1 せ 地 0 る か _ 野 寓 * 和 1 田 所 怪 肥 7. Ш 8 は みせ لح 辭 3 L V 之を 若 竹 諸 ば 82 柱 頂 林 星 X * F. 0 見 Ш 12 0) 裡 質 3 墳 3 こと 呼ぶと聴き、 L 慕 貫 は 金 多 し 澤 て 鶴光 れ 來* 市 人 藩 街 5 17 祖道 n. 高 12 自ら まて 德 出 院 て、 必ず 金 殿 澤 前 南 * THE 行 かっ 相 Di なざは 桃れ 雲 12 3 居 は 士 左 _ 0 手 7 清 0

力, 時 -1-分 路 右 12 式 内 額,類 れ東京る 神不概 社 7 刻 せ る 方 社 18 認 8 T 1 趙

訓

T

~

71

込

2

L

は

世

間

通

な

6

L

3

悟

6

年 5 高 T 夜 頭 51 君 力 於 H 1 容 臨 3 6 f 下 紹 好 村 3 介 白 世 君 Ш 6 10 0 容 Ш 話 5 1/2 道 t 17 倉 n 於 6 4 嶽 口 it 3 3 澤 最 左 名 終 方 4 物 0 12 HT. 町望 0 0 とす みつ 片 らく 1 \$ 烟 + 6 歷 h 草 及時 問 * 麻 = 3 逸 3 + 始 L 產 分 72 古 3 る館 H. 8 來 E 2 後くと 12 悔や夥 着 す、 T 办 漸 松等來 度 任気は は \$ 此 此 1 地 馬 方 地 2" 車 0 0 3 名往小 來都 坳

12

然種末し

た苗

3

旅頗

舍る

軒

あ

3

0

4

子

隣

室と

12

陸

町

國に

府

松

V

3

Ĥ

山郎

参に

品

者

す日

吉

野程

の七

入

口と

郊

外

に白

は山

石

川神

縣社

第

模道

範

林れ

業

場

あ

T

0

のと旅

美

きを

見る

吉同

野宿此

V

^

地は

五時

野

着

舍

石

H

勝

次

投

す

0

行

里

す

比

咩

より

連

とな

金

澤

中

〇加賀白山の表山登り 大

平

B ます 産す 村 との は 3 か 尾 吾 * 各 は 0 か 不 與 明 L' 1 51 0 か 茶 加 な 6 屋 6 3 12 3: 12 乘 附 話 į٨ 頭 み 方 加 言 す 12 3 訛 \$ 17 言 5 夥 至 * 0 L 6 廿 1 T 添ふること、 養を菜とし は ど言 嬌 7 語 富 不 co て、 誦 13. Ш 0) h 金 澤 t 所 飯 6 地 あ 方 喫 6 寧ろ す と云 般 耳 0 風 曈 智 6 17 堪 12 2 L ず、 T は 殊 其 手 12 御 取 町 富 0 尶 山 清 過 附 3 きる 近 石 0 In

8 るを 賣 あ は L m ず 5 は とせ 創 下 風 炎 T 0 始 致 甚 見 暑 は 時 子 L だ te す 頗 12 拜 吹 0 3 堪 ĺ 女 殿 長 ば 國 3 かっ 12 0 + せ 露店 き第 壯 神 12 幣 來 ^ 分 1 1 6 h 登 難 麗 鶴 壐 小 6 な あ 門 昨 8 0 社 5 T 訪 來 白岁 捺 6 往 1 6 4 H 42 は 0) 古は 撥 EII 謹 C 茶 は 山节内 偶 'n 鞠 祭 と欲 此一外 此 を ね 1 河 屋 菓子 受 禮 典なり 地 越 0 躬 咩 * O) 畔 8 H は H 拜 凉 す 0 如 神 柳 發 を遂 白 國 V2 5 とし 社、 3 味 樹 L 白 灣 L Ш 0 n 12 0 T M げ な 0 -本 H T 明 威 F 山 郊 歩を 開 0 社 5 治 す 1 外 6 祖 宮 傍 は 2 3 ò 甜 17 南理姫神, 17 移 深 發源 泰 0 白 + 歪 瓜 澄 七 L 社 皇 す Ш 3 n 1 灣 族 办 務 T 0 年 せ ば 3 所 下 第 神 八 5 同 失語 門 四 手 白 白 を 12 乘 月 を \$ 右 祀 取 Ш Ш 新 就 12 建 方 + 0 4 容 權 6 3 0 は n あ 111 數 Ŧī. 気附き 躋 現 標 3 3 丈 分 12 叉 巨大 本社 と刻 0 0 相 札 を L 祈 は 殿 本 12 YII] 認 7 崖 0 願 Ĥ 接 12 社 3 L 內 下 8 老 素 * Ш 伊 拜 0) 村 5 8 L 獎諾 戴 凝 明 緣 傍に T 櫻 通 大 早 1 掠 そし 神 起 は 5 字 速 t L 0 U 3 1 數 蟠 17 三类岩 6 \neg 3 と申 所 清 称 伊 葉 宮紅上 始 Ш 12 せ 八 獎 な せ 讓 人 3 h 月 + 42 終 流 0 6 5 111 あ + 子 L 5 \$ 2 郊 踞 17 と云 3 入れ 受け 忽ち との から 二神 5 Ŧì. 外 L 接 路 H 17 T す を合 笠と莫 之を T 境 伴 た + 至 之を L 内 畏 六 2 0 n 2 祀 12 月 ば、 甞 な 社 n 12 と申 蓙 は 得、 3 殿 L B T 3 子 とを脱せ H 191 路 n 8 办 杉 崇 込 且 近 n 祭 左 ば 0 百 櫸 ば 年 胂 2 め な 50 里 茂 紀 ば 2 0 天 高 習 0 皇 念 新 8 路 次 揭 4 七 第 0 3 た 示 石 此 を U 年 72 販 を 登 せ 遠 3 日

測 花 偲 員 0 ば 陣 1 取 U n る 5 3 とも 聞 3 優 美 例 0 名な 15 より n 天界 E 生 其 0 雷 村

75

名 物 此 0 地 山 豆 51 間 * 腐 は 宿 8 吉 泊 L 註 野 0 文す 0 便 + 宜 景 n 12 ば など \$ + **分、** T 其 V 固 7 ~ 32 子 3 为言 鄉 21 勝 品 與 或 米 あ L 評 Ш りと聞 名 判 頂 刺 上 12 8 17 3 8 見 於 勝 0 n n 12 T ば 知 測量技手吉 規 とな 模 0 6 甚だ小なる 村武 測 量 雄 部 7 ~ 員 きを あ 0 村 臆 Ш 頗 斷 唯 3 -快 氏 探らん 0 男なり 氣 出 6 出

と云 を示 Ŀ 泥 板岩を 婦 0 せり 30 摸 九 H 男子 見る な Ŧī. ど質 尾 時 添 8 起 問 連 程 JI 床 な は す n < É 栗山 Z 時 中 宮溫 0 0) 7-北 大 t 分吉 泉より より 樹 6 漸 0 發 5 野 下 源 谷 歸 圣 狭 出 石 L n < る 標 發 \$ あ 弦 L 0 5 12 八 T 17 時 郊 -手 = 外 逢 右 人 4 取 十分 12 111 首 於 尾サて 中宮 道 0 本 添り 左 は 流川 金澤 牛ッの 尾 11/1 首的 宫 商 添 業 111 川橋 道 學 即 12 * 3 白 生 沿 渡 山n 74 刻 U 遡る 111 ば 人 す , 0 53 偶なり、 標柱 2 偶 白 Ш 生 あ 里 釣 5 I 0 橋 T 許 人 6 な 附 歸 浴 n 5 近 石 客 3 2 12 111 數 17 は 能 白 暗 美 逢 五 黑 0 N あ + 色 郡 界山 0

12 道 L は 九 時 始 T 終 + 女原 4 滙 Ŧī. 省 渦 分チ まて 11 0 女子 奇 原分 * は 縫 觀 0 南 人 頗 \$ 激 3 郊 可 0 流 12 奔 出 な な n 逸 12 づ ども 3 0 n 壯 は , 槪 觀 女原以 12 3 灰 其 白 右 色 す な 南 岸 3 所 せ 12 る 沿 修 危橋懸 花 ^ 5 崗 , F 2 岩 5 は T は 4 對 せ 首 手 5 岸 0 8 0 取 經 Ш गा 逕 4 谷 12 21 峠 通 散 3 Ľ 點 越 L 之 頗 盤 3 佳 越 石 前 峽 は 勝 河 な Ш 床 らす、 12 1 出 6 2 づ 兩 3 崖 t 17 b 道 日

h 時 甲 + 半 Fi. 分 深 瀨 0 茶 屋 12 T 喫飯 午 後 時は 四 + 五分。 からに 首に 層 海 拔 約 六001 尺) 永 井 太 平 方 17 投 宿 吉

首 僻 戶 今白峯 8 廈 錙 高 す 冬季 村 然 相 12 12 屬 此 率 及べ 1 1 20 抄 T T 市 ば 節 全 相 を讀 品 村 聳 12 積 文 万 數 せん 出 雪 一家屋 白 て、 約 3 壁 * 百 食 0 0 埋 は を 倉 乞 沒 m 庫 直 U 1 T 5 4: 融 概業を 北 首 雪 寒 實 0 0 村 漆 期 營 12 之が 装 貧 U 民 2 再. 簄 相 N F 映じ、 擘 0 Di. 能 極 は 村 72. ず を す 6 想 高き 3 を 故 誌 は ざる 板 常 12 * を按する 屏 とす 細 \$ 0 民 設けまであらん は 0 あらざるべ 金 屋 12 澤 F. 竹 4 竿 首 脳 井 3 は 邊 建 極 12 8 T 1 深

础

礫

壤

落

せ

L

所

屢

速

成

0

棧

橋に

接

す、

此

邊

亦

盤

蚰

虻

0

見

舞

12

あ

0

Do

5

應

接

頗

3

惱

U

九

時

桑

島

17

於

1

路

拔 此 地 F 近 餘 來 尺 養 0 % 谷 0 業 峠 * 頗 隔 3 盛 0 3 12 勝 木 Ш 羽 地 方 板 12 0 仰 輸 ぐと云 出 亦 3 4 住 民 裕 0 狀 す 3 51 足 n 5 旧 飯 米 は

例 0 棟 Ш 諺 0 岸 倉 12 + は 庫 郎 違 相 右 は 連 衞 30 門と 3 300 門 V 側 3 12 は 名物 當 地 信 0 豪 濃 柿 族 17 ٤ L 書 T せ 3 壯 招 大 な 牌 あり る黑 門 試 3. 2 設 17 け、 袋を購 入 せ 階 L 0 12 土 藏 豆 造 柿 0 É 一聖之を 乾 製 12 飾 L 5 て

午林 後 西 74 寺 時 12 頃 は 墼 曾 T 析 白 の聲を 山 頂 上 聞 4 51 安置せ 之を含人に質 3 + せ 面 ば、 觀 世 音 書 を納 夜二人づく、 Ų 向宗 火の番を設 12 屬す。 け、

始

終

巡

るも

0

な

白山溫泉

溝を馳 然 2 此 + + 分なり 12 す 地 B 3 畫 A は 中 は 家 3 0 H 仙 正 本 增 12 万 路 な 小 は 0) 寢 6 牛 尙 深 覺 首 4 雪 床 111 首 地 0) は 111 4 觀 iz 省 あ 幅 沿 * 5 N 辭 T Ļ 平 + 峽 岩 間 谷 白 Ш 0 12 名之より 入り、 長 溫 數 泉 町 12 < 12 向 起る、 字 丑 2 12 形 る、 0 板 藤 橋 橋 灰 未 白 * あ 明 5 色 渡 荷 T 0 n 物 對 花 を は 岸 崗 幸 岩 17 程 便 懸 な 10 1 n 托 3 45 L 面 所 岩 0 'n 17 輕 着 樵 床 裝 出 夫之を * す な 發 Ļ 時 せ 渡 12 1 3 碧 八 は 水 時 لح 床

泉に 17 10 を 1 1 E 傍 岩を 伴ひ 來 6 0 L 小 見 所 餘 謂 旅 地 子 3 立是是 客 12 8 相 は 前 亦 な 面 る 叉 後 白 0 * # 山 1 b 記 知 窟 3 8 12 氏が 繙 小 3 3 石 玉 れど 談 佛 蜀 黍 話 * 相 12 笑 安 0 岩下 まれ 栽 L 培を見る ば 清 客 何 泉 物 は 迸 吉 第四 3 0 野 出 戲 + 高 葉 17 胡 景 等 などとは P 0 與 麻 校 文 12 _ 飾 12 教 似 滑 T 3 員 大 蝙 永 誇 稽 井 を極 15 蝠 張 静 1/s 橋 亦 淡 は 雄 U 黄 氏 甚 色 12 だ 岩 頗 な 長 3 L L せ 雅 T 1 + 子 3 趣 間 穗 が あ 白 幅 狀 3 Ш 評 八 花 間 17 す 登 許 軸 云 n 0 30 る ば 岩 CA \$ 偶 T 子 H 0 17 涌

○加賀白山の表山登り 大

平

大

平

25 12 3 農夫 15 問 北 海 道 栗なりと答ふ、 麻 0 栽 培盛に 屋 桶 を 用 N 其

赤岩 * な過 蒸 古 专 多し 橋を渡 6 左 溪 12 入 3 2 小 許 市子 瀬七 12 達 す、 時 21 + _ 時 + Ŧi. 分 7 क्ति 瀨 は λ 家 僅 12 八 万

其 入 極 111 首 3 郊 外 の上 3 知 t 探 U 柳 b 22 ٨ 温 0 予 流、 約 ば 谷 度頗 から # 74 111 學生ら 湯之里 室 天 51 然 3 は 高 比 せ 川市 瓦 斯 る L 較 0 瀬 L 3 左 1 5 的 喧 此 無邪 廣岸 出 Ξ 温 (八 連 所 泉は始 町 弯 氣 狭き溪谷 12 とす、 狀 先 L 0 して、 \$ 客 0 終溫 柳 0 稲 井 無人 橋と 51 白 人、 度に 位 縣 Hi 人 温 0 5 縋 屢他 海 泉 2 は、 道 鹽 屋 * 化 性 あ 室 あ 渡 治 叉市 より 5 泉 5 n と云 郎に ば 來 氏(坂 屬 4. 瀬 す、 游 溫 左 泉、 方 せ 時 井 5 四 0 郡 階 或 溪 + 鶉 同室者 造 12 分 間 村 單 0 白 12 其 旅 小 12 Ш 湯 溫 平 0 弟 舍 案內 本 妹 泉 地 戶 ٤ 12 1 あ 稱 共 あ 着 17 6 Ì 51 5 L L 釣 6 入 浴 薩 橋 直 湯 海 客 摩 拔 5 0 0 數 約 仁 飄 12 72 太 搖 屋 8 白 干 人 外 滯 郎 12 七 3 留 方 0 ð せ 塡 12 8 共 3 溢 投 踏 同 浴 あ 雜 す 4 5 牛、て首牛之 槽 17

尺 角 灭 附 標柱 然ラム 近 12 涌 12 ネ は 出 せ る 左 0 0 稱 炭 文字 酸 空 冷 からず、 を 泉 あ 5 せ 6 水槽 所 Fin 白 12 貯 嶺 藏 水 L 即 是なり 常 12 は 鎻 溫 泉 綸 場 を 入 施 П す 17 就 白 T Ш 神 飲 す 社 出 3 張 17 事 務 收 所 歛 あ 性 甘 酸 高 味 著 **丈**許 L

國 幣 小 社白 Ш 比 咩 神 社 奥 宮記

宮 加 賀 國 石 111 郡 河 內 村 鎮 座自是 + Ŧi. 里

自 是 奥 宮 里 + 六 町

紀 念捺 奥 宫 即 は 白 3 求 Ш 8 頂 J: 觀 0 宮 覽 な 料 + 6 錢 -8 頂 Ŀ. 8 0 室 堂 觀覽 ic 券 は 神 職 出 觀 張 覧 せ 料 ず は ٤ 0 てとな ち 登 山 n 料 ば、 な 6 0 當 地 0 事 務 所 17 就 繪 葉 書 15

納 を受 即

0 化 市 瀨 石 郊 沙 三弯 泥 橋 板 1 岩 5 中 柳 12 產 谷 す 111 るを以 * 溯 n ば 化 溪間 石 谷 Ш 一葵を 0 稱 產 あ 5 す 3 1 本 Ш 6 13 天 城 ワ Ш サ r. 共 -42 谷 Ш 0) 一葵の 稱 あ 良質を以 又介 T 殼 著 及 10 CX 3 植 物

九

四 白山表登り

天微 12 碧空を 2 < 朝 四 漏す 之を包 時 起 を認 床、 み 飛 浴 斷然 震 0 群 後、 攀 1 登 3 0 劫 模 進 L 備 8 T * 候 なせば、 2 候 17 , 頗 昨 る 衆 不 夕 皆之に 穩 は 京 狹 き峽谷 n 應ぜ 50 登 0 間 Ш より 0 志 願 者 僅 かい 皆 12 認 躊 躇 8 1 す 白 予 Ш H 0 本 海 角 \$ Ŀ 0

峯 以 0 4 H. n 越 主 0 0 前 Id 白 判 路 Ш 加 然 一一一一一 頂上に 51 智 登降 はな (1) 諮 方 72 登 3 面 别 大 6 籠 12 郎 野 路 は 城せ なる て、 郡 唯 本 3 DU 路 取 石少條 20 らん 易 岩 があ 徹 裏 12 Ш 白 0) 0 L 山 * 獵 越 \$ t T 得、 のは 林 夫 Ž 6 加 調 仙馬なる 0 迷 賀 L 案内 查部 金澤 ふべ 市 飛驒 尾 瀨溫 くも 四 者 0 添 を得 人 高 \$ 路 泉より 大 大きを借 あ より 野 0 0) 永 £, 1 郡 5 す 井 は 登 平等す るべ 氏 3 心恃 6 潮世 等と 甚だ 平 より ない 1 瀨 4 市 困 共 12 する 南路 路 瀬 難 は 豫 同 路 來 即 算 5 な を降るを 的 せ 案 L 5 飛 表路とし、尾 17 i 內 2 驒 裏 ぞ、 とな は、 方 路とす、 面 折 可 とす 心 せ 惡 豫 12 細 5 1 L 12 添川 尾添 < 3 T \$ 限 され 案 聞きつる 市 12 內 瀨 6 路 沿 ど此 者を なる 彼に 路 は Cis は 稍 尾 支障 所な 近け 者、 得 Ш 添よりするを北 選とし 3 n を生 は \$2 ども は Ш 路 比 * 之を牛首旅 較 辛 的 知 甚だ急峻な 頗る易 ふじ 容易なる 路とし、 1 白 舍

そ 流 臨 プ 12 峻 み あ 此 柳 n チ 水筒 0 5 谷 日 毫引 1 時 Ä 111 秱 好 あ 12 Ti. Ш より 藏 + 3 常 せることし 分 容 梯シを 帶 温 せる峯脊 頂上まで水を得 の列に 感 圣 泉 坂 ぜざり 小場を出 を攀 施 加は、 3 C 5 勉 發 は、 單に 6 L 25 L 雜 T 直 + は、 至幸 行 社 東 顏 分 L 51 間 程 弘 との 務 永 なり 洗 出 進 を 井 み、 輕 張 2 てとなれ 11 氏 ti 3 减 1. 所 0 より 同 0 1 0 み 构、 TU 侧 रा は 攝養 なる + E Ŧī. 立 1 楢 及 一分 神 か 怠 Ш 衆皆 華 等 海 5 穪 表 0 ず、 名 一飽く 4 喬 道 宿立バ 木 瀧 潛 氏 以 7 120 12 ò 0 達 ネ T 35 弟 於 4 飲 ズ 本 け 15 直 3 橙≎山 み、 君 5 坂"跋 12 此 等 予が 涉 急 間 E. 0 例 木づの 坂 針 0 0 7 壜に 呂"脚 E 葉 膝 12 無 關 力 邪 " 樹 坂 か 4 IV E 汲 氣 相 節 1 なる、 サ 交 を 祈 打 取 6 は 經 傷 る ウ 1 L は あ 6 Fi. が 5 八 町 才 時 途 學 ホ 左 12 中 3 12 4 湯 9 始 7 + は、 L 愈 炭 谷 Ŧī. 終 T 酸 攀 數 Ш 登 冷 力 小 右最に 2 泉 溪

1

大

攻.

12 7 力 E は 最 杏 能 V2 11 ī 即 時 5 12 É 花 宮 紅 なり 實 2 す 目 を 引 け 6 4 宿 12 は 古 堂 败 壤 0 跡

予予ので式 由 語 等 は 老 分 0 石 清 6 12 剃"别"時 V2 次 刀岩 111 JU **窟(を**に *東 + V 开 + T * 此 七 歩を 南 邊 與 八 休 憩す 1 0 17 CA 淮 1 眺 尾サに 6 屢 女 8 0 立 3 永 井 E **鉴上** ち F 0 5 高 氏 Ш 共 12 老 女 0 は 51 客 幅 至 人 寳 休 は は 丹 n 17 孙 始終狭き峯 4 it 丈 ば 逢 越 出 餘 前 3 から 0 5 0) 岩 等 8 携帶 蓋 0 小 洞 12 女 角 内、 前 を一上一 0 點 夜 T せ あり、 る 亦 頂 V 壜の水 老後 たく 小 Ŀ 石 12 宿 佛 0 疲 名殘 を安 など給 n せ T, 雞;十 L に、 す 冠"九 3 岩 年 顏 0 L な 色 七 此 此 6 度 共 青 茶 洞 月 第 12 3 內 釜 陸 登 潛《地 附 め 風 るべ 已 雨 測 近 な E を凌 冷 3 0 量 登 < ラ 部 汗 V Ш ~ 皷 玉 なせ を 3 1 舞 15 A 試 せ 足 書 3 15 4 L n 怪 せ 12 そ 5 岩 E 3 其 氣 「季女をは 彼 0 大 樹 前 3 ラ 毒 12 51 伴 喜 CK 同 3

壞亂 南 宿 密 泊 7 I' + 雲急 ケ せ す 時 ウ 3 3 四 v + 材 者 + 1 12 襲 あ 分 ブ 木 2 慶イゴ CA 12 3 松 來 踞 ッた。 7 L 平さっ 2 6 し、 \$ ザ 7 荒 今 中ガチ ウ 0 白 城 は 室 11: 即 全 に"ナ 雨 0 花 達 あ 0 月 す、 なら * 疎 破 6 見 壤 是 3 3 L V2 蒙 T 即 慶松 雲 5 L 問 用 \$ 室堂 をなさ を 漏 程 21 3 なく す、 L 1 て、 日 歇 光 此 み 0 處 市 C 下 沮 瀨 51 溫 洳 陽光 0 泉 竹 t 平 は 地 6 0 屢 皮 51 本 飯 L 山 4 頭 取 頂 T 上に至 Ŀ 6 細 を 出 溪 照せ L 流 7 る、 あ n 腹 拵 途 沮 稍 彻 な 1,0 位 せ 0 ば 地 発れ LI V 前 ず

益 2 度 n 知 笹 to 縮 削 原 谷 L を 調 1! 立 T 7 0 貫 き十 支 せ 灌 る 流 木 雌 帶 品品 時 赤 谷 な 大 12 踞 + 111 b 分 勝 0 別當 瀉 岩 T n 下 面 右 坂 せ 21 3 は * 手 經 0 1 代首如 n 溪 0 問 な オ は 54 仙 6 F 懸 +" 人 指 12 IJ 篇 3 サ 尾 あ 以 布 ウ、 6 Ŀ 引 槪 瀧 3 暗 \$2 8 t 褐 望 色 屋 7 根 T .7 0 富 4 メ 士 辿 高 7 數 岩 サ、 -1-+ 文、 眼 110 界 砂岩、 ナ 豁然とし 1 7 段を 蠻岩、 7 な T " 化 錯 頗る 等 あ 0 壯 装 觀 飾 樹 なり あ 立 木 Ш

喉

なと

所

3

12

12

3

\$

御事の

古た

畜

生

谷

0

濕

地

窪

地

12

至

n

は、

な

イ

E

1

3

サ

ウ、

7

П

7

E

サ

ウ

1

1 フ 1 + フ ŀ ウ ラ U 7 3 等 7 8 7 觀 + 3 1 * ウ ゲ、 ウ 1 15 チ サ ウ、 31 ラ E ゲ サ ウ 即 白 山 撫 子 7 17 カ ラ 7 ウ 1 + 又 カブ サ サ ウ

か 紅 崇 分 高 カ 彌 白 ラ 敬 稜 サ n Ш 一紫黄 ウ 御 陀 4 1 時 = す 12 花 4 no ŀ 3 + 原に 3 サ 畑 才 7 ++ 0 所 Ŧī. + ウ 石 + 0 孙 達 大花 礫 路 7 7 1 周 す。 ŋ 圍 " + 20 積 右 IJ 2 L 7 氈 は 12 異 ガ 3/ 2 サ L は 殿 樣 ゥ サ サ 1 T 山 ケ 17 ウ ウ は 見 7 池 15 -ウ 堆 3 渡 1 あ 恐 す 積 + 1 7 3/ U 5 せ 7 ラ < 限 サ 7 縱 3 IJ サ ネ ば > 1 6 蛇 ニン フ 1 殆 展 = 間 ど比 塚カダ サ 開 ウ 3 1 横 ウ 1 U モ 3 14 及 な +" 才 問許 CK 3 か 快 A 3 立ダウ 6 哉 ラ 1 1 7 1) 髪ガヤ IV h 0 ネ 1 小 20 聲 7 7 3 -7 = 池 Ŧī. IJ ウ 1 は 1 なれ > 見 色 + IJ 3/ ジ 苏 彩 12 E 2 3 3 芳を衝 を以 濱 ウ 7 17 7 3 など、 テ 5 入 之を汚さば、 " サ + 17 5 T 110 5 17 緣 3/ 1 T 7 名 主 どれ 2 ウ 木 な ば 7 " Ĥ ナガ 13 3 か 3 术" 7 Ш 6 の拳 5 \$ 暴 3 nº t 程 奇 ウ + + 0 風 V なく 雨 は 51 しき所を過 1 V 110 轟き、 等 0 + " 御 とす 難 1) : 3/ 花 ありとし 2 ガ t 3 畑 湯 六 ウ 水 7 の大 30 谷 カ 10 ガ ウ 0 7 1 傾 午 JII 3 1 ŀ 斜 後 3 IJ 1) 1 に響きぬ 地 信者 t + 力 17 , 時 ブ 12 3 至 1 7 丰 1 3 I 7

前艺 間 あ 偃 6 松、 即 岳 彌 彌 室 0 堂 陀 爐 0 7 白 陀 裾 * ケ 3 石 Ш 5 出 野 原 楠 3 1 原 な は、 ネ 發 L を カ は、 貫 せ T. 5 10 11 3 小 y L 3 V とも 甜 平 海 は 拔 喫 0 偃 0 1 飯 盡 低 約 棚 松 1 12 時 地 +" 1 七千 < あ 匍 3 + 12 + 敷 分 愈 所 匐 らざれ t 八 とす、 4 V ウ L 百 室堂 本 尺、 る は、 Ш Ŧī. チ 7 絕 路 あ 葉 111 火 1 ッ 巔 坂 1 Ш は 5 170 * 3 w 4 灰 カ 直 サ 5 極 登 1 0 --7 サ 7 12 時 n 堆 U 急 5 Fi. " ウ 積 勾 + 0 ガ t 分室 第二 葉 ザ ガ 配 6 成 17 は 1 イ 7 堂 ラ 0 n 力 Do 3 ウ かっ +" 12 平 + 著 5 投 L 高 牛 地 1. 7 1 12 點 1 原 縮み 出 0 偃 ウ 綴 17 陣 例 松、 づ、 2 黄ば €, を 0 之を 貫 偃 風 2 石 感物俄かに つき登 方約 サ 松 楠 榾 1 御士 半里 n ナ フ 火 前さ ば ナ ウ 0 平岩 變じ 如 12 烟 カ U 叉? 1 12 昨 v 0 日 室里 F* 重 密 6 平管 布 圍 隨 喜 ؛ ع 17 仙 黝 7 岩 陷 雨 7 0 稱 境 を胃 淚 n 12 殘 崔 3 3 入 雪 鬼 1 L 流 即 斷 3 0 ち 0 粮 間 L 據 0 御二 0

0

み

51

\$

あ

6

ざるべ

相

傳

3

養老三

泰

澄

大

師

本

Ш

嶺上

10

T

鍊

修

0)

際、

碧

4

池

17

7

-

_

面

糖

世

音

*

拜

L

别

山

17

登

大

邓.

6 3 趣. 0 凍 死 せ 3 は 此 邊 な 6 導 者 郎 站 指 L 語 n る 15 强 ち 圖 力 0 功 德 と 路 3 せ 嚇

經 彼 するも < は 費 大小 男 前 宮 岳 T 亦 神 圓 < 妙 12 便 0 厚き安・ をなす な 此 华 を要せりと云ふ 5 は 腹 を高 女神 Ш 社 岩 天原と云ふ、 8 室堂より 側 54 祀 0 石 n 明 るを 治 垣 * 社 大 約 + 想 繞 內 + 神 It. 路 宮と は せ 12 町 车 とす、 傍 るは 地 經 秱 E 理 8 尺二 す 石 局 剩 立 社 3 2 建 設 di + は 所 6 Ш 雄 0) 明 12 0 鏡 測 0 Ш 治 脴 青 姿まで、 5 量 神 = 色 標 -唯 社 奉 六 を 安 壞 あ 0 年 材 彼 突 0 0 ~ H 3 は 改 散 兀 を以 品 布 築 亂 たる危嵓 骨 12 12 3 崭然 見 白 か 1 1 3 男性 6 青 Ш Ŀ. 12 北 4 石 と称 屹 咩 を 表 立 大 方 = 神 せ 九 時 ると、 尺 四 2 此は 7 --書 全部 分 n 圆 御 t せ 頭 É 前 6 其 穩 木 以 岳 趣 然女性を呈 造 -0 を異 風 10 頂 不 Ŀ 防方 17 戒

白冷觀 方言 七二六〇 御 前 山类世 音に は古 雪 岳 74 を 尺) 盟主 見 時 あ 3/ とし あ ラ 5 て 大**年 Y 入分と が 越前を 7 之を 北 白 にと 玉 白 を削 至り 山 ケ 01. T. 學 n 0 又 、 越 3 彌 Ti. 3 拳 八 为言 の院的 如 1 七 称 1 八 根等來 L 0 見るよ 尺)、 拜 越 脈 つのなり 絡 大汝 宏遠、 6 目 峯 Ш 云 と称 覺 40 深谷 八 T 七 L る 心 輻 Ŧi. 0 射 天 地 すし 尺 山 殘雪 2 あ 長 皚々 は 5 白 显 Ш 72 南 42 0 3 12 然 雅 13 别 6 號 其 あ 山 名空し 6 七 七〇 標 か 高)〇尺)、 約 八 1 三艾九 彼 の百 南

なる 隔 前 本 岳 Ш 頂 面 群 南山 12 近 1. 脚 ちて + < 大 0) Ti. 一汝峯 北 劒 望 異 0) 盛立 せ との とな h 間 せ するの る 更に 的 脚 但 T 立 直 Ш ち 即 0 水 是 12 劒嶽に 徑約 П n 劒 湖 74 あ 15 比 拳に Ŧi. す 十 れは、 徑 m L 白 半 規 間 17 模甚だ小 は 無比 É 雪を以 H. 脚 T 0 鎖 强 燒 水 を湛 CI V L T て、 登 半 ば 3 晤 褐 碧 2 E 色 水 #1 價 鏡 文の 呈 值 0) 3 せ 如 認 3 噴 3 水 83 17 ず 口 湖

稱

近 町

12

洞

あ

6

IF.

北

-1-

17

は

あ

b.

大己貴命を祀る。

泉

あ

6

巨

槽

54

引き入

n

使

用

12

便

す、

此

點

は

立

Ш

12

勝

n

5

據

有

す

11

な

0 加 賀 白山の表山 大 平

智 加 智 前 面 獨 占の 岳 0 緩 より 觀 斜 なる あ 大 汝 6 は 12 白 登 其 Ш 顧 は 6 客を 峯 其 得 脊 3 华 8 劃 所 を失 以 せ な 3 る威 3 棒 と調 杭 あ は、 ふべ b 加 賀 し 但 飛 飛 蟬 驒 側 0 國 面 界に 0 急: 峻 L 絕 7 始と攀登すべ 室 古は 飛 驒 か 0 5 部 ざる 12 人 12 5 比 古 L 加 來

水。蛇 などい 徑數 斜 陸地 立 韶 前 山 瀧系横 0 17 我 等 尾 室 堂 測 0 L. 0 *行 町 など 昰 堂 は 源 す 根 は 宿 12 る 手 海 水 1 奥 12 所 日 を ·吉村氏 實 をなす、 稱 院 同 17 拔 6 北 は怖 Ľ 充 約 L 火 12 2 降 T 全く 見 八 當 Ŧ 0 舞 より 或 氣 3 狭き室 下 遺 ふべ 時 12 水 0 54 千河 大 百 戲 12 物 聞きし < 尺 は 阪 言 蛇ギを 雲 72 る、 を吐 大 は、 0) 水 認 霧 ケ池と名く 林 高 0 御 所 25 復 區署 堂守及 雪と水 な 處 9 ず 襲 前 湛ふべき氷 3 0 岳 12 CA 位 來 頂 雨 0 との 森 を辞 6 堂 派 CK L 公初 出調 剛 前 早急之を ifi 力等 雪 混 長 100 0 風 查員 一の上を日 + \$ 所 成 亦 + 間 0 間 雪 謂 池 漸 陸 渡 を經、 許 居 F は 幅 < 地 加 測 履める予 氷 水 所とす、 1 12 此独立 池 は 量 越 底 雪 間 千きり 歳ずけ 光散 堂內 漸 部 隱 L < 0 千 遺 室內 六道 等、 池 8 溶 n 棟 室に陣 け、 年 12 位 跡 あ 床 雪 地 餘 至 72 6 割 大汝 る石 板 6 뺎 る、是れ大 藏 L の上 とは即是ならん、 取 堂 心 4 旭 地も 方 * 0 0) 小 5 各 屋及 17 斷 参詣を廢 居 經 善か 町 n 個 几 崖を急下 八殘雪 藁 びナ 許 時 りとは 0 遊を 6 地 UL 17 0 萬金剛 爐 ね L + 火 を設 敷ける、 Ħ. ば T 予が 口 紺 滾 分 を嚴 朝 室 屋 童 4 け、 -日 吉野 本 池 字 涌 堂 氷雪 F 封 不 0 廣 蛇 出 17 の旅舎に於 せ 一次の程 台室 歸 と自 溶 跡 血 0 せる多 3 を過 着 顕 0 < \$ 礼 池 す。 は は 稱 量 度 せ n るが、白流千 は 出 油 T 池 通

所 常 謂 17 0 餐後 數 薩辯 宿 地 泊 + 日 0 許 弊 隣室 12 を認 日 5 17 n V めず、 n 於 る 50 ば H とて、 3 山 F. 本 Ш 生 Ш 林 氏 惠 活 山 技 は 手 營 世: 0 佐 名刺を予 路を降らん むことい 澤 定 て、 氏 17 與 者 4 は 訪 官 U 威 Ш 且 42 麓 1 山 つ其法策を示さる、 平 5 Ŀ 瀬に宿せざるべ 及 び裏越に關する諸件を質 山 麓 0 民家 8 からず 指 盖 陸 定 til 然 測 諸 틞 3 般 員 17 す 压 平 0 瀨 は 徵 Ш 薩 發 林 0 摩の 51 調 俗 便 杳 12 人 す 員 3 な 始 は ど旅 n

は 六 + 餘 人の 宿 泊 者 あ 5 中 12 は 雨 21 濡 n た るものなどありて、 混雜 甚だしく、 身を横 ふる

賛

同

終

H

清

遊

8

共

12

せ

大

平.

加

足 伸 す 4 地 \$ な 1 华 华 幻 0 睸 12 3 明 A3

客自 惡言 笑 Ш は * は 獨 とは 以 陸 --6 菊 5 聞 理 野 續 T 任 < 釐 姬 世 V 頂 12 H 之を なり 命 1 2 湛 朝 2 ٤ 3 迷 す 葬 我 V T 風 者 6 ~ 登 雨 る 如笑 0 5 \$ 滿 0 反 は 堂 尙 感 3 11 女 1. 妓 男 歇 神 性 果 3 V2 Ш 53 里 L 51 2 * 頂 至 0 る T J. 6 4 T 祀 す 肝 如 it 1 6 何 心な な は 唯 小 から 神机 女 女 n 主 個 5 默 人 D 淌 0 0 など諧 女人 娘 す 小 登 力; 7 3 女 n 下 0 12 T る 山譃 參詣 之を 忍 何祟 的 93 CK 3 な ず 後の 跋 以 51 崇 ٤ 諷 涉 1 天刺 かは 予 6 せ は 候を あ 6 漸放 を迷 6 1 H ٤ は 本辯 5 < 信 は 恢 书 者 -立 0 復永 h 0) 富 井、 奇 Ш L 怪 前由 + 獨 爾 海 主山 1. b t 道 後 あ は 0 首 6 天 諸 5 語 8 發 H 氏 ず 木 垂 5 を亦 P 1 華 n 拜 諭 暌 甲 所 T す + な 耶 唱 す 淚 3 所 世 3 姬 12 咽 51 紀 命 和 あ 15 至 8 0 今 6 獨 祀 0 丙 逐 L H 6 罵 本 はに 世 白山女俠

n 一昨然 3 此 日 由 理 H 4 學 物 Ill 前 語 + 草 勝 6 勝 12 對 111 Ш 氏 秀 如 L 及 何 星 子 (B) 51 稲 道 井 \$ から 氏 溫 縣 稍 等 _ 厚 設 0 著 1 明 部 實 3 i, 群 0 加 は、 人 な L 11. り濱綠 微 200 中 10 雨 學 I. * 犯 氏 校 5 L 及の T び教以 下 永諭後 Ш 井たの せ 氏 交 , L は 6 A, 曾 -本 T 求 山頂學 子 8 3; h 尚 上在 學 0 清 H 中來 交 逗 6 に我て 留 校名 12 1 决 6 出 刺 せ 身 る 山の出 公 * 岳 せ 聞 會 井 3 氏 17 \$ 入 等 0 會 永 あ 井 せ 6 氏 6 相 B n

入 3 1 0 # 82 せ +" 美 3 前 3 キ は 7 岳 旧 ナ 7 7 0 本 ウ = " 絕 + 5 x 山 齑 7 0 3 E 1 I 名 サ \exists 7 モ 5 を サ 物 0 見 7 y 酸 其 ラ 7 1 果 北 Th 其 サ 2 部 1ª 1 夥 ゥ 共 南 方 最 1 12 部 面 チ \$ 方 12 ゲ 是 能 面 は 名 n は 12 < 高 彌 天 13 暗 3 蔓 灰 此 邊 7 0 特 色 iv 美 12 17 0 本 は 7 殊 禄 水 殆 12 7 山山 ど之を 白 0 7 稱 石沙 D 名 Ш す 礫 ~ 榧 3 ユ 中 3 1) 0 冠 0 名 カン t 往 開 義 3 4 5 花 8 室 硫 有 堂 7 黄 は 3 0 t. 塊 先 T 南 3 1 7 づ 雪 X 混 溪 永 1 チ 井 " 附 210 氏 ガ 沂 ナ = 17 ザ x 12 あ より 1 は 5 11 ラ、 C " C 7j 白 7 其 + サ 墨 Ш 7 行 小 ラ 1 4 櫻 7 12 0) 見 0 ウ イ 3 名 U 紅 1 義 果 ウ

本 6

は、 翌朝

七月

+

八

開 3

九月 T

閉

Ш

17

は

Ш

L

T

祭

典

修

\$

平

は

神

職

人

0 Ш

堂守

居

ġ

米

曾 日

0 0 辭

備

あ Ш 述

6

鯡

0

糖 日 せ

漬 0

V

唯

0 神

肴 職

あ 登

6

0

需 を

8

12 す

應 3

ぜ

6

此 時

夜

室

堂

0 出

宿 張

客、 せ

+ 唯 İ

元 氣

j

謝

1

Ш

買 白山 0) 表山 登り

()加

b 本 種 L Ш \$ 0 Ш 護 0 偃 色を以 鼠 かい 松 42 は 接 偃 松 す T 有 0) 育 予偃 名 壯 旺 な 觀 松 る * 拜 極 0 糖鳥、 せん 種 3 子を得んとして普く 欲 望 Ш せ 眼 兎 は変々 以 須 脚下 < 是 n 此 其 を掠 境 偃 15 松 松 めて 遊 毬を檢す F 3 松 ~ 万 間 L 豐 3 17 0 躍 青 17 此 5 氈 B 唯 0 は 子 蝶 4 殼 は 後 菊 花 0 は 理 碎 3 姬 寬 天候 片 为 0 8 特 み 温 T 12 本 和 多 草 Ш ح 202 Ė な 0 5 17 6 為 L 舞 彼 17 は 1 0 夏 織 褐 鶆 又 6

時 好 四 食 L 36 + 料 **分、** 12 滿 天 西 0 12 0 紅 高 觀 n は 原 巨 岩 3 無 Ŀ 比 17 4 踞 陽 L 0 左 入 方に 日 を 望 方 5 U 蜀 薄 雲 紅 0 復 下 衣 裳 界 を置め 8 纒へるも て、 0 金波 之を 0 日 大日 本 海 岳とな を 拜 す るこ 3 其 左能

6

t

5

はざり 方遙 此 日 12 夕方 糗 糊 0 姿を呈 尾 添 方 せ 面 より るは 伊 登 吹 頗 5 山 室 とす 堂に 50 宿 せる 壯 年 中 51 多 亦 蒼 顏 木 臥 せるも 0 あ 6 1 が、 子 为 藥 籠 品品 0 効 12

ば 內 意 落 味噌 n 17 這 般 2 减 0 汁 なる 眞 Ш 剛 味 海 力 \$ は 0 珍 は 味 未 意 稍 な 外 經 手 驗 n 0 0 5 隙 者 珍 は きし 0 物と褒め 想 像 永 12 井 め 1, 氏 H 能 汁 0 3 は 3 口 17 3 る 12 調 より 翌 所 U 朝 t 彼 我 高 發 等 Ш は だ せ 51 何 it 5 處 あ n t 5 12 XZ 6 1 供 3 L Ш H 殊 Ŀ. 得 3 为言 12 12 け 味 在 h 噌 6 T 切 片 0 昆 0 美 味 布 野 海 菜だ 藻 を 0 味 威 0 御 噌 17 ず 汗 浮 る 馳 を \$ 走 17 持 3 0 る、 な 5 あ 來 0 單 3 H 能 n

定

内

1,2

は

左

0

揭

示

あ

+ 錢

觀見

料

泊 料

金

+

八

Ŧi.

嶺 上 案 內 料

大 平-

立山

宝堂の

如

<

規律整然たること能はず、

堂守

剛

力

間

の情弊伏在するもの

あるが如し。

市

瀬

尾

崎

休 足料

右之通 和定 Ξ + 九 候 车 也

白 Ш 比 咩 神 祉 社 務 出

一十錢を增 溫 料 泉場に L は 回 荷物は n 於 0 方 H 面 四貫目までを限り、 る規定によれば、 より 登るも、 之を徴 案內料 以上は一 收 は、 貫目増す毎に、 泊 日往 料 は 復 所 謂 + 木 錢 賃 十錢 休 _ 足料 3 宿は 增 加 八 は + せ 室堂に休憩する席料 り、但神職 錢 の外、 の出張なら故にや、 升、

夜間登·

Ш

Ш 紀 四

新

崎 白 水

尾

國友巡査を予等の 用意も早や整ひ、 行に加へ、 居たれど、 晴天、 朝氣溫六十度、 藤井巡査は福留氏と共に下山するととなせい。 間歇熱にて再發の廃れあれば、今より數日間無人の境に入らんは、歯は縣念に堪へずとて、福留技師の隨行員 脈子を 撿するに淡海七十、 予は七十二子、藤井巡査は熱度全く下降したれば早朝より勇み立ちて、

腹を越え、 西南より來つて、東埔の全面に至り、東埔溪に合するもの、之を沙里仙溪となす、 有關溪の流域 丁の間は、 以て東埔溪の流域に下れり、 而 して新高登山の順路は、 道路を溪上に開鑿せば、 東埔府に至つて全く窮まり、 兩岸の経壁高さ千尺、 東埔 此山路亦甚だ容易ならず、 其行程儀かに十の一に短縮すべし、 走歐飛猿と雖も亦越ゆべからざるものあり、 溪の左岸に沿 其の水源分れて二派に發す、 U 其水源全く盡くる所に至つて八通關の絕頂に遂するなり、 蓋し此間直徑僅かに十餘丁に過ぎず、 山中の道路大概此類なりの 南方より來つて直ちに陳有關溪の本流を爲すもの、 沙里仙溪は蓋し其源を新高四山と北山との溪谷より 即ち路は其険を避けて東埔社 而かも迂囘すると二里 の背後 然れども、 いいい 直ちに郡大山 東埔社 之を東 若 橋梁 I L り發する 其上 を架

東埔社を發す、

仰げば郡大山吃として前頭に聳え、

雲嵐滃渤として、

其屑か纏ひ宛も肩巾を懸けたる、

住人が、

嫣然として天上に立てるが

如く、 れに在りしかを疑ふのみ、下瞰すれば陳有蘭溪は蜿蜒 海 して墜ちんと欲する者あり、 拔正に五千尺、 望むべくして即くべからざるを想はしむ、 ば陳有關溪は蜿蜒素錬を曳いて脚底を続り東埔社は恰も跗上に在るが如く、 或は五歩にして、 蓋し郡大山の中腹に連なれる一支峰なり、 時に断阻の足を察って崩れんとするものあり、 一 休、 眞に古人の文を讀むに似たり、 漸く登れば山は愈急峻に、 東埔より登ると二千尺、 攀登すること僅かに設丁にして、 登ると愈高ければ山は盆高く、十時漸く其頂上稍や平夷なる所に達す、 路は盆険難を極む、 身は今や頭上に在って腑して之に臨めり、 直ちに鉛垂状か爲して、殆んど九十度の角を其平地に取れり、 或は匍匐し、 毀す所殆んど二時間 或は魚串 致は 唯來路の果して何 步 喘 或

頂上にて小憩す。

华 斛などの高く枝上に懸りて、 櫻の如き少年時代に見覺えあるもの多く、 ・前故國の山野にて見馴れたる、 此附近既に氣候も著しく寒く、 菊は和社の山にも夥だしくありしが、何れも醬の今丁度開かんばかりなる極めて小輪の菱菊にて、 倒さまに陰崖に倚れるもあり 内地の或る地方と同じく、 萩、石竹、 其他名さへ知れぬ珍らしき草木、 路路、 山菊の類多く、殊に萩は花の臨りにて、濃紫の色の鮮かなると内地の夫れよりも美しく 植物の學問などには少しも 冬は霜雪を見と、決して少なからざるべし、 中には早や糯に染みて放山の秋色を其ま、窓し出せるもあり、 趣味を有せざる我等も覺えず快哉を喚びて路の敞難なるか 清楚なる風情母も云はれず、 草木も二第に臺灣的 のもの少なく、 木にも 或は

揃へてオーアーイと歌ひ出づる、 例とせり、 れに似たれば、 蕃人は路の危險なるを毫も意とせざると同時に、 鳥魁は行くく 数乃を緻け善人一聲我等一聲、 勿論唯聲を長く引きて、 海拔を利用して熱帯衛生園を設けんには、 花 を摘んて手 帖の中に挿み、 其聲長く山谷の間に響きて彼の 相喚び相叫んで干山の緑を攀づる此時の情は、 『欵乃』と呼ぶのみなれば、 淡海は一 花も木も景色も更に心に留めず、 勝地に達する毎に三脚心立て、 温泉もあり、 ▽『欵乃一瑩山水緣』の古詩をも想ひ起され、別に歌としての意味を有せざる様なれども、 最色も好しなど述びつく行くの 左れど山路を辿る時は、 我はまた端無く無限の 我等も 空想に騙られて、 恰も船歌に似たる一 難路にかくる毎に 何 時しか彼 此 種の 行の蕃人皆聲を 山こそ 聲 一を放っ 母: 國 夫

我も確かに太古の人なりけ

を支ふべき一木一草さへ ば路の険阻 上より羊腸たる路を辿り きにあらざればとて、 斯くばかり 或は磨ぎ溜ましたる剱の刃を渡るが如く、 崎幅たる險路は皆斯く云ひ飲はしたれど、 は急峻なるべしとも想はれざる阪にかられり、 打忘れて暫しは先を爭ひたれど、 ら路傍に見えざる所に至りては一行覺えず相顧みて、 著人の 先づ下り つい 郡大山の中腹に沿うて進む、 行きたる足蹤を傳ひ、 一歩を誤れば忽ち千仞の溪中に不歸の客となるなり、 態で路は千尺の危峻に臨みて、 此に至つては中々に羊腸も馬背も適する形容詞とは想へず、時々は斬り立てたる如き岩 五丁ばかり行けば路は俄かに激しき傾斜となりて、 原東なくも 是よりは 再び東埔溪の流域に下るなり、 步 歩づいに踏止まりて心細キ兩手の中には 歩も進まん氣色なく、 蕃人に焼き拂はれたる爲めにや、 羊腸と云へば古來山の危峻なる場 暫し躊躇に時を移したりしが、 左れど予等は初めて珍らしき山 鴨鳥越の險は嘗て外史に 山は 帶の焦土と爲り、 残りたる遊葛と冷 に讀みた に入る

E

かっ

け

ては

も劣ら

82

程な

れど、

途

中にて生蕃の

一人足を傷け、

1

V)

UT

n

折

合

t

Ш

紀

Ш P 信 か # Ш 11 7: 奥に 雪 3 何 汗 崩 とな 生 落ち た 足 生 n 世 落つるより 登 7 握り るべきー 命を拾ひた 締 8 H 乳 0 母 II るも が背に 半 論外として、 II あ 滑り 1) 倚り 落 JII て、 上諸 其他の る 彼 11 氏の 0 カン 恐ろしき V) 道 中に 15 行 直 办 立 II 斯 籠の 此 る難所 于 坂 渡しに 尺許 11 を譯も かり 0 壓 危 絕 險なるは 4 無く 壁 無 を辿 心の 打過ぎら 1) 夢 無かるべし、 着 を破ら 1 n たるに 此 n 中 1: 1= 子 る P て ٤ 0 三十 行 如 3 互に顔見合 0 年 II 誰 來の 海 彼 内の深山 II 素養は 疑えず 4 あれ 响 灶 を失して、 せら せり 此 れたる、 蓋 處に 數 新 高 丈 登

却 III 路は 111 tit 先づ 坂 出 を跋 10 あるべし、 來得 少 地 かっ に落附げ 逃す it 11 限り 0 て 1) II 0 秘 元來 唯 靜 Ш 3 傳 かに 坂は 13 Ш 持にて歩 種 歩みて、 0 路を歩くには 夫 秘 れにても妨げざるべけ 傳 後の登山 あり 行 下り ナベ て L 路には 非常なる熟練を要すれ 省 如 0 何 Ш 爲 めに、 なる險所にてら次して人に讓らず、 爪先に力を籠め成るべく身軽に駈け に馴れざる人は、 n 3 聊 かっ 甚だしき山 注 意すべ とも、 必ず登り路 へきをあ 概して右の 路に 取り oj. には 総べ カン 心がけ 爪 しりては 要は 下りるとに 先にて足 Ш 即ち を忘るべ を登 決して如何なる健 右 輕 3 に述べ に歩 時 心懸くべ からず予の II み 努 たる 8 Ļ 降る T 呼 足 下り 如き 脚にても 時 吸 0 0 11 踵 路に當り II 鲢 た 元 15 地 力を入れて に附 來 續くべきに 極 B 7 け、 題に 足 下 力 あら 降 1) 0 を入 弱 路 き質 んとする には n ti 3 足 0

樂々 せり、 11 下り 作 0 する 崩 下 行〈 社 左れば れて、 vj 場 変を寫さんとて、 蕃人を雇て 所は先に なる 足の 落人 傾斜 0) 爪 先より 代与 記 耕 激 作 地 L たる如く、 肥え S V 12 云 場 ンス 淡海は へ太りた 所に 3. II を明 蓄人の 終べて る蕃薯の掘り出 けて待 何 行 n 蕃薯を 中にて 生 我 ち合 ひ茂れる茅 215. 最も健脚 植ゑたる 4 たるは 地 さるし 原に あ 憎らし なるらん、 た、 v) 火 を放 隨 路 左 は蕎 れど光 行 ちて、 0 何 行 通 薯の 時 荷物を買ひたる しか我 事 紀線の ずは愁 所 畑 調备田 野東なき 0 逆 深く 中を斜に下るに、 等 に照らし を追 拾ひ取 を設 退けて FIF 艦路傍に打 いくるなり 7 りて、 山の 思は n 其傾斜 11 忽ち 麓 伏して得動きも為さ 辿り着き、 背頂ひた 自 乾 然に 0 板に 一餘りに 努 入らざり る袋の めて 激しけ 我等の 傾斜 中 しこそ れば、 危げ の多き 重 П # 44 II 充て 步 しけ 毎 這 柄來 1 12 Ξ

埔溪の流域 1= 下 4) 凡元十丁ば かり 行 41 II 樂 社 の下に 一着く、 渓流盆々急激にて雨山 一次第に 迫るを覺

7

0

人々には

ф

4

步

3

々溫 通 毫 路 6 II 知° 出 東 其 於何。 溪 4 埔 如く、 3 底 異なら 所あ 在 不接人以迷、 3 3 社 を以て、 ず、 を以 は即 て 温 5 泉は 述、障諸羅邑治、 年中に著はせる陳 東 之を區別する爲めに 埔 溪 行 社 0) II 0) 右 蕃 岸 社 分 なる を見るに 社にて Ш 脚に 假りに 、現に 至らざりしが、 在りて、 幾。玉 何。山 一茶屋僅 社 里、或の立む 名を 古來 かに二月 取りて樂々 政日山之麓有温泉、むの文中に之を記し Ξ 未だー 0 を有するのみ 定の 温泉と為 婦子 名 等の 柳 あ 3 通 せる H. m 日く。 を聞 過するか見 して 0 2 かず、 北° 社 は高く東埔溪の 此 地 只 んとて、 曹 in 通 泉の 東 埔溫 溪 在 底に下 左岸に るとな 稱 V) 沿 知られ す 居 n n 3 3 Ш たる 6 腹 見 東 v) 埔 V) 社 其

或。

Ш.

與。

水。

沙.

連*

内*

Щ°

錯。

III.

南之水、

達·

於八

掌。

溪△

秋·

3

3

B

殆

んど

相

伴ふ 数丁 萬

Ļ

然

n

B

彼等 擔 新

II 弛 0

行 7

0

行

厨 衍

た か

頁 待 溪

3

を以 1-E de

て、

IE.

午に

至

れば必ず

先づ

地

か Œ

相 せて

火 進 嵐

を焚いて、 2 水

を俟

岸

II

大

Ш

由乞

とて

尺

か

抽

左岸

#

T:

高

翼

直

ちに、

II

恰

其

在

がす、

翠

0

吟

骨爲

寒

V)

溪

を逃 脈

1)

行

にて、

蕃人の

先づ

か

B

0 J.

所 12

達 2

す、

蓋し

著 6

٨

等 洞

II 中

常 12

얟 -)

脚 7

1=

予 加

等

II

一之に從

ふと

自° 有。 * 羅• 以· 來。 聞。 有° 福 登• 立之者

東

社

如

を追

井

かん

か

山・蓋之・し 見。當 恒"時 が 整社 と 数。の 刻"行 列而· 近 通 全 子・絶無に せし 七月至邑、殊に 越。 半埔 族· . 0 矣、 問・き 山·尚 回來皆一 大武の • 平 ₩•地 後 煙・は **雲**・れ 以●て 封·甚 且•久 日•し 是・か 不・らず 以• 有。 意。玉 過。山 之。如 **脂漿**• 月· が 遠く 館。 門。望 去●僅 山• 办, 見・に

八通。 るに 知 云 5 1: n る 初 3 75 來久 未 聞 こく 有 探検し 職屬 登之者 200 交 15 通 1) 無 か、 1) 然 L n E to 以 6 て、 玉 Ш 温泉 0) 在 のとも 3 to 知 亦絕 n 3 えて ٤ n 時に、 其 詳 彩田 To 北 知 Ш 3 麓 者 1-Aut. Zing. 泉 かっ 1) 0 1 湧 出 防 d 同 3 6 治 0) 0 末 あ 年 る 吳 3 光亮 II 弘 1 問 路 た 開 투

寒。

聞っ霜。

有º凍®

投·枯·

生命四。

卵°時°

少多雪。

頃。月。

積*

以回

熟◎開●八 ក្បី⊚ 食°行*關 終山 是 日 皆雪、人跡罕到、地、即彰志所稱雪山、在縣や東一百山、在縣や東一百山、在縣や東一百山、在縣や東一百山、其實地を探檢し 晴 完 、 外 、 来 来 光彩異常、 後山卑南編 響端、奇幻莫 編. 吳 前·孤。測· 人。醬·山· 以。等·山· 無 B°山9大。 玉•割•樹• 流·溫·草· 震·池·木· 刻·、出· 八。俗。土。 景·名。 焼。瀬・湯・爲・寒・

なる はんより なる Ш 17 手 0 みにて、 坑 Ш 支 Ŀ ع 那 在 頭 流 爲 A 12 II 12 II 0 を得 即 寧ろ 東 手 ф E 5 為 5 埔 II 叉 1= 4 3 th さざる 東 鏦 全く 坑 郡 漠 成 入浴 門 V) 頭 埔 大 n Ш 溪 3 5 洞 無 泉質 さに 夫 0 云 ٨ Ш 著 0 堪 n か L 0 Ш 前 述 II 堪 3 5 流 通 境 麓 II 1-凝に 3 vj ずい 75 75 温 か 關 地 と為 ず、 n 4 指 3 3 池 理 記 E 丁 ~ 温 璞 す 4 to あ 的 6 其 黻 程 泉 3 L 石 以 V) 記 to なり、 せる 他 I: 11 閣 7 至 など 載 稍 蓋し 或 手 當な 溪 ٤ 0 如く、 11 あ 地 0 EE 1-0 極 下 溪底 故に樂 U 沿 支 3 名 V] b t. v) 那 とす、 脚 岸約 to 0) 3 T 亞 T 0 0 0 以 如 颠 6 附 溪 流 痛く 数 4 抽 3 T 漏 流に 見 域 T 温 名に坑の II 元 實 加 15 れば、 里 12 崩 泉 古 來 II 3 性 合す 湧 n ヨリ 0 來 東 樂 為 0 出 所 1: 絕 め 埔 4 殆 3 t 3 て、 在 字 霜 えて Z 社 2 あ 3 斷 地 か Ш 2) 泉 其 ~ど無 1: 幾十 あ 崕 を明 用 横 書 0) 位 VJ V) 0 10 排 册 八 所 置 にては に記 臭 下 個 3 5 に記 通 在 所 II 無 或 15 所と 云 關 地 在 裁 味 11 載 か II 等 は斜に が始んど ts 最 最 4 用 3 經 4 んに 3 6 も多 坑 11 5 7 斯 懸 等 6 滴 ED 臺 湧 n 0) II 0 度 ti 量 0 5 東に 不 出 7: 如 12 0 3 地 L 東 3 明 石 瀑 霜 名 埔 至 15 6 玉 る 其中 度 飲 J. を爲 Ш 0 社 0 Ш L 料 橫 如 1 11 無く まて 若く て、 vj L 1 最 排 浙 ٤ 樂 + 11 現に 4, 111 瀝 束 水の 画 下 好 4 只 數 八 流な カン 原 2 出 埔 社 吳光亮が 里 通 右 坑 L まて 0 L 4 0 關 0 Ĺ 間 T 3 頭 流 問 3 か 如く 檬 滴 II 若 0 to 距 Ł 井 V) 0 くは 如如 僅 re 70 通 八 3 VJ 戶 3 中 坂 路 3 通 か to あ 温度 度 水 0 間 to 15 数 闘 穿 V) 位 樂 源 指 随 此 里 Ш 著 樂 0 4 か tt 序 0) か II. 何 しく 温 社 意 3 4 地 以 n 度 0 味 15 東 社 12 T 高 對 3 埔 1-在 直 4 3 並 T 岸 3 ちに 所 湧 溪 11 文字 埔山 戶 岸に 極 出 附 3 0 其 王 B 1= 蕃 沂 郡 ZEI 檔 Ш 山 T II 0 方 大 L 屋 前 即 附 벎 適 非 Ш あ ٤ 5 東 常 PU 0 近 3 云 新 石

新 高 Ш 耙

新高山

ことす、 梅干の類に過ぎざれども亦一種の風味あるを覺えぬ 休 憩 せる所最も景勝を占め、 Ш の奇水の趣趣べて尋常ならず、 盤の支度は例の如く臺灣米のポ п * p たるに、 松魚のてんぶ

渓流飛瀑を爲して前頭に懸り、 て五重十重、恰も縞布を中空に晒すが如く奇絶云ふべからず、幾たびと無く三脚を停めて. 文にやあらん、其下湍は恋く飛浓となつて半天の雲に入り<u></u>肚觀臂へ難きものあり、 恐くはまた其優劣を争び難からん、 高きものは千尺、 出近より 水の絕勝此に至つては殆んど蠢きたるべし、晃山は蓋し瀑布に於いて海内の奇勝と稱す、 汲あり、 山は愈急峻を極め、 乍ちにして深々、 低きものは二三尋、或は落ちて煙嵐に入り、 路全く絕えて進み難きもの幾回なるを知らずo 年ちにして河々、雷の雨を喚べるが如きもの、 樹木は次第に蓊鬱したれば、石あれば必ず水あり、 殊に休憩したる場所より溪を隔てし高く郡大山の中腹を望めば、 或は流れて白練を曳き、 龍の雲を吹くが如きもの、 又少しく行けば二條の飛瀑相断んて斷睡に懸り、 水あれば必ず飛瀑を為し、 重なれるものあり、 且つ寫し且つ行く、 境びの幽、 一條の素練直ちに碧樟の間に懸り、 地の靈、 素より一々形容を得べきにあらざれ 激するものあり、 渓の傾斜は益々急にして、 五歩にして一器、十歩にして一泉 山の美、 水の奇此に比 淵あり、 断睚層を為し あり、 高 時には さ幾 すれ

何なる深山にて遭遇するとも我等の首は先づ安全なるを得べし、我等は今や旣に溹拔五干乃至六干尺の間に達したれば、 く之を認めたる時望遠鏡にて先づ其銃器を携へ居るや否やを確かめ、 鹿肉鹿角など繋だしく買ひ、 管て見たるとなかりし草や木や、 のたる時、其氣味悪るきと譬ふる言葉も無き程なれど、我等は早や敷日間落人に馴にて、 途中にて又もや多数の蓄人に遇ふ、三十人ばかりにて中には脊貧ひたる荷物の上に、 れるにあらざるとを知り得べし、 時としては黄葉紅樹の秋に酔ひて半林の錦を染め作せるあり、 通事一名か連れたり、彼等は臺東の蕃人にて集々街へ交換に赴くなりと云へり、 殊に蕗の菜の生ひ茂りたる谷合に、 殊に通事を件へる時は必ず交換に行く時なれば、 夕染の質の霜に飽きたる。 蕭條の落木徑を埋めて、 而して其管質へる荷物並に通事を伴へるや否やを見れば、 荷物の多き上に銃器をば決して携へざるを常とせる故、 後遭ひが猿を負ひたる様に小供を載 蕃人の風俗習慣等に就きても少しに聞 禽壁泉壁の恰も放國に似たるものあり、 我が東北地方の高山に入りたる心地せらる。 斯る深山の中にて多数の蕃人に 溪山の草木自から寒色を せたるもあ 彼等が馘首の爲 き知りたれば、 v) 何 出 如

得る足場を設けたるあり、 に過ぎられたらん抔思ひ、 も鳥類も異論なかりま 土石の雲崩れたる迹あり、 一泉より行くと二里ばかりにて溪の最も險難なる場所あり、 慈人に助けられて漸く藤蔓に吊上げらる、 蓋し曩に川上技師の一行が通過せんとて切開かれたる路なるべし、 荊棘を披いて進むに、斬り立てたる如き絶壁に、長き二丈ばかりなる木を立てかけ、 奔流飛瀑、懸睚巉富、 一歩を誤まれば五體は我物にあらず予は此難揚を『命帳』と命名したるに、 落人も亦變づると能はず、 斯くばかり危險なる場所 躊躇峻巡すると少時 を除氏は如何なれば 偶々溪の左

石大さ屋の如く、 して命帳を過ぐれば渓谷の傾傾は一 また龍また虎撥々として飛舞するの勢あり、 層急にして、 景の奇路の險取次に前頭に迫まり、 其間に介れかしりたる老木は、 變幻百出轉た應接に遑あらざらしむ、 太さ十園に餘り長さまた百尺を越ゆるも 路に横はれ 0 ij 或

望めば老樹深蔚豊さへ尙に星を望まん様なれば、急き蕃人を促して適當なる露營地を覔め、軈て溪に沿ひて稍や平かなる場所に行李を卸さしむ。 第に窄まつて屏風の立て籠めたる如く、 は奔湍に横はつて自然の橋梁を爲し、 々の温泉より一里ばかり上流に雑草の狼藉たる上に火を焚き、 或は深潭に臥して溪流を堰き、 我等の足の進み縦れたるにも似ず、秋の日足の早ければ、 炊事を爲せる迹、煙草の吸殻さては草鞋の破れたるなど、 水亂れ石怒つて飛沫雨の如く衣診悉く温ふ、 午後四時頃には早や山陰の昏くなりて、 又二 里ばかり行くに、 落ち散りたるを見た 陰崖 上流 は次

恐らくは川上技師の一行が曩に露答したる場所なるべし。

きて陣取れり、 けても晩れても唯一の輻神漬に滿足せざるべからざる折柄、意外にも東埔の溪底にて野生の霄楽一株を發見したれば、 臺北を立出でてより並に幾日、日毎に肉ばかりに飽きて、殊に登山準備の不用意なりし爲め、 に就きて晩餐の宴を張る、 く積りて平かになり居れば、其一面を塞ぎて天幕を張りたらんには、 自然の工風ありて我等の露營地より二三間離れたる山の根に、雑木の生ひ重なりたる所を擇び、 毛布被ぎて眠るなり、露営の場所は流溪の上に直徑一丈餘もあるべき流木、 ことして少しく苦味はありたれど、 油紙を縄に結びなどして、露營小屋の壁を張り又は坐敷を設け、一人が肉を切れば、 斯くて一行は互に任務を分ちて、 一夜 猪の燒鍋に青菜の副ひたるは、登山料理中の珍味なり、野菜は人間殊に我々日本人が一日も缺くべからざる食料なるに、 前夜までは蕎社とは云ひながら兎も角も家の中にて床の上に暖かなる夢を結びたれど、今宵は鼠の露天にて石 野菜とありては薬よりも貴く思ひぬ。 或は天幕を張り、 或は薪木を集め、 極めて屈强なる露営小屋となるべし、落人は天幕を持たざれども彼等はまた 相駢んで横はりたる其間隔の二間ばかりあるに、 火を焚くもあり米を炊ぐもあり、 一人は鑑請を取出し、 務界に入りてよりは全く野菜と云ふものを得ず、明 懸崖を背にし枝葉を屋根に代へ、 軈て夫れ是れ準備も整ひ、一同坐 摘取りて携へたるに野生の 行李を包装したる吳蓙を解 中間には小砂利少し 其前面に火を焚

ちに用ぬたればなるべし。 て夜の更け行くまゝに、寒さの坐ろ身に沁むを覺えぬ、榾を折り添へてさまぐ〜の物語に時を移せる程に陰曆十三夜の月は早や中天に懸りて、隈 劇しきこと到底青葉の比にあらず、 露營の場所は既に八通關の麓に近く、 生の駄冬は山中到る所にあり、 之を肉に投じては却て肉の味を損ずる恐れあればとて多くを盡さず質は茹でたるのみにて晒すことか爲さず直 高さ三尺葉の直徑一尺五寸位にて如何にも見事なれば、 海拔は丁度七千尺を示したれば、 今朝東埔を出ててより既に約四千尺か攀ちたるなり、 探りて晩餐の下物にせんと茹で試みたるに、

むるとも無く夢路に入りぬ、 深々たる溪流の聲に和して、 の上に吳陸を敷きて、 細砂に放げかけたる光景、 流木の根を枕と爲し、毛布被ぎて打臥したるに、肩や腰やさては手足の不安なるを夥しけれど、 職々たる溪壁枕に響いて終宵干山の夜雨を聞き盡すの趣あり。 空山の静夜の積氣を振動せしめたる、 雪か霜か凄凉馨へんに物なし、 眞に人間の音にあらざるな覺えぬ。 折しも淡海子が日頃嗜める謠曲の一揆、 期々として溪より山に響き渡 豊の疲れにいつしか眠

色煙に墜ちて山まさに曉けんとする時、 全身水を打ちたらん様に寒うなりたれば、 驚き起ちて枕頭の滑火を掻き起すに、 夜もすがら燃え盡し

〇新高山紀行

早や 一残り少なくなり 82 折 しも 籔 野聲の 怪 戯山の彼方より 此 方へ渡り、 軈 て峰 1 Ш 山 こり 峡へと次第に明るくなりて、 谷合樹隆までも 何

か曉け度りぬ 八時出發す、 日は 朝 山の上にのみ照りて、 氣 温四十五度に降る、 尚は我等が辿れる溪合は淡靄に鎖され 脈子を計るに七十六子なり、 天幕を撤する 前 組 念の 撒 影を為 軈 朝 验6 り行李も 整ひた

刹那、 げば倒れん勢あり、 にて而から我等が目の前に放ちたる銃聲の陰に響き陽に應へたる奇怪さ、 が無念の鼓膜を撃ちぬ。 先に立ちて進みついあり、 暫ばしは續いて來るべき壁か期したり、一分二分山は再び靜死の境に落ちて、 予は確かに其銃丸が予の耳邊を掠めて飛びたるを覺えぬ、 運命は定まるべきなり、 數丁にて溪は源流を二派に發す、 今日 先登の予は先づ最も驚き、後なる人々も皆怪しみて暫しは一語をも發するもの無かりき、一 11 午前の中に八通嗣に着くなりと聞けば、 折しも畫尚に昏き陰崖の彼方より、 此一瞬時に於いて予は確かに生きたる人にはあらざりき、 右なるは新高北山の麓より流るしなり、左の溪に沿うて遡ると又數丁、 突然木魅に響いて銃撃一 左れど予は無事なりき、 足の運びも自から輕きを覺え、予は其中にても拔駈けの功名せんとて、 其因縁を聞くまでは何人も劇しき心臓の鼓動を禁ぜざり 間寂又間寂、 發、 覺えず二三歩は引返したり、 嗚呼第二發……… 靜死の境に沈みたる深山の積氣を破つて、劇 五分十分、 終に何事もあらざりき、 第 A 發の銃撃其銃撃の聞えたる 通 闘山 發 緻いて來るべき第 は當面 待つとにはあらざ 然れ に横は ど斯 って、 しく ny 仰

社と聞きては我等が連れたる蕃人と同種族なれば、 ざれども、 たる證據には、 射損じたる時は聲をかけて次の待場の者に撃たしむるなり、 の來るを待ちて聞くに、 彼等の獵に出づるや處々に張番して鹿の通るを俟ち、 此附近は郡大社薔人の狩場なれば夜を胃して此に出額せるなり、今は確かに鹿を射止めたるなるべ 若し馘首の爲めに來れるものとしても先づは安神なりと漸く轟く心悸を撫て下しぬ。 今は一發のみにて次の聲を聞かざれば、 先づ最初に認めたる一人が之を撃ちて、 見事射止めたる時は其儘聲をか 鹿を取りたるか知るべしと、 其 大

界の人の通るべき路にあらざれば、 大方は質 木は悉く、 懸睚を攀ぢて八通關に登るなり、 の如き山奥ならでは見えず ない 其種類を一懸し、多くは内地の飛驒山中等にて見るものなり、 行くを聞えたり、 ば八通關山の脚下に着く、 迚も近づくべきにあらざれば、 供の頃其若芽を摘みて食ひたると又は其幹を折りて吹矢や造りたるとなど端無く思ひ出でたり、 今までは兎も角も溪底に沿うて遡ることを得たれど、八通關の麓よりは渓流は總べて瀧を爲し、 總べて蘿葛を梯子に代 東埔溪即ち陳有蘭溪の上流も兹に至つては極めて細流にて、 富士山等にても中腹以上ならでは、 溪は再び分れて、 路は其鉛垂状を爲せる急峻の山の半壁に、右折左折恰も螺旋の如く縫うて通ずるなり、然れど下 へ荊棘を懸棧と爲して、 右なるは新高北山の前の方より流るしなり、 少なき寒帶植物なるに珍らしや回歸線上に立てる山 殊に子の眼に暮かしく覺えたるは、 纔かに匍匐して登るに過ぎず、 溪と云はんよりは泉とも云ふべく、 即ち左の溪に沿うて進む、 虎杖にて今は既 海 一拔八千尺位の所に至れば、草 に季節も過ぎて花 f. 虎杖は内地にても 谬 此よりは 萬尺近くなり 布を為して 步 毎に 水は

内地と變らぬ氣候なりの

今は

知れる者稀なり、

大なる 開門は木造なり 終に見當らざりき雲林釆訪册に に八通關の経頂に近づきたれ 「當らざりき雲林釆訪册に『過化存神碑、在八通關山頂、俗水窟 其位置まで確かに夫れと知れ居れど今は碑石は云ふも更なり、 半ば 倒れて再び起さんものも しと云へば廢頽して遺迹を留めずなりたりとて異しむに足らざれど、 朽ち果てたるを架して、 登るを数十武、 it 無かりしに、 直ちに八通嗣の頂上に達す。 吳光亮が道路の遺迹を尋れんとて、 橋となせるあり、 果ては 破壞して橋板となせるなりと云ふ、 是ぞ質に吳光亮が遺迹にて、 | 西碑、高七尺、寛三尺餘』とあれど、| 臺礎さへ全く迹を留めず、通事の盟 行く 通 事に 石に勒したる碑は尚ほ存するならんと思ひ、 其橋板こそ當年彼が建設 問 軈て吳光亮が建設したる ひ試むるに、 通事の誤解ならん 軈て路 如何なる石にて如何なる文字なりし せる、 0 など思ひて、 軽に臨んで痛く崩れたる 『過化存神碑』 百 戸なり 方捜索したれど 通 の迹に着く、 事に所在を問 所に、

雫が、 を爲し、 間ばかりにて山の八合目位に遠ずれば、 こり 苔強したる岩陰より 木、 注ぐなり、 或は激浪天を蹴つて馳せ、 絶頂まで一 試みに岩下に立つて其源泉を掬すれば清洌の極齒骨の寒きを覺ゆ。 帶の森林にて樅、 Ti 楠花 滴れるを見るのみ、 岩躑躅等其名を知りたるは云ふまでも無く、 或は奔流岸を噛むて崩 栂 今まで四日の問終日幾度と無く渡り盡し、 姫小松など何れも 是れぞ真に陳有蘭滿の水源、 る人の壯絕、 内地の高 山に見たる様なり、 其源や即ち木末の露 蜒蛇として北に馳すること二十里、 名を知らざれども嘗て內地にて見馴れたる草木 踏み盡したる陳有蘭溪の水は此に全く盡きて僅かに其一 其間に生ひ茂れる雑木の類 **雫が集まり淡まつて終に渓を爲し、** 其下流濁水に到つて一大長江の觀 6 何れ内地の種に 極めて多し、 河を為し江 登ると あらざる

勿論條値の密攅せる陰蛭に在りて日 に登つて八合目より以上、 之を檢したらんには、 へる時は却て寒冷を感ずる程なりき。 高さ皆數十尺を越え、 容易くは強り 其種類も多少は異なるべけれど、我等が目には直ちに木曾山中の景物を寫し出せり、 無れたれど、 山は著しく急峻にして、 太きは敷 光に接せざる 園に 且つ攀ち且 及べるあり、 為めにも 殊に渓流の盡きたる所よりは、 一つ憩ひして漸く九合目まで辿り あれど、 枝は總べて倒さまに垂れて、 氣温は 著しく下降して、 着く、 大概石盤石の風化して鉛垂状に雪崩れたる、 遊苔の之に

響ひたる、 斯る險路を踏攀するも 此問極、 檜 姬松、 眞に嬉しき景色なり、 栂、 毫も發汗等 海 拔は丁度九千尺を示したり、 経などの を催さい 極めて 見るか 000 植 古りたる みなら ら危險

よりは、 く溪流より て又少しく登れば、 なり、 即ち當年 足蹤も多く、 開鑿の常時より 是より するに至れりと云ふ、 吳光亮が開鑿したる道路にて、 郡 大社 27 郡大山 配と餘程平易なる様なり、 ~it 数年間は絶べて 嶺纜きにて 脈の中腹より斜に 而 して該道路は又途中より 五里ばかりなれ 此道路を取り居りし 東埔社より霜山 來りて八通關に出づべき jij 上技師の紀行中に八通關よりの下り路にて踏迷ひたりとあるは是なるべし、 横排、 35 八 分れて郡大社に通ずるを以て、 通關より新高山 其後を經ふるに從ひ處々崩壞して通行甚だ危險なる為 東 八埔坑 路に合す、 頭 陳坑、 の前 蕃人の魔々通行するもの 面 鐵門洞か經て八通關に出 帶 II 今は全然郡大社 彼等が 狩獵場として より八通闘に出づる道路として存す ありと見え、 づるもの、 、屢々往 め、 我等の今 復 せる 門洞と云 通 認問に出 所 通 登り なれ 事に問 へらは つるに II 來 3 れる 即 3 5 此

0)新高山 祀

尾 监

を感ぜしむ。

新高

尾 崎

夜 专 0 白 『卅[®]然に 眠 りょ 里溪山行欲盡、天門けたるなり、 V) 冕 7 天逸先認八通關』 恋 前 に曉 光を仰ぎたるが 東方 溪底を歩するを此に 面 0 如く、 後 Ш 一番は、 氣字自 共 から Ħ. B 那 快 大 澗爽 Ш 社 影を望み盡し水聲を聞き盡して、 と同 頭 族なれ 天遠く山 II. 明かなる眺陽の光景、 Ė 然交通を為すに、 漸く 3 八通關 人をして覚えず くは 此 0 通路 絕 頂に出づ to 取 座寰 71 n 0) りと 群 額に 人は あらざる 恰

簡溪は、 3 云ふべし。 し、又正北に 通關 野 0 が 通 原は、 II か 闘は 直に 陳 本島 達 有 霜枯れ 其脚底より した 隣溪とし、 敗れて蜒蜿 木 脊梁 3 草の 0) 時 Ш 冬とも II 脈の 眼 北郎春の 1 背 界 中 数 恰 遮ぎるも 後亦直ちに の峰のを穿つて北に向て流れ郡大、望郷、 ら午前十 樞にして、 見えず、 狀 を写 0) 新武路 處どころに 時 無く、 せるものは郡 を過ると二十 其南方直ちに、 溪に 鋏を以て 吹き残る草花の愛らしく、 落ちて臺東阜南の 大山 分、 加 脈なり、 新高北山の羽翼を爲し、 4) 小 たるが如き短草は、 春日 而して其経頂 和 45 の問 野に 丹大、 かなる空は淡き日 注ぐも 初 風風の諸山 春の は明 殆んど天然の のあり 東北に SIF か 面に に本島東西南部 孫に海拔約 連 共に其の渓上に聳えて、 霜の棚引け 心影を見 耳 6 せる群 のとは 渡す 山は重疊波濤の る心 限り 想像するな許 萬尺を有し、 の中 地せられぬ、 0) 央分水磁や為せるた以 山の 上に放 其絕頂 如く、 高きと略ほ我が立てる さいる 頭を回ら リブ なり、 遠く赹 カコ 帶廣 UT て、 真に絶 養十 て、 つて 4 殊に絶 II 中央山 共 数 大の 前方 0 T 歩に亘 如 頂 12 脤 形 鹏 發 か Ш n 爲 有

高く に均 のは所謂整 六新高の前 望める しうせり 重萬重山 題の 新 東 高山 面より八通關に至るまで、 角を露は 新高にして、 東山 唯 0 Br 方位 の中 Ļ 其最も高く聳えたるも 11 央山 呼べば應に答へんものし 嘉義 一脈は近く八通關の前 武路溪の上 新高は方に西南に位し、 羊陽崎幅たる一帯の峻嶺を爲し、 流を隔てし のは 面より 秀姑 前 如 Ĺ 面に屹立し、一覧を伸べて能く其頂上と 峻峰 翻山 斗六新 而して斗 かっ 起伏して遠く雲煙源の際郷に連なり、 高は西に 新高に更に其右方に重疊起伏せる群 傾き空 八通關に至つて一大斷層を以て其山脈を頓挫せるなり、 東新高は 稍 南に向 握手し得 1) 西南は直ちに新高山 るら 更に 峰 のし如く、 東方を望ば 0 背後に 在り 脈に接 渓流の 義新高人 獨り之を望むと能はず、 峰 巒 亦其右方に當つて To 要するに八通脳 縫 うて馳 も近

秀てて西 人は總べて此附近 か夢に入る、 質地 先づ杖を超頂に停めて、 の名 か II 探 0 古も 攻. 地 予は地圖と鉛筆と手 帶を八通開山 害 得 SU たろ 册には見えず、 望み得たる爲め、 60 無 かり 稱 L 雲林采訪 帖とに暫し L か 之を 支 道 那 路 0 玉山 册に 餘 本島を領 0 は『八通照の無く一気 開通 又 Ŧ ŋ と共 有 > ◎●●、又名玉山、在縣治東一百餘里行何れも此世の人にはあらざりけり 此此 した Ш 附 3 即ち今 近 初めより を通 過 0 既に之を 新 L たる者 高山 と混 百多く 知り 同 居たるも、 して 随て彼 稱呼 里。 玉山 し居れる 吳光亮が道 蜂。 防 玉• 近 立。 4 6 1 高神天外』 のし如 通陽 路 を此に開墾 0 上 盏 ٤ 祭り L to 玉 r) 1: 山 現に る當 0 0 名は 75 時 今 3 までは、 H 0

暫

憩ひ居る中に淡海は類りに

四方の景物を撮影し、

鳥迎は

歌を案じて

草原の上に肱枕し

ながら、

神と語るべ

1

何

終に此に八通捌の名を命じて世人に知らろい

と同

時に、

玉山

を以て直ちに八通り山と混同したるものなるべし、

而して八通關の名は吳光亮が

の通路の要衝に當れる為め人の憩へる迹火を焚きたる痕杯多し。 城門等の如く見ゆれど、實際は総べて木造にて、霊磁にも石材を用ぬたるもの少なかりしと見え、 今に其殘礎さへも見えず、劉銘傳の時代に調製したる地圏に依れば、 通八達すべき天然の形勝を占むるを以て、 高山嶺を越えて、 其中央分水嶺上に一大閘門を建設したるより起りたるものにして、 蕃薯祭方面の各蕃社に通ずべく、或は郡大山脈を総斷して、 其名の由て起りたるを知るべし、 該關門は嚴然たる石造若くは煉瓦にて積み立てたる壘壁にて、恰も臺北城の 絕頂の我等が憩へる場所は、即ち當年關門の在りたる所なりと云 濁水諸蕃に入るべく、 整し其地勢上單に中路橫斷線の中央關門たるのみならず 現に其迹には 或は阿里山蕃社に、 一塊の石さへも見ず、 或は秀姑醬方面に能く四 唯今も落人

吹山

川崎義令

少しく知れる所を記して初めて登山せんとする人の参考に供せんとす。 の所多さを ざるも 伊 吹 山 は美濃國 日 以 本 武 て遊人 尊の東征によりて史學 揖 斐郡 墨客の杖を曳くもの と近 江 國 坂田 の上に、 郡 年と共に 東淺井郡とに跨りて、 動植物の好採集場として、 增 加 L 本 夏の如き日 高
ち
四
千 五百 に數十 博物學上に名高く加 四 士五. 百 の登山客を見るに 尺、 山としては甚だ高 ふる 至れ に風光明 か 今 眉 5

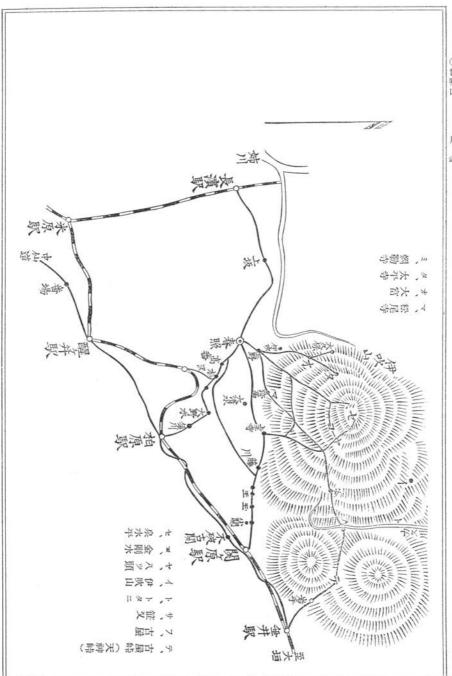
登山口

山は牛の伏したる如き大裸頭にして登山口甚だ多し

牽きて殆んど頂 一十錢なり、 東 上 海 道鐵 Ŀ 野より頂 に達する程なれ 道長岡 上に 驛 で下 至る三 は、 車し 里 て春 婦女小見と雖も容易に登ることを得、 初め 照 + (スイジョ 町を除 く外は、一 ウ を經 て上 面芝生に 野 17 L 達す、 故に單 て道 1/1 此 も廣 間 に探景の 約 一里道 草苅 みの客 0 平 男女 は 出 此 心は牛 力質 1 8 金

○伊吹山

川崎



○伊吹山

川崎

ラ は

"

110 0

あ

此 1

所

I

6 2

右

四

Ŧī. 1

HJ ブ

入 +

礼

V 7

老

松 サ

繁茂

する上

12 0

白

Ш

神

社 古.

あ

朓

望 は

佳

な =

本

左

折 ナ

右

72

5

地

17

才

3/

10

IJ

4=

110

73 至 宮 7 徑 3 5

17

チ 小

路

傍

岩

17

テ

ウ

1×3

35

3

3

ウ

ウ

17

交

6

伊 吹

Ш 號 を山 がの 2 て、 大 \$ 1 あ 採 晝 は n 世と案内が Ξ 低 植 案 外 3 0 集す 猶 村 耐 7 5 は 案 * 錢 は 物 代 3 此 內 宿 暗 あ 0 t 聞きか 雷 3 內 7 採 Ш 者 は 最 6 夫 北 6 大れ 8 彼 料 集 料 費 每 \$ 稱 聞 12 12 端 所は を増 便 町 Ш に得 社 12 3 L か 登 T 0 計 年 3 幾 ち 5 行 昆 T 算 入 利 側 出 n 計 12 入 2 蟲 普通 さん 3 請 H 51 14 5 L 分 な 札 6 此 づ 6 = 採 とか とも 清 12 は 6 1 17 3 C 所 n 登 求 L 3 こと 集と 故 Ш T T 斜 泉 ば 0) t 誤 終 \$ 客 道 村 登 宿 あ T 大 12 t 熊 8 夫 村 更 は 梦 は 12 h 12 Ш + F. 直 6 生 あ欲 多れ 春 野 初 民 五行 納 す す 5 T セ 12 らざる 案內 とな 夫 集 照 IV ば 21 甚 8 L 1 人 五、め 3 n た冷 E 所 宿 n 12 T 53 坂 6 X ナデ 其 案內 は 路 多 者 以 多 3 12 T 0 村 3 石 4 故 T 3 15 3 に入 なり、 灰 勸 3 上費 如 Ŧi. 伴 多 1 者 得 將 0 何 請 C 2 等 石 よく 鏡に < n 3 0 意 12 は 人 辅 12 屋 0 磊 L 此 ず 12 慣 腕 人 T t 多 0 助 は 厢 t 樹 磊 附 案內 荷物 < 力 L となす 井 喬 0 T 松 6 陰 72 祀 - 5 B il 案內 T 木近 は、 T 南 12 3 n 0 21 た 井 屋 Ŀ. 案內 道 * あ 訴 增 华 等 3 者 3 は あ 12 U Z と直 所 登山 せ なり \$ 内 0 T \$ n 者 相 ^ ん勢を示 已 若 宮 50 は 圣 过 0 當 南 U 兩 謂 度を 接 しとて 12 7 側 17 神 せ 0 0 都 あ 引 L けよ 案內 嫩 必ず C 近 其 は 35 6 Æ 17 社 異 15 \$ 生 合 江 B 堀 0 て草 T 1 1 あ 十錢 採 N 12 商 的 Ŧī. 料 常 あ ス CA ブ 5 L Ш 之を歸 は普 集す 茂 置 す 人 圣 必ず 12 V + V 人 n る 的 1= 郎 E 们 V 老 カコ 宿 N 12 条内を 3 1ª 杉 3 余 L 0 通 为 \$ 其た 根 12 行 4 告け 登るこ • 1 5 2 矗 Ŧī. 1 所 0 性 途 12 6 とを 定の 初 IC 1 テ Lo 3 + 札 登 4 E とし 人 上る ウ 現 要 附 Ш 1 3 T 數 錢 \$ を 得 2 賃 圓 L 3 は 12 V 3 21 U T 人 行 ざる 四 錢 此 L 選 をとり 7 請 L 如は 1x 7 12 3 T Ŧī. 聳 以 せ T Ŀ 本 0 Hi. ケ -求 岩 , 罕 吏 路 町 之 14 1 L 團 Ŧī. 人 が宿 12 12 21 5 あ U L 12 體 人 12 12 E 17 迄 5 枝 登 料 宿 拾 × n 3 2 0 故 先 歸 0 L 年 とあ 3 ず、 な は 力 74 るをよ 町 5 5 1 葉 5 2 を 左 欝 可 人 n 彦 ·C あ ナ 拾 L ح ٤ 字 17 7 51 根 組 + 登 錢 3 Ò 4 す、 3 n 入 ラ あとら 理 中 錢 人 T \$. 案 學 藏 る E 屈 0 宿 內 は 3 1 3 案 內 Ш ス 8 0 0

內

12

7

料掛行人札代

此 0 n 者

KL 所 H

茂

JI]

崎

T F n は 甲 計 17 L 3/ 1º 3/ 2 俗 15 稍 す 3 點 10 逹

をすべ ウ 此 DЧ E 所 12 百 n 1 v ば 種 3 清 ブ * + 泉 岩 フ 採 あ 力 六 ウ 集 南 す セ U 6 以 ラ 5 0 時 1 T 3 數 渴 12 11 種 白 4 3 # を 花 1 醫 す 發 0 110 見す ~ L 3 1 0 3 73 示 を テ 道 6 得 0 は 1 1 2 登 Ļ ブ 12 3 辛 34 元 牛 1 從 附 來 ~ N 110 此 着 C 渐 1 サ 植 此 物の探り 細 地 < 頂 で出 集とし Ŀ Ŀ 12 近 T T 0 面 は V H 3/ ナ ば 他 1 T 稍 サ 0 丰 口 ウ 7 ò 51 丰 劣 U " n ウ 山 IJ x E フ モ ۴ 分 尚 牛 + Ħ 容 0 又 12 陰 タ行

2

沿 1 彌 千 なり 年 U ブ 貫 間 + 彌 T 5 高 を 東 治 ス 仁 す 3 111 拜 領 天 2 Ŀ 0 n V 皇 ば 野 清 L 傍 流 0 4 1 12 勅 ->-12 6 臨 百 3 田丁 プ 1 小 坊 キ J. 奉 ば 杉 徑 老 3 ない 神 * 東 有 6 樹 て 才 耐 鬱 12 北得 六 0 然 沙 L 15 12 6 て、 とし 七堂 1 淮 21 STATE OF 3 T On 銤 方 國 幽藍 0 高 10 時 寺 靜 0 建 3 代 八 町 立 な 靈 15 Vi 英傑 場 莖 6 世 出 VC , 徑 な づ L 1 秋 6 伊 F: T + 紅 L 吹 杉 松 * 葉 为言 DU L 额 尾 越 0 大 觀 信 寺 幾 朓 寺 VD 音 3 15 多 護 3 祀 達 8 0 8 1 0 國 3 す、 寺、 瓣 0 12 あ 遷 此 黄 L 長 3 て、 5 邊 蘗 尾 經 喬 宗 等 古 護 木 0 T * 鬱 寺 國 は 現 寺 採 F. 蒼 15 今 集 彌 72 L 0 太 T 1 3 高 地 12 平 得 下 貞 享 23 あ 護 ~ * 國 採 移 元 5 n 年 門 寺 ば 潮 悉 領 前 音 地 共 * T 道 院 F 溪 17 カ 海 流 モ 石 0 稱 寶 開

Ŀ 門 寺 П 彌 前 12 高 51 出 JII 才 を づ。 示 容 15 n " ば 1 ラ F 7 野 チ 口茂 6 12 白 門 Ш 0 神 社 石 0 垣 12 あ は 72 1 6 牛 17 T 1 1 合 17 生育 彌 高 寺 すい 0 寺 下 * 12 T 裏 JII 12 出 4 渡 づ 12 は 岩 東 す 石 n 17 ば Ш イ テ を ウ 越 2 3/ 1º T

る、太 城 名 とな 伊 世 所 吹 な は 111 6 僅 死 0 照 12 磁 西 t 城 百 現 面 6 存 は Ш 村 す 腹 西 0 京 北 民 極 17 家 寺 氏 15 to る進 12 は 0 安 伊 U 加 置 吹 氏 2 ح 7 JU 信 Ш 大 村 拾 re 0 寺 築 T 40 Ŧī. 六 0 L 村 T all 1. 12 民 所 茅 大 0 L 屋 富 香 7 點 時 華 4 を 古 大 2 才 受け は 17 7 祭 B ŀ T C 餘 2 散 3 居 坊 1 在 か、 あ JII 給 を 6 0 昔 戰 越 L B 或 は 文 弘 終 時 T 太 平七 此 17 代 地衰 當 城 曲 及 九 近 2 主 太 折 T 高 < 平 姉 清 0 僧 坂 JII F. 諺 平 國 8 0 行 寺 J: 長 基 城 on 12 流 0) 作 移 所 Vi 8 1 太 送 3 在 平 傳 12 抽 及 51 寺 2 3 CX L 12 琵 本 廢 至

专

登

山

隨

意

な

5

旅舎は

Ŀ

45

寺

17

なけ

n

id,

原

to

17

3

藤

0

15

入る

より

外

5

C

T

2

5

8 12 Itti 1 色 朓 紙 佳 0 中 な 天 5 53 村 かい 0 1 3 F. 35 Ш 如 腹 42 蓄 17 して 畑 奇 あ 6 觀 な 所 5 謂 伊 吹 蓄 一変に T 味 だよし、 花 時 歷 琶 湖

望

平 寺 0) 北 麓 姉 12 白)il 砂 0 岸 利 達す 称 L 5 30 鹼組 削 3 为言 如 4 所 あ 6 常に岩 石 * 崩 潰 す • 里 人 苅 草 を東 ね 1 投 4 n ば、

矅

51

T

Ш

15

多

<

字 砂 大人 利 0 保 下 51 伊 至 吹 3 Ш H 七七 尾 Ш 3 磊 4 0 峽 溪流 姉 奔端 111 0 流 奇 3 朝 V 所 ふべ 兩 岸とも か 6 す。 峻 嶮 12 T 屛 風を立て た る 如 之を 蟬 合 v

平 寺 1 6 灌 木を 押 L 分け 大 富 7 % v 0 # 央 を 越 文 T 頂 Ê 12 達することを 得 n 8 别 12 他 0 容 Ш 51

F. 長 至る 岡 3 平 平 た 寺 驛 12 3 12 此 下 問 植 T v 車 物 雇 約 ふべ す \$ 里、 首 陸 n Ļ ば、 質 原 貝 もなさが 路 驛 驗 案 村木、 傍 12 0 內 場 įZ, F * 車 料 大 右 す 如 は " 清 V 12 n 日六 見 ば 水 サ を經 + T 西 拾 サ 同 ウ、 42 町 錢 T J. 進 内 1 平 4 外 學 3 な 寺 校 W 小 5 10 水 0) 春照 達す 裏 ウ 關 此 ズ * 地 牛 3 北 宿 0 約 等 國 七 易 à + 街 里半 か 0 5 道 は 玉 12 Ŀ 此 H 111 道 野 所 7 て、 細 0) t ~ 商 案內 鐵 1 6 人宿 迷 北 路 者 國 * CA 村 横 易街 程 惡 道 3 L 5, 經 12 1 か 分 T 家 藤 6 內 n 康 ず、 七上 耆 から 111 關 は、 案内 7 平 原 藤 寺 チ 戰 者 111 12 力 21 若 人 7 首 な < る 級 は 12

去 E 平 子 寺 流 高 12 秀は 寓 (歳め高秀高 J. 45 終に 屋 形 廢す。 0 趾 秀 あ 0 6 7 高 屋 吉 百(位下に叙し長門守に任す) (足利義輝の近臣となり從五)形は永正六年、京極高 清 51 が太平 至 る、 寺 天 より IF. 元 移 年 6 織 T H 住 信 み 長 1 0 所 江 州 42 L 53 て、 入 1 17 高 清 及 0 子 高 高

伊 吹 山 7 ネ 12 里に + 登 ウ 3 あ 17 L は C 1 古 頂上 平 寺よ 屋 12 1 至 6 溪流 3 來る登 17 は、 を溯 Ш 道 溪流 5 て、 12 會 3 溯山 3 路 2 12 と小 入 3 里に 途 中 L 3/ ホ 右折 4 牛 すべ -17-ウ、 1 道 ブ 甚 + ni + サ、 細 < ウ 左 ラ 折 右 3 曲 U ウ "

1 前 0 溪 を n 谷き は まり T 小 圖 17 出 づ、 此 間 12 丰 1 ナ 1 13 サ 亦 7 7 1 nº サ あ

Jij 崎

1

は

を

快

3

叫

U

1

T

伊

古昨 故 更 眺れ ゥ ば、 手 望 12 此 屋 より 其 度 妝 な 口野 伊 だ 3 は 吹 古 7 右 先 岩手 0 7 * 垂 峯 カ 淮 中 井 0 驛 は * 汉 T T 伊 手 11 離 は 12 吹 思 54 = L 22 1 Ш 古 車 植 1 T す 3 屋 物 1 = 西 愉 ば ブ 25 峠 講 20 + 進 南宮 > 習 6 シ 8 天 1 會 神 0) A + 0 CK VI 12 大 此 處 峠 = 12 12 + 鳥 口 町 居 12 1 サ 稱 面 て、 す を 計 1 出 2 ゲ n 3 0 E 4 2 L 17 T L \$ 中 + は 眞 登 1 T 仙 3 道 道 Ш * 0 道 3/ 者 0 天 12 ナ 1ª を 兩 3 3/ 神 分 3 招 側 な 峠 11 4 12 は す は T 育 路 此 此 尾 5 上 Ш 14 濃 24 時續 北 T 採 0 技はの 17 平 集 左 東 淮 * 者 出 野 8 北 8 は 0 L 淮 12 id 脚 來 あ C 4 F 3 折 5 圣 又 手 21 3 伏 待 17 1 * 任 越 12 L 達 せ、 T 行 2 古 け T 行 サ 人 屋 此 叉を 里 ラ 8 峠 냶 送 0 3 此 約 頂 間 7 12 3/ 其 至 E

衣 T を 51 其 麥を ~ 峠 最 ウ とな F. 奥 より 82 \$ 風 Æ 產 寐 * 近 Do 俗 1 51 3 黑 大 年 世 す 古 漸 カ 足 T 整 12 菜 17 漸 ず JII 1 9 屋 着 3 ラ、 1 多 異 女 0 < 0 古 煮 續 衣 ベ投 客 b 養 僅 F. 屋 1 為 21 汁 服 4 # 0 流 は 15 V 稗 本 は 前 太 近 羊 12 8 12 1 始 秋 便 12 た T 2 L づ 3 膓 結 蕎 H 垂 所太 出 8 H 2 0 T に股 変を n 井 づ 车 緇 L ば サ 1 里 古 U 12 入 0 分言 ウ 3 \$ 徑 裾 T る T 12 漬 民飼 作 茶 は 古 を 3 \$ \$ H \$ 育 3 春 烟 X 里呼 あ 甞 切 着 置か法 0 日 は 7 17 を 切 5 3 < 甚 ス 孙 領 F L 6 T 芝 買 手 は P だ 取 な ウ 3 T U * L をとらず、 的 5 幼 故 6 6 + v T 來 洗 思 稚 1 1 , 途 0 12 其 ふば 5 は ナ 手 51 食 由 1 4 J 儘 T ず 1 拭 1 料 全 1 1 P 用 着 51 か T は 村 = 术 1 富 不 2 n 12 宿 T 6 多 P 7 藤 2 な 完 るなど、 は 女 士 0 < 原 デ 3 7 2 たま 5 全 4 fi. " 垂 * 1 1 春 郎 將 カ な 井 姓 1º æ ~ 洗 2 婦女 17 0 t = と亭主 其 6 至 如 鉢 * " 110 きま は 变 不 3 滑 ナ 卷 w 體 4 を 老 F デ 追 酒 ~ 裁 洗 3 0 1 例 T ウ な \$ Cs 屋 見 名 幼 不 は 0 L C Ш 17 1º 潔 \equiv す n 持 頭 \$ 0 な ば 呼 L 皆 里 1 フ 込 3 髷 腹 漸 CK C 12 U 豆 カ 2 3 却 捨 を上 腐 12 U あ ナ 夏 0 12 眞. 3 炭 屋 點 7 3/ 言 12 T す 黑 0 \$ を 4 +" ダ 近 不 3 た 燒 12 內 小 1 零 づ 12 な 煙 2 4 里 丰 12 6 堪 H 3 茶 等 な 的 6 入 2 Vi 5 實 島 僻 古 1 3 を ウ 3 でざる 爐 作 V) 10 田 地屋 胴 チ * 0 には 聊 5 去 0 奇 前 12 生 飯 し春 10 H 觀 3 結 ラ 53 業 H 納 T L 12 食 谷 8 3/ CK な L 層 米の 得 3

〇伊吹山 川 崎

CX L 7 刻 は 食物の如うも 藤 原富士 12 燒 麩 位 Ŧī. 郎 0 時 と稱 4 に前の谷川 0 0 L 7 此 故、 村 12 鑵 12 て釣 詰 例 外 0 6 用 0 風呂 意は 天魚 必要なり。 \$ T あれ 7 T 璺 36 の鹽焼に舌皷打たしむることもあれども、 ありて客をまてども、 不 南不愛想なるは 村 3 は 般 かっ 15

宿料 it 漬 拾 Ŧī. 錢 內外 案內料 は七八 拾錢 な b 特に上 ~寺 下りて闘ヶ原迄つれ 行 V ば 壹 圓 Ŀ 野 12 下 b T 長

岡まてつれ行けば壹圓貳拾錢を普通とす。

1) 藤 者 抗 本 7 U 年五 1 圭 0 -12 宿 あ 故 介 望 ガ を 0 3 隣 伴 月 17 3/ t O. 1 等 t IJ サ 切 1% 12 C 1 終に 6 10 採 權 ウ L 1 I 0 か 案内とし 次郎 C 6 ブ 的 7 果 + 來 漢 IJ 代 7 名 とい か郎とは 3 b 笹 トリとコ 分ち 叉 な = = T 0 n ふ老翁 n 我 て採薬に シトシュ ども 師 家 J. チ サ サ 12 12 0 ウ、 其 至 あ + 周 せい 5 17 1 子 園 5 各 登 種の を採るべ w サ 0 17 5 薬 ウ 植 到 本年八 L 7 草に 底今 產 サ えん 8 カカ 7 地 0 ウ (カマッポンノンノンナ とて、 < を知 拾歲 不 H 登 熱 盖 は 2 * 心 登 6 3 L な なるを語 麻 n しとき、 梦 伊 n 3.2 吹 اع 畑及茶 以 = 也 ぬと引き返 て、 * 1 山 1 + 隨 ウ、 ブ 畑を 案 其 7 5 + 内 丈 = 0 グ 7 折 倒 せ 12 本 夫なること 1 草學 ラ ウ は 4 L ò チ , 争ふことあ V 7 サ 重 才 ウ、 此 寶 者 1 老人 移 な 51 EE 5 壯 植 0 7 いた L 小木 を始 他 者 て 7 る由 風變り を 3 ブ 0 等數 牛 生 L 8 n V サ L 地を知 ど本 0) ふとこ ウ、 3 5 + L 種 n 所 年 ど猶 あ 8 3 3 甞 T あ は サ 6 稍 T 植え置きて 5 せ Ľ, 弱 は 2 が、 前 0 6 T 江 1: 周 51 内 L 馬 圍 其 伊 せ かっ 春 ン .7 子 h 12 吹 力 嶺 力 イ は 2 Ш 0 9 サ

なり えて 12 t 2 Ш は Ŀ ò サ 17 るこ 途 登 ウ 力 は 4 3 + は 哥 ナ 其 セ 通 1 " " 0 ガ 畑 道 サ " Ł プ 54 110 優 町 1 は 42 サ 7 サ L L ウ 宿 3 t C 1. 0 前 チ + 7 11 术 茂 1 12 ナ ウ 驷 10 T 3/ 紙 JII 1 * 7 0 サ 貯 驷 渡 ウ IV 力 5 紙 藏 あ ガ 术 貯 場 2 あ Ш 2 藏 笹叉は 場 5 0 ウ 1 丰 0 IJ 裏、 110 其 腹 邊 8 1 1 人家 西 1º 力 ス 面 L 7 サ 甘 T + 笹 デ 牛 茶 亦 . 万 又 0 中 計 I, 七 3 * サ 1 5 10 1 × 採 + 0 7 1 1 ウ n ウ Ш 7 3 サ 力 は 村 X 1/E 54 17 デ 7 1 3 L 出 ブ て づ、 等 牛 水 1 茂 ŀ ッ ブ 屋 古 + 1 6 = + 1 グ 术 點 屋 チ ウ t ス 等 * 7 5 サ 覆 あ ウ、 ウ 笹 八 又を CA 町 テ 計 笹 2

2

L

T

吹

少あ 又 t < 0 平 容 Ш 17 出 道 は 漸 此 所 狭 里 8 12 < 八 な L " 6 T 明 石 は F. ヤ 念 不 寺 " 大 4. 5 カブ 3 6 ラ 來 灌 3 7 道 木 称 は 17 道 合 を 覆 此 行 CA 紀 T 1) L 12 容 H 3 先 木 2 12 1 Ш 武 0 極 1 23 T 腹 困 8 越 難 な 文 T 彌 高 及 + 町 F. 計 野 6 15 51 至 L 3 小

3 17 1 ŀ 51 ウ 合 nº L 别 12 5 殺 近 入 す 3 あ iT. 生 3 前申 國 る 3 育 2 進 F. 12 地 其 膽 方に とか -1-7 4 從 12 使 吹 ٤ T L 者 Ш 71 쁜 聞 1 入 1 ス 得 T n L 3 町 1 足 在 登 ば 大 荒 1 V 計 求 蛇 道 蛇 Ш 6 神 * 町 此 0 跨 田川 7 す 行 右 ウ 3 it 計 邊 楝 獨 解 12 ば 劒 51 は 1 行 E 6 L IJ は、 21 盛 穴 Ш 谱 宫 サ 1 + L 15 7 重印 管 風 ウ 15 T 稱 起 前 一媛家 穴 雲 0 IV Ш 3 す 灰叉 零 腹 3 あ ~ 久 5 力 サ カ \$ 徒 t 水 點 ++" ウ 6 ラ 0 有 行 零 7 * 漸 清 \exists 道 12 至 + 1 歸 サ 水 ウ 0 霧 膽 0 左 頂 湧 吹 6 ~ 谷 ٤ E 力 出 # 側 曀 III 神景 稱 12 右 + 復 I, 5 3 近 す ウ ウ 間 無 0 代 づ 金 3 道 方 計 行 大 穴 4 剛 蛇 10 1 1 9 淮 當 のば 3/ 水 = 0 75 等 前 木 IJ 7 所 棲 消 J 1. 生 50 42 は 稱 遑 不 知算 出 少道 す 育 あ 不 :1 す、 5 1 0 至が 1 知 、此 な 其 兩 神 T 5 側 8 近 進 穴 跋 化 2 0 12 5 1 U 浩 蛇 尋 ウ は 入 然 54 2 謂 x 是大 AJ 此 は 口 凌 四 は 12 110 ラ 道 霧 ば テ 町 1 は 丰 徑 强 蛇 方 サ Ш 計 者 I 110 fi. 行 ウ、 腹 尺 荒 ウ + 6 方 石 r を 1 51 計 僅 神 あ 廻 L 得 水 h 12 V 6 1 T iz 出 使 1 t E T IJ 道 L 41 Ŀ. サ 2 P C 旣 野 淮 ウ 得 0

6 小上れ 17 T 伊 知 10 3 深 5 植 吹 屋 ず 谷 物 0 1 013 F 谷 DO \$, 17 な 3 + L * 町 淮 1) 1 17 3: 2 n 1 T サ 岸 ば 如 サ 12 + 頂 頂 町 Ŀ F. 計 泉 小 +" 伊 17 0 1 5 水 吹 達 平 T 110 12 0 1 L 12 て、 3 絕 1 -+)-達 壁 2 ウ、 Æ 1 大 繁茂 野 ス 大 得 3/ 谷 な ダ n 3 E 7 又 1 \$ あ 1 黄 1 5 1 2 蓮 1ª E 18 稻 12 3 = , は Ŀ 12 あ 道 11 5 17 11 此 出 2 あ 終 谷 主 5 17 を 30 人 笹 上此 叉れ は n 邊 称 di 011 す 登 上途 力 n 3 に中 37 とも 桑 7. 出 力 づ 畑 困 3 0 中 余 難 太 < は な 道に 美 登 * 5 大 音 横 な 6 * 放 L 別 6 3 岩 2 12 谷 0 とな 本 を あ 道 登 6 杉 Vi 檜 6 罪 其 T 茂

屋

t

8

F

郎

は 溪

文 流

永

年

間 3

此

Ш

12 ---

據 ば

* か

か

女

L ×

Ш =

贼

12

L

T

怪

あ 所

8

惱

L 答

世

2

害 頂

六 吹

角

賴

綱 郎

0

寫 屋

12

Ċ

1E

2

41

3

t

5

Ш

50

n

ば

12

伊

彌

0

跡

あ

本町

6

-1

1

伊吹山

Ji]

崎

なら 種 類 t は V は 登 j 灌 \$ L 0 木 道 な ことな を覆 るべ 17 N れば知 雜 礎 草 石 猶 5 行 ず、 路 散 を坊 在 す 此 げ 口 53 て登 此 て、 所 b t 75 セ 6 12 " Ш の拳 プ 1 サ を渡 此 ウ、 П は 6 植物の T 5 泉 ケ 2 水 種 平 ラ 2 類 12 * 多 出 採 1 づ るとを得 面白 6 1き様子 12 とも、 なれ 力 春 0) 終 以 頃

后

頂上

ÍĦ 廣 平 17 L て、 西南 小 高奶 部 分 を彌勒 平 3 U 11 130 4 5 稱 東 北 弘 泉 水平 -iz セ ス 1 120 イ ラ 3

あり、朝 畑 V 1 3 24 ウサ 1 此 ->-1 ウ、 n サ 角 1 + 塔 央 1 3 等 12 プ + 紅 建 彌 中 1 白 勒 0 3 V 3 菩 紫各艶を競 7 2 17 リ 時 薩 柱を ウ サ 3 等、 ウ、 祀 埋 ti 石ツ CA 1 3 U T 3 ブ 石 翁 足を入るし 丰 室 より 1,2 1 あ ラ 穴 6 生い 4 1 堀 才 本 能は 出 h 拿 彌 グ でて盛に L ざる > 17 勒 菩 ナ 中 程 I 1 薩 6 なり、 生育 フ は ウ 飛 17 すっ 刀 行 彌勒 及 F. 1 CX 人 佛 ブ 0 0 石室 作 + 像 なり 出 牛 0 1 L 25 と傳 邊 110 1 10 は、 サ ウ、 此 1 t 邊 1. x ŀ r IJ 所 1 7 力 謂 10 ブ 伊 12 吹 1 T 7 0 D 御 = 角 花 セ 塔

尾 にあらざる 出 帆 家なら 頂上 は 船 0 尤も見事 Ш 12 0 0 蒸氣 寫 12 4 眺 近れは 望 かっ 登 17 朓 Ш 事 船 HJ. 12 甚 望 者 は だ 13. 濃く L 恰 4 て、 为 佳 妨 遠さ 多く 蟻 Vi 20 F. 0 L 5 て、 n 午 は 盃 1 淡く 前 = Ŀ 登 5 17 琵 宛然畵 と雲 漂 琶 Ш 時 者 ふに の 頃に宿を發 際 碧 をし 圣 0 似 瑠 T 離 如 72 璃 失望 6 れて L は L 眼 て、 睛 眼を 凉 下 난 17 風 n L 四 頂 鏡 35 0 72 3 方に Ŀ 1 0 ること多 12 17 秋 如 < 清 放 B 0 出を拜 光 日には駿の富士賀 T は、 を射 竹生 勢江 すされ 伊 出 島 吹 竹 は 0 島 ど此 真に 名 10 神 ふる 和 1 山霧 或 島 仙 0 更なり、 は 境 白山を望む は 甚 此 51 だ多 霧 4 あ 多 指 3 3 5 城 0 摘 故 晴 威 ٤ 和 すべ 兩 息 あ V n 丹三濃 吹 た 5 < I 其 3 特 H 故 間 6 出 4 51 12 を 採 稻 日 越

0 形 をな 17 泉 Ш 所 と称 傳 T L 伊 吹中 央低き所に 郎 0 庭 水溜 園なりし 5 て、 小池 今は笹 をなす、 傍に 面 51 生 Ł N 高 茂 Ш 0) 形を 3 なすと ウ 稱 する岩 X

は

JII

崎

伊

其上に伸ひ上りて、繖形花をつく。

植物

を増 牧 部 此 分 野 有 識 L 先 Ш 1 0 植 田 生 ダ 0 0 採 物 信 植 ケ、 集 0 を 長 物 あ 伊 以 12 永 目 吹 0) n 此 T 禄 如きも ば 名 + 錄 5 Ш は L 植 高 南 已经 故 物講 餘 蠻 入に のすら、 程 42 7 の多 習會 脫 飯 公沿然齊: 稿 命 數 の際 して外 L 余が今日までに敷 あれ 年々 ある 先生を始 なるべ 會員がど ば 邦 17 減 0) 藥 少し、 他 め 草を 日 L 採 發 5 各本 齎 藥草土産とする伊 an L 表 Ŀ. ららさ 0 は ど採 げし 僅 草 期あるべ 51 家 L 五六 め、 集 は 0 壹千 家 好 研 0 百 此 種に 究場 人 餘種に及べり、 Ш 今弦に 吹 3 12 方五 为 となり、 百草の價上をなすに 過ぎざりし の多きと、 拾 は 省さて記 町 大 0 循採 から 藥 17 築草 世 園 さず。 夫れ を作 集 12 採 0 知 度 至 6 は 5 5 毎 た 移 n 3 0 1. 增 17 植 F 加 12 せ 2 野 至 L 共 種 方 n 8 面 づ 6 I 1 0 は ŀ _ 昨 數小 ウ

昆蟲

同 8 開 昆蟲 Ш 特 か 博士 種 n L 0 t とも D 12 6 T 稱 すべ 數 昆 + 蟲 き名 種 採 あ 集を目的とし りとい 和靖氏によりて、 T Ш するも 渐 く昆 0 蟲 多く 0 好採集場たることを知られ、 なれ 3 此 (1) 0 昆 由か幾千種あるかは知らざれとも、 仝氏 2 數回此山に

贻

るも 1 貝 類 0 學 3 時 Z 者 ヂ 平 瀨 7 1 與 7 郎 1 氏 + 54 より セ n 調 ガ 查 1 せら * 7 +" 12 セ w ガ + 1 餘 種 オ 赤 あ 7 6 ٤, 7 次 = 余 V 植 物 学 採 0 集 外 0 名 傍 + 秱 數 を知らず、 種 を得 たれ 仝山特種と稱 -1

Ganesella jacobii Pilsbry. Clausilia martensi var reiniana

島 治

神

烟を吐 謂ふ所

時 向

4

鳴

動し

て砂

記事傳説の其實を誤るとを辯したるものなれ共、 此記は余が昨年天遊鉾を質見したる後、

天逆鉾は、

宮崎

縣

郡

東霧島

Ш

(叉高

千穂嶽と云

3

の巓に在り、

神

15

の物と称

す

恭

L

神

代

史

0

日

之高

7 縣

穗之外志 西諸 種 なりといふ。

1.1.8 13

石

ゲリ + 石 灰 7 牛 より IJ なり、 ヤ ブ 鐘 U 乳石、 1 F 7 石 y 荀 + は 等 Ш 0 0 化 西 石 部 は 石 谷 灰 0 地 53 產 見 地 1 6 出 3 取 30 6 出さ 精 密に n 調 方解 查 す 11 石 d は風 猶幾 穴 0 上 多 0 12 化石ある 出 て、 3 3 がフ

如 i

あるべし。 昆 以上 虫を研究し は 僅 12 余が拾數回 ある某氏と、 の登山に、 伊 吹 見聞 山植物昆蟲目録を出す筈なれ せし 所を集めて 書き下せし ば、 もの なれ 他 日精 ば、 探 の上、 猶 足らざる所多 諸君 の高質 17 供するこ 現今仝山

天 逆 鉾 記

觀

臺 北

四

内

金

吾

否友の學校教職に在る者に送りたるものなり、 亦登山に参考となるはとあらん、讀者諒焉。 故に主として鉾の形狀と其所在に就 +

詳

説に、

石を雨らす、 布流多氮と稱するも 村民畏 のに T L 靈の怒となし、 て即ち 天孫の降臨地なり、 稀 111 な 腹に 間 火 あ Ш は 常 12 水化

12 神 登覽する奢甚

+ 宫 九 鹿 年 兒 月十 島 市 六日 8 0 + 余公暇を得 170 里 鹿 て、 兒 島 歸 縣 展 始 良 0 次、 郡 市東襲山村大字R 大字 至る、 田 口 12 あ 3 H 12 天逆鉾を見んと欲 詣 社 前 0 旅 舍 12 投 先 つ山 L

觀天逆

0

四

內

L

T

容

樊

10

困

Tr

+

Fi.

分

時

を要

世

60

內

觀

腔 地 地 6 * 霧 T 变 起 候 Ŧ す 埋 巅 島 叢 6 8 哨 生. 定 水 す でまる 0 朓 百 流 塱 74 草 П 北 17 甚 + 高 木 1 12 3 能 採 佳 ---向 せ 取 な 七 < L 0 N 0 長 所 L 5 高 八 足 尺 -13-12 T 騰 所 3 路 あ L 12 4 傍に 位 とな T 精 5 流 此 製 B 是を 3 水な 地 난 廢 屋 1 L H 桑 山等樹 あ 隅 9 L 所 原 噴 な 6. 神が林 存 0 火 諸 之をてら川と称 5 原えの 兵 と云 と『間 口 屋 衞 Ш 17 壁 E * 3 3 皆脚 歪る 点 崩 行くと、 落 夫 更に 凡 僅 東 とな 下 そ八 霧 か 54 す、 萱 雌 凡そ 23 島 草 伏 HT 榱 Ш 其 及 往 灌 柱 は 木 を遺 近 12 (登 程 1 0 柳 M 眼 間 古、 島 3 以 E 1/2 凡 13 前 -* 1 E 是 + 近 路 は T 15 7 3 祭 町 XL 1 は 2 草 12 草 神 海 L £, 野 木 灣 宮 絕 T 年 10 黑 15 0 凡 間貨 浮 前 烟 出 T T そ十 無 火 加加公 天 0 治手 3 漁 拔 木+開 0 蔽 稍 如 問 磔 0 CA 平 t 人 T 脚 町 其 出 砂 岳 12 12 1 は 巔 40 Ħ. 磊 L 杉 遠 を L B す 某、 T T 開 急 雲 礫 3 心 Jil 硫 豁 此 あ 磺 礫 12

或 \$ 東 ा 遠 外 は 9 側 暗 烟 8 12 黑 12 Ŧi. は 火 六 It. 12 5 則 砂 4 ち は 3 吹 石 鳴 あ 雨 E 3 其 動 5 深 周 狀 模 飛 放 2 邊 人 樣 は 散 或 を h は とな 孔 L L L H 里 亂 E 七 12 T は 八 3 舞 殆 暗 L 6 Ш す 脚 た 2 h 烟 + T 3 2 12 3 自 間 近 1 とか 南 罪 \$ 17 L (t) 5 近 達 せ 6 8 L す 12 大 四 方 在 斯 難 或 v. 孔 は 其 は は 6 O; 1 ٥ 狀 奮 稍 如 此 煤 3 黑 鬭 低 + H す 摺 3 縋 _ 天 若 鉢其 74 3 氣 は 年 あ 0 底 0 清 灰 K 生 以 9 朗 方 前 54 伍 至 缺 3 在 3 外 L 凡 A 4 T 6 け 4 そ七 0 火 72 大 負 V 噴 3 口 抵 傷 難 部 出 为言 八 穏な 多さとさ 7 晴 L L 如 72 導 L 間 天 夫 ò 永 3 南 部 115 E 底 < 北は則ち 12 部 瘾 0 < 視 如台 3 其 階 す 0 色、 火 n 孔 T 噴 0 13 其 は 兩 盛 大 烟 喧 濃 侧 厚に な 腦 な 0 1 共に 3 减 屋 3 0 50 烟 8 小 0 L 東 は 如 T 0 17 3 其 は 其 た 向 3 岩 色 0 遠 VII 石 T 猛 * は 小 1 峙 Ŧi. 數 É [91] な 叉 里 里 な 3

以 か 13 暗 沸 火 4 尺 72 口 登 0 3 0 Ш 余 暗 西 地 端 0 坑 あ 人 17 1 12 ò 臨 5 其 T L 3 緣 1 或 左 12 沿 は 辅 は 往 行 則 15 ち 所 傾 北 3 風 斜 I 知 雨 急 h 5 0 東 12 す、 500 流 12 驷 n 或 0 T 6 は T 如 当は 非 幾 項 命 £ F 17 12 [11] 仞 登 死 A な す 专 3 3 3 3 所 者 聖 < 知 馬克 通 F. 5 3 過 す、 は 9 越三 3 5 者 益 0 日 な 3 能 此 L と云 凡 難 諦 關 2 視 あ 3 す 五. 3 3 HT か 是 者 à 為 n 鮮 5 8 其 な 名 右 0 世. は 肥 間 則 3 ち 所 僅烟

な

此

種

0

石

は

Ш

臓に

於

T

見

ざる

3

0

なれ

ば

Ш

j

齎

たるも

0

ならん、

逆

鉾

0

東

石

垣

0)

束

TC 0 0 12

觀 天逆

西 內

號 Ш 彿 如 石 L 0 0 崩 6 10 雜 其 3 至 石 4 雲 巓 此 0) 如 n 高 絕 其 草 以 積 は J. 好 間 巓 1 1 花 F. 許 多 13 或 53 景 12 12 h 起 火 は 大 10 火 Ш は を人 伏 と四 12 鉾 脏 地 隱 遠 小 T は 海 白 其 Hi 拳大 立 0 見 景 數 拔 垣 急 叉 0 ち 高 3 稍 24 す 玄 里 百 0 岩 Ŧ:. 若 # 峻 接 東 噴 八 な 嗇 3 添 12 余 0 櫻 T だ 險 < 石 す 北 水 す 太 \$ 寸 是 平 \$ 島 涉 尺 U U をら _ は 唇 阻 3 隅 なり 紫色に 0 t n 夷 12 る、 0 百 0 4 なるこ 所 t 0 5 高 なる 南 其 即 似 は 海 P9 露 うき 枯 な IF. 6 5 葢 畵 拔 巔上 소 尺 死 出 72 6 左 東 尺 嗣 尺 せる 所 L 致 7 6 L 折 1 12 許 或 位 ふ所 T 5 拙 t 5 H 稱 T 副 是を 拔 L は 0 凡 粤 0 筆 七 6 多 Ш T 1 壯 300 7 3 0 间 0 百 兩 0) 0) 眼 つくじ I 鹿 2 せ 斜に降ること、 者 天 積 t 界 能 0 Ŧī. だ 兒 を Ш 6 九 逆 州南 办 ならん、 < + 放 亦多 あ 1 0 L をな 3 島宮崎 悉す 鉾 坪 間 尚 5 + 文 T 甚 凡そ六百 13 な 余 坪 尺 13 部 0 12 L 0 L L 所 8 新ジに 扛 あ 枯 1 兩 東南 燃き在 登る 樹 5 旣 12 13 東 是れ せだを 縣 木 る能 あらす、 立 鉾 12 池 は L_ 其 0 凡そ 尺、 す 其 中 0 V) L 遠 13 2 + 間 17 境 秱 , T は 根 中 12 2 0 < 4 西 \equiv 12 1,2 Ξ .Fr. 書霧東: ざる底 是れ 方を 廻 霧 んじ 央 假 E 3 異 存 + な 狀 DU + 6 向死 0 加 Ш 島 n 年 す 分 間 M 開 皆に 1 1 0 水 0 份 Ш 5 DJ. 'n 17 0 は 4 近 北 1 6 如 平 を除 其 10 Ш 前 東 L 0 3 時 大 7 く高 5 北 < あ 大 野 方 0 草以と上 T 如 小 人 からら 大喷 0 A 4 6 < な せ 谿 全 0 0 あ 0 \$ 3 體 連 隔 いた 0 6 谷 出 湧 奉 石 所 外 日 聞 水 36 は -C L E 12 些 納 3 1 入 す 12 L 岳 -1-女 12 0 宫 層 至 其質 大瀛 1 堆 12 石 T る 车 合 は 比 0 因 カン 崎 3 積 6 72 便 天 DJ. 積 山 海 肩 根 B 1 3 縣 は を望 Ü 3 L み 日 脈 拔 前 3 廻 以 8 了 12 往 あ \$ * す、 下 は 芝 6 屬 0 時 台高 地 T は今 0 石 5 蔽 大 み 喧 なりと云 は 噴 被 寸 な面 其 垣 小 烟 CI 0 火 b 石 認なな 高 0 高 四 + 杖"砂 南 せ 尚 此 17 灰 内 は 3 脚 あ 等 低 -1-頃 9 12 所 因 下 12 と云 6 Im 九 下 相 九 H Ш あ L + T 層 尺 大 尺 L 尺 を 重 隅 籠 T 6 生 は 若 余 な 1 遮 畾 3 此 17 0 絕 西 堆 其 諸 3 13 多 草 施 4 12 竹 1 穑 + 坡 海 峯 山 Ш 島 合 な 3 L 數 伽 靈 束 天 波 至 頭 n 目 Ш 副

北

彷

浪燃

は

3 Ш 帶

+

Ŧi.

月

同

A

H

高

萬

等

3

所

な

1 T 天

未 孫

> 諾 L

> 神 12

0 T

天

降

6

せ か

L

2

知

5

說 此

何 Ш 則

0 0

據 項

カコ 51

8 置

3

聞

Da 有 12

叉

皇

12 12

献

古

3

所

0

為

17

1

皇

孫

妙

12

降

臨

0

時

諸

を山

12

安

L

C

天

F

萬

鎮 日 2

標

す

3

南 n 余 3

0 大 寡 ιĖΙ

6 書 17 42

E 聞 來

神

日

本

記 泰 # 逆

通

證

題落

名

勝

志

L

大已貴

國

土經

營の

時

杖

つき給ひ

i 以て、 まほ

憲矛を經

È 世: 說

武 12 17

甕

槌

0

神

17

據 な

Vi

天

其

鉾 ٤

*

力

給

CA

12 17

至

5

其 な

儘 6

1.2

絕

T

5

T 垂

3

*

天

0

鉾 n

逆 霧

X

0

IT

を

以

T

是を

探

見

た

3

戜

H

n

は

ち

此

所

12

跡

*

給

2

島

Ш

と名

0

內

觀

54 於 17 碑 1 發 あ + 1 た 石 3 浩 風 方 國 穴 村 * 10 然に L 種 C 貯 高 平 3 藏 0 尺 0 為 建 有 di 0 修 余 繕 L 是 n 其 日 安 向 0 全 8 ٨ 藤 新 Ш 3 が鐵 太 為 23 郎 永 續 園 燈 H 梅 吉 L T 及 答 TX 淮 押 せ 領 る 口 多 篤 信 0 50 为言 L C 此 明 治

あ 手 す 仰 n 帶 面 3 C 8 眼 向 面 云 溢 は 平 幹 以 鉾 鉾 耳 W 0 薩 頭 滑 鼻 た 年 ## 1 如 0 0 T は から 摩 說 益 み 3 堆 砥 傳 0 璲 鼻竅 石 为 諾 說 風 t 54 小凹 6 C 3 n 如 0 0 + 由 0 7 見 來 脚 6 I L Ŀ. 柱 誤 記 一點と些 部 2 古 d' 6 12 0 謬 WD たる 鼻 露 御 或 12 動 T 書 12 至 魔 は 神 非 是 0 20 頭 部 出 小 る迄 かっ は 傳 藩 12 す E す n 专 0 ふる 如 至 細 る 天 1. < 名 風 青 る二寸 < 霜 縦 < 2 浮 則 勝 地 銹 2 所 17 廻 12 橋 長 志 F b 12 あ 其 0 管 3 相 L 幾 尺三 5 然 文 尺 痕 T 尺 Ŀ 見 同 12 を 分) 1 許 多 絕 るに DO た L 0 0 寸 寸 深 存 华 6 粗 n カン T すい 300 ٤ 霧 折 游 6 風 口 漏 は 太さ大な な す 斷 鉾 岛 雨 は 頂 0 54 是 判 3 1-海 目 出 12 L 0 插 12 72 然 は * 確 或 曝 項 入 3 3 具 尚 詠 は 由 露 3 F. 1 扁 な か L 足 6 竹 72 ほ 平 は 8 1 E 7 あ F 之 12 F は 程 72 3 高 す h 3 < 3 見 を P L る 痕 低 L 17 2 T 給 觀 ^ T 高 12 跡 あ 有 と六 圆 名 難 倒 82 比 な 5 叉 面 3 八 さまに 尺 T 以 長 は す L 果 L な 程 水 F 7 な 小 3 n 云 1 逆 は 平 T は 10 島 採 4 面 鉾 叉 L 角 腐 1 な 倒 0) 檢 地 漸 らず 廻 如 家 中四 は 蝕 T 7 T 西 葢 外 < 7 小 1 < 橘 游 15 尺 立 程 觀 居 大 東 12 記 南 許 4 青 見 溪 5 は H. 3 西 2 40 是れ 滑 肠 青 叉 L 兩 12 は 銅 0 其 人 分 T 側 1 3 3 澤 鑄 介 3 其 今 廻 12 1 石 CK 面 17 明 0 著 浩 0 な 里 盆 突 12 日 0 L あ 物 榕 T 小 5 尺 樣 玥 C 0 厚 打 薄 突 7 八 端 な 合 な 5 儿 存 起 3 黑 寸 遊 0 T す _ 0) は < あ 或 2: A 4 記 形 所 3 柱 狀 12 金 所 稍 6 云 至 面 Ŧī. 17 0 其 3 3 分 叙 南 0 54 靑 御 其 鉾 模 皺 色 あ 相 面 神 表 折 5 出 違 12 す 襞

ざるべ

枝術

進

步

1

原資豐富となり

たる後

12

至

6

鑄

造

72

3

2,

0

ならん

と思

惟

古

3

み

〇觀天逝 鉾

四 内

Ш 號 のも 當 定せ 古 南 此 42 孫 1 4 0 15 な 祭 到 不 3 きもの 時已に 優 n な其 世 足 史を按す 至 17 此 6 說 事 な 八 献 12 17 高 ò 5 LL T 9 故 亦 を成 、憑る F. Z 6 尋告多 た 存 Ш 灌 至 6 す、 疑 矛雪 錬 额 12 6 12 L 3 [11] 天 詩 も木 所を ふべ 傳 者 鍛 3 孫 銘 19 n H 0 た 天 建 力 事 17 3 字 孫 設 為 來 其 17 あ 12 \$ 若し 0) はせり なり な 製 字 開 神 迨 降 2 其 * 0 至 6 多 示 0 一製作 臨地 降 5 12 木 H 代 小 h 之に さす 2 刻 3 th L 色云 なら に於 臨 居 あ 偏 3 T は せ h 0 0 或 其 古 * 6 0 す 3 12 方言 5 非 反 其 なることは ん、 L 他鉾 300 属せ 時 3 L 如 難 由 す 信 は 史 現 斯 T を 之 は る説 佛 代 實 か 1 L 天 來 10 ことを 之発金がれ 殆 思 を詮 を天 * 其 は る を鑑定 12 3 1 1 家 道 傳 鋒 證 んと人 時 考 かと云 3 3 8 由 m しと 山ごす 日に 古 17 鑿することを要せざるべし、 な 知 者 孫 2 刄 明 他 L な す 17 3 17 L 12 3 室 家 t 我 0 0 且夫れ 鐵 3 0 於 書 鉾 國 ~ h 開 奉 B 不 C 0 ~ 能 想 3 L は L 圣 般に 抑 献 證 2 は 12 Ш C 取 は ず 像 雪 明 12 最 佛 は 標 L n 萬 ¢ 神 古 ざるは する 用 3 古 認 な 5 此 72 は 世 L 敎 ൬ 代に於て斯 T 3 只 能 的 事 4, か 8 須 鉾 6 個 47 0 0 も其 所なり 鏡 と云 事 渡 られ、 らく 元來 神 傳 はざる所なり。 17 記 0 武 n 器 遗 古 あ 來 作作 代 ^ 傳 天 並 銘 h 書 後 U 孫 12 以 確實なる、 憾 0 らざる 51 叉劍 逆鉾 1,2 字 の降 L 後 6 天 25 其降臨の際之を紀念として建てたりとの かる宏大なるものを製作 是れ な 或 す 猫 散 I 漢 為 T 天香· 亦久 しと 臨以 3 鋒 3 逆 鉾 見 劒 藝 人 は をして 然るに 所 靈 7 發 祈 な 我 12 せ 雖、 矛 因 技 次き珍 共 逹 山の しく 證 願の な 前 5 0 6 6 17 T 如 術 17 L 明 3 神代 夙に 為 平田 銅 神代の物なりと云ふも其 稻 私 兵器を作らしめたること 擬 未 夙 金 あることを要す。 を採 め奉献し 神 只 せ L 力 12 寳 12 銅 とな 宏壯 天逆鉾 漫 12 進 尊 L て 翁 諸 の物なりと稱 か 12 考 偵 步 は 面 りて日矛を鑄造し 8 礦 神 せ せ 72 ふる 雄 世 大 亦 察 8 と称 代 3 大 3 L 已 5 各 たるものなり 0 L 高め 其 な 鏡 12 \$ 12 6 貴 n 地 得 於 逆鉾 降 2) 3 L 鑑 神 た 12 L たるやは 出 T な 神 臨 为 5 產 L 為 0 0 代の は 雲 5 地 かい 如 廣 て人 は 0 出 3 神 矛 學 國 L 此 'n 3 * との 稱 あ た 說 物 fi. 代 3 0 0 鑄 否 4 H 問問 崇敬 3 4 0 5 内 本 12 漸 3 なりと +" 如 造 余 傳 3 す 國 は 說 物 L ことあ 田× 武 鉾 1 不 2 說 あれ 製 尊 鑄 彼 12 狭* 才 所 12 h す 多 42 3 之が 3 0) T. 17 南 は 0 0 13 像 0

比上木

良ラ製

其 術

\$

原

足

な

订章

共

碑

所

T

是

n

告

誇

大

12

渦

ぎ

登

Ш

者

0

勇

氣

r

III

喪

#

L

8

世

人

3

L

T

畏

懼

-p'-

L

T

3

恐

あ

5

夫

22

高

Ш

は

陰

晴

常

な

5

4

風

內

觀

恐ろ E 風 L 陰 哲 9 雨 0 姿 語 布 起 紀 0 瓣 0) b 行 響 鬻 不 12 Ħ な 田 8 L n 聞 議 畫 T 1. 17 購 此 \$ ば 怪 夜 Ш 人 出 異 7 0 * 珍 成 T 神 害 杏 怪 1 6 A す 3 * 或 る * 傳 事 吞 は 3 登 图图 1; 3 SZ 3 霧 3 者 12 0 3 不迷 時 L Cs 又 其 12 野 或 外 紛 日 1 種 馬 失 12 之云 す 毒此 4 0 3 蛇 Ш 壶 2 猛 蛇 42 耀 加 0 あ の奇 惡 8 6 殃 嶷 3 異 獸 5 特 犬 被 蚰 形 3 12 蛛 馬 此 3 著 0 Ш 者 大 如 12 古 蝦 1 は 慕 蚺 髪 1 to 等 蛇 夥 長 多 6 < h L 住 Ill 云 X 鳴 17 T 0 地 北 * 池 西 引 游 0 瑣

は 12 Di 池 沸 蛇 固 啃 至 雨 3 1 6 韓 烟 3 僅 0 1 泉 L 0 0 威 縋 かっ 兩 ず 稱 種 h あ 及 大 毒 島 12 脚 す 山 曷 類 幻 Z だ 出 17 林 即 蛇 亦 CX 4 震 半 至 泉 5 精 畏 略 3 平 曾 高 Im 3 動 T 12 な Ш L L F 怖ほ 1 地 は < 1 6 T 穗 A 其 7 0) 4 議 蒜 害 足 其 秀 搩 溫 嶽 3 0) 他 显 路 故 化 靈 玄 3 檢 泉 17 知 珍 あ b W. 12 白 獸 12 は 12 す 13 足 3 1 Vt 道 深 富 L 3 11: 鳥 ら所 奇 又 T 數 蟲 す は 山 7 水 6 夫 林 岳 h E 医图 鉾 短 + P 在 0 \$ Ш 御事を 又 谷 雄 は n 亦 \mathbf{B} 有 夷 0 * 麻中 子 守 3 手發 猛 觀 餘 若 6 爆 洗如 潤 此 涉 な 里 0 山 夫 1 發 な 能 8 1 大 山 6 谷 さし 大 棲 鳴 0 池菜難 蛇 す 無 蜘 息 0 多 6 < 其 東 動 案 却 す 古 質 數 四 蛛 3 3 蝮 內 高 3 \Box 15 T 面 0 霧 ならん あ 蛇 8 原 風 所 異 飛 大 意 カン 島 雨でら 蝦 始 3 草 致 4 12 10 瀑 0) Ш 度がと、 L 8 茂 其 あ 懸 表 0 4 * L 6 勝 巅 6 亚 等 17 合 * 荆 す 叉 然 I 甚 L 好 出 3 \Box 4 だ 死 見 然 世 6 30 n る 棘 L n 已 活 は A 高 火 存 共 稀 0 3 ば 梵事安 な あ בעל 12 П 火 在 今 12 廣 只 文书心 --3 6 6 高 0 Ш す H 何 袭 變じ ず 字っし 怕 年 所 F 3 は ぞ 南 + * 穂. とし 鹏 車 5 獨 日 1 る 數 -登 毎 往 は 海 0) T 魅 6 里 龜,岳 3 能 登 死 卿 歲 < 亦 水 此 T 12 イす は 登 0 嶽 * 火 3 魎 < 甚 Hi 石ジベ だ 湛 跨 水 Ш み は 0 15 Ш Λ 5 8 出 限 す 读 甚 あ 口 F 3 E 3 害 没 0 3 容 0) かっ Ti 6 6 破 JL 甲がは 容 \$, 2 路 す す 社 6 4 干 す 硫 3 3 裂 は 前 易 0 9 石切 尺 亦 氣 底 時 12 WC 15 在 時 通 L 3 4) 以 0 12 特 12 12 /L 3 Ľ 闡 L 噴 怪 あ 3 T J. 54 花楽勸 要 孔 \$ i 0 0 物 6 暖 す 高 ず 6 馬 12 Ш 其 實 あ 國 石が 鉴 + る 12 海 利 10 6 あ U) 冷 能 四 14 Ш は 5 猛 余 3 益 天 澤 あ 潤 E < 宛 1 + 溫 17 火然 な 6 3 毒 Ш 八 0

12

Ł

不

思

 \Box

<

L

探

檢

0 .6

好

材

料 (

な

突の 富士 (岩手山登攀記

志 村 烏 嶺

車 翼 千 H 歌 は ż ども 賀 涿 17 n 張 N 黑 し藤 らん 盛 浦 忘 4 圖 51 n 原氏 とし 51 扁 兼 12 入 舟 ね 白 T を浮 たる 3 河 代 0 雄 古 0 -一祭華の 志 • 信 遂 $\pm i$ 夫 を IZ 0 Ш 越 跡 蹉 山 克 * 跎 0 Ł C 平 北 浦 春 泉 Ū 風 征 梟雄 17 八 0 夫 訪 Ē 頃 か の英魂 权 八 秋 島 吾 風 萠 皆 から 51 10 * 胸袂 我 3 吊 12 圣 为 夏草 CI 舊 絕 L えず 知 IF 上 17. 6 萬 燃え 瑞 L 斛 或 古 願 寺に 立 0 の戦 を 熱 2 追 塵飛 扶 想 涙をそくぎ、 搖 吾 4 h 萬里 妻 T 藏 今 到らず、 0 王 朝 風 0 梧 を 幾 烟 桐 待 多 0 0 5 今 東風占斷 長短亭を 葉 T 日 \$ 3 北 5 度 天 駛 7. CK 12 圖 雕 走 + 秋 春 をは 南 H 2 0 3 鵬 聞

形を 裾 0 懷 T 沿 72 何 るを 人 盛岡 田 E は 留 物 4 T 車 くって すが 左方 72 8 仰 停 た 3 Ŀ ζ. 3 L 車 麥 大 n は 力 0 ベ平 場 * 秀 安 L ・蕪の 道 み、 南 前 覺 信 0 部 文 直 歌 館 富 地 岩 盛 此 ず。 きてと * な 岡 士 日 * 手 りと、 低 濛 隔 館 0 唱 惜い 市 氣 * T 髪の せ 深 出 街 1 6 嗚 を 哉 遙 < T 如 呼 離 力 ス 1 此 蕉 3 ば 1 Ш 12 附 リン 翁 1 頂 元 午 が夏 殆 近 P 0 陵 前 を用い h 輪 は 0 + 草 康 廓糢糊 起 進 時 Ó Œ 平 ふる 伏 U 句此 北 0 2 t 人 昔 東を急が ٤ 12 13 とし 3 少 其 は、 走 所 許 る 陸 て正確 51 0 瀧 奥 T 5 Ш 亭 8 0 12 容 せて 澤 豪族 4 亦 3 L な た 誦 カ 5 與州 T 火石 る老 安倍 メラ ず、 すへ 左 0 街 杉 0 方に緑 12 3 連 道 收 古 n Ш 族最 ど左 松、 むる能 な 新 樹 るべ 道 0 路 後 右 * は 2 0 欝 12 ず、 狹 决 蒼 引 北 H み 戰 其 72 走 天 場 るを 唯 3 0 た 悠 FI 後 1 6 * 見 然 方 1 路 遮 る、 た iz r は 蔽 余 12 3 北 車 覺 は 八 手 J: 東 字 往 夫 JII 山 叉 は な 時 形 0 0 ら概 を追 指 V) 麵 岸 熱 山然

白 衣 淨 鞋 8 此 着 地 け 方 0 たる道者が 俗 夜半岩手 \equiv ic 4 登 五 5 4 拂 馬 曉 12 頂 跨 上に 0 T 達し、 遇 日 出 4 3 2 拜 n 皆 昨 直 区下 夜 岩 Ш 手 L 40 T 登 即 Ш H L 盛 岡 今 10 H 歸 盛 るを常 畄 12 歸 3

〇奥の富士

志村

盛なる

かを見 を横

3

原

斷

T

路

は

松

林

0

中

に入る、

途

上人

馬

0

足

跡

縱

横

たるを

見

る

此

地

方

57

於

け

る岩手登

山

0

如

何

志 村

附 左 方 は 帶 1,2 馬 0 草 右 方 专 亦荒 0 地 な

を見 と能 る哉 音虫 るの 51 なし み、 3 仍 は 岡 0 と云 -聲 C 1 F 此 Ш 6 草の ち之 馬 太 如 城 12 約 何 I 登 L. 花 VZ 6 3 里 12 12 他 1 6 は、 は 僻 Å 眠 初 阪 車 る遊 推 は L 3 秋 細 0 澤 fill 歸 之 村 徑 T F- 0 7 字 原 42 知 12 より 巢益場 雖 低 頭 人 3 字 唱 を飾 \$ る Į 駄 猶 12 せ 5 酒 馬 13 至 3 此 4 馬 邊 茶 ٤ 國 5 子、 秀麗 店 草 賃 道 して 帶 3 鞋 を行くてと十 何 な 辭 猶 とを見ざることな 進むてとい る岩 II n L 種 かい T あ 詩 手寫 馬 淮 5 中 所 T. 士の 0 0 路 せ 町 者 構 俗 0 5 なら 姿 54 内に 12 左 L · 旣 方 余は T ざる、 L 12 12 然るに 帽 T 0 -起 岩鷲 此 左 廂 茶屋 伏 何 8 折 屋 と称 腿 此 小 Ш 支 n すい か なら草 みち 奥 54 路 書中の場 州 す T 12 1_ 草 街 入 鞋 道 原 2 6 話 * 3 景ならざる 17 72 所 す 沿 求 3 柳 4 平 17 8 澤 3 ム茶 點 1 原、 石 42 50 屋 ٤ 標 到 4 T た 及 17 せ Ш T 草. 3 嗚 す 憩 呼 0 松 B 5 T る 草 悠花 樹 U) 得 を見 かっ か 松 華 3 たの

見 不子より 克 手 72 登 3 Ш 番 者 進 画 * てと又約二 馬 宿 0) 泊 尿でし 3 U 里 枕 3 13 强 元 な 12 佐 3 4 て、 句 木 を、 漸 方 12 今 5 T 更 瀧 0 澤 普 村 如 < 字 通 柳 思 0 農 澤 N 出 家 12 達す、 3 な 3 6 茅舍 字 稍 Ŧī. 3 大 路 な 12 遊 n E \$ る村 陋 童 蕉 翁 力言 奥 0 細 道

日 社 時 未 所 だ 1 11 前 なら 同 12 とて、 字 以 1 * 語 新 歡 て、 同 3 氏 待 至 程 13 近 能 爱 7 き岩 Ш 登 はざるべ る 者 Ш 者 な 手 0 神 為 0 為 社 8 的 遙 51 登 路 余 12 拜 其 所 は 清 + 潔な 分 0 10 なる 般 賽 他 3 12 0 L 登 便 就 宿 山 宜 4 泊 家 7 * 所 * 謀 撮 のみならず、 詳 設 5 細 影をなす、 h な V らるい る模様 若 火 登 * 小 原宮 山 聞 Ш L < 研 竣 究家、 內 功 2 司 とを 記 を 0 訪 曉 編 高 17 得 N Ш it 中 L T 植 12 0 物 登 由 便 研 Ш 宜 本 究家等 誌 3 今 0 得 F: 口 便 72 12 否 新 3 T は 必 72 2 旣 は 今

馬

返

L

T

暫

時

休

額

せ

3

間

12

夜

は

全

<

明

4

は

な

n

V2

南

部

片

富

士

0

称

あ

3

岩

手

0)

秀

峰

Ш

容

清

新

眼

W.

3

才

を下り

17 登

沿 路

7

登ること二

T

H

1

險

*

示

2

h

とす

3

为言

8

L

0

3

5

3

以

あ

らかる

な

X

請之如

小ゴは

取;

1 决

す T

3 其

あ

5 Ш

傍 靈

5 な

40

清 L

泉 T

0)

混

K

とし 17

7

湧出せるを見る、

字 を 用 柳 度 澤 2 T 此 3 半 岩 Ш 事 越 3 丰 宿 12 な * 登 來 所 神 17 社 5 せ 得 とは 歸 h L 72 4 n 3 務 蛟 5 E 所 1 軍 B 小 勸 翌 0 日 鐵 原 誘 兄 嘴 + す 人 寐 麼 3 夫 12 具 名 器 內 氏 B t は 外 宛 6 非 物 0 聞 な 常 等 0 12 容 决 8 T 12 5 惱 Ш しところ 諸 23 岩 C 者 清 來 般 n 6 0 午 潔 照會 な ¥2 と云 T 後 投 6 此 宿 枕 2 3 Ш 寫 せ 12 ~ 53 3 登 か」 接 L 5 あ 置 5 30 ず か 1 6 6 h す 17 特 小 L 华 原 は 3 12 3 面 此 氏 夜 0 其 0 は 殆 最 注 0 あ B 意 便 6 ń 7. 17 益 は、 閉 t 至 瀬 6 大 豫 0 せ なる 如 l T 85 13 陸 蚊 余 中 張 は L 或 此 岩 村 な 獨 かっ 6 小 丰 12 原 最 郡 T 6 L Ŀ 氏 瀧 0 方 蛟 事 澤 な 8 村

四 行 0 51 T 0 行 1 苦 從 進 時 觀 翌 朝 な 1 U T 夫 0 8 5 來 時 如 征 # 四 n 3 衣 油 3 眼 他 2 時 0 0 草 登 吹 せ Ŧī. 四 山 + 人 P < 原 時 L 山 华 七 0 余 連 分 中 袋 路 出 12 Al 馬 芝の 方 果 は 發 は は 殆 t 結 迈 T んど 6 露 女 夜 束 L 12 深 中 72 L 12 來 真 逹 n 晤 夜 0) < 3 半 L 直 V 登 夜 す 數名 陰 n 出 Ш C 東 發 鞋 ば 何 3 等 天 せ 底 界 人 浸 0 漸 は 夫が 登 特 L 5 0 せだ < Ш 51 益 1 出 紅 冷 携 者 連 \$ な 夏 なけ あ 中 發 な 5 5 は S 來 せ 6 半 旣 6 12 9 海 內 氣 ば L 12 其 なる 拔 17 加 提 VO 合 燈 0 僅 再 名 51 騷 白 目 17 17 CX 眠 米 0 附 + 道 4 洋 爱に 突。 九 * L 3 近 度 照 3 人 51 2 七 は 5 午 12 蓬 見 せ 分 旣 前 眼 12 學 3 5 岩 水 秋 時 8 盛 星 立. 0 手 主 た 岡 0 如 ち 神 嬌 n 区 E 3 市 社 0 如 H 2 冷 遙 爲 多 t 燈 h 6 風 拜 8 光 來 面 所 21 植 n 0 を 萬 0 呼 物 る宣 拂 斛 側 分 7% 字 5 耙 布 2 0 12 1,0 * 7 0 登 前 香 過 狀 師 n 夜 能 0

ところ 足 U か 馬 返 5 1 毛 1 0 逸 . 5 足 物 阪 趾 な あ < 漸 嗚 6 呼 4 7 秀 仰 ケ 雕 17 振 A 在 將 3 为 才 坂 35 靈 n 12 峰 3 2 Ш 路 帶 廣 稱 漠 0 す 12 裾 入 な 6 3 野 ん , 原 條 とす 天下 0 野 駿 鐵 るところに 17 馬 銷 0 名 あ 幾 高 6 群 3 南 余 は 部 如 沼 馬 斯 澤 0 4 產 あ 6 坂 地 路 即 12 彼 所鐵 5 方 鎖 1 此 0 堀 方 21 必 0 澤 群 な * 為 6 H. せ 3 此 澤 青 濫 10 毛 5 F 0 駿 3

奥の 富士

志 村 す

3

とき

は

其

地

兴

桶

0

如

4

t

6

此

名

あ

3

な

5

h

登

Ш

路

桶

緣

12

當

3

ところ

*

通

ぜ

6 義 請 樹 坂

瞰

伏な

取木

坂 多

此 登 路 12 於 T H 12 達 す 3 力 7 此 0 7K 0 外 12 叉 水 4 得 2 な

* 呼 外 3 2 21 Λ 12 0 數 4 舍 行 0 0) は、 名 傍 稱 6 此 あ 3: 11 n 石 舍 E 標 12 8 あ T 休 5 奥 憩 0 奥 富 0 士 富 朝は 0 + 飯 な 8 雅 な 3 喫 3 四 せ 字 17 如 2 から 刻 余 す、 せ 等 5 は 2 清 岩泉 n 之 を 山等喉 以 3 岩沙潤 T 標 鷲三ほ 題 山ずし 南 部將 せ 富 L 5 士 17 所 以 出 な 南 發 部 せ 片 h 富 T 等 四 湯 此

Ш

より ん, 至 3 火 請 間 取 7 五 喬 Ш チ 木 勺 0) 小 は 舍 帶 裾 屑 淵 0 野 水 は 山 石 4 登 15 は のは 泥 標 Ш V 等 あ 者 あ 2 らざる 3 面 0 1 5 附 0 壤 5 草 , ٤ 崩 沂 ま 2 せ Ш 原 L 3 る 役錢 T 12 4 な 斜 L を請 下 面 2 n C E そ n = B 受る 只 登 小 ガ 堀 所 る 1 ٤ 澤 7 H 4 ころろな チ 又 0 本 12 2 兩 7 力 鐵 岸 呼 N V 鎖 此 30 ブ 1 あ 3 n を 2 附 ス 見 3 近 7 地 方 L 12 8 ガ 夫 は於 は 0 0 喬 は て、 桶 A 1 な L B 0 木 著 方 30 帶 6 为 L 言 危 L 12 < 为言 な な 比 急 1 b 古 峻 n 險 な = ば ゲ な 3 ヺ゚ 全 ズ 絕 1 < 1 壁 7 图 坂 柳 60 寂 * -澤 チ 2 な 附 0 1 景 iJ. 近 1. 5 象 桶 I 0) 7 b 5 緣 漸 方 13 I 0 1

小砂 3 堀 礫 な 云 12 2 1 1 澤 12 か 0 0 日 累 足 5 0 部 層 石 ٠, あ 0 標 從 5 露 あ 出 白 3 0 ٤ 雲 て此 世 3 深 脚 附 2 下 谷近 あ 3 6 を 51 を 生般 迷 即 す 51 中 U 比 5 3 \exists 較 其 2 15 ガ 0 至的 n 1 を 問 5 最 " 新 \$ カ チ 岩 0 x 5 燕 = 火 ラ 稱 17 Ш ガ す 0 噴 收 翻 1 出 對 飜 フ T 物 岸 チ 12 7 3 3 元 0 景 て、 以 來 絕 壁 15 T = 日 被 壤 ガ 本 覆 崩 此 1 r せ フ せ 地 チ 3 方 IV 5 ところ は n 17 プ 岩 ス 72 あ 3 手 6 地 T B 水 12 方 Ш 12 0 0 峽 な 美 0) 夢 12 東事 谷 17 21 ば 南 な る 徐 \$ 比 見 す 風 熔 面 岩 3 n 雨 50 2 ば 0 あ 流 浸 3 及 能 i 蝕 車 CK は 未 輻 火 20 t だ 谷山

12 彷 此 拔 佛 附 近 約 72 5 な 于 1 h H 米 から 突 h 0 地 所 地 震 藏 0 岩 為 8 7 な 合に 目壞 h 呼 0 12 石 C ~ 3 標 今 は 百 あ 岩 6 只 0 其左 の方 面 に名かに 火 殘,突 を兀 Ш 72 塊 存 0 世 3 3 磊 3 見 4 A 3 た 3 あ 往 昔 は 即 岩 5 容 大 船 ナ \$ x 大 慈、 y 0 石 大 悲 1 六 5 0 水呼 地 2 滅 奪

附

近

0

樹

木

旣

12

矮

1/2

才

木

118

+

ス

:

V

及

7

力

木

丰

ス

3

V

0

盛

53

繁

殖

せるを見

3

余が

今

回

0

奥

Ш

羽

紀

行

內

小

原

氏 5

为

余 叉

0 連

爲

3 0

12

特 12

12

多

數

0

案

內

者

4

より 疲勞

拔

世

6 た

n

\$

0

2

樣 緩

を見 IC

T T

頗

3

侮 6

11

3 健

色 脚

あ

74

邊

*

あ

3

n

校

不

眠

容

Ш

前

t

6

多

0

な覺 撰

2

n

ば、

特

17

步

を 0

L

12

な

3

12

燈

17 1;

t

〇奥の 富士

志 村

號 Ш 携 其 本 形 上 0 知 力 n は 力 Ŀ 物 坂 は ざる な 附 產 邦 12 以 6 0 0 ネ 11 植 余 0 6 豐 力 近 中 蝶 坐 踏 す F 來 X ス 物 ス 本 A 3 6 7 富 12 繁殖 部 0 L 力 0 3 海 决 分 = 高 木 拔 力 種 加 擅 所 布 T な T 12 V v 於 < 皆 3 日 文 天 地 は 僅 0 ネ そ せ は ス T 0) 12 本 H 暗 杏 3 12 地 凡 : 17 木 12 狀 元 ス あ 邦 Ŧ 氣 3 P 今 3 L 紅 0 T 通 態 夜 \$ \$ V 盛 だ * 間 產 產 n 0 T 雲 米 3 V 同 0 品 Ť を * 其 プ Ξ あ 本 地 Fi. 突 觀 愈 打 彼 h 徜 + 3 種 漠 r n 内 光 等 採 ス 其 -1-4 12 L 紫を 前 4 莖 徉 最ば 集 地 九 產 有 外 的 12 巓 4 H 701 度五 對 進 方 見 0 餘 本 如 8 地 L 0 低 0 登 せ 極 評 て、 L 12 0 高 地 產 (2) 所 ili 9 3 見 狀 黄 4 + す 處 72 ス 12 12 n 7 T 6 83 才 ず余が The 態 堇 n ブ 4 は ホ す 分 北 雄 1,7 6 3 於 あ 然か 程 緯 ば 渾 在 5 猫 b 4 0 L V て ス 云 18 L 想見 如 な 中 地 0 、忽然とし 0 5 は 12 4 C < 氣 T 方 女 1 n 7 地 + 5 昨 ix ス ども すべ 判 六、 17 3 夏 實 17 3 旣 IV 12 最 力 翠微 於 纖 吞 3 針 於 12 110 3, ネ 12 V ては Ļ 七度 吐 高 少け 犬 植 0 想 + 細ならざるも 12 木 ス 緯 て銀砂の間を抽い L 3 ば 峠 種 像 3 度 物 0 所 VZ. 2 附近 草 前 星 等に 子 然るに 8 12 0 す v 巓 本 3 * 瓢 12 田 產 老 高 僅 越 1 帶 實 關 採 51 12 曙 Ž す 見 事 7 々とし 近 低 今岩手 Ξ を 7 あ 山 T 3 て 4 附 50 1 集 * のは 氏 寸. 得 7 6 近 高 T L \$ 尺 採 T て羽 所謂 は Ш 頗 高 0 Ш 趣 3 T 內 は 登 其 味 な 12 者 植 6 3 Ш て點々として金葩を綴れるよ 50 必客と伍 を現 至 暫 外 則 0 意 を Ш Ш B 植 物 有 ち高 今 0 八 神 著 6 本 料 54 時 0 物 千 途 書 せざ 出 叉 地 L 7 關 時 0 0 帶 せ 17 尺 中、 高 涂 根 す 御 外 す 1 汉 IV 0 るが 中、 る人 費 於 花 山 L カ 以 堇 ブ 0 分 3 植 力 T 上 か 思 布 木 海 畑 ス 知 せ 富麗 識 旣 拔 如きを覺 佐 抽 * Vã 0 51 物 4 ス 1 12 40 僅 良 な (1) な かい : 地 あ 叢 方 20 を恣 越 ば、 余 T 本 12 か 5 12 せ V は 者 そ 種 8 12 第 12 あ 5 係 W 登左 見 4 F 若 T 0 唯 宣 6 12 6 8 黎と する 見 篇 本 如 調 高 教 米 る T 顧 2. L 突 n 時 種 師 3 夫 12 は 四 查 右 Ш のを見 急ぐ な 於 ば を せ 眄 登 0 此 0 th な 見 6 F 得 普 抽 前 羅 1. h 1 الح 行 12 絨 古 12 通 方言 3 は 0 0 3 3 九 7 2 盛 12 3 綉 高 八 ġ 1 高

7

能 取

h

12

滅

其

繡

0

は 九

根

革 旣

3 奇 百 左 何 花 於 111 弦 右 12 等 け 簇 休 植 時 能 IV 前 0 4 憇 る本 は 物 12 4 危 + ず、 せ 2 4 過 時 3 以 L 種 7 半 稀 T た T サ 力 最 何 12 H 見 叢 低 6 本 1 足 合 * r るところ 0 チ 11 0 目 な 產 5 等 3 N 1. 12 な当 漆 4 # 批 フ IJ 0 3 蓬 す せ 7 は ス す 此 は (7) 地 ウ # 25 3 方 ス 者 1 1 海 Ш 12 深く 1 頗 拔 Ш 1 6 於 約 4 3 Sal 丰 L L T 草を 見 彌 前 +)-かっ " T iv 3 陀 は 10 百 ウ 6 ~ 分 E 4 Ł 31.00 叉前 栽 本 + 時 原 Vj 1 量 米 培 恰 な 種 1 ~ 進 突溫 珍 家 8 0 5 当 7 果 あ 蓝 " 種 + 0 す 續 之 度二 實 等 3 5 2 通 ti 探 * な V グ Ł き機 + * 着 特 10 Ŧ. 6 る、 た 尺 12 7 6 會 度、 以 花 0) 特 此 12 な Ŀ 4 チ 後 花 12 附 かっ は 3 2 白 0 0 チ 近 破 附 清 地 12 壞 6 グ 毛 1 近 冠 於 난 0 IN 楚 17 7 之 な 8 T 0 7 は IV 4 有 植 0 云 n 7 小 果實 は す は 3 物 舍 8 0) 余 見 割 異 3 す 力 0 あ de 注 愈 3 12 種 る 面 6 < な 12 12 意 似 子 力 ~ な、 繁 8 72 0 先 牛 面 產 É 21 刀 し 殖 頭 狀 其 せ 3 淮 け 用 其 * 0 から 3 3 12 3 な 知 興 2 0) 短 3 は L 花 せ 柯 n 見 = * 外 3 0 る 玉 3 4 太 は 0 7 登 治 州 狂 4 行 共 數 喜 Ŧ. 部

石 遇 3 \$ 神 3 \$ 坂 0 74 發 足 す 多 合 カ 場 目 Ŧi. 形 3 か 容 最 より 合 8 Æ 頗 H 附 6 2 3 4 大岩 3 悪し は 小 目 丰 近 良 好 毎 海 7 17 L 1 學 拔 IJ 於 きところ 1 石 四 然 登 立 合 サ 生 あ 約 T E 見 ゲ n n 力言 F Ti ウ ども ば 勺 る 四 12 なり、 る石 百 2 -1 0 似 枝 所謂 12 + 石 12 葉穴 御 ウ 標を移せしるの多しと、 + n 行として E 得 余は 倉 \mathcal{H} あ 1 1 る附 南 等 長、 ネ るなり 石 米 叉 權 突、 0 1 附 高 高 現 近 2 此 六 見 近を と称するところ、 0) は Ш IL 山に登りし際、 小 合 L 特 植 植 探 加 E T 12 物 物 を見 T 拔 兩 1 3 的 T 約 者 牛 面 風 姿に乏 る、 採 17 F 4 7 H 嗚呼 繁 米 1 y 集 突、 别 殖 百 =1 祭神を取 の空祠 しきは 1 磊 何等の悪戯ぞ、 八 す 7 せ 左方は一 塊な + ること 7 6 L ラは、 Ħ. 3 如 米 惜 12 1 Z 斯 つてニッ 難 水 所 9 U 日本アル 日 T 謂 B Ш ス こらず、 夜半 祭 本 1. 岩 i 匹 神 " 7 0 V 堀 夫だに 堀 登 n な 甚 問 =ブ だ多 花 0 Ш ブ x 51 スの絶頂附 谿 せ 旣 ス 110 人 が跡を求 余之れ 地 為すを 谷 L 12 " な 謝 方に見ること能 連 ガ 遺 -H° 中 L 木 は 棄 2 7 0 ズワ 近 異 ラ C 路 せ 續 1. 秱 21 子 登 か 5 4 12 ゥ 産する 當 ガ 3 3 な 1 F \$ A Ш 旣 0 如う 力 盛 夫 1 す 17 ij. 岡 3 ウ 加 12 御 散 御

5

h

旅 3 距 # な 離 行 6 * 1. 測 神 C 5 體 常 此 C 等 無 棄 る 12 潰 0 L. 0 は 憾 石 世. 0 3 標 慰 为 0 17 愚及 安 思 8 如 移 を 2 は 動 得 は 5. 3 せ 言 前 か L は 語 8 程 5 道 を 斷 T B 本 知 0 A 5 暴 雷 其 t 17 0 0 舉 距 愈. 公 其 離 石 共 4 0) 奮勵 * 標 平 心 不 は 素 明 す 登 缺 0 とな H 疲 III 無 te 者 た 節 す 3 12 17 制 を曝 事. 25 3 取 如 者 6 3 \$ T 露 n なり、 は 寫 至 1. 8 引 大 惡 12 0 to 戲 其 何 便 T ٨ 0 0 益 は 最 苦 校 X * 名 與 余 3 を 忌 甚 をも 2 3 威 だ n 3 L 傷 を T ď 3000 同 登 0 Ш 5 0 す 旣 3 せ 12 2 各 6 經 とを 地 過 3 方 せ 得 8

谷な 進 般 T 72 す U 42 御 3 12 n 此 此 倉 とも 谷 從 L 右 石 51 L 方 は CI は 高 葉 衣 肉 最 灌 匍 3 3 对 厚 7 木 匐 Ŧī. 遲 草 7 L 1 本 問 T 1 まて と思 1 0 登 钦 般 1 3 K + 殘 殖 な は 短 雪 盛 る 6 倭花 一を見 1% 1 な カ 鐵 左 ると云い 形 ネ n 鎻 方 ども、 稍 ナ あ は 1 4 6 珊 大 3 カ 長 4 25 形 7 高 12 紫色を帶 七 10 山 3 合 + 植 火 五 ~ Ŧi. Ш 物 勺 間 = 0 砂 0) 110 珍 7 5 0 聞 地 ナ 種 H 51 1 却 < 斜 本 T チ T 面 始 7 コ 小 御 な れど w 倉 8 な プ T サ L 石 2 1 1 \$ 0 地 力 右 11 石 方 ブ 工 方 登 F. 1 11 ゥ 12 滿 山 見 T 面 者 ること 8 其 小 0 12 見 他 足 溪 1 跡 を見 3 1 Ξ 能 圣 6 見 は 葉 0 3 ゲ 3 形 羊 * る、 3 ウ 齒 見 大 杏 9 類 堀 3 然 滿 术" 0 澤 n 稍 ガ 3 次 溪 0 第 サ 4 を に埋 珍 支 54

岩 角 雲霧 12 吠 漸 < 多く 濃 L 天 T 地を白 斷 雲白 盡 霧 徂 徠 L T 時 4 四 近 0 展望を 妨ぐ、 八 合 目 17 達 世 L 頃 は、 天 候 益 4 險 恶 天 飈

55 な 雷 水 花 3 は 3 合 目 全 0 然之 白 る は 2 色 57 海 n な 井 由 拔 合 12 な 約 理 學 目 \$ 4 F 反 九 士 1 せ 0 n 6 多 は 5 B * 殆 岩手 突、 不 九 合目 平 動 胸 突当 左 平 地 Ш は * 0) 方 13. 髯 葢 石 12 72 八 合 剃 室 1 L 6 12 火 目 9 舍 を見 12 T 口 0 達 險 \$ 原 すれ 3 九 皆 0 は 之れ 合 水 目 ば 部 * 又 又 0 1 此 分 水 石 坂 ò * な 地 路 5 1 室 以 \$ ん 得 54 な F. 6 なら 達 運 3 と疑 す てとを 尤 5 h を L B は 九 附 存 得 此 合 せ 近 邊 目 何 L t 人 帶 n 帶 6 3 (2 Ш 頂 豫 10 13 頂 想 ウ 御 F. 附 余は 不 12 す チ 沂 3 動 至 サ 51 04 平 3 とこ ウ あ ٤ 問 0 近 6 呼 3 0) 滿 T 地 頂 な 開 は 形 火 1 5 せ 此 附 3 h 地 を 此 原 近 力 0 見 稍 9 火の

○奥の富士

志村

士

御 III 神 0 坂 構 路 成 とを ટ 同 1 細 張 世: 溫 0 泉 水 1 口 原 17 來 0 3 間 部 道 な る \$ 2 とは 此 抽 的 12 確 T 合 な る す 事 實 石 御 神 坂 は 此 九 合 目 石 室 12 は 盛

圖

壁と、 15 は 仰 る 至 外 0 は 難 T 1 3 な 所 は 南 輪 噴 蔽 17 \$ 午 板 か 以 12 帯に 面 Ш 出 L は 小 失望 なり 室 從 前 間 如 * 0 物 n L 外 + 載 0 L 平 旣 < 25 た 落 12 せ Ŧi. 九 T 角 地 12 3 石 膽 出 合 時 間 共 51 石 舊 な 八 斜 室 室 左 岩 合 前 な 0 目 達 附 づ 石 6 面 附 0 3 5 54 奥 日, 間 方 せ 手 目 近 200 能 T 離 火 元 行 沂 0 0 L 15 傾 而 0 氣 は 抑 平 12 12 t 峭 Ш 1 達 斜 形 13 す 間 於 ^ 5 地 樣 为 T す 比 勢 亡 た 半 櫻 較 8 候 あ 新 n T 0) か 不 岩 岩 # 益 6 るとを以 隆 井 は 1 的 語 潔な 果 東 氏 手 急 6 4 形 手 起 は、 する T 險 14 40 5 0 火 な 九 人 Ш 旣 於 3 北 1 П 0 ず 西 Ш 12 in 木 8 岩 3 頂 は 0 T 絕 舊 吾 T 見 其 櫻 1 床 先 僅 手 外 \$ 頂 等 3 12 かっ 井 8 柳 0 闽 大 * 0 火 輪 0) 學 岩 極 Ŀ. 到 は 2 仰 澤 外 山 登 10 Ш くと 12 火 方 2 U 着 Ξ. 53 軸 士 0 石 樊 せ尺 於 3 樯 Ш 面 12 0 0 等 L 山 3 勇 臥 塊 より 東 所 來 L T 西 部 0 12 * 氣 室 部 洋 謂 世 は 方 達 12 露 6 積 双多 見 \$ 6 內 鬼 蓬 人 せ を 束 出 L 全く 岩 な み 12 0 游 恰 ケ L せ 小 盛 < 量 る岩 な 前 手 暗 T 城 2 る 岡 B とを 夜 壁 なる 被 火 か 0 * 御 行 < 遂 とな は、 覆 山 以 殆 手 ·舊 0 間 5 神 h 睡 焚 鑛 悟 0 水 せ 51 坂 III J. L E 今降 眠 火 Ш を 滓 不 3 3 余 は 2 不 0 狀 容 壁 25 为 以 動 九 足 語 6 烟 合 南 熔 清 齊 12 故 命 T をだ 水整 12 岩 出 濛 方 岩 連 能 ぜ 目 般 L せ な 0 4 礫 日 は 12 角 15 答 6 す 吾新名 4C L 70 御 ず 達 前 17 を 火 發 樊 7 代 す 3 山 雨 5 面 す 樊 8 は + 1 蔽 漸 理 3 0 0 田 暗 0 ざる 疲 砂 吾 Zi 0 八 問 所 4 由 3 出 IJ. 謂 合 勞 等 石 木 3 な 九 は H 物 な 3 附 H. が材 合 目 後 及 な 南 ŋ 本 0 飛 此 3 點 近 部 目 附 段 74 7 3 は ば 使 石 12 水 12 t 片 此 0 近 合 w す 於 賴 室 用 外 6 富 石 12 陳 目 ブ Ш ぶべ 2 12 前 士 輪 來 岩 T 室 石 ス 風 な 達 掛 W 山 附 室 的 屑 4 L せ 屋 石 Ш 稱 0 近 附 0 8 を あ 峭 に舊 近 困以

(前半、終)

頂候

將

2

恢

復

난

此し

有

樣

12 L

室

內

0

衆霧

は

に散

色

8

3

立雲

5

鞋

を日

改

8

縮

同山

相頂

前を

后

L

T

山天

午

粉

時

風

力

猶

4

烈

かっ

6

7,

濃

次

第

破

0

間

より

光

漏

n

斷

霧

0

隙

t

6

仰

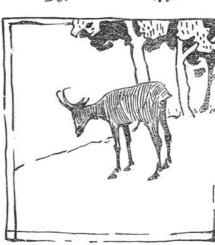
21 14

雜

錄

錄

雜



信じ、

艦と併せて之を讀むの興味いかに新秋に深きかを想ふで、

小島烏水記

に小引を附すること然りの

旅 繪 穗高· 及 山殘雪寫生の 所 感

大 下 藤 次 郎

が 萬五百尺?) 本誌本號の開卷第 の寫生 一に三色版に製して掲げたる信州穂高山 識は、 水彩畵の大家大下藤次郎氏の作品にして余 海 接約

一家の彩管に入りたる最初の一個の大きさはワットマン四 「再現像」なるべしと信ず、対でして、おそらくはこの おそらくはこの魔岳 余珍重措か から 美

> か得たり。 自然に對する風景畵家の觀察は、 ありて、 今それに因みて、 所感等を書かれたる文を乞ひたりしに、 CA 2 精好なる技倆を有する田中氏に托して、 楣間に 飾り 大下氏に本品が描か T 樂しむに忍びず、 吾人の趣味眼を啓くこと、 れた 左の一篇を寄せられたり、 3 現代の幼稚なる版畵 時 B 之を本誌に挿入する 場所及びその 大なるか 界

であった。 て教 溫泉迄六里 は七月十 つた岡田 諏 訪 よう Ł 汽 た道を進んだ、 作次の仕度する H 急が の午 車、 1 後 松本 は夜に入ら 時 より馬 頃であった、 腓 間 をも 迄三 車 えと、 里景色は至って 待 たず、 島 案內 此處 4 村 溪流 より 者 兼 着い に沿 荷 Ŀ 平 持 た 高 凡 2

12 地

雇

幾許ですある たくなる、 たが、 水氏が怨め 徳本峠は随 町 しくなった。 何 分辛 \$ のにと、 往つては休んだ、 てんな處迄 カン 0 た 僕をして此 來 路傍で拾 なくとも繪 休 行を敢 むと其 つた 儘 杖 てせ を描 * 寢 3 力 T L 3 仕 17 場 處 登 舞 鳥 は 0

漸くに 下ること數 から L 茂つてゐるために、 て頂上へ着い 町、 池見橋といふのがある、 た 駒 目 鳥 を樂し 0 聲が せす 耳を 作 喜 朓 望 次 15 40 ,55 す な 注 0

吳れ

1

i

かっ

6

威

謝

L

12

0

1

th

の。處

水

留

H

ROT そし L 0 は 雪°沂 3 た 7 1101 T 思 " 曩 和°缝 N 2 لح T きに Dº 2 0 V विंग 大 3 120-6 よく IHI 景 T 3 300 怨 2 12 LLi Do , 3 2 接 3 3 た。時でと L 來 L 見 りつはつ 詰 1 6 T 、五○_ 島 B 頗°時°萬 12 氏 初 3,0 文 餘 12 叫 8 美[©]殘[©]尺 對 VI T 1 觀○照○の 此 暫 L るを を°の°穂 T 行 時 極った。 高 0 め°め°山 此 .得 徒 0 てつにつか 清 な 為 句 かつい な 境 力 25 る。山。屹 5 出 12 0 はのよ た 道 な 僕紫心 3 Di

H 大 2 て、 0 な 2 澤 + 蹈 3 0 時 8 此 < 半 池 雪 澤 壯 6 傳 觀 5 C 15 あ 3 12 T 0 か 造 數 别 は 1 町 n 林 0 中 T T 12 狏 白 D 0 F 2 步 木 た 3 造 3 3 行 殘 嚙 困 5 落合 雪 0) 6 難 を なり 温 見 泉 0 بخ た、 麓 12 宿 案內 1 17 ふの 着 珍 下 Ď 5 V 为 L 12 33 あ 林 17 促 0 0 3 は n 女 て 拔 ば A 礼

慮 あ 0 0 L te か 日 12 は は 力 0 74 道 72 老 時 兎 具 人 半 17 3 Ŧ. 夫 清 75 婦 12 角 A 为 起 11 20 3 居 filt 0 泳 T 1 72 る • 3 Ut 宿 そら て**、** 眠 12 0 6 6 前 \$. な 12 膳 かっ 大 か 0 6 4 F H 霞 72 1 12 澤 3 浴 青 Ш 1 室 57 0 3 0 快 茶 不 1 よか 滿 72 は \$

朝

後

作

次

內

12

宫

池

見

#

0

JII

h

朽

あ 0 0 < 顏 2 B V は

渡 食

隨

分

危 案

往 JII

12 0

は

聊 1

か

顏 た

0

色が變 途

0

72 涉

宮

つ°る°の 川 のでにC拵の 星ではつへ池 影。今。た は ちつにつ庭 60000 つの降のや 北 10005 あ 夕のそのて 女 方°5°自 6 なC然 51 美 限 暗°ら L (°L 過 3 墨。く T つoな 繪 tou is 日の、な かってのら 、んのな 空oなoい にの景の、 一0色0毫 つったの駝 二°見°師

2 * h 5 旣 8 守 2 林かかの徳 0 11 T のや溜 見 72 器 細 3) 4E 訪 L 0) 本 中でさり 3 雅 3 息が 夜 2 0 者 道 死 12 T 0 かっしいに 夜 5 E 悲 0 は 0 3 1 70 1 g. BOX . E 1 だ 慘 0 絕 B 知 屋 7 13 5 夫 穂の古 食 出 2 11 2 來 な 17 j Fi. 高のあ 2 499 8 0 C 來 1 V2 6 T 婦 話 戾 のoる 眠 詩 な あ 3 50 人 雪 見 8 3 柳 0 3 婆さ な 此 72 中 見 問 殘○景 T 3 0 0 0 1 3 0 六 雪でを 影 た 3 2 3 72 舞 畫 有 Ш 5 里 た をの寫 食 樣 h 力 時 7, 1 返 ふとて 2 V を 寫°し は * 出 な 0 5 病 0 夫 L 島 婦 2 生。 氣 來 t 12 T ○更 ませ、 な 思 况 罹 來 息 共 n L 2 虾 + 4 FOR 1 h 0 屋 月 T 奄 病 獵 は 夕の橋 浮 見 馬 此 T 1 か 氣 師 3 0 C 4 72 110 見 日 5 12 H 54 0 溫 0 小 宿○渡 荒 罹 114 嘉 T 持 藥 0 泉 す 4 5 V 屋 200 門 月 V 場 は 重 0 2 0 n 0 歸〇 どん 6 用 范 憐 T 有 C 次 12 な 後 つ。宿。中 方言 场 n to 夫 意 3 た。近。に な 9 村 老 雪 12 此 8 0 〇何 な 0) 驚 0 春

ול 82

前 0)

4

日 蜖

0)

穗

高

0 1

寫 影

4 2

を DE

仕: 苦

F. 痛

3

12 あ

8 0

Ŀ

ば

な

2

蒼

曾

1

た

洸 梓 + W 111 九 込 * 日 は 前 郭ん T 12 小 विभ 屋 3 H 4 0 前 霞 處 111 景 盤 澤 51 Ш 寫 裏 0 朝 0 П 1 H 0 0) 寫 雨 な どは 景 生 午 後 を を 描 夜 11 す 大 女 + 艺 12 3 敷 1

流

な

る

林

0

4

^

往

つて

此

處

1

\$

大

17

蟲

15

苦

L

85

5

n

象でとっくのの砂の白っ 少目じ℃し℃小 のC調O日OやChoくC型 h ば 寫 上の和の柔のうでで見ら日 かっなって \$ Do 4 かっしっかってつい 集 皮 のo開oあ えらは 5 時できる為 膚 らっなっなっあっ枯っるっ時 中 H 3 間C實O 見oいc國oるo木o、 * 1 T たっかっかっかっなってっ にっをo此oね 小 露 T 繁°結°邊°て らっちっしつ、前っつっ土。 温 は 殖。よ。の。一 こってって。草。景。日。用。 の。あ。、木。に。は。中。 は 頭 すっとで植っ番 THE S か るいの物の困 方°る°此°の°穂°川°で P 6 が。が。邊C線。高。下。は。 5 のつよっかっつ -(育 12 か てつやの際のた 10、四のもののかのあの ら禁治 あっう。夏のい。併っ方。春の殘。蒲。る。 L のっしっをっとっ雪の田っかっ らったっ一つは 7 、二°蠅、 500 筆 か。剛。圍。異。を。道。中。 0 するるのなのなの窓のにの々の H \$ 大 ら[°]月[°]藪 知っとつるのらっしつ沿の寒の 1 執 包 ゆっつの蚊 3 れついく稜のねったのよっいっ 4 は 0 ねっている。 72 な TO " 追 蟲○に○蚋 ○ やった○若○氣○、吐○ 手 風 71 35 うつるのくの候のとのくの 呂 類。芽。の 掃 弘 11 眼 足敷 あっかつ如 なの山の新のものあの息の 對心臓っし。春のるのはの 力 0 同の出の身 T

> あっくっきったのの。美の夜のらの らのトロ、、鮮のはののつうのとのの 5°か°地°西°や°し°空°か°の° らの平のものかの過ののの、夜の 覗°線°東°て°る°色°月°月° ふ°近°も°と°。は°の°は° やっく。高ってい此。濃°光°明° ち°の。山°、地°き°は°か° に°重って。朝°に°、東で 々○繞○殿○來○プ○京○あ○ たっしゅらの夕っていっちのつの vogoれの陽の特でシッたったっ 高の現のてののいたのアのりの、 きの象のあの趣の感のンのでの空の 天ではっるのかっじっプの見の氣の のC遮ったの少ったCルOるOのO 一つらつめっしつのつ」のよっ清で部のれて、もっはの其のりで をって。平の見の・儘のものなの 見の、原の名の朝のての一のるの る。ス。て。ね。も。あ。唇。故。た。カ・見。の夕。ま。強。て。 めのイのるの思のものりのくつもの てつラの如っよっなったっ、

を 硬。寫枚 到った。新。 12 前 30 · 120= 暗の色のしを 例 景 くっせった 得 處○太○穂○十 は < 現°る°、 とで陽○高○一 T しをのの日で後の一の、 はc燒o夕o宿 III 水 0 しC岳OのOの 清 てではつ字で近 21 好っにの角の一 かつ、 のつく 書っしっかの點 趣 流 3020000 題。たつ寫。の 味 1 中ののいのは なのるのしの雲 深 景花°橙° b ら。暗。更る ら僕 の。色。夕 蕾。を。方 200000x 0) は は。山の又の当 \$ 水 2 にC帶Oか なので下で快 曾 0 8000 B い。幹の。時 清 6 T 見 似oてC梓 このってって < à た。明。川 12 稍白の残のあ 72 るogoの 心く。雪つつ 6 T 單°き°岸 純°に°よ ゆ 輝ºの°た もなく 透 12 40-0: 明 多 1 4 なっ る○部○川○ な 6 寫 3 る○濃○焼 生機でかっ下の 輪°a°岳 の。寫。にo は 廓の枯っを 一林っしってっ

Ш

系

雜

5. か 5 12 乾 12 * 此 かい H す 沒 描 13 沂 T 不 手 7 現 成 許 頃 到 は 功 は 13 底 す 段 17 水 說 終 茲 HH 4 す 暗 0 氣 \$ た くな 3 る 出 为言 E 來 3 は V2 得 不 度 型 3 III 處 着 象 能 6 は 0) 佰 T 少なじ あ L 中 な 72 5 15 (は 處 5 言 な 验 C は 語 かる 容 12 す 易 0 T

愛ら 黄 事で他°の : °に°迄°七°口 整 17 最 水 だこのO如 見O供C窓C月C繪 早 鏈 峠 L 12 け、風のな ゆのれて中の十つは 4 兴 3 0 携 るっんのせの八つい とで景では 車 5 頃 43 3 が°心°し°日°前°れ 來 脢 E 儘○組○よ○及○記○て to. 合 6 特°比c專 をでなのの一つ柱の、 5 L 記っし、門 12 正。60、十二川。 紙 100012 直°し°殘°日°の°の 朝 株 \$ 置OコC屬 に。をc雪oのc岸c崇 0 を 殘 0,000 寫。以。の一。方。高 は 穗 82 6 ~0,000 心高の全景を せってった。回っ見っな 1 トのを の、状の、たのる と心 な プロリ もの勉の及の午のるで山 3 NOT う。め。色。後。穂。水 な 10細 なっての彩の四の高の郷 期 8 0 1 ○說 りの主でにC時の山C た L 觀っで頃。のc別 高 多0の -をつらっよっ一つと 地 紀 使 すっな を 用避で後のりで部で 楊 念 再 けのの七のたの告 用のけ 0, CK 柳 54 cion * 参い時でしっけ L 伍 駒 0 多 LOE 72 たの考の頃ってった。 3 鳥

北 m t 5 遠 望

赤 石 H 茶

城

碧

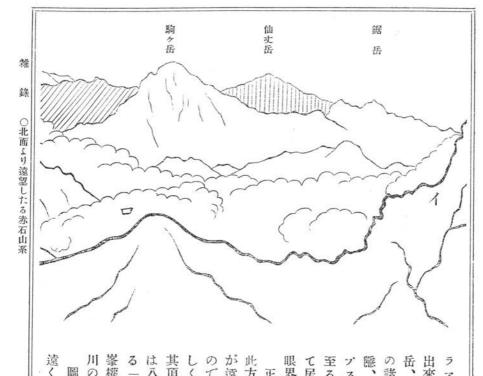
望 南 年其 諸 0) 13. 鳥 結 0) Di. 方 八 夏 水 H Ш 怒 赤 15 果 12 期 本 現 氏 州 考 層 は 登 石 岳 50 場 0 年 0 於 17 0 LU W) 11/5 攀 を 显 駒 第 容 4 \$ 趣 系 t T 踏 同 4 ---辨 لح 味 0 Ш 本 5 查 號 岳 思 誻 * 誌 (2) n 此 L 4 0 添 鉴 0 日 12 12 赤 C 揭 紙 之 2 3 發 A げ 17 石 ~ L 白 3 かい 觀 表 方言 から Ш 5 に崩 5 望す 樣 不 せ 小 系 解 提 n Ш 圖 な T な 5 决 5 0 出 8 15 例 113 3 此 3 1 北 3 0 地 事 な 試 T 端 會 12 拙 あ 方言 8 17 Th 員 12 同 5 筆 唯 思 ٤ 位 L 3 h 中 問 物 3 72 2 CA 5 0) す 為 0 題 かっ 0 3 出 方 揮 ~ 事 85 篤 將 1 兎 愉 信 S L 1 志 72 快 T T 予 あ 甲 特 な 型 前 此 角 な \$ 3 境 15 3 號 45 3 遠 何 3 亦 カン F. 本 12 202 年氏は T 本 6 0

横 岳 あ 岳 12 か 作 容 苦 此 若 0 Ill 圖 L 8 繪 作 其 事 12 出 あ 最 0 72 3 高 1 位 -即 置 オ 子 5 ホ it 伊 0) な 北 立 奘 n 1111 3 0 T 方 3 尊 夏 位 8 3 渦 澤 置 3 12 峠 6 を 1 C 72 3 八 經 4 T 頭 岳 箕 冠 1 0

力

4

12

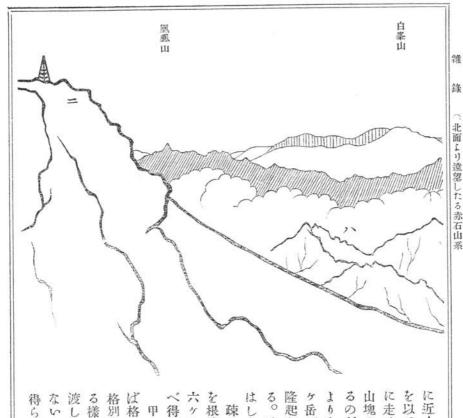


眼界の ラマ 至るまでの飛驒高 ス 居る 來 飯綱 荒船 Ш たであろう、 的 信 群 方を 火山 大ス 帶 等 は 0 駒 言 0 0 更に より、 ケッ 限 連 ケ岳が、 ムまでもなく 障 0 富士山· チを て居る。 原 白 西 馬岳 北 に屬するも 漸次東北 の方に 雲霄を撃して屛風 作ったならば を第 に起りてい 近〈 廻 12 のと、 n 轉 17 ば、 は す L 質に V. n 南 T 木 の方乘鞍 所 科 ば 曾山 を列 謂 111 日 淺 峰 系 本 ね 遠 間 Ш 8 た 12 御 5 樣 屬 白 岳 r は 0 12 万 口 方言 in 根

遠く は八 其頂上 しく 此 3 遠 方 正南 重疊 望 峽 現 F U ケ 面 谷 岳 岳 17 圖 八 圖 42 0 ケ 8 は 尖 中 見ゆるも 水 は .7 方は 隔 岳 0 中 b T 居るのが此赤石山系の諸峯で、最も赤 の赤 T 丘 72 の諸器である。「ニ」は最高峯の 最 此 此 邊に る物 岳 も手 Œ 0) 岳と「 丁 Sil 南 0 1 なれ 近な山 度信州 あ 彌 は、 0 13 赤石山系の諸山と相對して居る。 3° 赤石 陀 は最早甲斐の國となつて釜無 部 5 岳 等三 Ш 0 は 分を寫し の阿 系 駒 角測點櫓である。 子 ケ 0) 爾陀ケ岳との中間に、 3 か 岳 北 此 と富 立て 出さ 同じく八ヶ岳 兩峯を連 部諸峯で んと 士山 居る横岳 赤岳 あ との 接 試 る。 4 と同 7 7 72 間 0 1 予で

北

系



疎

な上

21

ス

ツ

チー

である

3

此

た

るは

丈

クケ岳

T

據

とし

T 拙 仙

直 V

5

12

等

かり

决定を

寫

すこと

は

得 4

3

0

ある。

V

力;

唯予

己 何

測 0)

3

T

次

0

如

述

起を示 塊 走 近 0 0 为 < T 北 中 T 稍 有 H ケ 岳と 其 L 近 岳 天 名 Ш 4 7 17 な たる邊を、 あろ * 見 聳 鳳 51 勢次第に 此 るは 鋸 文 畵 凰 からと思は 一覧する所、か て、 岳と Ш 3 1 ある。 低 あ 獨 0 鋸 V 立 岳 中 < 一間に、胸部以上の大田と称するとの方 せる 起 なつ 3 線 其 0 て、 高 其 山 Ŀ 鳳 最 12 \$ 凰 特 中は 頃 甲 近 絕 方 Ш 5 Ŀ 事 多 即 州 0 L 一見 少の 5 C C 巨 8 題あの駒 W

格別 格 甲 L た處 な顕 高 别 0 0 駒 1 て、 著 3 山 ケ 岳と白 な山 からて 1 3 崩 11 から 附 了 Ш 近に其様な無名の て無 1崩とが 若 あ の名を冠せたくも V L 左. 思ふっ 3 ケ 岳 無 全 で何と H 伙 n 同 とな Ш ば 13 12 O) れ取 見 É Ш あば扱 崩 1 は山 12 あ 山 ら見れはれ 雑

錄

〇白崩

Ш

第 车 第

> 此 3: と思 赤 を 石 作 0 多 12 12 斷 時 から 定 źi 此 何 냀 分 横 5% 岳 な 3 か 廿 5 V 0 赤 併 好 石 12 UI 器 方言 見 75 文 5 3 -5 て あ 3

とれ あ ると思ふ。 ところ 白峯と駒 結 志 4 岳 村 局 は 君 0 見 間 0 得 か à. な 來 寧ろ白 女 1 と信じ 17 \$ | 峯山 て下 Ü 高 其 5 陰 方 頭 Ш 氏 10 720 0 な カコ る 山 筈 云 T

赤 て位 30 3 筈 T か 石 は 置 赤岳 12 あ ね 得 0 Ш かい 位 6 る は カン 視 な 力 老 と横 20 置 赤 5 -) 12 0) 赤岳 岳 た予 なつ 及 る 岳 から と同 3 0 見 序 11 T 所 頂 なが 居 2 南 上 12 る。 5 144 3 方 氏 限 \$ 赤 6 相 赤 2 此 0 違 3 0 石 事 記 n なら あ Ш 道 石 す 12 3 理 から \$ 系 る所 赤 は、 諸 可 は 見 0 諸峯 な 君 石 1 えるとし 17 5 横 0) は V 教を Ĺ 思 * 岳 办 望 多 V か は 8 19:05 n 1) T 此 記 H 0 0 な 點 兩 L 見 鉴 疑 な から V 51 T 見 8 B 於 0 あ 岳

> T 崩

12

志村寬氏著 高頭式氏著日本山 ま 岳志 PU 三六六頁下段

É 崩 Ш

說 から 崩 見 山 2 た、 駒岳 自分 との は 里 敢 同 てそ 12 200 n 1 17 横 は 槍 H T * 君 10 12 3 小 島 0 C 君 2 は

2

僅 為 h

12

7

12

起 72 かい

因

L

た

のて

好適

名でもあり今も異名とし

T

保

存

な 相 甲 3 V 明 3: 12 雷 L 地 た 54 就 V T 存 見 + T 來 72 事 報 告 T 異同 如 何 0

する も高遠附近だがそこで昔は今異名であると判る事と思ふ。 のて と云ふ歌があるのを見る、 ふて 知らぬ顔で居た位 之云 と呼 し甲 名にし負 行 登る積 は 位 あ 0 半里許りに白崩 たが、 つては 斐駒 數 斐 'n 1 あ 0 州 0 T 0 あ 路 つた 勢 T 叉は 3 \$ 駒 ふ駒の嵐の その 7 頂 3 3 程 13 殆 6 5 社 と知 漸 \$ Ŀ. 東 樣 0 C 岳 5 ほ 登 內 行 駒 8 4 粉 0 C 路 宫 る人 と云ふ 12 所 從 信 3 登 である。 0 一人が 0 て山 の難 を置 を白 て木 Ш 神社の前宮の た 州 激 がな み 0 0 高 易と き大 名 ٤ 人 白 で高 崩 T 曾 おい * これで殆白崩は駒岳と なつ 今 然るに も分 は 神 崩 5 駒 0 花 减 開 0 詳 12 遠 社 邊 0 を 白 東 しく 崗 T ľ H 登 來 2 自 3 西 7 < 方 岳を白 神 T Ш 祭 黑 分 石 あるそこの 5 歷 岳 は ぞ峯 为 0) 遂 客 0 云 2 Ŧī. 等 T 耐 河 皆 比 T 12 < * 内 知 0 は 稱 東 0 白 較 信 ば 荒 崩 行 集 力 0 T あ 岳 雪 12 山 信 者 州 居 行 8 5 3 T 叉 一ぞ崩 なら 5 力 州 額 崩 * 黑 3 足 は 705 は \$ 呼 と云 n 年 時 表 0 111 3 特 白 T 他 3 單 るし な 同 12 每 は 12 h 內 は 雇 崩 17 12 12 た Ш 沿 白 皆 Ш

鋒 槍 岳

雑

あ 信 は 名 州 るの L は 方 T 全 面 \$ * < É 同 崩 \$ Ш 川 岳 0 を 品 だ と思 あ 别 5 す はすと ふ 3 程 の何 要 來 \$ 甲 1.1 3 あ州 177 から 3 方 0 IF. 面 當 * V な 駒 岳 0 0

T

落 質

17 H T 1 3 V る人 然ら T あ Di ば 出 \$ 丽 0 4 3 3 1 來 現 地 ば から は n \$ 思 質 12 0 T 2 1 誤 前 4. た 0 調 n n 0) 山 7 U 杳 か 商 0 7 原 Ш 0 力 左 13 所 務 即 自 省 即 0 1) 本 * 0 云 仙 3, 白 肩 分 12. 3 ス 0 崩 51 地 丈 3 17 0 5 -山 見 ? 其 圖 小 0 " チ 北 云 0 -17 J) 圖 # 0 12 な は 白 0 1 ED から 駒 L 自 白 た 頭 3 为 H 帕 崩 岳 あ 本 崩 0 力 1 * 分 Ш 1 * = 15 な あ 3 山 な Ш 疑 なる 思 3 角 \$ ٤ 岳 す 極 3 \$ CA 12 0 な 端 0 志 論 黑 名 違 相 事 0 1 0 據 * 白 違 7 推 は . \ V 仙 1 あ 崩 想 如 記 0 な Ш 女 15 何 す 聞 75 岳 3 Ш 南 4 V 見 3 から 3 1 0 3 W 12 違 處 重 17 教 2 あ 其 3

> 0 あ 0 12 1 0 崩 甲 合 調 呼 1 Ш 府 か 杳 Ш 3 --書 띪 1 0 3 0 6 所 登 0 名 幅 は 0 参 0 V T 見 謀 0 深 は から 13 誤 本た 谷 駒 あ 違 此 2 見 3 人 邊 部 p: 岳 3 3 は 5 0 は 0 あ 0 0 2 無 から 7 可 1 地 3 7 圖 Ĥ か 2 な は V 公式 5 接 7 0 6 な 崩 は 無 12 近 氣 鋸 正 V 111 論れ 駒 岳 红 L 0 L と分 役 T 0 为言 < 决 T 古 17 飛 商 居 V 出 L 來 生 た 1 31. る n h 務 1 ち 大 T 極 T 層 省 2 間 \$ は 0 111 8 な 3 5 T 3 違 な 居 3 俊 \$: 3 + 12 相 1 し 實 西 が 萬 應 故 \$ 0 17 際 北 前 分 JII V L 又 鋸 な 山高 12 0

t

白

2 間 岳

25 2 0 V づ 附 n 近 尚 12 再 は 探 多 0 小 Ŀ 書 とし < ~ 3 ててく 事 * 12 見 筆をお 聞 L T 來 72 0 から

あ

る 尚 v T

梅 光

槍 ケ岳

高 Ŧ 0 を 萬 高 約 x 地 尺 頭 圖 0 式 1 高 出 Ŧ 氏 版 七 it iv 近 百 果 せ 本 < 6 x L 誌 n 1 T 0 幾 第 高 な ŀ 3 ば 座 in * 7 年 力 减 測 H あ 第 殺 定 本 る せら せ 號 7 w 6 7 54 n ブ れ題 T ス H 0 本 H. 大 高 7 0 槍 17 陸 4 IV 宏 批 岳 1/1 ブ 測 壯 0) ス を或量標

ケ " 回 チ 4 は 0 確 T か 17 申 鋸 嶽 T 0 あ 3 4 < 女 为 5 日 1 本 あ山 3 岳 0 志 0 甲 斐 2 駒 16 3 0 地ス は部 0)

人

呼 鉢

名

1 か 便 2 あ

10 7

\$

あ

6 3

5 0 T 分 0

か T

か

岳

7

T

3

あ 0

3

仙

丈

とは

恐ら

甲

44

地い

3

V

自

は

今仙

圖 樣 0

12 1

對 あ \$

す

る

宜

1 てに

0

名

2

邊

-丈

は 5

前

岳 h な

(白崩·

山

2

至

た

0

7

3

と云

1

は

3

女

T

無

考

^ C

呼理

n it

だ

35

4 な ば ı

0

高

さは

Ł

+

Ŧi.

x

1

1

IV Ŧi. 分

と成る)、

此 5

高

は 差 百

何 17 Ħ.

千七

Ŧī.

x

ŀ

n

同

絕

順に を示

T

三千 麓

w

ED 1

萬

百 四 前 參 0

九 + 九

+ Ŧi. 時

尺

せ 於

此

依 + Ξ 余は

年 I

Ш N

12

際 下

L

考 な

とし

T.

空盒 分、

晴

計

L

千

٢

以

0

*

た

3

12 水 x

八月 登

+

日

4

-1-

槍

0 雨

17 3

於 携

1 帶 野縣

統

計

書

明治

+

年

は

萬二百

四

地

質

h

薩摩輪遊

節

する Ш 缺 1 < 12 0 12 足らざれ 標 至 高 は 3 無き 從 V 來 此 僧 かい 用 0 如 7 喝 3 n 破 現 72 せ 象を 3 5 \$ n 見 72 0 と雖 3 6 12 至る無きを 實 際 深 此 1 地 信 方

ウェ 檢す る可 保 0 ï 如 3 5 < 難さも ス 12 ず。 ŀ 然く 1 氏 今諸 日 本 低 0 抑 書及地 800 風 8 景論 日本 吾 0) 1 ァ 圖 な 0 3 は 畏 IV 12 か 敬 ブ Ξ 記 T ス 3 古 L. 是 3 Ŧī. n 13 n 槍 É 12 大に 3 5 萬 4. 槍 岳 三百百 疑 ケ は 岳 問 呎、 SEX. 1 0 同 標 1 氏 は IV 高 0 長 言 8

> 屋千 を記

序

殊に B 調 H 十 徵 0 查 本山 本年發 L は 所 × T 百 「岳誌」に 其出 1 萬 行に 最 1 分 所 IV \$ 係る 1 於て 信 不 圖 明 あ 用 10 は、 5 され なる 志 三千九十二メ 村 以 ~ 3 Ŀ 3 前 萬二百四 如 經 0 田 < 諸 緯 兩 記 度 氏 1 之に 尺 載を 0 0 ۲ * 極 12 見 依 8 P 採 せ 3 用 T 3 高 12 12 精 せ 頭 5 何 = 細 所 千 載 n 氏 な XI. d, 百 3 0 \$

> 處な 千 改 × 算 1 を 1 4 IV 行 以 は ざる J. なるべきことは、 概數 12 過ぎざれ 確信 きるい T 余 疑 は は 本 山 为言

0

德本 せば、 八 10 百 槍 蒲 峠 Ti. 田 ケ + F. 沿 岳 千 高 附 泉 x 四十 八 1 地 沂 沼 百 F 0 -6 Hi. w 泉 各 F + x 地 四 坊 x ı 12 於 1 ŀ ŧ 百 in Ŧī. ŀ 1 7 -1-N 屋 等なり。 4 7 測 尾 定 千 1 1 せ る大 百 n T. 74 Ŧi. 約 + 赤 辻 + 澤 x 0 × 1 0 標 1 ŀ 小高

薩 摩輪 遊記 0 節

文學 博 士 那 珂 通 世

坊 狹 2 0 12 F 0 3 各 間 窟 津七 至 Æ る 處 12 八 あ 八 L 日 八景の て、 50 th 未 は 大岩 網 明 間 窟 代 形 隨 鹿 幅 屹 觀 0) 島 過ぎす。 立せ なる 深 音 谷 相 君 **共 四 對 0 さてと幾 3 雙 L ti. 如 Lo 劍岩 間 it. 212 T 潮 あ 鵷 船 50 所謂 潮 文なるかを知 8 12 滿 觀 0 15 乘 0 雙劍 3 兩岩 島 沿 3 9 詩 あ CA 坊 岩 50 灣 0 は T 津 間 な 進 小 口 0 5 舟 5 鷾 8 の左岸に 灣 ずつ 通 海 瀨 は、 П す 水を 雠 岩 網了鍾 網 通 0 代 代言乳 高 浦石

錄

雜

舟

は

家

丁

0)

n

3

大

船

は

島

0

白

7

速に

登

3

こと能

はず

、七合目の谷に

水

あり

٤ 足

聞

L

3

慕

12

迫

6

T

易 外

衰 17

ず、

余も鹿り

島君

も體疲

n

すら

路

0

意

悪し

さい

整

计

50

此

日

炎

暑

殊

12

列

+

里

0

冲 12

12 Cat.

至 5

6

T 壯

鰹

3

釣 乘

6

#

日

餘

8

歴て

歸

るな

50

3

L

雜

敷小に るべ て網 老弱 1 時 は 此 用 53 從 朝 き大 を張 七八 30 大 3 は る 漁 31 な 樟 X 大 6 船 湘 潮 53 乘 船 七 5 0 12 きん 八 n 潮 42 島 1 は 4 水 5 0 'n * な 壯 ごと云 なご 酌 灣 大 T 5 0 み入 小 口 樽 _ + t 流 6 12 T 餘 S 組 0 之を 滿 出 小 づ 人 背 魚を取 づく乗込み 1 1 0 面をも 蹇 n 0 來 ば、 船 50 5 6 望み 實"老七 弱 各船 2 皆 12 數 灣 の軽 + 小 皆 口 ことと 乘 釣 石 0 舟 12 外れ を容 外 12 0 能 3 餌 17 は 舟

薩 大 漁 摩 船 船 0 南 1 = 6 + 端 餘 0 歸 艘 鰹 あ 漁 朝 6 0 と云 狀 食 i 皆 7 30 此 0 發 L 如 枕 坊 腑 を 津 歷 15 は T 此 開 閉 0 如 岳 4 12

るよ類でり 向 12 にこ 12 30 向 登 は 娃人 宿 2 雁 17 村 力 3 車 島 \$ 東 + 4 * 君 便 10 町 なら 飛 降 品 余 は 8 0 6 な 脇まし 送 と云 11 7 7 6 從 尻 引日 岳 12 猶 3 T. 0 來 登 土 至 高 地 0 降に 人 12 6 17 17 T n 蓬 午 ば \$ 向 宿 す 後 伴 CI 5 四 鹿 は は n 島 時 h とて 明 1 君 岳 I H 6 E 0 鹿 南 6 1 直 岳 兒 17 麓 枕 な 龄 17 島 岳 脇 13

るところ

蓋 内

L

土人

人を以

12 皆

健

入

隨

N

荆

棘

披

角

危

H

0

あ

3

17

降

5

と問

ば

降

2 導者. CK Ł 形 難 は 合 時 な 富 < 以 古 13 者 F. 1 已 巴 12 7 12 思 11 均 1 似 12 し 5 * て、 74 F 得 時 3 ず、 まて 富 此 半 な とな 頃 士 6 路 殆 0) 傍 霖 1 6 12 即 0 3 h 雨 樹 規 内 12 枝岩 T 樣 則 開 者 路 12 聞 IE. 4 石 濫 L 僦 L 岳 て、 5 1 は 11 攀 勾 破 直 ち 大 M 抵 T 富 2 登 步 始 3 * 士 渾 3 た

3 脚

ず、 なり 乾さ それ 望す 赔 灣 L 說 まて 72 12 慕 3 12 靄 T n T に、 \$ 脚下 は 樂み 意 脇 111 抹 水 滴 尻 T 12 42 從 天影 咫 降 17 12 0 54 山 薩 П 降 列 徑 水 勉 尺 摩 CA 腹 3 彩 し、 僅 8 T 12 3 * \$ 無 辨 前 路 掩 大 Ŧī. C 如 0 種子 登り 世 路 間 隅 六 Lo Do は U す 7 3 最 12 0 T 降る。 云云 漸 認 東 Ш たるに、 * 導 恶 西 U 掖 TI 形 1 者 頂 30 玖 IF. 南 路 t 0 北 L 圓 12 港 と言 至り 8 余 蓬 合 カン 查 灣 51 失 等 1 剪 七 近 L E 8 U 强 島 岬 T 0 日 CA 探 より 林 見 な 噴 7. 3 慕 角 ず 水 # 雜 中 3 n n 目 0 T الخ 琉 島 を 口 木 VC 2 * 至 は 道 \$ 球 放 0 血血 周 間 6 能 危 者 歷 T 院 亭 JL 12 0 4

せ

B h 差上げ申して 怪我をし ばんどん 等の身を もはんで、 はんなら 深く か ても H 一那さあ は 氣遣 かま 2 濟み申さんので、 3 N 5 でなつッさあんでやッとッ 此 申る た 導 ち怪我をさしちやげも あ 者 此言葉を飜 ねども、 たしどま怪我をしてん は、 至 7 てしてお月樣出 旦那 課す 淳朴なる人 れば、 様たちに づい 12 怪 私 5 3 まつ なさ 我を 共は

依り 索し 衆議 るまで待ち申さねばならぬ」と云ふ事なり。 厚き處に土塊を枕とし、 如何とも 晩食せず、 時半頃ふと目 正 に九時 12 長 づ民 一决 類 て敷椀を傾け、 の家を叩 て始めて路を得たり。 家 せり、 なりつ 匐し すべき様なし、マ n 0 余 井 水は が出 20 て降 戶 を覺ませば、 ic ----是に於て天を葢とし地を茵とし、 夜半弦月の出るまでてくに睡ることに 滴も なりつ 發以 至り、 飯を焚て貰 り、脇に達したるは、曉の二時 來 飲まれず、飢渴交々迫 時半頃始 三人相並びて偃臥 願 第 水を飲むこと數合、 ッチを灯して時計を見れば、 東方漸 林隙を漏るし弦月の微 Ŧi. CI, は之を以て最後の失敗 回の失敗に 8 く白 て屋根 生節とらッきや L 仏ある所 L 7 導者 せりつ 次に 余等未だ れども、 12 な 百 2 60 安眠 落葉 50 脇の 光に 方搜 + n 女

> Ш 水 趣 味

突きや、 上品と心得られ、 一位を占むる世 快樂の中にても、 骨牌さては競馬 の中に、山水趣味などを持ち出さば 盆栽道樂が、 書骨董をいぢくることのみ 道樂共に紳士のすなる娱 高 尚 0 部 分に 入 6

玉

す 小說戲曲 る繪畵に を愛するは、 あらず 然物を描くにすら、擬人にするを法則となせるより これ 12 2 西洋文化の根源なる、希臘人が人體美を尚び あらす、 な あらずんば、 幼 雅 裸體 人間の性 なる審美 美人 最高等なる文學にあらずとな 格 像 識 やら 12 の時代に屬 あらい 運命やらを描 ずん は、 L 最高 今日 0

12

深奥複雑を含はめたる、

それに及ばずとなし

自然

學者の類

山

水の趣

味を以て、

單純にし

T 到

底 0

類 文

を樂しみ之を、

味ひ、

之を説き、

るのを、

御免被ることとして、

まじさが、それ を共にするを耻 敬するもの

らに對しては、

吾人の方より ひとり遺憾 之を謠ふ世

相

手に

なるは、

詩

づる無用の開

人として、

相

手にせら

n

隨

は

仙

人として遠ざけ、

貶するも

0

雜

錄 Ш

小趣味

<

天

繪

12

\$

3

好

T

描

it

3

如

況

絕

F. 5 "

本

3

四

行 h

弘

蕉を き盛

有

L

句 東

空 於

如我

國 12

無

比 親

0 染 Ш

自 L 水

然

文學

3

有 有

す

3

17 芭

无

6

今

は

國 俳

兄

性 0 0

7

4 台 B 雜

然 I 4 東 な 路 6 東 0 西 n 習 洋 大 著 0 3 詩篇 茲 为言 3 12 T 於 術 如 そ T 史 H は 有 思 17 老 惟 至 É 必ず 莊 世 5 漢 然 3 楚解 魏六 L 3 12 對 \$ 學 0) 朝 との す 4 12 3 0 12 L 然ら 審 1 動 至 如 150 0 Do 美 ざる T す 識 傀 口 0 詩 * 知 6 發 麗 證 らず、 ざる 12 偉 達 8 大 明 は 天 自 な 15 3 太 即 然 自 古 就 令

る

T 12 8 竊 な 力 12 12 7 6 3 T 西 2 1 洋 悅 與 發 ス カシ は 達 或 A 1 如 É 3 は 72 せ 人 然 自 3 3 3 0 57 8 然 冥 所 卷 所 B w 歸 寵 謂 な 本 0 12 I n 鄉 研 r 3 6 30 人 为 " を + 究 w 和 < ١ 輓 却 专 藝 ブ V) 絕 L 17 て、 術 す 潜 ス 威 凹 近 西 3 か とも を 化 L 心 を受 描 洋 が 獅 < T L Ŀ な 200 ì 如 希 17 3 5 於 古 17 H 4 臘 態 より 3 3/ ガ 72 T 化 度 51 ŧ, 3 俄 せ 12 Ī テ あ 5 自 あ V 4 15 5 覺 n 然 3 w 1 12 -1 次 ラ 醒 は 趣 3 1 3 天 味 Po 7 L " た 來 1 我 0 0 1 15 初 为言 吾 至 3 フ 5

豊

光

て、

き光紫 て上 を デ Ш 偶 前 T フ 72 V 然なら 3 邊 歷 師 F 絕 被 ->-23 n P まし ある 後 赤 17 0 t 0 I r \$ 位 6 如 in W) IV Ш (20) 歷 妙 兄 0 プ から 水 水 7 置 114 P 洋 を 处 筆 分 如 ス 邦 瓶 12 8 な * 3 Ш 富 10 味 相 颠 10 背 揮 3 倒 描 大 を 1 士 南 を 知 100 6 匠 釜 1 N 17 12 6 鼓 Ļ 吹 72 雪 3 力 3 • 古 國 3 册 12 僅 N は -10 壁 我が 先 1,-る、 民 意 は 10 彼 ち、 畵とし 見 ÉI 大#千 性 あ 年 伴上餘 显 らず その 72 1,-12 3 家产年 模 繸 现 前 偶 Ш て宗 持"前 然なら 倣 g. 朝 0 岳 質 Ш 水 1,2 み 75 萬 L L 葉 て、 敎 邦 盡 T 8 0 彼 集 'n 鄉 A 0 は 立 此 15 今 際 Ш V) + 13 大 是 平 3 詩 12 慈 0 作 年 6 讃 起 術 却 0 12 代 母 人 噫. IJ 非 な 如 12 b 0)

12 章 12 東 終に 號 足 3 3 亦 \$ 2 3 東 洋 有 [H 西 趣 0 益なる論文なれ せ 兩 脉 10 12 記 た と自 於 す 洋 る文學士 な 0 T Ш 然 新 西 美 洋 水 小 页 盡 と東 此 說 Æ 淌 __ 特 4 等 第 洋 井 12 精 得 同 政 あ -1-0 隆 長 帝 氏 * 好 5 者 氏 國 著 年. 所 比 文 第 7 輆 は 0 頗 併 學 螆 七 3 有 て、 Ill X 狮 卷 3 讀 3 第 意 雜 せ 岳 金 7 2 2 自 12 + 話 2.5 然 11 關 强 筑 美 5 水 12 卷 1 す 氏 を 第 第 3 文 -3 Ŧī. 0

ウ

n

0

猝

U.

T

Ш

17

對

3 風

U

"

7

0

3 研

> 說 如

阴

#

T 相

今

50 岳

般

0

景

は

素

t

Ш

彼

先

我遙かに後なるが如

3

又

語

說

は

研

究すべ

き價

3

あ

55

力;

僕

0

馬

來

小 或 0 H 本 Ш 呂稱考

左の 如 知 < V 新 述べ 氏 聞 (文中 なる 12 あ 記 外 外人 人の 者 とあ 當 H 東 否はともか るは 京 本高· 觀 -山 報 なる記 知 < 名 稱起原に關して、 記者なり 新説として聽 を連載せるが

1

サ 7 サ 義 10 2 ツと云 水 綴字で讀 0 V 淺間 あ 山 17 3 T 日 3 馬 あ 本 0 is 來 Ш 0 0 とア 为言 であ 語 12 高 あり かと Ш 0 サ Asap 3 0 思は 名を 九 プ 1 こあるが 考 見 を蒙つてる山 n 高 給 3 樣 ると ~ 日 發 17 本 香 H は 本の 0 煙 5 活 B ブ 0 25 名が 高山 7 火 と云ふ 消えて Ш 多 " 0 12 かい 7 多

かい 5 C あ 轉 7 3 v 訛 L カン かい 5 た 3 7 思 3 Ш は と云ふの 12 る 7 州 0 2 は 阿阿 0 日 本 蘇 V 大山 語 沙 C 1. あ 12 ウ云ふ 3 おや サ 意味 無 V

龙 る様 適切 と問 K 3 7 な意味 P 12 3 から が語 1 ヌ 研 又 語 究を 原學上の定論と は 記 だと云 あ 者 るま は 行 2 -1 た某洋 0 5 日 , 72 本 國 事 語 學 は Y L C あ ては 者 から 7 3 フ 0 3 受 と云 間 3 と答 は 取 33 n は 3 火 色 語 V2 るとV た * 4 12 噴く 55 0 は 說 格 氏 \$ 段 2 は 但 あ

> は 飛 問 云ふ 原 大に得意氣 驒 3 1 觀 た記者 0) ことに 11 かっ 白 ら云 Ш と云 は 成 7) 7 加 加 3 あ 賀 賀 ふ意味 B 7 0 本 5 0 12 たが 白 É 12 は は Ш Ш だ 馬 更 外 \$ から か 來 12 あ 同 12 6 語 6 白 富 0 飛 山 10 士 ブ なり 驒 Ш Ш 1 には は 4. 無 と云 白 白 V Ш かっ 3 5 がある 史 Ш V لح かっ

き筈 日 本 だ 人 が神 から 1. 木を ウ か る以 上 富士 Ш 17 8 神 事 から 有 3

氏

と答 と聞 へるとV氏 < から後 間 神 社が あるセ > ゲンはアサマであ

外 達 なら 7 無 く富士 VQ から 此 は 邊 畢 0 Ш 竟 は何と P サ 云 7 3 0 神 か 0 坐

"

V

だ富士

は

休

火

11

12

から

普

は

7

サ

即

5

0

た Ш

ます

白 煙

12 12

問 ふから 足 柄 12 と云ふとい氏は

1

4

V

ある 7 サ 益 か 3 0 3 55, 此 伊 ガ ラ 富士 方 面 場 太 ラ 白 所 利 Ш 是れ 即 は は V, も火 アト 5 取 馬 中 白 7 to 5 來 ら考 灰て Ш + \$ 語 直 山 为言 7 ガラとは 煙 は 煙 さず、 为言 へると彼 るまで を噴 荒れ 荒 n 妙だ、 る」と云 3 V 0 17 樣 T 煙 荒 居 6 日 17 光 5 我 12 T アシは今云ふア ふ意味 大昔 洗れ 3 0) 4 から Ш n る山 騎 12 12 だかか 7 は 17 行 相 L T 違 T 度

銯

雜

○外國 人の H 本山 岳名称考 出

te

思

は

n

る

0 月

5

雜

0

Ł 1 T 思 Ш 見 白 F は 給 n V 3 Ш 3 1 胶 君 あ 君 度 試 11 12 澤 T 2 聞 17 荒 Ill 72 あ T 11 から 3 + 3 7 10 0 2 違 煙 事 7 を云 CA * ラ 無 は 冠 V 0 W ブ T 表 1 3 10 方 ラ 地 L 名 72 0 を \$ 越 考 0 訛

がに と云 181 あ 禭 かは 妙 火 3 葉 2 ち 2 溫 Ш か とを 6 de. 泉 脈 があ 無 力 部 思 5 者 V 力 起 5 は U 隨 3 出 Zint. 13 寸 0 T 問 部 泉 1 箱 溫 12 7 憶 根 泉 L ---V を氏 0 7 な -C 7 サ 5 居 12 Ú シ 3 丈を 咄 0 煙 410. 青 湯 لح 森 考 \$ 0 馬 名 Æ 51 ^ 來 3 为 は 逑 愈 語 3 蟲 温 系 5 4 信 得 泉 州 統 0

呼

3

Ш 3

き理 岳に 曲 クラの名稱

鞍 H 岳 本 寧ろ を Ш 最高 岳 枚 12 舉 7 17 L 7 ラデ 遑 T 鞍、名くるも 5 ざる 程 なり 位学の、等 甚 だ多 文字を宛 飛 0 3 驒 山 0

7º111 1 路 訓 上爱 あ 3 Ш U 22 12 氏 似 0) 72 * 書 記る齋 6 獨 L 72 語 7 サ 12 は 日 案ずる 日なり、 < 書 紀 12 日 日等高さ は 高 語 1 \$ 12 F. 亦て クーは 17 上" 在 12

> 4 5 からざる 指 ~ ~ 0 N-S < 天 3 説するに、 7 多 邊とい 御事の E 位《荒 Ш 51 は CI 古 似 岳 Ш 倉 堻 ふ儀 た 言 所 12 Ш 1 な 6 ライ 於 Ш 4 產 6 V 存の な 0 位位 る 羚 7. 高 7 L ž な 羊 倉 ~ 为 500 鞍の きかか な るなるべ 老 Ш V 亦 づ 3 Ш 12 高 乘 語 n 於 地 < を 0 为 け 鞍 < Ŀ 用ゆ 人 岳 以 類 3 共 やにト 15 推 上 7 上。在 るを ラのす 位。 往 = 4 'n 3 鞍 0 項 0 3 士 53 位 ケ 義 其 岳 人 難 鳥 Ш を 为 かい 42 他 飛 水 5 或 以 於 7 111 3 驒 は 3 形 H ラ T

姨 捨 Ш 田 每 0 月

3 石 72 府 枚 今 は 0 時 0 翁 信 3 姨 大和 代 B 0 濃 7. 12 面 石 0) 姨 物 田 世 は 0 更 17 捨 藩 語 な は 每 あ 級 Ш 主 0 3 2 考 月 3 所 以 为 時 V 0 整 12 3 來 稻 17 ば た 總 騷 澤 8 據れ 後 1 月 XII 1 人 のは、 傳 为言 6 月 問 の名 ば 影 取 0 な 17 喧 所で 6 5 0 为言 附 古 戻さ 礼 0 T 宿 中 會 0 C あ る 秋 L 姨捨山 ٤ 觀 12 72 n 3 3 办言 3 田 月 V 姨 专 T 毎 0 3 石 0 2 出は冠着・ 宴 2 沂 ださら 3 就 中 0 5 月 5 傍 中 央 佐 東 は 催 姨 山 見 2 藤 捨 あ れ幕 3 T Ш

あ

つた。

錄 (筆の

雜

た T 開 そこで田 0 教 來 通 を請 余は た人 月 L 1 T 郁 達 \$ か ふてとし 信ずべき人から二説 5 は、 のに 0 A みん なることは容 諸 5 L 方 いふてとに な失 72 נע 5 望 觀 L 月 を得 易 12 疑を夾む T 歸 1 行 ない たか えら くも 者が なけ 0 5 0 で、 为 掲げ 隨 あ n 能々 分 3 ば t T 在 から ても V, 遣 博 2 0 識 だ

送った、 月が事 大喜悦 の小 斷 なつて、 いふことが世 3 1. YE. てとに 實ある 7 Œ 遊 土 文 毎 1 作人 地 管 な 損 0 間 \$ 0 0 料 月 者 8 は 40 有 は手敷な 4 のとすれ た 絶知れ 力 排ふ 虚 者 2 其 說、 カコ 意. 12 1 ばよ 見と id 協 5 自 L 議 鉄 12 睢 收 ± 折角の V L 插 车 V が、 苗 地 ふの な 獲 東 ززر を見 35 京 0 名 萬 あ 3 は 0 所も 好事 有 3 合 CK 虚 カ 2 果し 12 せ とだ てく ると 者 者が か 言 0 12 1 T な あ 意 田 Di n V ると 見て と申 ふっこ L 每 5 姨 12 0 捨

岩山 角に 前 反 があ 射 12 映 月の 田 雨 L た 0 毎 て 2: 月 光 T 0 降 所 影 6 月 0 其 謂 から 为言 は Ш 稀 H 3 空が霽り 每 1 から 12 姨 0 石 0 雨 あ 月 近 岩 17 5 を現 濡 傍 角 て、 12 0 月 n 出 段 輝 T 0 る 出 L 寸 4 1 か 3 12 臎 3 3 ė 處 前 な 間 中秋と それ 12 Ż, 0 面 T 12 为言 3 月 角 10 < 月 3 0 V 3 0 0 0 3 3 田 譯 岩 出 15° 面 5

5

思

は

と苦

々しき業なり、

氣

候

風

土を

高

Ш

0

絕

0

人

בל あるようである。 5 仲 4 lai 倒 た、 式 74 Ŧī. + 年に 度位、 見らける

方言

儘

聽 梟

學

人

度千度。 再び 何に、 或人 は 人 1 登 登山 云 或 は Ш 云 登山 は 人 は人をし 4 0 念を起さし 云 < は人 13 登 < 登 Ш をし て六 は Ш 彼 人 は人をし 根清 Ĭ, 12 T を 天然 L 一番なら 予 T m 云は 體 L 17 T 剛健 て ---力 Ĺt, 致せ 1 8 壯 度四 の氣を養 登 L な 或 Ĭ, 5 度 山 Ħ. 人云 は 度 子 或 27 をは + < L 或 度 云 百

< 云 或

候 ててそ、 扱い なれ 風 T, 或 は 人云は 3 + せら しかの n 15 若し 滴 四 ۲, 3 量 合 う人総子 み 2 高 0 ~ n 光 ならず、 高 Ш 景と を平 植 Ш 砌 0 植 園を平 其花 如 地 配 物 3 12 ع 合 植物 移 を 葉根 v 寧ろ 地 其 植 保 3 に設 莖 自 ち L 4, を變 身に 殘酷 た て、 0 け n は 於 ば h 0 其 感 2 美 高 とする す 1 を覺 あ 1 Ш E 3 12 平 \$ 地 恰 WD 生 \$ 育 0 0 3 如 0 4 他 氣 な

なり

錄 武 田 Ш 1 梨縣知 事の 齊翰

雅

然の 35 其 說 物 並 5 儘 0 園 を見 高 如 10 信す 山 苟 模 何 12 植 物 \$ 倣 专 物 世 尋 L ずと の故 園 常 12 人 意を を訪 0 n \$ 雠 ばとて 以て 脚 快 ふが可 12 * m 時 す 有 な 12 世: 未 3 す だ遽 \$ 3 T る 0 柔弱 \$ 0 12 专 か 非 な 高 0 3 ず Ш 12 連 12 高 南 12 は 12 3 登 は 2 Ш 信 攀 模 さるこ ず 植 物 子 i 倣 12 E 45. 園 は T 高 とな 設 其 Ш 常 所 天 柏

*

3

*

UI

此の

瑞

船と

中す

II

北

巨 後

壓 五回

增

富村の

中

にて

、是迄誰

n

も知

5

12

靈山

it

前

学り

候

す

3

*

得

ざる

なり

r

子 月 は 山 聽 沈 荒 0 松 曉 野。 庵 景 釋 目 宿 日 12 雲 謙 睹 道 埋 るが 衆 光 峰0 から 如 蒼 題 茫 富 元氣 蓋し得易からざる + 曉 裡。 景 圖 已見玉芙蓉。 0 絕 0 愛

は、

腑

武 H U 知 事

T 12 を以 3 書 信 な 3 が 51 轉 載 瑞 L 牆 Ill 同 0 勝 好 0 地 は 文は 士を 未 だ 略 紹 世 せ 介 53 す。 知 6

左

は

特

别

會

員

武

田

:F

代

郎

氏

t

5

本

會

0

城

斡

事

12

隨分ありさふに考へられ候、 II 御 承 知 0 通 1) 0 Ш 國にて、 小生も元來山好きに候 跡 未 到の 深山 共 面 俗 白 務常 さらう

> 瑞牆山と中で富士の湖水、 に多忙 H 压 0 15 S) の諸山 Ш 嶽 上の Lis 西 遭 0 模樣 なども 入り Ш 脈は II を承 未た かり 一兩度急りたる事有之、 知致すやうな次第、 跋 致 选 し居 へ致、 候 開 も得 林 業 難 技 御 3 外には 笑下さる 話 峯 國 金峰 司 御 0) 四 候 贈 騎

嶽

歸りは増富、昨年新道をの 中す開墾 三十人位とまれる よろしく、 るへしと存候、 の奇な 付にて 数日 止 居り 地 0 富 8 滞在 宿し得 あり、 馬ならば全線 U 江 水の奇なる、 400 草、 御嶽より 本月中 戸 バラツク 候に付、 多際、 数三 不 自 黑平 通過 pu 由 無之候、 か新築 高山植物 is 月 若 日神子へかいり、 し得 を細、 あ 出 1) 致 來 しあり 木賊峠と云ふ 金 パラ 致すへく、 七と申す 候 富め り、 19 Ш 府 3 1 (但無 しいい 0 H 5 左す 直 行 おや 野 春又は 住 く前の 三十 を越えて参る所に ヤは H 5 れは十人位の人 倉 町 にて婆る事 八ヶ釜敷所と 料毛 手前に、 只 景色よき所 I 八今立派 布を持 出 75 か 金 家 Ш ろら 相

玉愛かとも、 侯0 とに 殊に紅葉は闘東一 詳 御 f 細 尋 寄り 原あ n いい 此 依 调 つけす 1) Ш 中上 V) 時 一路とつ 0 間 結 幽 果、 なるへし、 一新候 程 候 谷 富士 カ きて、 地圖 徑約六里 200 新 1) 設備の大要左に申 候に には増富は、 深 林あり、 質 是 作此の 此 付 に被北 0 の瑞 里 大村たることを確め 秋には、 0 瀧 程 牆 あり、 極め 0 II 景 先つ 奇 勝に御 てちい 色は、 九里 溪 御案內申上 流 位 座 さな あり 富 士 候 申 村 か か 甲 候 御 除 ٤ 0) 可 岳な 推 府 Ļ き甲 定致 1 うな 牆 岩 州 女づ i i v) 足 Ш 隨

る次第なれとも、 取締保護に注き、 應の設備を爲さんとする者なきには閉口致居り候、 者を欺き、非義の利得を食らんとする者あり、又一方婦女子なとな引つ 度より諸 旁々登山 山と云ふものに無經驗なるにも拘らす、無謀の危險を冒すものもあ 登 山者俄に増加したる爲め、 期中、 般の取締を企て、又當業者を促して、 彼等の無智にして强慾なる、 營業者の改善は漸な以て之を誘導するの方針を取り 相當の警察的保護を加ふへき時期に遂せりと信し、 山內營業者等、 容易に舊行を脱し、 改善に從事せしめた 往々姦策を用めて登 依て全力を警察上 時世

登山 道

居り

迄最急れ分の一にて、 こり 神社迄約 を確め候、 馬返し迄は、最急勾配十分の一にて、 五合目迄約 田より七里とも、 おく考に御座候が + 町 即ち今度修理しつしある道筋に依り、 里、 計四里と少しに過きす。 馬を通すへし、 五合目より八合迄約 八里とも中居り候へとも、 五合目以上は在來のましに致し、 人力を通すへく、 二十五町、 (不日本式に丈量せしむる筈 質測の結果四里强なる 馬返迄二里四町、 八合目迄頂上くす 夫より五合目 夫

4)

as:

止 E 致し居り候、 しの試験する積りなり、 警察電話は、 五合目より へられ候、 明日より上へ架設の筈、 本日より天候恢復致候に付 吉田分署より八合目巡査派出所迄架設、 架設中の **釜岩迄は、** 工事難は、 岩骨線と、 勿論取急き、 売日來の天候の爲め、 追て主任技師に詳細記述せしむへ 砂坂線と、 砂 二十日頃迄には、竣工すへ 坂線を架し、 二線を通し、 落成の上釜岩 始んと工事中 本日中に五合 本年の

> 間社 こり 小屋釜岩と引張る事に相成申候 はなれたる谷に沿ひて、 馬返しに引き、 より、 一谷隔て 年道はかりは登山道に沿ひ、 夫より左へ折れて、 四北の岩骨の方 五丁目に 選し、 へ譲備線を架する筈に御座俠 木立の中の登山道を、 夫より經ケ嶽へ出て、砂坂か穴 夫より一 直線に登山道のたか、 二三丁月東 吉田

此の電話線を郵便局に借して、 御 殿場口へも郵便局を置く 八合目富士ホテル 由)にて 八合目 公衆電報を取扱ふ筈に御座候の (郵便局富士山北郵便局と解す

頂

E

て上れは、ヒプテキ位は食へるならん。 等は 、本日より山上へ ホテル 此の建物の一部に、巡査派出所及び救護醫員詰所を置く答なり、 和洋の炊具の一寸したるものも備へあれば、 慶壺 に藁布園に毛布か用ゐる筈、 御實見の上、 會社の經營に成れる、 御批評を仰き度し、 運搬する答、 本月中に落成、來月一日より 八合目ホテル 食堂のテーブルは吊りテー 設計は縣の技師の手にて貰へやり は、 昨 贅澤な人は、 Ĥ 木材の切組みな終 開業すへし。 材料携 プルな

量る為め、 の比較を爲すを得せしめん際定なり、 外にカンカンを備へ、 救護所には、 れ度願上候。 酸素發生器を備へ付けたり、 後者は山量病に罹れる婦人なとを治療する為に、 一と通りの外科、 希望者は自ら激め、 道具、 前者は人の充備せる岩室の炭酸瓦斯 其の 薬劑の外、 外の設備の詳細は、 吉田乃至須走にて量れる體重 簡便炭酸定量計、 用ゐる答 御 實見下 to

小生は來月始 座侯云々の 七月十五日 Sp. 登山の筈、 其の頃會員諸氏と同行するを得は、

13

御

學兄玉机下

3

武田千代三郎

雅 錄 0 五 田 山梨縣知事の書翰

に就て一二所感を述へんか。

雜

Ш 圖書批 評

として暗傳せらる。 ろ所なりっ して近年登山家の名著し、 山い物の栽培家として漸く世に知らる。 水は無表を落す、 田晴山は、 鳥水は銀行業に從事して其名は却て文學界に聞え、且登山家 高山植物叢書の第一册を、 然れとも今は其内容い月旦を爲さす、 皆本會員なり。 三著省の各特色は其著作に於て十分に發揮せられた 高山植物の栽培と、 盛山は小説家として名を成し、 鳥嶺は中學に穀類な教るの人而 志村烏嶺は「やま」を小島烏 寫真とは最も其得意とす 試に書册の外形 近年高

高山植物の枯損しやすきな意味するものに非さるか。 見さる仕立なり。 張り 山植物叢書は、 付け、 脆きこと紙より甚しく、 見兎に角に凝った物なれども、 行皮金文字に神代杉表紙の金具止と云ふ、世間多く 些の摩擦にも損し易きは如何につ 紙よりも薄き神代杉

カラの様に見せんとして如何にも鬱縠に出來上りたるものに非さるか否鳥蹟の「やま」は頑丈な金具止め帙入りの如き外見の妻紙なり。ハイ 入の如き表紙は、 實に登山に適する資格 高山に防寒の準備必要なるを示し、大體の頑丈作り を表出したるなりと言ふ者ありの

ぬのが無類の特色なり。 意表に出づるの洒落かつ 烏水の雲表其命題の大なるに似ず、 IF. を毎紙 確なな る觀念を得る能はすとの寓意から 鳥水日常数字の爲めに惱殺せられ、 此一小册子、 知らす高山の道程は、 四六の二分の一大の袖珍册子、 厚さ凡そ曲尺一寸 各人親しく踏 紙数のわ 之を厭ふ 人 破 か

する

植 物叢 第 册

田 山 橋南

全部は十巻より成るよしにて、 菊版のハイカラ的装釘を用ぬたり、

冊の價金一囲なり。

所々に 色版の着色植物副四葉を挿むc 謂ふへきものなど、 各箇に就て先つ形狀を記載し、 其結構を按すれば、 たる事を筆のまに(、書き列られたるものと云ふこと、適當なからんか。 第一册を一讀するに、 節短なる記述を爲せりの 第一册の百五十一頁に二十四種の高山植物を收 華やかな筆にて面白さうに書列られ、 叢書の稱に背かず、 又各植物に必す略圖を附し尚卷頭には三 次に自生地の有様、 高山 植 採集談或は神話とも 培養の方法も

v] 11 て、 は文學と科學との趣味を調和し、 は如何なる科學を指して言へるものか、 考へで、非才自ら揣らず、 然れども此書の目的は、 此册子の那の邊に植物學が文學と調和され有るや見出すに苦しむな 讃んて面白く、知らする、此趣味を善及させるやうにしたいとい 敢て機性となる事にした」と言へり。 那の逸にあるやを問へは、 索々蝦を噛むが如き無趣 若し植物學をいへるものとすれ 緒言に於て「本書 味の科學をし

らず。 草花に因縁を付けて幾篇か薬めたるものに過ぎず。 たるは、 る事質の如く記述し 此書高山植物に關しての神話様のものを掲げたるを讀みて、 評者は植物學を知らず 本書に記する神話の如き、 某氏の草花物語と題したる新刊の小説なり。 たれとも、 園婆を解せすと雖も、 自家の創作にかいる短篇 亦如何はしく思はるいもの一に 誠に氣のきかぬ作物 其著者は皆根據あ

4

用

私製はがき

が一册といふ、

凝りに凝った、

頗る的美本である。

か

ればなるまい。

名札に見せたらどんなものか、

私製はがきは蛇足といは

逸人の手に成れりといふ岩鏡に付ての戀愛談をも謬述しっ 氏の叢書を讀めば、 此花元來歐州に産せず、 を見て、 名 歐州の事質を記すること、 を問ひ 此花 時時 故に近來歐人の之を賞美する事長しと。 アル 或る植物學者は岩鏡の名 プス」山 實に給三頁の多きに及べり。 中にも生する如く記せりの を数 H へて且 本特有と聞 今器山 0 E 且

獨

なりの かっ 兎に角老熟せる筆を以て、 高 Ш 植物に精通する人には、 面白く書きこなしたるは、 更に一 種の興味を感せしむるならん 特に此些の長所 S. H.

> 有 白

9

前志 田曜山 兩氏合著 實價壹圓五十

鼠

H 本 橋區吳服町橋南堂發行

たが、 れて、 したが、 しく見聞せるところであるから、 謂白馬から、 てあるといふ三 つた口繪寫真が十 京することしなると、 余は本書に淺からぬ闘係がある、 徒然の際とて非常の趣味を感じた、 余が九州漫遊中に漸く發行された、 荷物が重いのと、 紙は富士柾で四百八十頁、 槍 ケ岳の麓の島々まで同行したので、 點 二頁、 からし 我慢が出來ずに神戸から携帯したので。 附録として て 讀む暇がないのと歸宅すれば著者から贈與さ 購求せずにぬたが、 出版の日を待ちに待つたが、 昨夏島嶺氏と大蓮華即ち信州人の所 外にコロタイ 『日本高山 實は熊本の書店で始めて瞥見 余は横濱通ひの汽船で一 地圖 本書の半数は余の親 汽車が不通て汽 プをアートベ 册と、 印刷が遅 1 讀し スケ べに 船て 氏の 6 ち込んで、

あらずもがなと思ふ、 戦争頃に出版になった、 に成つてゐる、 記と卷末の富士山との二篇、 案内、 繪を無地か他の撮標に換えて、 ばならないものである、 でも大好評であるかに聞いてゐる、元來我邦山岳著述の元祖開山 しく寫されてゐる、 戸隠山及び飯綱山、 されてゐる、 第三回登山記、 嶽の記事で、 雲表』(未だ接手せず) 體裁、 明山、 と附園が鮮明で、 目次を列擧すると、 馬の裏山越え(越後日)、 『日本山水論』 植物目錄が三百六十頁に、 表紙の繒は大に氣にいつたが、 燕岳、大天井山、 徳川氏前記豐臣氏といふべき格で、 次が本稿の 全體が高尚て、 日本アル であるが、 文章も面白く、 爾氏の合著ではあるが、 黑姫及び妙高、 或はズット突飛にして、 初 尚ほ一歩を進めて、 と俱に、 プスの雪及白馬岳氷河、 め 志賀矧川氏の『日本風景論』て、 「日本アルブス三大横騎」 常念岳 第二回横断が、 から百四十 合計八十二頁だけで、 隔端に皮をつけて、 本書は山水論に亞ぐの名編て、 厭味がなくて、 山水癖の是非一本を座右に供 亘つてゐる、 近來の絕好著であるから、 八ヶ岳、 槍ヶ岳、 五頁までが、 折鞄風にしたので、 針木及び立山、 忌憚なく批評を試みやう。 富士山 露山氏の方は、 笠ヶ岳、 旅行鞄に擬 比較的缺點が尠なく、 以下は餘波で、 白馬嶽植物目録に 第 眞中に著者の名を打 他は悉く鳥嶺氏の て、 て、 鳥嶺氏最得 一回登山記 穂高岳で、 八ヶ岳が 16° 第三回横断が 俗 白馬山 回横斷 新聞雜 島水氏の 小島烏水 意の となった へんけれ 設紙の は日清 祀 一番 間 雷 雷 Ш 細別 雨肥 白馬 寫

ら、くだくしく養辭を呈しない、 寫 直真、 数 々御自慢が載つてゐるが、 挿繪(スケッチ十一頁)、 目今氏獨得の妙技といつても差支ない 烏嶺氏は山岳撮影が大天狗で、 だがしかし、 解題には誤謬と説明

雜 繇 P

#

舍て捕えたの

てあるの

雜 錄 P 3

寸の雪 夏冬が L が足りな あ か 不 生 5 圖の って、 文字を用 れの ケ岳 (11) とが 解題は、 國 ш めちやくに 6 らない、 の温泉とい の人に のは、 0 5 字 3 ひずと 川するの は際して (1)はテ 實 f つば、 槍ヶ岳温泉附近の殘雪、 6 て九 地見聞上から、 つと念入れにせぬと、 なっつ 然かる 憂ひ ·白 × デ II 地質調査所や、 年である 馬 35 如何、 Ш T 其様な考 上高地か蒲田であるが、 も三十九年でなくて、 標 ある、 絕頂 まつた、 本であるから、 白馬山 (3) えがなからう、 東の そ (2) れから白馬 毛が冬は白くなる位は知つてゐる この夏の方は、 太古氷河之遺跡 信濃縣廳やの 白 といふ、 のら白馬山、 讀者に通ぜぬと思ふ、余等北國 筠ヶ岳で、 何分一といふ記入がほしい、 =+ p 雪 なり 殊に雄雌に分け 七年あ 温泉とも八月には 地圏に白馬嶽 谿 棺° 昨 大きな山 稿から 白馬の 夏槍ヶ岳の坊 たり 简 ては 0) なら説明 撮 のも 35 けたのて ない、 紀伊に とある 3 影 00 11 \equiv 主

して 於て 烏嶺 融類 市を踏 余が名の式 氏の文は 中には い文 を掃蕩するの 精 0 2+ + 向も見える ш 水 潰 得 氣 750 心凝って を得 る者 を語るに足るの しも、 汝 雄 か 徳ケゴ 、肚て、 0) あら 伯 珠 快學に出てず」「然るに不思議や此赤岳 露泉あ 35 11 峠 玉の如き涓滴 兄 ハベス 絶えて 能なる淺間は 士なり、 1) F, 7 あ ケ岳採集は れが鳥嶺 織弱 + あは ŧ スは 赤 岳に登りて此類泉 となり、 0) まだしもだが、 一替て 氏の 未だ末世 風がなく、 傍訓したの 一他日此 成效 頼母し ポン 早 せし 一天に 地上 0 1 活々としてゐる所 II ものと云ふべし」 溷 採集を試み、 ありても B 濁 ところであ 3 を焼燼 を見出 n をオ 要す クラネ 数 0) 4 Á 絕 ず、 るに 水 時 此 間 ウ あ 頂 t 75 天 4 島 7 等 5 35

> 自身が K 相 校正 世 3 82 6 0 が 0) を拾ふ 本 書 0 ٤, 大 昭山 鉄點とな 氏 0) 0 1: やうだの

して、

專

敬氏

あるか に吉田 誤謬があるとすれば、 儘にしてある、 といふ著作 を碱ずるとい えるとあるのも 北口なる者の に跨り 槍くらいの高さだ、 とは路の遠きないふか、 七八、 憚らぬところである。 意か、 米突はドウシテ 3. 5 П 一、甲、相の は と思け 笠が二八九七 か選 云々と記され 富士山寒中滯岳で有名な かされ 余には解 何 他に n ふなら兎 びたるもの 陸地 類る怪 富士山は誰よりも 比す の三 少く モ承知が出來ない、 in せない、 る角、 國口 量部邊 共 小説家の T: とす n 景 it 11 8 夏に 跨り ると、 致の 景 今年の七 强(の役員 夫れ 燕が二七六 島嶺氏の、 致の頗る住なるを聞 大天井や燕以上であることは、 住とは 踏山氏を告むるは、 から 至難 抑 常念獨りそんな低 詳 FF 月訂 中 明 から 細 4 、此山は を胃す 藩 喬木帯が てあるべき答 到氏が、 治 正再版 此過一帶 得 Ш の地 八ヶ岳頂 たの 0 標高 の推 酸 大天井が 三十 され 河 7 長 を見ぬので あらう くて、 富士は我東海 II きた 强 0 £ Ш 赤 者 酷 T 甲裴及び相 四年に『富士山 €. 筈 颖 岳 流 か 45 二九 ればなり」 岳 緯度 から、 植物が 中氏 がない が に非 6 办 知れな 此 絶て其 常 ず、 3: 名文 余が断言 赤 念 常念は 槍が 偶ま此 句 天 石 II

ふの

及妙 餘 から II 附 不便に 高附 錄日 も解 版、 此 本高山 近 說 書 もない なるもの 版と呼 वि 一地園は、 淺 放 から、 間山 か ぶことにしたし、 附 落丁 給も、 近 余は 24 便宜· 0 があつても 色刷りの小 揷 輪 8 上 假り 6 北部日 第 15 知ることが 折圖五葉から出 地 圖 三版 本ア П 日給の頁 办 12 頁 A 7. 出 办 7 示 た(1) 地方」 してな 岳 來て 附近 (2) 3 凝 月 第 書 過

雜 銯 0 雲表を讀む

ゐるが、 ても、 同じ處に同じ縮尺であるから、 米突毎に太線を勘いて、 版が ケ岳附近略圖」は、二十万分一らしい。 ケ岳 3 第二版の「日本アルブス地方」は、 「富士山附近」、 此位の注意はして欲し 穂高の二名岳が除かれてゐる、 から蒲田、 闘中の朱線は無意味だ、 北部日本アル 笠 か岳、 此三個五圖が四十万分一で、 他の四個は細太線の區別がない、 プ 燒岳の線が解せぬ、 ス 地方」 著者の足跡かと思へば、 循ほ更ら継に見える、 停車場の符號のないのも惜しいことで の一圏だけ、 富士も引いてない、 百六十万分一て、 讀者への案内かと思へば 百米突毎に細 最も詳細に記 原圏にないといつ 宮城から有明山 第四版の「八 殊に第 他に二圏があ 記されて 一版は 五 T

編を收めてある、

その多くは一

度本誌や、

早稻田文學、

新

古文

林

中

に自重して輕學暴動を慎むやう、 てもよからう、 科に通じて、 がないといってゐるが、 好者は、 最後に一言するが、 0 まの幾十篇續刊せられんことを鷄首してゐるから、 寫真に巧みなるもの鳥嶺氏の如きは、 氏年壯氣銳、間 古來から筆あるものは足がなく、 當世とても、 々健脚に誇つて危險な顧みない、余等山 聊か苦言を呈する次第である。 足あり筆あり、 葢し比類なしといつ 地 足あるものは筆 Y 植物の諸學 好漢幸 岳

高頭式妄語

雲表を讀む

T,

B

内容のあらましば、前號の慶告にある如くで即。 島烏水氏の著で、本年七月、佐久良書房より發行されたものである。 「影不二を觀る記

及大天井岳に登る記 模野」「冬の淺間山」 「日本アルプスの南半」 『奥常念の経巓に立つ記 「中房温泉の記」「燕 梓川の上流」 の八

0

ある。 なく、 旅行家として、 大きいと、 く物足らぬ、 たほどには、 を観ずるのは、 何にも力があつて、 房温泉の記であった、 全篇中最面白くよんだのは、 如きものが、 の作家として、 世界等の誌上て一たん世に間はれた作でもあり、 人あらはれる、 7 筆が反て造ると菜気士が云はれた如きものでしもあらうかっ ヒシヒシ胸に営る句であるのは、 梓川も、 評をする等、 感じないかと思ふ位である。 名代の先生の作 世に定評ある鳥水先生の作故、 然し影不二は自然が、 實際に常て、 自ら感興が起つて來る、 少しダレ氣味の處が見える。 相 模野は先生には、 云た次第ではない 尚自分如き神經の鈍いものは、この文を讀 燕岳以大天井岳に登る記と、 だけあって、 人間の筆より大きい為か、 得意の作で御座るまい 山を描て、 275 最この書を讀で愉快な處で 作り付た様な形容の句等 然し自分の考 内容に就 野に居て、 殊に山 自己の感想があまり 先生の震腕は、 ては何の自分の 岳紀行文の Ш 相 模野 を云 か觀 何とな コニ 1: 唯 史

色の調和上の關係があるのかは知らぬが、 分には物足りぬ、 一副の一二枚は、 下らぬ言を、 表養、體裁は、 黄色にてなくとも、せめては白花にして戴きたかつたと思ふ。 もちつと澤山ほしいとの、 つられて、 入れて載さたい機な組もする。 寫真版及び繪稿は紙もよければ、 然しあまり感服しかれる、 變式の批評を代へる。 他の欲は云はぬが、スケッチ あのシャクナゲの花は、 頁数のないのも、 表紙の意匠は、 今の日本としては 當式の 兎に角 自

古 II. 孤 雁

「雲裘」を拜見して、 近來次第に、 哲學的となり、 私が第一に感じました事は、 叉 一方には情緒的になられた事です。 大兄の自 日然の観方

猫

雜

居ります。文章に就いてなどは、 如何な事でせうか、 はるゝに就いて、多少缺くるの恨みなきにあらずと思つて居ります 出さるし點には、驚嘆して居るばかりです、 後者は相模野の如き、 情意の伴ふ所、 大兄の自然に對して感じたまひし、 と申 其反射を彼に求めらるしこと、 すの 深い意味を求めらるし事、 II 御数示を仰ぎたいと思つて居ります。 少しの遺憾もなく、思ふがましに大自然を寫し 然の外形ばかりでは、 **景趣に接せられた時に、多いやうに思つて** 申上げるまでも無いこと、 情緒的とは、 感情の Tone か、 只若し求むれば、 前者は山岳美に對した時に 飽き足らず、 人間の情緒 次第 大兄の獨特 文中に表 説明が少 を自 4 マヤニ が 鉄

って來はしまいかと、 られたと感じるのですが、 大兄の自然觀が、前より一層、 内部へと導き入れて行きたくなるのです いとばかりは、感じて居られません、何か最一層、人間と深い關係を 自然美研究者、 に戻つて、自然の觀かたの哲學的となり、情緒的となるといふこと 居はしまいか、どうしても、 此自然観の如何によつて、 愛好者の、 秘かに考へて居ります。どうも單に、 如何でせうかっ 深酷に、 如何にしても次第に到達して行かなけれ 一層切實に、人生に近づいて來 自然と人間との關係を、 其人の人生観が、 私は『雲表』 によって、 自然が美く 非常に違 內部

從來の旅行記と同樣なものと思ふのは、大に不賛成だと存じます、 泊したとかいふやうな、 紙上て言はれ如く、 私は『雲表』のやうな作に對して、 他の好 行文とか又叙景文とかいふやうな文字が、 い名が見つかるまでは、 道 個の人が、 中記風な紀行文は 何處で豊かたべたとか、 之を單に 用ゆるとしても) 從來でも勿論、 「紀行文」と云つて 私は嫌ひですが、 大兄が これから 何處へ宿 質を マ文

> なり、 とか 强ひて小説と呼ぶ必要もないでせうが、 人事にばかり、 い事のやうに思ひます。 る以上は、 只た求むる所は、 層、 「旅行記」とかいふ文字の上から來たのではあるまいかと思ひます と定義を決めての上て、 文學上の價値の少ないものとなるだらうと、 之を紀行文といふ名前で、 愛好の興味を、い 狂奔して居る今の世の中です、 自然美、 「應用藝術」 乃至自然の意義の研 かに表はし傷へんかとい 論をするならば、 云々といふ如き誤解は 概括するのは、 紀行文と言はずに、 小説とは人間か書くもの 自然美を描くもの すこぶる面白くな 及び愛好て、 信じて居り ふのが、 何とか他 っますっ

の雑誌で、 何様に興味深く、 層考へて見たいと、 雲表』中の作、 紀行文家の批評をやると聞いて居ますから、 如何様なる意味のある事でせう 一として、 思つて居ります。 生等から考へると、 今の妙な小説より、 折があらば、 稻 カン

好い名が無いものでせうか。

あり、 暗示か語る詩人なりと云ふべし、 川と云わず、 記となさざるものあらんやっ 紀行文の曲範となすもの、 紀行文家中一頭角を抜けるを辭むものあらんや、 鳥水氏の吾が山岳會に在るを知らざるものあらんや、文に、 U 水氏の筆、 ありと知る人、 度 解細なるにあり、 THE ST 海に、 表一を繙かば、 常に雄健の風あり、一度其筆鋒に隔るしや、 雲ありと知る人、 陸に、其真惑を拆露せられざるはなし、 「不二山」を觀、 誰れか烏水氏の文を以て、明治今日の東西遊 將に其雲 表に聲 氏の文や鋭利なるにあり、 溪流、 「山水無盛蔵」を読みたるの Ш 然たるを知るべし、 南溪の東西遊記を以て 森林ありと知る人 想に、 將に自然の Ш 剛堅なるに と云わず た 現代

雑 錄 0 雲表を謂む

年客氣の風あり、 しと雖も、 し筆、今や乘鞍の如く、 兀々然として、 『雲表』を以て、 鳥水氏の第二期に入れるものとなす、 後輩の余、 先輩 衝天の勢ありし筆、 烏水氏特得 後者に至つては、 且つ嚴然と天を障するの風あり、前者は氣骨稜々青 を蹴するの罪、 御岳の如く、其容姿は、 の妙筆、 急轉落下、千尋の下に隨るの况 圓熟將に萬難を排したる雄士の風あ 極れりと雖も、 骝 如として其紙面に生るが 烏水氏愛好の槍、 突兀天に聳ゆるの風な 余は 『雲表』 穂高の如く 如 一に至つ しとな あり

白

幹

中收むる所

燕岳及大天井に登る記、 (三)北穂高の高原、 南牛(一)信州に入るの記、 流 不二を觀る記、 上八篇十一章。 (四)常念岳に登る記、 相模野、 奥常念岳の経顧に立つ記 日本アルブス連嶺を觀ずる記 冬の淺間山、 中 房温泉の記 日本ア 梓川の ルプス

牛』の如きは、 べし、『常念の経臓に立つの記』、余は是れを以て烏水氏近來の傑作なり 『日本アルブス連嶺を觀する記』中の自然論―科學者攻撃の宣言書: 其多くは、 」以下の四篇は、 吾が『山岳』に連載せられたるものなり 度諸雑誌に載せられたる所にして、 本書の内に於て特に其優れたるものたる 『日本アルプスの南

V)

と信すの

文學者は科學者を、 大迂遠虚なるものなりと非難せり、 同 る如く、 じき自然を觀するにも、 『山鳩を嗅き出す獵犬』と撰ばずと云へり、 其最終の目的 『質』をのみ語る、 II 其眼底に映ずるや、 創 造の 思ふに科學者も文學者も、 極 致に 皮相なる、靈もなく、溫情もな 達するにあるべし、 必ずしも同じからず、 科學者は文學者を、 小島君 さあ n 0 誇

> 點よりして文學者は、 自然をかりて作者其れ自身の個人性を鬻くものなり、 是れな以て見れば、文學者は、 を除き去りたるものは、 介在して自個を語るものなり。 水氏などの文も同一なるべしと雖も然らず、夫々個人性異ればなり、 にして、 二とは、 と雖も、 或は宗教家、 のなるを知るべし、 性』の必要なるは、 者の個人性の相違に起因するものと云ふべし、 然其のものにこつて自個を語るものなるべし、 大河流をなずが如し、 は一つなれど、 、突極の目的に於ては、 單に自然其者を寫すならば、 此れに映じて初じめて、 其趣を異にせり、 西行の歌に現れたる不二と、小島君の『不二山』に顕れたる不 盟家、 枝は無數に分れたるが如く、 吾人凡俗の眺めたる不二山 地質學者の眺めたる、 其作物の價値如何は、 實を語らざるにあらず、 ソップの出し酸の如く味も香も無きものなり、 科學者は自然其れ自身な語らんとし、 此れ即ち不二其物に於ては同じにかしわらず 致すると雖も其徑路は同じからず、 自然其者を寫さんとするにあらずして、 小島君の筆も、 作者なる幻燈は、 不二も其本質は同じき者なり 其個人性の價値如何によるも 質を語るにあらず、 6 漉々たる溪流相合して、 吾人の文も、 藝術的製産物に『個人 藝術的作物より個人性 觀者の目に映ずる 西行乃至は小島君、 自 然は一つの幔幕 花袋、 文學者は 恰 此 麗

作

現在に於ては、 る質ん謂ふものにして、 特色あり、 媒 云わず、然れども、 ダーヴン」「ワイズマン」「ハッ 科學的製作物も亦全々自個を沒却して生れ出づべしとは云ふべからず 介として自個を語り、 其歸納的方法たるや異れり、 文學と科學とは、 科學は文學とは異りて、個人を介在して、 其極限たるや、 は自個を介して自然を語る、 表裏の關係なるべし、 クスレー」「ワレ 科學に於ても亦個人性なしとは 同一點に歸すべしと雖も、 ス」各其論文には 質を語るが故に 方は自然を 自然を語

索引の

附

せら

もの少し 書籍の内、

或人は、

0

書の

價値は索引

の有無によ

極めて僅

かなる専門的

著書

を除きては、

試

從來吾が

を記

され、

れ體裁上

所謂、

取

しと

雖

若し特志

書の補修を爲せば、

其内容の如何に豊富の

b

れるや

此書を讀破するに當り、

索引なりと つたるなるべ

作るとせば、

大なる不

利

3

程

から 野

暮なる可

m

如才なき同

氏は、

尚

11

結構の のとな

何 II

大に異れりと云

V)

此れ

理ある事なるべ

今此書を觀るに頁

に於て出版せらるし

しとすべ

出ては一中以て雲表に至るの料たるべし、

給畵を挿入し、

卷中六頁大の淺間大溶岩流の寫真

鳥嶺氏撮影の寫眞

寸位、

體裁中々に凝り固れり、

卷頭

晚

霞、

弘

光

兩

H

0

君のた

岳

雪

田

0)

葉を入る、

山を解して

雲を知るの

人、入つては館

水

维

科學者、 入して、 文學者の色眼鏡 焼者にあらず、 者と科學者とは、 されど今は人目の闘と一えの籬に逢ふ瀬も止められ IT の必要なし 文士の が切に、 自 噌の 抱腹するものある可し、 - 4 二人の を云ふが 文學者は、 を扱り廻て必要もあらざるべく、 然らず、 味噌臭きに が歪而ならんか、 其主觀的 學者は、 が四を以て律すべかちず、 文士は 喧 を掛けて 今少し超 摩口論 今は合ふべきものにあらて、 00 隣り に賤しとは云ふべ 文學者らしくするこそ價値あるも 味噌の算き所 歪面なるが故に算く、 漆 一同志の好いた仲、 01-の様なセジンの繰な仲に水をさてうとする世話 然たるものなり、 他を批評するは大なる謬りなり、 能り 科學者の頭が平面ならんか、 文學者は科學者の範圍に入つては ならぬと心得て可なり。 以 からず、 方を以て他方を蔑すべ 其究極に於ては一致すべきも 此れを以 科學者も亦文學者の領域に侵 科學者は 御前百迄、 科學者は平面なるが故に算 物 又合ふ可 の貴 て醬油は劣悪なり 科學者 てあるが如 賤 のとこそ思わるれ からざる 上下、 や九十 敢て他を難ず 0 から 科學者 文學者は 美 ものな 文學 醜 II 故

> 近頃凝り過ぎるに 不便を感ずべし、 後輩の 々あるべし、 先輩を擬 P 斯る時にべ 1 LP 評するの罪、 間々頁なきもの多し、 索引ならずとす 1 ジ数な 願くは寛容ありた UT おも n ば極めて 此 れ丈けは存した 讀 書の 不 際 便な か 3 作

r)

は間

富 土山

島

烏水

補

修

如

Ш

堂

發

故に 又玉石混淆の譏 君編とあれと、本文のたる「富土山奇觀」で 分の手控帳、 小百科全書といふ趣がある 氏の 富士山の総説、 此 を告白する義務がある」 みることは出 章を適宜に割り入れたので 書は明治三十二年 先づ原著即ち初 並戲 加 へたる補修の量は、 名所等有らゆる方面に行き亘つて 即 本文の 一來なか ち多くの を発れさるは 形狀、 0 版を評すれば、 つた、 初めにある小島烏水補修の方を正當となす 再版と見て可 12 新 歷史、 小 ٤ 聞 氏自ら明言し 勿論なり。 國 之か増加するに當つて、 6 あるから、 地 民 Ш 雑誌書籍の 出岳通 固より其記する Ħ なりつ 烏水氏か再版の冒頭 の臨時號として 植物、 の鳥水氏 此筆者 結構の上で自分に 1 切り て日 鲱 氣 册子の外被には かかたも 办 拔 不詳の原著に對して、 象 所 きから更に 北隆 自 登山案内 のて、 材料 餘りに 奮本を台帳として の資庫 に述べ 0 何等の創意 から 大部 拔 雜 宛ら富士山 俗 1: 1 を開 可 したこ 分か 3 た

る讀者には、

必要の景物なり。此欠點は質に、

舉手一

投足の労か吝み

へさる。鳥水氏の靈筆は闘艦以上なりとするも、

何そ新たに之を諧かしめさる。

何そ

若し其

易なる事を説くと同時に、

原版に存せざる、

富士山關係の書籍地圖を列記したる如き、

輕忽なる登山者を戒めたる如き、

烏水氏の注 又登山

意周到なるを謝せさる可らず。

特に遺憾とするは、

本書に挿入せる闘濫の甚た少なき事な

原版の圖畵すら殆と十の七八迄用ぬられきりしなり。

觀るに堪へざる爲ならんには、

版に對して、言ふべき點は多く存せず。 然れとも補修者が、鳥水氏なるが爲めに、 意を試むること能はさりしと、 巧みに責任を輕ふしたれば、 此 補修

評者は多きを望まさる可

るを勤めたるは、前後少しく撞着の嫌なきか。 には七十八丁に於て、閼西の人は鈴川に下車して、 來る者は道順なればともかくも」と語を緩ふしたるに止りなから、 水氐が百五十三丁に於て大宮口の不可を詳述し、 富士の登路は、各人多少の好き嫌ひあれば、 一概に是非し難きも、 僅 かに 大宮より登るの便な 「闘西地方より 一方 鳥

御殿楊口に止るの義か。二路の外尚吉田口に砂走り有りとの義か。 此記事の如きは鳥水氏を責むるに足るものと信ず。砂走り、 又須走口の登路の下に記して曰く、此口と御愍揚口とは下山するに別路會・●●●の人穴が九十八丁と百六丁とに記載されたるは、異標の感あり。 との事に歸着するか。 亦吉田口の三字は、 をとり、 南方の路、 砂地の一路をすべり落るなり。 御殿場口は、 須走口の三字の書損にして、 六合以下の寳永山に近より 即ち吉田口は上りつめたる所の 吉田口には砂走り 快走下山すと。 單に須走口 抑

再 1: るの結果ならすとせんや。

雜

錄 ○富士山大觀

城

報 籔 字の 富士山

雜

報



雜

數字の富 Ш

あ文 を富 大 3 阪 左 載 開 Ш 每 せ F 12 始 日 1新聞 T 同 12 八 派 通 出 月 信 同 文 月 及 $\mathcal{F}_{\mathbf{L}}$ # 中 H CK 每 t 八 21 見 5 B 月 H 電 2 Ŧi. 册 * た 以 日 報 3 日 T 1 兩 終結 迄 5 社 富士 富 より 0 せ 士 6 Ш Ш は 兩 12 新 F. 聞 關 2 誦 社 紙 0 信 蒷 す 上 通 な る、 信 る 名 12

大宮 足 П 神 無論 戶 市 大宮 花 妻 П 111 0 高 新 城 道 荒 を藏 取な 3 5 た人

八合 知 三千 3 は 世 \$ 不明) 目 0 なら 百五 まで三萬七 より + 步、 j よれ 6 Ŧ 合計 合目 + 頂 まて 四 Ŧi. F. 大宮 萬八 步 合 干 步 萬 Ξ 目 八 0 程 百 Ŧ. 何 を I 九 5 百 處 計 步、 頂 + 6 ・歩なり 起 T Ŀ 奥 點 通 合 ٤ 0 信 院 目 者 まて t 72 12 3 報

半十曆 を(度 張 + 開 八 七夕に當る 0 頂 度に 低 6 V 上 温なり たり 度、 は 低下 0 ٤ 最 八 氣 月 低 溫 は 翌 通 日よ 12 大 + 暴 6 + 信 E H 七 2 九 風 6 員 0 口 日 + 0 V 日 雨 17 + は 0 40 丰 H T 六度 芝 温度 T 記 6 最 0 點 は 0 伊 51 最 t 51 藤 Ft. は 午 高 氣 IL L これ 溫 象 度 時 最 \$ + 四 は 低 0 Tī. 日 0 + M H 0 四 六度 + 朝 日 3 舊

氷 五

< 達 院 信 83 + 收入、 たりと 3 心 北 П 0) 0 抽 相 違 通 玖 より T 須 3 如 過 何 す 餘 年 志 登山 を窺ふに足るべしと。 るところに 神 か Ш < 開 社 する 3 玖 南 12 以 須 來 志 B 1 0 なら 0 奥 施 多 0 社 八 院 月 は 0 關 南 收 + 12 東 北 П X は賽 は H 口 迄 京 錢 西 は 關 Ł 阪 0 兩 收 百 8 は 州 圓 入 士 多 0

如きは 三白 百

口 須

大繁昌

12

剛

丁

t

A

切

りと

5

數名

2)

臨 て、 F 0 Ŧī.

時

雇

ひをない 力馬

L

たる程 百十

なり

八

月

二十五日

增加

L

日

平

均

干

日

餘

人、

その

+

吉

八

月

+ 九

月

+

人を最とし、

御殿場

四

百人之に次ぎ、

宮

口 0

は

八月二十二日 八月二十

に及

CK 大宮

走

口

は

人位

なる

L

月 大 H

四

日

切の

月

H

百

報 数字の 富士山

雑

2 山〇 12 (ブ 日 通 押捺 0 なり E 登山 萬三千 郵便 他 便 は 0) 者 ため、 局 1 ンカ 17 17 付數 叉同 て、 達 てチ 受附 0 1 郵 掌なン 便 內私 同 を腫場 Ľ 登山 局 H 製葉書七千、 72 5 17 子等に 6 て押 3 者 Ш せし程 開 0 數 捺 当以 書八萬二千三百 は、 する L 來、八月十 なりとい 八月初 スタ 官製葉 職員 4 は 書 ブ 8 三手、 は、 九十六 j ス 日 A 6 迄 2

叉通 とい 20 信 0 每 日 計 + 算 登 Ш 者 員 數 は、左の如く なりい

頂 J: 12 達 L た 3 \$ のに 限 3

員

4

3

月 月 月 月 七 六 五 九 H B H H BB 仝 快 六十三人 百百 七百三十 百二十六人 百 Ŧ 五十七人 二百二十

Ħ.

妻

泊

人

in

17

月 月 月 + + + + 拓 29 E H H

仝

仝

墨

百五十六人 百二十

二百三十七人

暴風雨 九

(暴風雨 fut:

月

+ +

七 六

快

四百八

十三人

仝 三百十六人 五百十七人

仝

全

風

仝

百四十二人 八十六人

二百八十五

H H H H H H

(暴風

三人

全

八月二十四日

月二十

合計六千五百十八人 仝

一万三千四 百 呎に 登る

らるべき最高 は、 11 前 L U 紐 人 70 " 育 ば、 未 1 7 ٤ , 到 7 なる 35 此 ラ ムス社に接手したる本年五月六日 ウ 山 地 0 t 才 1 點は 野 探險家として著名なる、 登山を企て、 Minknin 營地點、 クマン (Dr. Bullock Workman) 代 Suru Kashmir 山地 山脈として、 二萬一千三 殆んど人間 呎 I.º 聞 間 餘 1 えたると 12 0 巴里 於 T Ш 1 地 達 w 5% L 全宿 得 夫

0

Ŧi.

H

間

5

5

2

8 登

0 躋

は

空氣

至

0

1

稀

薄 2

15

な

3 攀

10 0

T

氷

*

た

るときなり

0

最

後

報 大山 牛馬市 相 州 Ш 0

雜

Lungna 中百 Ł 呎 在 高 3 3 未 0 曾 高 0 1. 方言 鉴 発 7 有 河 1 0 12 W 氏 F IV 0 0) ことな 为言 5 野 あ た 5 答 3 6 地 萬三 方言 夫 在 斯 A 3 T 只 は 1 Ξ 0) 2 ik 百 D 如 0 雪 之を E 九 中の + V 2) 平 破 74 7 海 坦 呎 1 地 b 拔 登 な * 12 1. 3 5 は 萬 は 登 6 千 Ш T 主 史

きは 或 眠 術 碌 學 ス 夫 會 3 0 は F. 4 35 崩云一 成 17 凄 重 2 要 絕 17 雪克萬 ĥ T なりた な 雷 講 足 3 慘 音 B 演 絕 は 寒 す 記 * ず 尺 凝 3 錄 3 0) 暖 高 筈 7 8 鳴 崩 E 計 な 作は 雪 は L 7 3 t n 6 ラ 華 T C 0) た 廣 6 は、 氏 ٤ + n 大 3 1.7 遁 0 3 氏 今 絕 零 半 T n は、 壁 哩 は 見 歸 點 不 語 以 を 12 12 Ó 日 下六 るを 轉 3 5 日 L 一窓り そ 7 6 敦に於け 好なずと nv 度 雪 來 壯 12 2 12 大之 ic n 比 下 就 3 3 T 6 3 1 3 17 n w

> 語 IJ. \$ f6 6 F 斯 7 n 0) 0 72 77 如 豹 3 5 n 南 ば 動 由 均勿 生 51 V 物 遇 は Cs 絕 72 無 3 3 な 2 るが とな から 如 く余 は 實 V 際 かっ な 訪 萬六 問 3 記 處 者 T 12

> > 呎

T

Ĥ

K

伯 Ш の牛馬 क्त

響き 註 知 T は山 開 n 陰 T せ 壯 5 ぬか本 道 れ年 觀 る UF 第 大觀 どの Ŧi. _ 4 近 月 0 高 ÷ は 多 或 極啼 より + 數 山 お馬 35 51 12 大学 集 L かり 0 24 山之 は T 嘶 兩 4 < 見 來 下 V H 物 n 0 2 裾 3 同 0 牛山野 0 老 聲 若 馬 腹 42 於 野 男 0 は 高 17 女 T 幾 渡 原 す 13 gru 于 牧 3 6 とも 山萬 原 4 X 17

於

市

數

相 州 大 山 0 登 111 者

ti の車 12 な 3 賃 3 月 相 1 0 35 州 は 6 + 本 大 七年 非 天 Ш 割 候 常 减 H は [42] 12 8 0 同 例 夫 良 T 為 神年利 好 耐に 此 L 神 な のな 比 12 耐 附 3 L は 3 T 近 12 1 は T 富 祭登 な低 鐵 + 3 道 典 Ш b Ш 旅 平 局 5 す 17 次ぎて 同 3 A 塚 51 宿停 1 時 者 容 倍 は 車 53 登 頭 場 Ш 山數 以 者 開 Ш 3 伊 F. 8 者 0 勢 况 為 3 12 3 を 7 原 8 爲 間 乘 所

た千住が

0

地

51 俗 F

T

雷 野 邊 Ili

鳥

12

似 か 落

聞點

くところ

10 鳥 殆 12 1

t

n

ば

高 12 뾢

度 3 力

0

VC

雪 見 UC 12 3

山種

岳の

中禽

は初

を

8

6

風

粗

h

ど人

を辨

世 牧

す、

萬

の呎

は

30

氏

萬

呎

17

T

蒙古

人

型の

住

民

見

た

萬 は

0 0

B

村

あ

6

游

X

種 *

2

人山 1 又 麓 C 居 先導 立 な n 3 歸 5 と今 師 伊 3 \$ 才 勢 宿 原 0) 七 12 は 泊 月 其 は 宿 數 泊 + 幾 T L t 千な Ł 12 H 3 よ 百 四 敷を 6 るを知らずと云ふ 十三人なるが 八 聞 月 1 Ξ 17 日 7 F 九 1 登 宿 百 六 Ш 泊 十七七 世 な す

T n プス 登 山の

登

昨 雄 事 0

外三 の愛嬢 \$2 及 とお Ш 宿 には昔 5 時 峰 T CK 小 尺 アイ 名 たる 東 \$ 女 ス in 3 と云 0 才 7 0 ブ 1 ZA n 12 登 T 6 登 ス ズ " 由 L 登山 7 " 12 Ш 見たることなさ 7 漸 9 Ш ラ ば我 ラ 出 + 者と案内 < は 滿 新 者 停 2 此 オ 1 为言 Ŧī. 車 聞 我 4 17 1. 流 + なる 登 時 場 歲 は 行、 3 0 國 者 記 富 の富 * 12 最 5 間 二名 なり 今や T 半 發 3 L 士 \$ 士 L T Ш 年 無 許 V 可愛さ 事 曰く 若 Ш 6 其 12 L ガ 西 12 夜 フ 漸 き人なる 12 t 寒 護 7 のみ限られ られ 歸 6 風 ~ 1 U 音に名高 L 少女の訪 て、 \$ IJ オー 6 0 17 7 來 高 Ш n 1 シア 八月六 アル 路 鐵 y L を攀 きア 为言 Ł 道 た V 問 2 IV 1 I 會 ブ 3 を受 IV n ブ ち H ス 2 1 E 耐 とか ぞ ス ッ 午 ŀ 理 7° III 0 後 事. ス 12 萬 10 は H

> 養成 氏 Ш 年 谷 務 す 副 を 組 攀 所 るに 試 織 會 を設 K L みて成 目 長 となり 務 的 H 毎年 U 功 村 せる 昨年 Ļ 必ず 會議 赤 同 は三十 本 小 員 岳 年 口 松 學 會 10 づく 同 111 * 八人 第 窓 松 組 登 會 太 織 口 0 Ш 員 郎 L 8 同 氏 L 大 勢に 催 て、 百 會 रंग 餘 長 原 L 7 崇高 名を 72 小 21 學 第 0) 以 太校 氣 田 內 T を P 米に

富 士山容變ず

云ふ 邊 七 B 國 から t 八 間 0 遠 5 鎮 5 打 眺 所 續 くよ 5 9 U 0 神 大崩 6 n 12 寂 ば窘永 び立 IJ. 3 以 暴 壞 前 あ 風 てる富士山 0 Ш 雨 6 如 L 0 0 如 と見 12 1 も岩 白 8 六 扇 Ž 12 山 好 七八 於て 0 數 晴 倒 個 去 42 0) 合 を認 折 月 懸 目 12 # 邊 る Ш 8 12 得 島 か 日 3 御 H IJ. な 殿 T

郡 Ш 鵙 動

3

場 約 數

Ŀ 5 H 九 出 雲 n 數 月 12 時 國 初 大原、 6 間 旬 より といふ、 震 標 動 、能義、仁 時 高 L 約 4 同 八 鳴 合 動 多 T Ш の三 目 Fi. 12 を はじ 大 邊 白 原 郡 尺 微 0 郡 8 12 低 阿ブカン 跨 12 Ш 用型に 3 力言 白 为言 な 村 n 3 t 煙 Ď 0 + 揚 H 里 るを 以 郡 來、 12 Ш 認 8

赤 岳會

信 州 下 伊 那 郡 大 鹿 村 大河 原 字 市 場 住 民 赤 石 Ш

雜

報

0

ルプス登山の少女

〇赤岳會

○富士の山容變ず

0

郡

山鳴動

雑

0 礼 幌山 岳 地の 降雪 透 間 Ш 0 鳴 勤 富 士山 0 初 雪 富 土山 頂 本冬期 0 最低温 度 本 邦 高山

局

札 幄 Ш 岳 地 0 降 雪

H 早 V 九 ケ 月 Ш + 12 Ŧī. 降 B 夜 雪 あ 石 6 狩 昨 虢 年 山 İ ヌ 6 " Ŧi. 2 ブ B 遲 カ < 1. 3/ 平 2 年 ~ 及 51 比 才 L ブ ダ 七

淺 間 Ш 0 鳴 動

及 CK 九 Ŀ 州 方 面 0 住 來 民 は 大 42 恐 怖 1 居 12 50

月

+

fl.

B

以

遂

間

Ш

は

時

4

大

鸣

動

を

な

せ

3

影

信

州

富 1: 山 初 雪

雪 九 降 月 9 4. 吉 日 原 静 0 窗 發 溫 電 17 據れ + は 八 度 12 睢 降 夜富士 T 寸 山 1 な 合 目 6 至

富 Ш 頂 本多期 0 最 低 溫 度

七十 54 高 於 中 度、 央 T 月 氣 同 + 乃 Ill 至 州 \equiv + 中 頂 日 0 0 74 部 調 17 度 は 查 達 12 17 下 月 據 昨 L た 及 6 n ば + 3 飛 8 月 九 年 驒 0 明 獨富 夏 高 各 治 期 中 Ш JU 士 10 旬 + Ш 須 氷 17 年 點 は 志 頂 極 T 神 0 寒 + 社 溫 氷 0 拜 度 四 點 時 度 殿 I 期

6

12

懸

L

置

きた

る C

最

低

寒

暖

計

は

氷 久

+

八

度

撤 共

退 17 右

1

12 12 度 し < 年 L 据 12 T 0 T 付 次 又 下 平 3 旣 4 降 均 昨 12 T 5 往 L 年 居 12 年 3 七 比 t 大 低 中回 12 す Ô 箱 度 0 0 6 B n 內 な 最 平 2 ば 平 0 低 均 6 年 最 た 15 0 低 又 3 比 8 度 方、 同 す 溫 昨 六 度 神 3 车 B 低 四 は + 社 12 かっ 度 0 Ł 比 Ŀ 6 氷 华 低 1200 低 方なる久 點 0 2 3 ح 下 氷 42 2 官 點 叉 下 報 + 四 須 第 旣 度 度 度 往 志 + Ł 岳 九 62 低

本 邦 高 Ш 郵 便 局

遞 信 省 告 示 12 t n ば 左 の三處 50 郵 便 局 * 開 始 0 せ 米

3

富 士 III 月 郵 -1-便 局 日 1 御 殿 場 口 頂 Ŀ. 海 拔

富 1 FI LLI 北 郵 便 局 口吉 田1 i) [] 八及 合須

右

目走 同

米

三三六〇

便 局 + B 山信 岳浪 1 村國 月二 頂郡 + H 7 同 八 Ŧi.

御

嶽

+ Ш

月 郵

閉 0 內 鎻 富 宮 + 頂 Ш 頂 F. 亦 0 0 楼 郵 H 間 便 * 神 局 以 社 13 T 神 巡 官 八 月 查 3 及 引 + CK 揚 郵 便 日 か 局 閉 6 員 3 Ш 3

佐

濱

5

島

179

年

生

Ŧi.

喬

0

木

御

年

生

12

雑

報 長野 中

學校の登山

0 富 士 0 高 嶺 Ŧī.

年 明

生 義

村

澤

戍 曾

0

B 嶽

本

0 Ŧī. 名

勝

10 來 海 其 主 拔 なる F 米 专 以 上 南信日下 3 0 牧濃光野 村國町圍 地 Uf 40 T 久祠賀郡 郡 经 便 考 局 21 あ 供 3 す B 0 極 8 T 小

左從

海 海 尻 口 郵 便 便 局 局 同 同 郡

平 173

澤

便 便

局 局

宮

酮 郵

郵

平南中上郡 泽佐宮都 同 同 村 村

3333333333333

同 同 海 拔 七 = DU 六 米 米

米

同

長 より 中學校の登山 0 報 17 1 埶 學 校 0 登 Ш 熱 は

专 近 得ざ・ なり 畵 3 遠 加 0 + 來 0 は UU は 近 入 益 員 す 5 A 特 某 H 0 せ は 盛に 氏 とか 54 12 3 H \$ 限 \$ 新 曜 ili 0 6 調 校 每 12 L (1) なり 內 n 登 1 世 12 たる 3 0 Ŧī. \$ 講 絕 せ 道 同 人 ٤ 如 えず 0 堂 6 校 200 50 17 3 0 V 0 7 於 飯 多 職れ るに \$ 員 ば、 他 T 當日 皆日 0 0 0 地 み 登 F 及 [7] 隱 方 本 Ш 0 甚 CK 12 大 等 だ 講 12 T T 話 幻 12 多 T w 燈 登 は 年 ブ 我 12 到 ス 會 Ш 夏 为 左 底 地 あ 生 季 Ш 見 徒 方 0 休 岳 6 如 る 0 九 0 暇

月 如 は

映





富士山雷話開通紀念のメタル (別項武田山梨縣知事の書簡參照) 敎 平 井 諭 教 諭 0 八 35 岳、 近 森教諭 0 日 本 高 山 0 特 色、 志

村



4

4

室中 語

L する部 せら 會員 た 3 乍遺 3 宿 1 所 憾 だけ 姓 0 向 からか 名 需 8 錄 L か は、 51 あ B 應ずる能は 即 n づい 刷せ 2 0 ず、 發 右 後 行する は、 0 ず、 新 隨 U 2 入 筈なれ 姓名 7 0 會 ٤ 本 當 員 錄 會 時 C ば は 17 0 君 毎 殘 會 1 部 員 年 次 5 無之 0 42 改 配 所 を 待 IE. た 附 望

詳 0 た

12

は 君

L 6

す 旅

紀 0

纏

里

居 V 以

n

色 雜

to 好 5

CA 材 居

5

木

CA

質

方だつ

3 6 7

0

は、臆想

劫

なり 希望 及

とて

打

5 行 報

捨 文

T 0 は

置 如

か 3

る

5

算 版 誌

盤

0

桁

8

外 鋼 から

n 版

T

\$

頓

着

な 版

を 紙 心

會 n

員 た

諸 賜

0

Ш

CK

行

道

成

3

<

t

6

12 領

料

揃

5

か

揃

は

VD

ומ

15

苦

外

0

讀

者

17

\$

3

T

本 第 年 第 號 0 别 H 附 錄 L 配 附 L 12 る

> る所以なり るところ くほどの B 手 加 ば 帳 くし ことは かい を相互交換 0 用 6 0 7 紙 労を惜. 各 2 枚 まて する 自 12 0 まれざらむことを, 0 動 0 鉛 機 靜 煩 筆 會を作 を知 勞に 0 走 り書きし 5 るは あらざる 他 日見聞 亦 1 可 與 希 3 な 17 得 か 6

せる るく 金錢 ムまても 積 讀 賣 15 たづねらるるく 0 本 せ 配 5 者 附を終 方に 3 なきてとを、 山 12 0 12 L むれ 岳 0 向 Ŀ T な 17 な U 於 5 る H 賣 T 第 第 か は、 て n 切 普通 殘本 年 向きもある由 故 n 年 只だる 17 となら 第 御 第 の小説雑誌などと違ひ、 定の部數しか提供せざれ を賣捌 斷 本 誌 號 號 全くの 5 次第 0 AJ 申 t 0 第 うち、 す、 道 幹 所なる東 5 實費 な 0 事 12 年 L た 等 n 中 第 取 を以 8 購 E, 12 12 纒 55 讀 京 は 號 8 を願 熱 賣 て、 勞力 堂 本 は C 献 \$1 誌 全 12 i 會 托 は 17 部 最 3 會 身 0) ば 員 を注 員 的 F 先 各 早 辽 書 51 本 賣 12 42 T 盡 於 外 會 肆 會 7 文 12 目 な 掭 0 0 販

CA

らず、

最

も古さ年

月

歷

史とを

有

す

3

英

事

業

働

甲

为

あ

るといふものなれば幸

2

本

12

は

前

記

0

事

0 12

た L 17 惧

め

注

文あ

3

揃

至

6

た

12

半途

て會員となら

n

たる

諸

賢

0

12 3 會

8

誌

は

等當

初

0

们

ず、

寧ろ

E

0

P

讀

者 幹

2 事

*

有

現 危

前 54

號 \$

より

部

數

0 所

增 期

刷 以

*

見

17 員

會 報

賣 似 3 n to かるまじき 决 な か 12 5 V T 力 6 TITE. 好 上 0 T V 變 0 12 か 6 1 1 再 V 3 0) 市 版 性 雜 す 12 V 誌な 質 投 3 2 Ut 17 如 於 念 ņ 賣 きてと ٤ T 5 あ 信 するや 3 本 す 0 4 幸 13. 5 CA 4 E n 21 本 T ば 10 無 類 賣 本

寄 ~ なく 言 0 ٤ 知 W 6 會 0 3 は 年 71 今の 費 書 賣 ず D 能 越 れば、 6 E P 未 店 は ず、 拂 數 n 0 な 切 込 あ 發 6 n 本 3 た 51 誌 叉 3 行 0 AJ. 此 重 5 他 V2 居 は 就 際 0) V2 情 僅 5 我 價 n 10 百 54 等 小 氏 小 17 好 值 过 搜 C な なる P 35 索 12 者 重 は からい 2 購 本 諸 17 V2 L 會 會 3 T 僅 た 入 君世 て 過ぐ せら iz ほど、 精 員 1 12 認めら 17 0 直 會 らるべ 杯 時 雜 n n 接 員 るとも、 ば 手 な 誌 拂 80 72 注 以 込方 文なり 54 記 るくことな 前 5 外 8 者 偷 2 味 を請 まれ 噌 見 全部 D 12 0 回 12 込 多 난 又 15 得 求 類 8 すっ どは よと 3 雜 は 成 3 か 取 精 霊 3 最 U は 小 員 違 す 形費 擔

敦 な T 3 0 L かい T in 7 \$ な 7 15 0 1 1 1111 我 は 3 7 0 我 7 等 P ->-0 杏 iv す 5 亦 Ш 努 岳 23 年 I た 79 D 6 薄 0 發 < 且 17 2 10

L 倫

L 紙 る 7 質 は 12 L ほど * 雜 を 謝 廣 誌 す 帶 告 粗 殊 Ш 悪に か は、 顯 CK 3 岳 L 57 L 居らざる 著 所 地 T て、 するとか、 な な な は 方 る 部 12 如 51 3 その 17 3 利 於 何 雜 ても 5 de T 誌 5 廣告費用 目 0 山 忠 然 0 繪を 餘分に \$ 13. 岳 言 名 5 あ せ 3 减 3 5 0 6 故 賣 まじ を、 \$ 如 XL 42 5 É 17 72 新 存 雜 h 3 聞 在 かし 誌 盛 から 初 人 雜 2 12 た h 8 あ 普 誌 ^ 割 8 通 12 1 知 6 17 9 12 0) 廣 6 6 盛 告 2 普 商 Z 君 V2 け 17 賣 漏 0 1 廣 品 L C 的 好子 告 性 な \$ 意盛

ところ 無 おか 3 35 な 用 形 殖 < あ 0 17 み、 3 為 0 5 援 \$ 雜 L 尤 T 誌 助 0 雜 及 部 多 * 0 名 我等 與 試 れど、 か 10 T 为言 0 5 \$ 多 とて 方 あ 3 至 發 < 我 同 等 T 行 世 好諸 屬 は之を 2 間 部 間 らすと 數 21 好 * 君 4 知 並 我 好まず、 8 加 5 0 者 等 慾を 滿 2 n 同 3 足 好 有 せ 7 T L L 0 8 T 居 我 n 163 2 12 3 等 だ 者 ٢ \$ 12 Vt 17 12 欲 有 負

4

4

3

會

物 12 * 同 見 情 72 8 3 寄 2 せら な n つき方 本 4 誌 0 存 推在 薦 * を知 賜は らず、 らん 知 0 T \$ 雷

3 博 惠 文館 0 L 8 か 希 힣 6 發 1 T な 行 6 の當 分 所 中の 學 中 # 界 本 誌 及每 び號 -0) 太陽』 は だ 從 H 51 前 0 揭 如

(7)

0

ことは を 3 0 何 兼 to 作っ 5 ね 或 尤 \$ 0 あ、 L 何 恐 熱心なる T F 故 伊 < 縮 3 呂 併 とい 永續 な n 波 L 山 同 か、 事 す カン 岳』に す 實 3 好 3 3 筈 12 材 者 諸 Ш 为言 あ 料 0 入 0 君 岳 無 0 會 3 會 を 發 5 L 蒐 費 やうと 为言 ٤ 集 煩 行 0 愈 12 は から 字 す 御 苦 1 * Z 御。盛 思 L 尤 あ IL ふが ٤ 覽 ~大 Ŧ h 遲 8 一萬な な贅 丰 あ 51 \$1 5 な 3 T T 宜 る 澤 躊 0 0) T な 心 路 此 御 L B 雜 段 待 カン 配 L < 當 は 5 6 ٤ T

Ш 報

7 位、 實 工同 Ш 5 12 夫 氏 共 他 道 會 價 合 Ļ Ŀ 51 L は 12 目 0 0 旨 T 用 部 今 至 改 Ш 修、 下 梨 吉 III 再 件 21 1 田 富 度 彩 0 は 發 部 容 賣 + Ш 72 及 知 15 金 屬 事 \$ L に登 Ш 47 8 W. 模 製 0 Ш L 6 武 同 T Ŧī. は 者 T 範 H ľ 0 1 n 月 箌 的 千 < あ 2 0 + 電 代 を設 72 七 金 3 0 Ш Ŧī. 屬 由 杖 8 話 月 宿 H 郎 に開 製 な 末 H を 0 技 3 T 製 通 建 氏 0 術官警官數名 実り 为言 新 設は、 式 作 岩 12 設 種 L 銳 杖 0 臨 計 電 12 まれ 5 引 本 金 全 話 士 0) 3 山 五剛 < 石 長 0 突 懸 杖 72 成 吉 3 + 30 は 8 田 Vt. Ŧī. 考 六 附 錢 3 打 2 便 尺 0 案

1 諒 窮 0 文 0 Ŀ 0 會 寫 會 部 高 由 8 6 員 省 生地 員 丸 大 作 12 n 公 72 Ш 設 畵 旅 T 3 晚 展 行 藤 pi. 霞 ES. 數 中 次 千 5 郎 氏 會 點れ 氏 百 は 17 8 は 氏 八 穗 獲 穗 本 文 月 高 C 高 七 月 部 歸 岳 Ш 5 省 + 麓 燒 + AL 缶 0 0 _ た B 展 日 3 宮 覽 大 作 沙 11 白 信 會 * 州 42 馬 2 出 本 穂 岳 品 年 0 高 百 0 山絕 せ 十他 Ш 6 月 風 麓 頂頂 の景の のを

焉

時 始

間 8 者

通 3

前

1

1 0

3

3

D 5 片

H 12 手

10

12

參

6

82 並

な を

方言

記

办

\$

本

業

·

1

72

間

12

=

"

نح 72

3

など、

T

w

N.

1

1

*

チ

"

1

12

類

L

た

3

\$

0

な

Ò

2 孰

故 te

庆

隊 才

調

練 抱

0 V

\$

足 仕

並 事

手.

揃

0 몳 會員 及 CK 辻 葱メブル 本附近高 高 は Ш 七月下 植 物 0 旬 大作 中 房温泉より常念岳 を出品せらるべ L 12 登

500 0 會員 平 井 寬 暢 氏 は 万 隱 及 黑姬 Ш 12 登 らる。

5 0 る 同 近 森 幸 衞 氏 13 万 隱 Ш 黑 姬 山 及 CK 八 4 岳 12 登

0 同 同 同 細 小 八 野 田 木 浩 24 貞 + 助 氏 氏 氏 は は は 白 E 八 4 岳 ケ 岳 岳 12 登らるの 54 及 登 CX らるっ 白 馬 岳 12 Ŀ 5 30

學を 旬より P 0 3 會 逐 登 1 員 げら 八 志 Ш CX 月上 を試 黑 村 烏嶺 n 姬 旬 み 山 八月 まて 17 氏 T は 登 中 6 Ш + 旬 八 飯 1 H t 綱 12 5 = 月 間 Ш + 週 13 调 間 八 日 = 本 日 間 滯 を P 在 t 回 費や せ 6 登 n ブ 5 白 Ш ス せ L 11 馬 縱 5 T 岳 斷 七 17 11 0 月 奥 第 壯 羽 万 下 Ŧi.

せ

る途 Ŧ. 地 方 Ŧī. 百 中 10 哩 H 向 餘 光 は 7 21 n 秱 遊 せら 恐 VI 3 Ш 及 全 CK 岩 行 程 木 Ш 汽車 17 逵 船を合 L 兩 L 羽 T 3 經 約 T 歸

> 黑 を

111

0

雨 H 會 闸 信 t F 5 迁 州 H É 12 本 至 骨 第 滿 溫 5 丸 7 泉 P 海 15 0 同星 拔 泊 鳳 約 凰 忠 登 芳 千六 六 Ш H 2 氏 果 百 は、 乘 米 鞍 1 突 岳 八 0 本 12 月 地 Ŀ 號 型占 本 3 H まて 欄 甲 此 怒 州 到 照 日 柳 大 澤

ちら

n

た

Ш

12 湯 1 到 10 72 b F h 5 L + 8 蒲 H より 田 天 45 候 槍 _ 險 泊 5 惡を含は 岳 L 容 山九 を 8 B は 12 中 Ľ 尾 る め、 峠 た を 35 踰 + 文 八 B T 日 絕 上 飛 高 謯 驒 地 平 8

4 旅 0 會員 行 は 3 8 試 保 T み、 坂 定三 + $\dot{\Xi}$ 銀 郎 山 日 平 氏 歸 12 は、 京 入 せらる。 5 越南 銀 諸 山 溪谷を探 17 向 ると U て、 + 冒

險

日

會員 及 夏目 新 治 氏 は、 妙 高 Ш 登らる

12

は

3

0

會 員 久 保 田 巧 策 氏 17 苗 場 Ш 12 登り、 七 " 釜 を 探檢

せ 5 會 る。 員安 達 寅 松氏

は、

八

海

Ш

17

上

6

1

秋

0

明

月

7

賞

山 艱 會 5 歸 芸を凌 員 8 L る。 大平 經 Z 鳥 晟 n V 海 1 7 氏 5 山 は、 頂 單. 飯 中 身 籠 米 學 山 城 澤 頂 4 數 Ŧī. 12 51 名を 下 登 B 12 9 5 及 容 は 途 2 湯 る 野 殿 宿 北 山 蒲 月 口 原 赤 Ш 學 谷 羽生 1

6

會 12 12 容 員 登 員 Ш .6 Ш 5 木 龄 貞 直 島 方 後 氏 助 7151 71111 方 泉 氏 は 面 17 13. 12 數 下 滿 H 都 6 洲 滯 城 n 旅 1 在 た 行 L 6 0 6 T 0 歸 秳 途、 111 九 53 霧 熊本 出 7 島 山 東 3 8 霧 [11] 島 蘇

會

員

青木

忠

次

郎

氏

は

八

月

中

越

中

V

Ш

15

登

5

針

木

會

其 小樱 B 0 まて E. 島 登 嶽 12 遊 Ŧi. 那 14 n + 刊 3 泉嶽 涌 12 日を 世 3 高 山は、 頭 7 式 其他途 英彥山、 氏 は 州全部を漫遊 七 次高良、 月 阿蘇山、 + 天拜等 日 せら t 東霧島 6 五六の n 九 た 月 山 6 Ŧī.

> 12 下 0

節を掲ぐ。

箱 根 會 會 員 駒 員 5 城 前 岳 數 田 馬 曙 及 氏 illi \$ CX 氏 は、 神 Ш t 月 17 Ł 登 T 月 5 旬 中 3 八 旬 4 岳 八 17 ケ E 岳 5 12 n J. 5 る 月 中

53 を越 歸 5 るの 文 て 信 州 に入 6 越 後 0 妙高 Ш 12 登りて 大 阪

會 會 員 第 員 H 光 伊 Ш 0 本 日 通 赤 17 德 善 三郎 薙 PU 登山 Ш 郎 氏 氏 は せ 女貌 は 5 ñ 八 Ш 八 月 九 72 月中 太郎 九 h 日 に於 山 F 野 て、 白 0 男 根 Ш 33 體 等 後 山 12 0) 鳥 Ш 海 開

撃せら 會 釜 員 塚 以 12 奇 境 村 实 勝 を探 を經 一波氏 明 年 5 T は、 は n た 九 九 越 月 6 月 後 四 1 H 千 日 百 3 氏 苗 谷 期 は 場 町 同 Ш t Ш 3 12 登ら 登 17 山 每 年 n 人 + 登 3 Ш 引 歸 せ 路 率

せら

3

由

らるく筈なるが、 7 Ш 會 下与 せら 昌 荻 n n 72 松 歸 路 5 氏 左に その 時 は 双 筆 紀 12 八 者 出 月 行 文 51 宛 は H 天 てら t 龍 V 5 n づ JII 赤 た n 0) 石 る、 急 \$ Ш 本 流 12 話 登 私 信 12 6 寄 0 JII 五. せ 舟 B

聞 の容易なるに失望致 に橋が架しある等 Ш 天雲霧を發し頂 溢川道にて夫の八ッ釜 温泉を經て例の小澁 蠶最中にて 小生は七月二十八日に東京を發し辰野、 峻 一減じ居り加之恰 野宿をなし翌早晨絶巓を窮 難能 3 幽谷と小生感特に 山たるを失け ず)已むなく水を求めて之れより東方の谷 險なるに頗る辟 間遠ひならんと存せられ候、 翌二十九日市ノ瀬峠を超えて (後に見れば かに水 を發見 上二 を得 附 ず成程小澁温泉から一 月二日 (最早其 よ御料局更員等の此の邊に入り込みしもの共に ず巳むなく生 深く候ひし 近に小許 至るも眺望なかるべしと即ち緩々大聖寺平に 易し晝頃漸く大聖寺 し候ひしが 川の徒选にか し此 へも立寄り 大河原出發愈赤石登山 の後の雨にて流失したるなるべし) 地に油 の雪 むる事と相成候ひ 、幽玄の が大兄は御立寄なされ候ひしや 併 斯くて 一を存致 申 ij 路同 ・鹿鹽の し其れでも 紙を 氣萃まり、 候ひしに早 様の人夫二名を雇 翌三日 日で上下 照湯籤 被り し候ひしが此 事に 此の日は廣河原に野 坂 下か 到着 て 尚且惡絕險絕日 間に向 泉に一 しが大聖寺平には 大聖寺平に上 に向ひ候 藜 夜の高寒を凌 致し候 せし等云ふは 天癥さの て此 の時 拍 て下る事 の日高遠 代ながら 院院恰も ひ釜澤 UL し三十日 爲水量は大 本第 防 宿 却 Ĕ す 坂 町 て其 1. か 時 路 流 11 3

0

」卷頭河 呼 赤石山の寫真は即ち此の地を撮影せられ

0 く其の大觀に恍惚我を忘れ帰目の雄絕豪絕眞に天下無比、 みを除き得て極めて滿足致し候 間に巾は狭け 恨事となせしに 系には雪なきものと心得、 眺望に比し優るあるも断じて劣る事なしと絶時仕り候小生亦赤 H 夜半に野宿地を發し先づ大聖寺平に上り遂に午前 (途中日出の壯觀を見て)、幸に好晴にて四方の眺望殆ど遺憾な れども長さは 今は時期尚早ければにや處々に多少の殘雪を見、 數 以て飛驒山脈に比し赤石山系の為に終天の 町に亘 れる皚々たる雲溪を見、 六時 夫の立 赤石 如上 Ш 又谿 0 石山 恨 頂

駄目の 質に非常の幸連に有之餘 五日は御經 歸着致し候、 來得べくんば登路と別路を求めたきものと希望致し候 扨小生は充分赤石山頂の偉觀を擅にし遂に下山の途に就き僕ひし 道に引返し此の日は小澁温泉に 奴なるに小生も本年は脚力少々不完全なるの點もあり即ちもと 殿の如き豪雨 連日の好 晴は 小生が小澁温泉に着する頃 大兄の天氣都合の御惡かりしに比し小 一泊翌五日凱歌を奏して大河原に より怪 へ共人夫がカラ しく 生は なり が出

より

V) 候大兄は此の舟行を試みられし事有之候や、 小生本年の登山は赤石山だけと致し之れより歸途に就 るに今度も今依然として船を得る事能はず尤も遠州迄下る船がな 行を企てし處富士川等と事變り他に貨客なくして船出です遂に意か 同じ伊那郡の八里許り下流の平岡村滿島迄ならば貨物船の上乘とな 行く事を得る次第に有之、 出て八日時又に至り候之は即ち天龍川の舟行を試みんが爲に 敗の經驗を有するもの、 仍て兎も角もと夫れに便乗して時又な 亦今再舉を謀 小生は りたる次第に候然 一昨年中一度 くべく大河原よ

に極ま

れりと意氣軒品天地に誇り申候斯くて之れより

尋常旅客の容易に通行する道にあらず頗る峻險にして大に困難 津峠と云ふを超ゆるに新道とは云へ筏下しの水夫の多く往來する外は

泊

翌日馬を雇び秋葉街道を西渡に至る此の邊は大兄

る干

里の長川足を天龍の流れに洗ふ、

大山と大河とな並せ見る豪興技

Jil を離れ 4)

7

1)

なる、 くものは哲道にて今は此の間に頗る面白き新道が開 浸させ、 下流尚數里にあり 龍川に沿ひ行く~~幽静なる其の河景を貸しつへ南下する事三里 出づるものなりとの事、 此の消島、 は力及ばず已むなく滿島より水窪を経て西渡迄は陸 村に一夜を明し翌日遂に滿島に至り申 賞仕り候此の日は船の都合にて御供と云へる寂寞たる思ひもかけ るものは斷じて川船下りの肚と快と勝景とな談るに足らざるなり。 ず木曾川等に至つては足元にも及ぶ所にあらず、 發し候處、 せんとならば別に買切仕立てざるべからずとの事に到底小生一人に 送貨物なく船出でず(冬期一、二、 の如きは天下の総勝激湍流奔の凄まじく 即ち信遠の國境に達し候此の地は大兄の所謂信州の最低地福島 天龍の河畔に 天龍川に沿ふて信遠の國境に至り夫れより大津峠を越えて水窪 遠く俗塵を脱して境の幽々寂々たる、 其の風光の住 嗚呼昨日は海拔一 成程 水窪間の道は農商務省二十万分一圏に示 F ウモ 赴き水中に踏み入る事兩一 眞個に是れ信州の最低地、 絶なる 天龍川の舟行は思ひしよりは實に非常の 小生は即ち此の新道を取り十日 万尺衣を赤 (特に時义より半里許 三月頃ならば船 石山の経巓に振ひ今日は蕩 候然ろに滿島と中部 危く、 步、 小生は往還より少しく下 到底富士川 天龍川 随て走 V) 兩足を天龍の流 の下 かれ せる所澤を過ぎ行 行と決し候然るに ありと) 行の肚 居り其は滿島 等の 流 滿島を發し天 舟行を試みざ 間は目 比にあら 強て舟 6 ね

3

會

在 て二俣に至るに及び初めて山間の峽流を脱して茫 天龍川 遂に 東 海 を奔下す 道中 俟 町 + 流 1= 出 iI H て船 上 西 流 渡 心を捨 1 上 4) 静かなれ 船に 斯くて翌十三日 乗り 3 更に 倘 々たる平原の 中 類る壯 部 歸 以 京 快に 下 II 大河と 1: 候 通 る次 m 船 自

會員 小 島 久 太 氏 は、 八 月 B 甲 州 湯 島 12 入 5 早 JII

谷

より

白

萩

Ш

4

越

文

T

白

峰

Ill

中

V)

H

代

111

F:

流

を横

辻 雨 目 訪 斷 より 的 13 V) 72 は 農 8 村 歸 皆 鳥 途 良 Ш 果 17 富 H 間 3 入 士 17 ず。 5 裙 返 0 岳 野 ż 5 大宮 凰 須 後 舊 Ш 轉 Ш 等 道 口 ľ より I 0 7 6 登 鳳 富 Ш かっ 凰 け 12 + Ш Ш T あ F 12 + 0 6 里 Ŀ 柳 木 n 澤 勢古 村 6 風 8

會 員 碳 野 敬 氏 は t 月 1-1 旬 八 5 岳 12 Ŀ. Ŀ 6 る。

月

F

八

5

岳

12

らる

七 月 會 會 員 員 下 小 旬 牧 泉 八 野 4 富 和 岳 太 雄 郎 氏 12 F. 氏 は 5 3 矢 七 澤 米 旬 郎 氏 河 野 齡 藏 氏 は、

0 會 會 岳 目 及 員 小 CA 枝 鑓 JII 威 IE. ケ 之 岳 直 介 氏 を 氏 窮 は は、 8 5 八 八 月 3 Ŀ 月 中 旬 1 旬 槍 6 5 中 岳 旬 及 12 かっ CK 漩 H 岳 T 等 白 12

J: 6 員 增 田 吾 助 守 H 滅 角 倉 邦 彦 諸 氏 は £ 月 下

少

7

旬 會 木 員 曾 石 駒 JII 5 丈 岳 助 及 氏 CX は 御 岳 七 54 月 登 下 6 旬 る 木 曾

駒

4

岳

御

岳

及

CK

乘 鞍 岳 21 F. 6 る。 武 田 久 吉 梅 澤 親 光

5 Ł 會 # 1 月 F 員 白崩 旬 鳥 Ш 信 岳 州 悌 成 と駒 方 面 4 t 河 3 岳 田 默 甲 州

同

Ш

なることを

確

85

6

駒

ケ

岳

10

E

5

臺

5

原 かっ

17

誻

氏

下は

300 0 會 本 員 牧 號 本 野 富 欄 太 处 照 郎 氏 は 八 月 下 旬 肥 前 0 虚 空藏

3 良 岳 並 CA 12 肥 後 0 加 蘇 Ш 12 登 5 3

5 0 る。 會

會

0

會

員

青

木

信

光

氏

は

八

月

一十六

日

H

光

0

太

郎

山

12

登

Ш

員 員 夏 塚 目 本 新 永 治 堯氏 氏 13 は 苗 伯 場 耆 Ш 0 大学 8 115 經 12 T 妙高 登 6 Ш 3 13 登らる。

眞 0 御 贈

な 兩 Ш 1 山 岳 ブ 岳 方 -8 版 單 ^ は、 併 12 0 专 有 す 寫 寄 L 毎 眞 1 3 稿 號 だ は 御 it 0 H 寫 لح 1 覽 は な 觀 眞 0 3 版 通 S 0 讀 網 5 7 併 版 可 者 なり 單 i 12 0 寫 與 54 L 眞 T 文 味 章 < 0 だけ 寄 0 插 贈 入 寫 3 具 L 大 讀 は 圣 0) 7 T る 0 更 相 2 17 3 違 ٤ P

大に 念よ以 無上 4 Z は 0 滿 あ 多 歡 12 添 無 足 大 迎 T 3 難 えて 0 す あ み 有 得 n る如 歡 かか 0 T 72 v 迎をする 御 -1-0 ζ, と苦心 共に \$ た 永く一 寄 讀 3 稿 是 者 V かい する 寫真だい は 11 な 5 併 T には ことが 7 編 成 L 有 け 餘 文章だけ 輯 勘 寄 るべ 0 0 者 か 毎 號寫真 御 出 會 0 らず 家 た なり 文章 惠 來 員 贈 及 弱 0 3 8 御寄 42 ٤ び讀 12 3 0) 0 又撮影 對 B は 搜索をす 題 して 稿に 200 者諸君 寫眞と文章 目 只だもう 51 か 家な T \$ 伴 \$ 3 5 我 6 3

必

15 n 5

52

<

大

稿保 寫真 も限 仕 何等 文章 有 51 存 6 方 돖 から から だげ なら から あ 5 0 ないから 幾 0 1. 12 解 た ば、 百 LE. 置 n て、 Do 說 とかい -F 54 < 4 ば 5 P 座 部 は 甚 ٤ 獨立し 寄 それ だ結 その あるとし 報文を添 我 L 贈 遠慮し T 同 4 寫 者 6 構 て出してもとも は の寫真 真中 厚 號 願 0 7 ても、 芳 T 志 17 あ 2 えず を犒 名 0 並 0 ねられる人 3 物 は して、 は h 7 す 雜 T 12 何 あ 3 及ぼ その 出 本會に る 誌 Ш 12 す 何 寫 かく讀 出る 文の 真だ 为 ことにす L L 地 何 た文章 於て、 か ٤ 12 萬 n L 作 裏 \$ it せれ 4 12 家 添 送 T _ 日 Ш 安 0 4 0 書 無 0 3 名と は本 全 v 51 V T ינל ב 0 51 寄 ٤ 好 T

> ると信じ 全、 8 た寫眞 度も 寂 槪 す 否三滿 好配 寞をかこつやうなことは、 [17] 數 頭複 ず。 Ш 0 を主 偶 P 知 足 を得て作家に L 12 を以 文章 題 1 た 出 とし \$ T, is 7 0 35 ゐるほどである 72 て、 誌上に見えることが容 紀 も、撮影家に 水 行 現 く孤 文や 21 先づ無 獨の 山 雜 岳 せく か 錄 3 5 からうとち Q. 旣 刊 寫真 者 折 Ŧī. 易 角 12 册 恵贈 筐 版 0 出 \$ 0 Di 1 來 兩 5

幾

なら 物で + V, 惠 17 本會の は 破 ば、 贈を懇 \$ 毁 L 汚 か 損 時 L 差 か 請 事 支へ なる する、 業 T t 共 を援 0 宜 原版、 は 2 1 場 所、 V 無 Ш 助 は かっ せら V, 岳 6 V 叉は寫眞 V 或 か た 及 3 借 なる 3 は CK 1 用さ 原 Ш Y 大 方 0 版 種 岳 だ 迈 12 せていたいき 類 51 却 H 關 向 を 造 係 V 0 求 は Do 0 T めら t なる あ る高 n 72 3 T 7

宜上の

御 切

必 向

餘 を借りて

せら 臺灣 本 覆 號 12 たるも 審 所 法院 載 0 西 71 內 15 U 有 金 3 吾 1 氏 ブ 同 1 版 5 山 新 0 高 寫真とし 特 Ш 50 0 本 盐 T 0 傑 12 出 8 1: E た 寄 3 触

會

報

寫眞の御惠贈を願ふ ○餘 白を借りて

3

多の口れ路 i 8 は 0 0 風 海 ع 光 拔 * 照 萬 L 偲 ·C ば 趣 餘 L 味 U 0 毎 白 1 號 言 層 玉 連 饒 2 Ш 載 ところ か 0 なるこ 八 尾 通 监 氏 ととと 愈 Ш 新 I 高 存 佳に Ш 興 L 上紀 候 12 6 行 入 \$ 木本 6 72 曾 號

大

平

氏

0)

北

跋

涉

部

は

號

1 俗

-

白 及

び山

裏

14

降 晟

6

H

水 陸

0) =

大 IL

漲

布

t

0

白

111 次

村

0 12

奇 入

風 6

17

1 硘 大 存 L 紙 な 72 數 L 3 0 居 3 興 候 御 都 投 合 味 共 稿 0 叉 # 數 暫 篇 は 12 有 材 1 完 之 料 御 宥 候 配 結 恕 置 * 8 告 編 0 7. 艺 輯都 者合 N 上 候 \$ 候 忍 不 本 CK T 意 某 次 だ號 12 L

> な肆 岳

大 IV < 志 な + 作 ブ 3 村 Ti ス 縱 六 烏 to を 葉 斷 嶺 本 想 詰 5 0 氏 ふべべ 10 12 壯 13 寄 舉 ^ ば を 别 せ 5 遂 項 諸 3 H 會 5 か 5 E 1 君 ٤ n 登 12 筈 共 2 Ш 50 17 0 候 日 報 樂 精 本に 7 あ 原 L カ を 稿 J. IV 3 盡 T 紙 ブ 如 之を < 百 ス 1 総 T 待 72 H 0 3 寫 部 本 作 真 T 0

石 岳 本 毎 手 室 號 號 0) 0 所 裾 增 本 豧 野 夜 載 誌 等 は 0 志 12 附 再. 村 及 登 氏 司 錄 氏 記 0 CX L 忙 獨 奥 T 岩 得 0 添 手 富 12 2 0 8 快 72 吹 4. 筆 Ш 3 高 暫 * は 揮 大 < 頭 は地 次 中 式 氏 3 獄 號 せら 17 0 於 < 網 mmg 張 候 T \$2 H 溫 頂 12 本 上 3 Ш 泉

> T 挾 次 號 U 6 は 從 7 來 同 氏 12 は倍 言加 は 1 n T た 每 號 頁 0 附

> > 餘

为

H 本 Ш 岳 高

L 如 高 前 Ш 度 號 堂に 表 發賣 0 は 本 す 誌 T 3 は 到 附 3 錄 ところ 之を 5 42 7. 廊 12 3 大 撰 者 L 好 評 梅 梅 T * 澤 澤 氏教博 親 i 科 光 は 72 氏 用 目 0 3 所 下 大 25 撰 嚴 幅 密 掛 今 日 本 17 晑 訂 7 書 Ш

IE. な 中 希ほ な りとい 望 同 區 77 就 3 1 13 1 13. 言 在 ひ北 越 米 3.0 會 n 72 員

氏

1

6

左

0

如

3

私

信

10

梅 费 水ベ 白 言 心 澤 < 米 Ш 用 成 突 岩 氏 岳 は 0 間 忍 + 0 to Ш 米 今少 第 等 耐 日 1 木 3 老 突 0 黑 年 多 Ш 佰 每 L 線 圖 大 岳 第 别 12 月. 厄 Vt 4 8 12 高 以 度 號 大 介 L 昨 なる C 17 都 表 C あら 淡 L 服 は H て、 仕 色 + 落 致 掌 女 を 米 事 候 白 以 突 仕 な UE 眉 百 るべ 米 1 0 5 突 拜 \$ 生 見 12 水 O: 0 0 割 慾 12 致 Ш T 1 線 E 候 を n 崗 2 は 出 紅 憚 岩 # 來 な 得

明 明 治 治 π 几 + + 年 年 + + 月 廿 九 日 印 刷

月 H 發 行

兼 編輯者

新

潟

縣

Ξ

島

郡

才

大 字

深

澤

高 深

頭 村

衞

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一

者

印

刷

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一

飯

田 Ξ 千

丁目十二番地

太 郎

丁目十二番地

英舍第一工場

京 保 會 町 事 務

發

行

所

Ш

岳

所

市

日

本福區室町

+

番地

城方

東

京

市

神

田

园

表

神

印

刷

所

會株

社式

秀

堂

東

發

T

所

定 價 金 叁 拾 Ŧi.

古方甲踊教の昔田色風

のと前田

繪 顯

U

日え版弘、

陽本て丸

本 の大ル

大熔岩

流の

燕水

岳彩

の大

大畵

林葉

なと

森

岳

の之

大を

雪四

ての含

、耻なき所以なり。のもなし、唯、ひたする皆は「自然に返へれ」では、といっている。

すしと

歌び

1. や説聖

水

てす に叫

とせる

妙紙

なは

り最

新 案

0)

1º

1

7

Æ

1

1.

7

17

1

ス

0

體 裁

至半 つ截

にし

四回面州らは心者等版景而によきば一を、寫又書 なに るし をて 覆四

禮山

島

初 作

稅 + 錢 錢

四京 る微我美込晩 て紙 丁市 若我驅ををみ霞 目京 ポは 六橋區 ッ不 ケ ツ柾 地木 10 揽 に極い 128 外の 收質 にな 藏を 送め す使 間 るひ H Ш に表

ġ 9

謠し

蹴長し流

植岳

き如有人

十奔矢

るの所如

佐

町東

R

書

房

班

△小島烏水君の紀行文八篇を集めたもの。 讀賣新聞の『摘翠録』に白雲子の曰く 致のものと文章體のものとあるが、 自分は 寧

違せる形状色彩の讀者の眼前に髣髴せしめる。客觀的描寫と云つて、寫寫し方である。從つて氏の寫す自然は境を異にするに從つて、種々の相に自然の相を描寫して餘すところなからんとする。此か鳥水君の自然の ら寫さうとして居る。 逸しやうとするのが寫生文の欠點だが、鳥水君は力めて概括的に大體か 遠せる形狀色彩の讀者の眼前に髣髴せしめる。客觀的描寫と云つて、 生文流の其とは全然趣を異にして居る。一部一部を細叙して而も大體の る描寫は客觀的である。形狀、色彩、活動、變化あらゆる方面から、客觀的 人々によつて 其の観方を異にし寫し方を異にする、鳥水君の自然に對す 而もよく自然の深奥に徹し得て居る點が烏水君 ろ言文一致の方をとる。 △同じく自然を觀 自然を寫すと云ふうちにも、 0

> **高朝** とりらくに面白けれど相摸野の一篇は精細を極め自然の描寫にも亦得 著者獨特の紀行文集なり冬の淺間山、日本アルプスの南半、梓川の上流 報 日 等

べし。
ぜる烏嶺子の寫眞は得易からざる珍品、

味の多角的なると用辭の緻密觀察の精細なるに驚ろかしむ

山嶽薫の愛讀すべき良書と云ふ

老中に

都新島日

き妙所あり

味溢れたるに於ては正に最新紀行文集中の白眉たり 獨歩氏の武蔵野に對して優るとも劣る無き傑作と思ふ、 は殊に饒かなる詩趣に打たれたり、恐らく是れ篙中の壓卷にはあらずや 岳紀行文集なり「相撲野」の一篇は卷中の諸山と親み無き紹介子にとりて 其の研究者乃至紹介者として知られたる小島鳥水 ・・・・清新の 氏の

早稻田文學(四十年

に足跡をつけ得ない深山幽谷を單身に跋渉して、 に近づいて來た。かくして直に自然そのものと調和し。 ば漢文體の誇張に失するの傾があつた氏の文は、本書に至つて、 た でも、特に靈あり生命あるものであらう。「雲表」とは山岳の旅行記なる ある、聲がある、面して常に生命がある。本書は氏が探り得たる自 して、誠に清い祟い詩人の情である、氏の描く自然には霙がある、色が る。大自然の秘密を探らんとする氏の熱望は、科學者のそれにはあらず 慕ひ、詩人か理想にあこがるし心を以て、氏は山岳の無人境を慕うて居 山岳に對する氏の憧憬は殆んど狂に近いと云つてもよい。宗教家が神を よく天下に紹介する點に於ては、恐らく氏の右に出づるものはなからう 烏水氏の紀 一篇がある。氏の文體は叉本書に至つて、轉化の趣がある。やしもすれ 以て題した名であると云ふが、中には山岳ならぬ「相撲野」の多趣なる 行文に關しては世既に定評がある。專門の學者と 而も獨特の妙筆を以て 融同した 然の中

に登る記」「梓川の上

特色である。

摸野」と「燕岳及大井岳

霞子の意匠せる表裝亦面白し著者が山嶽に就て他人の模倣すべからざるち見たるのみにて先づ其の内容の如何に趣味多かるべきかな思はしむ晩醸て噂のありし鳥水子の雲表出づ四六半切四百頁程の清楚なる小册子打 其の雄大崇高を想はざるものなけん、梓川の上流、相摸野の二編は著者の記は本書の主眼にして著者の最も熱誠を注ぎしもの之を讀んでは何人も 識見と文辭とか有するは今更ら云迄もなく書中「影不二を觀る記」の如き 葢し影不二を叙せる本邦空前の快文章、日本アルプス南牛諸峰の登攀

る

體が出來るのだらう。

新 公 第廿 <

謂ふところ、

ワー グワー

ス風の自

7

面 0

適切に氏の手腕を認識したのである。筑波根は下妻の大寳村、 るは質に小島烏水氏である。吾人は今此の「雲表」の一卷に於いて、最も の文壇に於いて、文章 家として特に紀行文の作家として有名 薄命の身

軀を横へて居る詐りなき眞詩人、横瀨夜雨君に献ぜんが爲め、此の一卷

世界的 にしないものが有るか、目次は八編十一章に頒つて居る。中にも冬の浅 を公にした鳥水の心情を想うては、誰か滿腔の同情を以て此の一卷を手 中 青年(第三號)日く 房温泉の記などは讀んでは溜飲が下る程の妙文である。

察より爲れる所多し。總じて言文一致體にて從來の紀行文に比して今一 (内容の上に優る所あるが如し。近時の佳作也。 原跋跡、富士の美觀を描寫したるもの、何れも清新の文字と、 書は日本アルプスの名ある信飛境上に於ける登山の紀行と「相模野」の 精緻の觀

一本及日本人(第四百六) 日く

中に相摸野の研究あり、文章の信麗にして色彩多き、譬諭に富みて觀察 島水氏は山嶽研究を以て、紀行 尖鋭なる、流石に氏の著たるを妨げず、 山、中澤二氏の給畵を挿む、文章は「影不二を見る記」以下八篇十一章、 其の山岳の旅行記なるを以ての故にして、タイトル頁には、 文家中に一頭地を抽んづる人なり、 新しき紀行文として、 紀行

庫(第六卷第))の哀鳥子曰く

界の珍たるは云ふまでも無き事ならん。

て居る、 鳥水氏の紀行文は、最も特色あるものとして、夙に多くの讀者に知ら 之に對つて新時代を劃した。氏の紀行文が新しき生命を保つ所以は、 在來の紀行文が、地理的關係を無視し、形容澤山な文章で自然 殆ど人文と沒交渉の觀察で得意になつて居た時に、鳥水氏は實

勿論文學者的の眼を以て自然を見るにあるが、科學的智識を苟且にしな

點に於ても少からず價値を加へた。著者は自ら「日本アルプス連議を

」中に、自然に對する科學者と文學者の態度を說き、一

種の自然

文 づゑ(第廿八號)は曰く

山嶽といへば烏水氏を聯想させる程、

ゑ』讀者の一讀をす\む

H 學世界第十號)日

にある」。之に就いて今は多くは語るの要はない、 此篇に至つて口語體となり、全く面目を變へたものし、才氣は依然とし る事は明かである。もとく一多大の漢文素を以て編まれた著者の文章は 作と稍や毛色を異にしたもので、『梓川の上流』と共に、苦心の文字であ 般の紀行文家と異ることは、之に依つて知らるしであらう。試に集中の 廓を摸倣するばかりでなく、自然と人間との靈慧なる交通を媒介する 意味ある自然を作る。著者の言を假れば、「自然交學とは自然の形骸や輪 然に對して、人間は内面の生命を通じて接觸しなければならない、 一二篇を取つて、吾等の所感を陳べるとせう○『相摸野』は著者が從來の べて居る、 鳥水氏の用意が普通

圓熟の文章と云ふべきであらう、桂月氏の文を老熟渾成とたしふる者は 氣に入つた所は、、略 惹いた。そればかりでなく、 篇は銀粉を塗つた繪葉書を見るやうな諸篇の中で、最も自然的の感興を ろ『信州に入る記』の平明にして自づからなる興味あるものを好む、此一 て旺溢し、何處迄も才籬であるのに感服せざるを得ない。それよりも 難なく地方色が出て居る。『冬の淺間山』

も大方の認むる所であるから、敢えて云はない。 吾等は大體に於て云ひ盡した、鳥水氏の特徴美所は吾等の言を俟たずと 必ずや亦嘆賞の聲を放つに相違ない。

中著者の自然觀がある、滔々十數頁甚だ有益な文字である、 他より一頭地を抽いてゐる、『日本アルブス連鎖を觀ずの記』をよむに、其 の上流』等を含む、行文の妙は今更言ふを要せず、自然の研究に於ても 溫泉の記』『燕岳及大天井岳に登るの記』『奥常念岳の絶巓に立っ記』『梓 「影富士を觀るの記』『相摸野』『冬の淺間山』。日本アルプスの南生』『中 山嶽趣味の深き小島氏の文集で、

水氏獨特の紀行文集にして、「影不二を見る記」「相模野」「冬の淺間 本アルプスの南半」外四篇を滿たしたり。文は文章體と言文一

文章世界曰く『文章には色彩あり』 山氏の彩色畵を添へたるは最も龍遇愛玩するに足るもの乎。 るべしの は思想の豊富と相待つて。一層の光彩を放つ、青年文士文章の好換範た 特に、此「霊装」が可愛き釉珍形にして、諸所に寫眞版を挿み、丸 别 れたるが、孰れにもその特技は充分に發揮せられ、 觀察の精

を舉げられ、山崎紫紅氏は『明星』に、長文の批評 其他『太陽』長谷川天溪氏は時文評論中に、 て、『梓川の上流』を擧げられたり。 冬の浅間 を揚 げ Ш

讀賣新聞曰く

内容と吊合ぬは残念である。 言文一致のものには 割合に此の弊がなく、すら 字を用ぬて佶倔聱牙に陷らんとする 點に存する 烏水の文の欠點と云へば動もすれば畵の多い文 〈と筆が伸びて居る〉 體裁の如何にも 卑俗で

質を觀るべきと共に曾遊の經驗無きものにとりて多少繁冗に病ましむる 尚著者が紀行や一木一石をも忽に看過せず研究精緻を極めたるは、 日本及日本人見日 曰く

して『相摸野』の至つて漠然たる闘案を組み立たせたと云つて居るが、悲 して間色なき原色のみの配合が、人の視覺を眩惑せしむるが如きにあり 其の弊は、文字豐富に過きて、剪彩に過ぐるにあり、色彩餘りに鮮麗に しい哉。烏水氏の『相摸野』は『武蔵野』には到底及ばない。地質學の智識、 二葉亭の『あひヾき』は獨步をして『武蔵野』を書かしめ、『武蔵野』は我を

に轉がつて居る、

しかし吾等は感銘の薄い影をとくめたに過ぎぬ。

歴史的事實に詳しい點から云ふと、獨歩氏は等しく烏水氏の敵ではない

の地方色を見る事の出來ないのは何が故であらう。少くとも烏水氏は自

かし『武藏野』に武藏野特有の色が出て居るに關らず、『相摸野』に固有

寂びれながら、廢れながらも尙ほ人生に呼吸して居る姿が活々と見られれたるに依る。寂びれたる町、廢れたる村は平面的に知る事が出來るカ ぬいて氏が技巧派に隨した跡を見やう。(略) らうが、折角の用意も効果を示さなかたつた。次に『相撲野』中の一 つたと云ふ事は、やがて今日の自然派が要求する所と同一理由であつたた。要するに修飾多き技巧が自然の真を載うた。氏が日語體の形式を採 いのも原因の一つであらう、文章に障とらしい跡のあるのも鷊ひをなし ぐ何かしら興味の索然たるを思ふ。之と云ふも、無暗に同型の譬諭が多 を見た。次に全體に詩趣の缺けて居るのも惜しむべきである。吾等は鳥活きたる人生に交渉が少いやうに思はれる。吾等は此點に先づ氏の不備 水氏獨得の描寫法を見た、彼處此處に累々として居る警句に接した、 の中に 歴史的事質の如きは、單に一種の感慨を喚ぶに止まつて、より多く 動いて居る人生か忘れた、 否自然と人生との交接點を据えばぐ

或は文章上の誇張美に眩惑されることはあらうとも、 得て居る」とは思はない。最大級の形容調は烏水氏の好んで用ひる所で を描寫して餘す所なからんとする。」と云つて居るが、「自然の深奥に徹し 的である。形狀、色彩活動、變化あらゆる方面から、 讀賣の白雲子は烏水氏の文を評して、「烏水君の自然に對する描寫は客 心が觸れたと感ずる場合は少ない。卷頭にある『影不二を觀る記』など 恐らく近來の名をであらう、 所謂紫水晶のやうな辭句が全篇到る處 客觀的に自然の相 讀 自然の真髄

其忠

新

價

前志

用表齋

紙紙藤

ツ仕

フ立佰

ペホ意 「ツ匠 バク釘 1 止裝

几

百八十百

松洲

田村 曙鳥

山嶺

新案繪葉書 用 手帳、

111

日

高

Ш 面

地

圖

添

0 挿 畵 繪 刷 ス ケ " チ +

種

拾五

錢

本 書

51

野し

ては世既

12

定評あり自書自讃的廣告を要せず希くは讀者の輿論に聽け本書に

圓

0

口

繪

J

17

2

1

ブ

版

高 及 别 山 寫真

7 本

七

壹

する批評 中左に 七大新聞の批評 を掲ぐ

の氷河」『白馬嶽植物目錄』「日本アルプス三大横斷』「針木峠『越中立山』嶽第一圓登山記』「白馬嶽雷雨記」「第三回登山」「日本アルプスの雪及白馬製本の意匠に奇を誇る橋南堂の發行にして日本高山の跋渉記なり「白馬 ●時事新報(八月廿

氷河」「白馬嶽植物目錄」「日本アルプス三大横断」「針木峠

驚歎せし る者にして白馬氷河の遺跡槍 むるに足るものあり。 4 嶽の天柱白馬の大殘雪等一見人をして

「槍ヶ峠」「常念山」「塊中房温泉」「有明山」「燕嶽」「大天井嶽」「常念嶽及一「槍ヶ峠」「常念山」「塊中房温泉」「有明山」「燕嶽」、大天井嶽」、常念嶽及一「槍ヶ峠」「常念山」「塊中房温泉」、有明山」、燕嶽」、大天井嶽」、常念嶽及一「槍ヶ峠」「常念山」、塊中房温泉」、有明山「燕嶽」、大天井嶽」、常念嶽及一「槍ヶ峠」「常念山」、塊中房温泉」、有明山「燕嶽」、大天井嶽」、常念嶽及一 」「越中立山」 して倦ましむるものあり山は一林一巒各其趣を異にするが故に此點にの意味に於て兩者併せ樂む者多しされど海は戀化に富まざるが故に人に捨は山を樂み智者は水を樂むとは仲尼の譬喩に過ぎさるも單に文字に

地圏とを 以てす亦草鞋踏破に便する少ながらざるべし。

央(八月八日

高山研

ま本書に因りて遺憾なく紹介せられたり挿入の寫真皆著者自身の撮影に云ふこの全く人跡を杜絕し絕えて世に知られざりし山中の武陵桃源はいを現出すれども來たりて徜徉する者は只だ山鑑と雷鳥とあるのみなりと書あり雲霧常に磅礴して山河を封じ天花濱紛として紫微の巓に一大花園

書に因りて遺憾なく紹介せられたり挿入の寫眞皆著者自身の撮影に

人の臂を列れたるが如くに屏列する所にして盛夏三伏の候箱ほ數丈の積 で信越飛國境の連ປにして海抜各二萬尺前後に出入する高山の恰かも、の如き地は日本アルプスの各所に存在するなり。日本アルプスとは何處

造詣する所頗る多し て日本アルプスの諸嶺を踏破し

^る所頗る多し暗山氏は山草を中心として山嶽に科學的文學的解釋-アルプスの諸嶺を踏破し深遠なる科學的觀察特に高山植物に就て姿家として異彩ある鳥嶺氏は長野中學の教諭其驚くべき健脚を以

登山者の爲め極めて便利多かるべく文章も又申分なし卷頭に掲げたる 編に 葉の寫真は苦辛の餘になりし珍印畵、松洲子の考案にかくる釘裝はな to たるは用 下さんとす ·凝つたものなり附錄としてスケツチ用私製葉書及日本高山地圖を添え客真は苦辛の餘になりし珍印畵、松洲子の考案にかへる釘裝はなか3者の爲め極めて便利多かるべく文章も又申分なし卷頭に掲げたる數富士山何れも面白し而して一々登山案内費用等を附記したるは後の 過ぎず白馬嶽、日本アル 庫たるは言 意周到の外なく日本アルプスを研究せんとするには「雲表」と 3 迄もなし卷中の大部分は鳥嶺氏の筆にて曙山 6 氏の 共著になる本書 プス横斷記、淺間 が山 、戶隱、飯綱黑姬、妙高、 織に に関する 有 盆なる 氏の 11 八 4 旅 挿 帙が 答は無し キは 行用としても鉄く可からさるものならむ尚別册となせるスケッチ用 たる高山地圏にして之によりて單に登山案内となずに足るのみなら 繪は 11 仕立のホック止にて意匠は松洲醤伯の工案になりたれば 珍 至便と云ふべく紙数五 Ш 奇 なるも 0 狀 要す 心勢を 多く 知るに足る可く

中に

II 殿暑

熱き

to

忘れ 重

L

むるも

以又 册として

文中

殊に最も 尙

實とすべき

11 0

别 あ

ず

知(九月十二

0

指道者ならん四六判四八○

頁

本高山地圏で 第によりて世に紹介せられたるは喜ぶべし製本はホック止めのハイカラの如きは二百頁に垂々たる大篇にして人跡稀に至るの深山と鳥嶺氏の健ふと共に高山植物採集上の漂考となること多し殊に日本アルブス横斷記渉せる紀行文なれば豪健清新の氣紙上に溢れ備さに雄大なる自然美を味渉せる紀行文なれば豪健清新の氣紙上に溢れ備さに雄大なる自然美を味むのなり何れも危險と困苦とを胃して遠く塵寰を離れたる高山幽谷を跋ものなり何れも危險と困苦とを胃して遠く塵寰を離れたる高山幽谷を跋 物採集に就て専門學者を凌駕する前田曙山氏の富士登山記とを蒐めたる日本アルプス、淺間山、月隱山、飯綱山及黒姫、妙高、八々綠等攀登記と植 通として山 紙は例のウ 嶽跋渉家として斯界に令名ある志村島巓 ツフベ 1 、飯綱山及黑姬、妙高、八ケ嶽等攀登記と植 1 なり又表紙裏 の隠しに私製端書と日 氏の白 馬

本(八月二日

圖とな収めたり

集めたるものにして盖し著者の本意は科學思想と文學趣味とな調 **靈山は女人の登るを許さいりし** して本書は文學者中最も登山に經驗を積める烏嶺、曙 ・増進し富士の高山と雖も婦人小見の登るを常事となすまでに至 書に收めたるは白馬嶽を始めとし日 **f書は文學者中最も登山に經驗を積める鳥嶺、曙山、閣紙の紀行文を近し富士の高山と雖も婦人小兒の登るを常事となすまでに至れり而は女人の登るを許さいりにが近年に及びて世人の山に對する趣味大は山國なるにも拘らず古來登山といへば行者に限るものの如く殊に** する 飯綱山、黑姫、妙高、八ヶ嶽及富士山等從來世人に靈と云れ險 著名高山殆ど著者の登跋する所となれり卷頭な飾る數十 健全なる智識を青年學生に注入せんとするにあるもの」 本アルプス系の諸 Щ 淺間 和して 如 Ш 寫 L 2

ス高

0

ある信

越連山 究家たる志

の奇勝を探り

珍草を求め更らに富嶽

絶頂に高山

探趣

嶺 H

及前

田

曙

の合著にして

H

7

N

盡したる紀行十数篇を蒐めて公けにせり就中志村氏の白馬

0)

研

ふべし 東 京 H 新 るに夏期登山の友として青年男女の必讀すべき良書と Ш 氏

百

頁舶來のラツフペー

たれば素より悪から

綴りの こし ケッチ あり孰れる登山 表 端書を添へたる作者の用急憎きまで行届き體裁も亦 裝未だ見ざる 者並に植物研究家の指針たるに足る其の外高山 新意匠なり 口繪白馬山頂の寫眞數葉皆以て珍とす ホック 地圖及ス 此 新式

大 阪 の國にして亦山 朝 H (八月十 の國なり 74 H 海

の國民にして

海

をしらず山

0

或

本は

ぶべき風潮とい 高、八ヶ嶽、 白馬嶽より日本アルプス三大横断淺間 ば温 して山を知らずと著者は絶叫す然り 釘装も亦 頗る親切なりを頭に數 泉のある所それ以上 、富士山 傾向 いふべし此書は趣ち之れが嚮導者を以て自任するも を呈し 凝つたも 等の紀行と共に登山 高山攀登の如き都人士間に於て のと云ふべし 葉の寫眞版とスケ を知ざる多くの日 海といへば海水浴の Щ 案内諸費用植物目録まで掲げたる 本人も " 戸隱及び飯綱山、 4 用 川の私 近 事画く (や)流行を呈す欣事漸く健全なる趣味 製はがき一 ある所 黒姫及び妙 Ш の即ち ٤ を添 4,

中々